
新宿のネコ

ShellieMay

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新宿のネコ

【Zコード】

N8461T

【作者名】

Shelbie May

【あらすじ】

そいつに声を掛けたのは、ほんの気紛れだった…。

何でも屋の柴健司が、新宿の公園で拾った未成年のホームレス『ネコ』…。

成り行きで一晩面倒を見た事で、手離せない存在になってしまった！？

しかし、名前も年齢も、何も明かそつとしない『ネコ』には、ある秘密があつて…。

相変わらず少し…ダークっぽくなつてますが…。 (^ー^;)

今回は、少しファンタジーも入っています！？
年の差、体格差、じれじれの激甘ラブ…

其奴に声を掛けたのは、ほんの気紛れだった。

思いの外仕事が上手く行つて、柄にも無く浮かれていたのかも知れない。

昼過ぎ、仕事に出向く時に見掛けた同じ場所で、夜迄同じ態勢で寝入つてゐる奴が居る…しかも若い…。

「ねえ、君幾らだい？」

脂下がつた男が声を掛けても、全く起きる気配が無い。

「ねえ、君…3万でどう？一晩なり、5万出すけど…。」

そつ言いながら躰を撫で回す男に嫌悪感を感じ、思わず言葉が口を吐いて出る。

「おいつ！何してる！？」

Tシャツの下に手を入れ様としていた氣の弱そうなサラリーマンは、ビクリと手を引いた。

「いっ、いやっ、私は何も…。」

「…何してゐる？」

ポケツトに手を入れたままズイと近付くと、サラリーマンは鞄を抱えたままアタフタと駆け出した。

男が去つても尚、ベンチに丸まつてスヤスヤと寝続ける其奴に、俺は頭の上から声を掛けた。

「おい…。」

狸寝入りか…それとも、もしかして逝つてしまつてゐるんじゃ…。

「おいつ！？」

寝てゐるベンチを蹴り上げると、よけやく反応して臉がゆつくつと開いた。

「こんな所で、寝てんじゃねえよ…。」

「…あんた…誰？」

まだ覚めきつていない瞳で俺を見上げて、氣だるそうに尋ねて来る。

「こんな所で寝てると襲われるぞ、お前！？」

「あんた、サツかよ？」

よつやく起き上がり、ガリガリと頭を搔きながら欠伸をすると、もう一度俺を見上げた。

もう一ヶ月だというのに、半袖のTシャツにブカブカの薄い綿のジャケットを羽織り、Gパンにスニーカーといつ薄汚れた出で立つ。クシャクシャの髪には枯れ葉が絡まり、顔もなんとなく薄汚れて、ドラマバックを胸に抱えていた。

ホームレス……いや、そこまではいかないまでも、家出中なんだろうか？

憮然と見下ろす俺を見上げる顔が一ヤリと笑う。

華奢な首に小さな顔……小さな鼻と口に比べ、印象的なアーモンド型の黒目がちな大きな目……何となくアンバランスな……。

……つて訳でも無さそうだな？」

「え？」

「サツじや無いんだろう？」

「ああ。」

「じゃあ、買いたい訳？」

「お前、ウリ専か？」

「別に……今日寒いし、外で寝るの厳しいかなって思つただけ。」

「……幾ら？」

「買つのは？下手だよ……きつと……。」

そう言つと、足を投げ出しケラケラと笑つた。

「別に、そういうつもりは無い。」

「そ……じゃあなた、オツサン。」

もう一度ウーンと言つて伸びをすると、洋服をパンパンと叩き立ち上がる。

その躰が思いの外小柄なのに、俺は驚いた。

「これから、どうする？」

「ん？ そうだな……雨降るっぽいしわ、ベンチも木の上も濡れるしね。」

ビルの駐車場が、非常階段にでも潜るよ。」

「木の上?」

「ああ、夏は最高に気持ち良いんだ！嫌な奴に襲われる事も無いしつてか、オッサン何喋らせてんだよ！？」

そう言つて、俺を見上げて又ケラケラと笑つた。

「お前、幾つだ？」

「…やっぱ、サツなの？」

「違うつつたろ？幾つだ？」

「ん~18?」

「嘘だらうが！16か？17か？」

「18にしどこいつよ…面倒臭いかひや。」

「全く…飯は？」

「はあ？」

「腹減つて無いかつて聞いてんだ！」

「…奢ってくれんの？」

「ああ…ついでに、ねぐらも提供してやる。」

「…何で？」

「何でつて…。」

「見返り、何要求すんのさ？上手く無いって言つたろ？」

「ガキに見返り要求する程、落ちぶれてねえよ！それに、俺はゲイじゃねえしな。」

「…ふうん。ま、いつか。奢らせてやるよ、オッサン…」

「違うだろ！？」馳走して下さこだらうが！？」

「いいじゃん！」馳走したいんだろ？」

見上げる瞳が悪戯そうな光を放ち、鼻に皺を寄せてクシャリと笑つた。

黙つて歩き始めた俺の後を、ヒョウヒョウ付いて来るそいつに、俺は尋ねた。

「何食いたい？」

「…温かいのがいいな。」

そう言つて、空を見上げて鼻をならした。

「…やつぱ雨降るよ…。」

馴染みのラーメン屋に連れて行き明るい光の下で見るそいつは、色白で、何だか華奢な女子高生の様だった。

「お前、名前は？」

「…人に名前聞く時は、自分から名乗るのが礼儀つて、親から教わんなかつたのかよ？」

「年上の…しかも今から食事を奢つて貰つて、ねぐらまで提供してくれる大人に向かつて暴言吐く奴に言われたかねえな。」「アハハ、全くだ！！」

そうひとしきり笑うと、小首を傾げて俺を上田遣いに見上げた。

「…ネコだよ。」

「何？」

「だからあ、名前。ネコだよ。」

「本名か？」

「さあね。オツサンは？」

「…柴だ。柴健司。」

小首を傾げたまま大きく見開かれたアーモンド型の目が、パチクリと瞬き…次の瞬間涙を溜めてブククと笑い出す。

「学生時代の渾名つてさあ…やつぱり…。」

「ああ…『柴犬』だよ。」

俺は顔を背けて、げんなりしながら答えた。

名前を告げると何時も同じ反応をされる…全く、親ももう少し考えて名付けてくれれば良いものを…。

最も今、じゃ、狂犬になつちまつたが…。

「柴犬とネコつてさあ、凄い組み合わせじゃん！」

そう言つて笑い続ける俺達の前に、湯気を上げるラーメンが置かれた。

頂きますと手を合わせ、意外と上品に麺を啜り美味いと笑つた。
ひとりしきり麺を啜りネコが溜め息を吐いた時、俺は尋ねた。

「家出中か?」

「まあ…そんなとこ。」

「何時から?」

「ん?」

「夏からか?」

「何だよ、身上調査? ウザイの嫌いなんだけど…。」

「お前なあ。」

「じゃあ、柴さんは? 歳幾つ?」

「…32。」

「意外…ホントにオッサンじやん!」

「つるせえよ。」

「何してる人?」

「何つて…まあ、色々…。」

「堅気じや無いんだろう? ヤの付く職業?」

「何でそういう思ひ?」

「だつて…。」

鉢に残ったスープを全て飲み干すと、手を合わせながらネコは言った。

「リーマンって感じじゃねえもん。何か匂いが違うだろ?」

「そうか…。」

煙草に火を点けると、ネコはあからさまに眉をひそめた。

「嫌いか?」

「いや…基本平気なんだけど、ちょっと風邪気味でさ…。」

ケホケホと乾いた咳をして、ネコは笑つた。

「俺の部屋、煙草臭いぞ?」

「そんなの我慢するひ。一晩だけだし。」

「…じゃあ、そろそろ行くぞ。」

俺達が揃つてラーメン屋を出ると、霧雨の様な雨が降つていた。

「走るぞ、ネコー。」

「…近く？」

「ああ、あの角を曲がったビルの2階だ。」

走り込んだビルの入口で、遅れて付いてきたネコが激しく咳き込む。「大丈夫か、お前？」

「…風邪気味だつて…言つたじや…ねえか…。」

喘ぐ様な息遣いをしながら壁に手を付き、怨めしそうな顔で見上げられ、思わず謝罪の言葉を口にするといいよと言つてニヤリと笑われた。

階段を上り入口のドアを開けると、

「何だよ…「！」。

と、ネコは田を丸くした。

「俺の自宅兼事務所だ。」

もう一度ドアに書いてある字に田を走らせ、

「柴さん…サラ金屋？」

と、窺う様に尋ねる。

「違う…何でも屋。」

「何でも屋？」

「そう…人探しから素行調査、ボディーガードから交渉事迄、何で

もやる。」

「ふうん…でも…。」

「何だ？」

「やつぱり、『ハッピーライフ』ってさあ…有り得なくねえ？」

そう言つと、撫然と睨み付ける俺を尻目に、ネコは腹を抱えて笑いだした。

「…確かに…サラ金と間違つて入つて来る客もいるが…。」

「ほらあ、そうだろ？ 胡散臭いサラ金みたいだもん！」

「？」

何となく違和感を覚えた俺に、ネコは氣付いて舌を出し話を続ける。

「横文字にしたかった訳？」

「何となく付けただけだ。」

「『幸せな生活』かあ…贅沢な名前！でも名前つてさあ、大切なよ？客の入りに影響するし…。」

「じゃあ、どんなのがいい？」

「自分で考えろよお～！」

入口で言い合う俺の横をすり抜けると、お邪魔しますと言つて入り込み、ネコは応接セットのソファーに座つた。

「苦手なんだ…こういうの…。考えてくれたら泊めてやる。」

何だよと言いながら空咳をして、テーブルの上に置かれた吸殻が山盛りの灰皿を遠ざける。

余程煙草が嫌いらしい。

「横文字がいいならさあ、『柴コーゴーポレーション』とか『オフィス柴』とかの方が良くなえ？」

「何の会社かわからんねえだろ？」

「あ、それ言う？今だつてわからんねえだろ？それに、仕事内容だつてコレつて決まって無いんだろ？」

「…そうだな。」

「そうだなつて…そんな安直に変えちまつて良いのか？」

「別にかまやしない…。」

「ふうん。」

ネコは立ち上がると、傍に放り投げてあつたゴンベーの袋に、「ノリ」を集め出した。

「何だ、掃除してくれんのか？」

「…「ノリ」袋出して…後、掃除機か簞！それから、雑巾！」

手際良く「ゴミ」を集め窓を開けると、ネコは精力的に働き出し、小一時間もすると部屋は見違える様に綺麗になつた。

「掃除してくれる人、居ねえのかよ？」

「基本1人の事務所なんだな。」

そうじやなくてさあと文句を垂れながら、ドッカリとソファーに座り込んだネコにペットボトルの水を放り投げてやると、上手そうに

音を立てて飲んだ。

「シャワー使うか？」

「後でね…柴さん、先に入りなよ。」

そう言いながら、自分のバッグを引き寄せ中から透明のボトルを出し、ザラザラと掌に中身を出して口に放り込んだ。

「…お前、ジャンキーか？」

「ジャンキー？…ああ、違うよ…これ普通の鎮痛剤だし。」

「…それにしちゃ、量凄くねえか？」

「そう？効かねえもん…良く寝れるしね。」

「鎮痛剤を、眠剤代わりに使うんじゃねえよ。それより、どつか悪いのか？」

「風邪気味って言つたら？頭も痛くなるし、熱も少し出るし…あちこち痛むんだよ。」

「病院は？そもそも、風邪気味なら風邪薬だろ？」

「病院なんて、行けると思う？それに風邪薬よりコッヂが効くから、鎮痛剤に頼つてんだつて…そうか…依存してるとつて事は、ジャンキーか…。」

そう言いながら空咳をするネコに、俺は先にシャワーに入る様に命じた。

ハイハイと意外な程素直にシャワー室に続く洗面所に消えたネコに、タオルも何も渡して無い事に気付いて、俺は自分のTシャツとスウェットのパンツ、バスタオル等を持って洗面所のドアを開けた。

「ネコ、これタオルと着替え…。」

そこには、洋服を全て脱ぎ去つたネコが居た。

華奢な肩に腕、細いウエストの上には、少し膨らんだ胸…そして、その下は…。

「…柴さん。」

「柴さん。」

「えつ…？」

「洗濯機、使つてもいい？洋服や下着、洗っちゃいたいんだ。」

「あ…あ…後で、俺のと一緒に回して置くから…放り込んで置け。」

「

「わかった。」

ネコは脱ぎ去つた洋服や、バッグの中に入つていた汚れ物を洗濯機に放り込み、シャワー室の中に消えて行つた。

何なんだ、一体！？

確かに、自分の性別についてネコが語つた事は一度も無かつたが…それにしても、あの口の悪さは、少年だと思つだろ！？

悶々と思つ悩む俺の背中に、再び声が掛かる。

「…柴さん。」

「なつ、何だ！？」

ブカブカのTシャツをワンピースの様に着こなし、洗い髪にバスタオルを掛けたネコが、スウェットのパンツを手に持つて戻つて來た。

「駄目だよコレ、目一杯絞つてもデカ過ぎて…。」

「あ…必要無さそうだな。」

パンツを受け取る俺に、済まなそうな笑みを浮かべると、ネコは静かな聲音で尋ねた。

「…出て行つた方が良いなら、洗濯物濡れる前に引き上げるけど…」

「別にかまやしない…。」

「…そう。」

俺がシャワーから出た時、ネコは事務所のソファーに自分の薄い綿のジャケットを被り、バッグを枕に寝入るうとしていた。

「そんな所で寝たら、風邪が悪化するぞ！コツチで布団に入れ。」

「だつて、ベッドにつきりじゃねえか。」

「…お前さへ気にならないなら、一緒に入れてやるから。」

「良いの？…そうか…柴さん、ナイスバティーで乳のデカイ姉ちゃんが好きっぽいもんね。」

「…そうだな。」

「…じゃあ、遠慮無く…。」

そう言ってネコは、寝室のベッドに潜り込んだ。

ネコの躰を押しやりながら布団に入った俺は、寝る態勢を取る様に
蠢くネコに尋ねた。

「お前、本当の名前は？」

「…ネコだよ… ノラ… ネコ…。」

布団の中で丸まりながらスウと寝入るネコに、俺は溜め息を吐いた。

逃げる

朝、腹と胸の辺りがジンワリと温かい…懐かしい温かさに田が覚めた。

母親が猫好きで、幼い頃から家のそこかしこに猫の居る生活をしてきた。

猫を馴れさせるのも飼うのも手の物だし、未だに外で猫に逢うと必ず向こうから擦り寄つて来る。

しかし、人間のネコに迄懐かれるとは思わなかつた。

布団の中で丸まりながら寝入るネコは、本物の猫の様だつた。

そういえば、顔も猫っぽい。

猫が寝入るのを見るのは昔から好きだ…寝る事がこんなに幸せそうな動物はいない。

寝入るネコの頬を、指の背でそつと撫でる。

朝日で金色に光る産毛の手触りと、まだ10代の肌の張りの心地好さに、そのまま顎の下に指を滑らせ撫でてみる。

流石に「口口」口と喉を鳴らす事は無いが、ネコは撫でられる程に喉を上げ、手を引こうとするとその手を追つて顔を擦り寄せた。

全く猫そのものだな…柔らかい髪をクシャクシャにして頭を撫でながら思つていると、ネコはクシャンと小さくしゃみをして、繰り返してケホケホと乾いた咳を繰り返した。

慌てて布団を掛けてやり、ベッドを出て着替えると、俺はネコの耳許で囁いた。

「ネコ…。

「…ん…。」

「朝飯買つて来るから…お前、好きなだけ寝てね。」

「…ん…。」

微睡むネコの頭をもう一度撫でると、俺は朝飯を調達に出た。

確かに好きだけ寝てうとは言つた…言つたが、昼を過ぎ夕方になつても一向に起きる気配の無いネコは、俺は苛立つと焦りを感じていた。

度々ベッドの中を覗きに行き声も掛けたが、少し微睡むだけで直ぐに深く寝入ってしまう。

本当は具合が悪いのでは無いかと思つたのは、夜の7時を過ぎてからだつた。

寝入るネコの腋に体温計を挟み熱を計ると、38度を越えている。「ネコ…ネコ…苦しいか？病院連れて行つてやるから、少し待つてう。」

「…柴さん…や…だ。」

咳き込みながらもネコが抵抗するのを見て、俺は苛立ちながらペットボトルの水を飲んだ。

「全く…具合悪いなら、何でさつせと言わない！？」

ノロノロと起き上がりながらペットボトルの蓋を開け、ゴクリと喉を鳴らしながら水を飲み、バッグを引き寄せながらネコは「メン」と謝つた。

「大丈夫だよ…薬飲んだら…落ち着くしさ。そしたら、ちやんと出て行くから…。」

そう言つて、又薬のボトルからザラザラと錠剤を出して口に放り込んだ。

「そういうことを言つてるんじゃねえ！」

「怒るなよ、柴さん…何熱くなつてんだよ？」

「そうだ…何を熱くなつてる？」

「性別、バレちましたから？」

… そうなのか？

「それにさ…。」

ケホケホと咳き込みながら、ネコは水を飲み干した。

「病院行つても、言われる事はわかつてんだ…。」

「何処が悪い？難しい病氣か？」

「別に…風邪だよ。ただの風邪。」

「嘘だろ！？」

「……大丈夫だつて、アンタには迷惑掛け無いよ…柴さん。ベッドの奥に座つたネコは、妙に醒めた暗い瞳を見せてニヤリと笑つた。

「…腹減つたろ？」

「別に…タべラーメン食わせてくれたじやん。」

「…待つてひ、粥でも炊いて来るから。後、今夜も雨だ…泊まつてけ。」

そう言つてネコの返事を待たずに、俺は寝室を出て行つた。

粥なんて久し振りだと喜んだネコは、それでも茶碗の半分も食べきれずにご馳走様と言つて再びベッドに潜り込んだ。

息を上げ喘ぎながら丸まつて寝ようとするネコに、腕を差し出して声を掛けた。

「ネコ、それじや疲れが取れない。手足伸ばして寝るんだ、ほり…。

「腕枕をして体勢を変えてやると、フウと息を吐きながら潤んだ瞳で見上げられる。

「苦しいんじやないのか？」

目を開じるネコに、再び諭した。

「病院行こう、ネコ。医療費の事なんて、心配するな。」

「…やだ…此処がいい…柴さんの所がいい！」

そう言つて、細い腕を伸ばして抱き付いて来る。

ネコの躰をそつと抱き込んでやると、小さな躰は俺の腕の中にスッポリと収まつた。

「…柴さん…。」

と胸の中で呼び掛けられる声が、まるで『ニヤーン』と鳴いている様に聞こえる。

胸に顔を擦り寄せて甘えるネコを撫でてやり、此処に居ていながら

と言つてやると、やがて安心した様に少し穏やかな息遣いで微睡みだした。

ネコが深く寝入るのを見届けると、俺は携帯を取り出し、知り合いの医者に往診を頼み込んだ。

しばらくして訪ねて来た医者は、ベッドの上のネコを見下ろし、眉をひそめた。

「…この子と、どういう関係だ？」

「…タベ、公園で拾つた。」

「お前なあ。」

新宿の繁華街の中に診療所を持つこの男は、松田研一。

俺とは、中学からの腐れ縁だ。

「俺…前に診た事があるんだ。」

「ネコをか？」

「そうそう…名前聞いても、野良猫としか答えなくてな。その時も確か…。」

そう言つて松田は診察を始め、聴診器を当てるとなごめ息をついた。「明らかに悪化してるな。」

「何の病気なんだ？」

「肺炎だ。俺が診たのは夏の終わり…9月の下旬だったかな？男と一緒にやつて来て診察を受けた。」

「男？家族か？」

「俺も最初はそう思つたが…密だつたみたいだな。病状がわかつた途端、捨てられた。」

「捨てられたって、どういう事だ！？」

声を荒げる俺を、松田は事務所の方に引き摺つて行つた。

「言葉通りだよ。ドロンしたんだ。で、俺はお京に電話して引き取らせた。」

「…そうこう事か。」

「お前も直ぐに連絡しろ。あの子は、お京の所の常連だからな。」

「

「ああ…肺炎つて、鎮痛剤で治るのか?」

「ああ?何を言つている?」

「ネコは、具合が悪くなると掌一杯の鎮痛剤を飲む。」

「ああ…熱は引くからな…後、胸の痛みも激しいんだろ?」

「そうか…。」

「お京に電話するぞ?入院手続きも取らないと…。」

松田が携帯で電話をし始めると、寝室のドアが開き洋服に着替えたネコが立っていた。

「ネコ、何してる!ちゃんと寝ないと、熱が…。」

「…嘘つき。」

肩で息をしながら壁に寄りかかり、怨めしそうな目だけを此方に向けてネコは言つた。

「…ネコ。」

「俺達に否が有るような言い方は、止めてもらおう!…」

松田がイライラしてネコに言い放つ。

「何も知らない癖に!」

「所詮親と喧嘩したとか、下らない理由だろ!…?とつとと家に帰つて、入院させて貰え。」

「…帰れる所なんて…。」

「甘えるな!…だつたら、大人しく施設に入つてろ!…お前みたいな奴が…売りやつたり薬やつたりする若者が徘徊するから、この街が荒れて行くんだ!」

「松田、言い過ぎだ。」

「…大つ嫌い!…!」

「何だと!…?」

「大人なんて…みんな大つ嫌い!…!」

「ネコ…。」

俺がソファーから立ち上がると、フラフラしながらネコは靴を履き入口に向かった。

「…捨てるなら…優しい言葉なんて掛けるな!…」

振り返ったネコの瞳から涙が流れる。

「えつ？」

「餌やつたり、構つたりするなよつ！…」

ドアを開けたネコに、松田が静かな声音で言つた。

「お前…このままの放つて置いたら、確実に死ぬぞ？」

「…放つとけよ！」

ネコは、暗い廊下を駆け出して行つた。

「それでえ？大の大人が2人も居て、そのまま行かせたつて訳！？」
来るなり事務所のキッチンで勝手に珈琲を淹れると、幸村京子は遙か上から声を掛けた。

170センチを越える長身のこの女も又、中学からの腐れ縁…若い頃はレディースのヘッドをしていたが、今じゃ新宿署生活安全課少年係の刑事だ。

「お前の所の常連だつて？」

「そう…野良猫ネコちゃん。去年の夏頃に初めて会つたの。新宿御苑の木に登つてゐる子供が居るつていう通報があつてね。」

京子はケラケラと笑い、珈琲を口にした。

「柴…あの子は松田の言つ様な酷い子じや無こわよ。」「わかつてる。」

「名前も住所も、親の事も何も話さない。でも、売りも薬も、グループにも属して無い…ただ街を徘徊してゐるだけの子供よ。」

「普通補導されたら、ビビつて話すだろつ？」

「話さないのよ…留置場に泊まらせても、平氣で中の掃除する様な子なの。」「…で、お前が面倒見てるのか？」

「えつ？」

「何度も補導されているなら、身元保証人が居なければ出れないだろ？」「

「参ったわね… ネコちゃんには、私の情報屋つて事で田溢し願つてるのよ。」

「情報屋？」

「ああいう子達だけのネットワークが有るのよ。その中で、ヤバそうな噂を拾つて持つて来て貰うの。」

「危険じや無いのか！？」

「危険だわよ、当然… でも、児童相談所送りになつて養護施設に入つても、直ぐに逃げ出すの… まるで、何から逃げ出すみたいにね…。」

「…。」

「…。」

「柴、あの子はちゃんとした家の子よ。親も育児放棄とかしてない親の事も愛してるし、尊敬もしてる。他の子達とは違うわ。」

「ああ…。」

「一度だけ話をしてくれたの。父親は亡くなつて、母親は多分入院してるだろうつて。自分は…。」

「何だ？」

「母親の言い付けを守つていろと言つたのよ。」

「…。」

京子は立ち上がりと、ガラリと窓を開け放つた。

「好きな人が出来たつて、喜んでたんだけどね…。」

「好きな人？」

「片思いだつて… 大きな手の指の長い人だつて… 何処の誰かもわからぬけど、公園で時々見掛ける人が気になつて、好きになつたつて言つてたわ。深い… 初恋なんぢやないかしらねえ…。」

秋の夜風が部屋の籠つた空気を吹き飛ばし、その風の音がニヤーンと猫の鳴き声に聞こえた。

翌日から、昔の仲間や街の情報屋を駆使してネコの情報を集めた。ネコが言つた様に、中途半端に手を出すのは間違つてゐるとわかつ

ている……だが、このまま放つて置けば確実に命が危ない、それに最後に見せたネコの涙が忘れられそうになかった。

京子にも身元引き受けを条件に、情報を流す様に頼み込んだ。グループにも属して無い割には、中性的な魅力も有りネコは結構な有名人だった。

「決まったネグラは、持たないみたいですね……お京姐さんの言う様に、ウリもヤクもやらないそうで、それが面白く無いって奴も居るみたいですね。」

「主に、新宿と渋谷を徘徊してるみたいですね……雨の時以外は、殆ど公園に居るって話です。」

「総長、俺、妙な話を聞きました。」

ネコが出て行つて一週間、事務所に昔の仲間が情報を持つて集まつてくれた。

「どんな噂だ?」

「妙な奴等に追われてたらしいんです……どう見ても、堅気じや無い奴等らしいんですけど。何かに、巻き込まれてるんじゃないでしょうか?」

「場所は?」

「歌舞伎町の外れ辺りだそうです。」

「何処の組かわかるか?」

「流石にそこまでは……。」

「今の居どころについて、何か情報は?」

「申し訳ありません。」

「そうか……引き続き、宜しく頼む。」

「あの……総長、そのネコってガキと、どういつ……。」

何も答えず、煙草を片手に紫煙を吐きながらひと睨みすると、男達は「ソソソソ」と事務所を後にした。

「柴あ、アンタ昔に戻ったんじゃ無いの!?」

入口で出て行つた男達の背中に手を振つていた京子が、ズカズカと入つて来るとドスンとソファーに座つた。

「伝説の総長様よりも、私としては食らい付いたら離さない、切れ者の刑事さんの顔の方が良いんだけど?」

「両方共、昔の話だ。それより、何か情報が入ったのか?」

「渋谷で見掛けたって子が居てね……かなり具合悪そうしてたって。」

「…そうか。」

「ねえ、柴。アンタ、ネコちゃん見付けて…その後どうするの?」

「…。」

「松田に散々文句言われたわよ! お前達協力してる様だが、彼奴どうするつもりなんだって…。」

「…そうだな。」

「自己満足の為なら、会わせないわ。」

「…。」

「彼女を、これ以上傷付けたく無いのよ。」

「…ああ。」

「引き取るの?」

「そのつもりだ。」

「それから?」

「此処に住まわせて、仕事をさせる。」

「それから?」

「それからって…。」

「それから、どうするの!…?」

「…。」

「あのね、柴…わかってる? 犬猫じゃない、人間なのよ?」

「…。」

「それから先の覚悟が出来たら、連絡して。」

「何があるのか?」

「3日後に渋谷で一斉取り締まりが有るわ。渋谷に居れば、多分捕まるでしちゃうね。」

「連絡してくれ!」

「だから、ちやんと…。」

「ああ、面倒見ぬや。」

やつせなへと、京子は首を振りながら溜め息を吐いた。

探す

俺は、ネコの事をじうしたいのか…京子に言われ、仕事中もずっとその事を考えていた。

浮草の様な生活では無く、定住させて仕事をさせ…落ち着く迄は、此処と一緒に暮らせば良い。

仕事は此処の事務でも良いし、俺の口利きが有ればアルバイト位は幾らでも探せるだろ?」

その先は、と京子は問う…鋭いな…正直何も考えていなかつた。

昔から、お前は考え無しだと松田に怒鳴られ通しだ。

刑事を辞めたのも、俺の実家の事であらぬ疑いを掛けられ、同僚や上司と揉めた事が原因だつた。

全くの事実無根である事を自分で調べ上げて証明し、上司に辞表を叩き付けた。

好きな仕事だつただけに、その後の落ち込みは相当なもので…事務所を立ち上げ、最近やつと浮上して来た所だつたのだ。

ネコと出会いつて懐に抱いて…癒し感はあつた。

それだけで、探し出して面倒を見よう等と思つだろ? つか?

『嘘つき』とネコに言われた事がショックだつた。

『此処がいい…柴さんの所がいい!』と素直に抱き付いて来たネコを可愛いと思つた。

『…捨てるなら…優しい言葉なんて掛けるな! 餌やつたり、構つたりするなよ!…』と叫んだネコの言葉に、胸がえぐられる思いがして…。

俺はネコをじうしたい?

そして…ネコはじうしたいと思つてゐるのだろうか?

4日後、京子からネコが見付かったと連絡が入つた。

指定された西新宿6丁目にある東京医科大学病院のロビーで、京子は俺を待っていた。

「様子は、どうなんだ？」

「かなり危険だったみたい……渋谷じゃ無くて、新宿駅西口地下広場で発見されたのよ。」

「新宿に居たのか。」

「2日前にね……ホームレスだか行き倒れだか見分けがつかずに、通報が遅れたらしいんだけど……運ばれた時は虫の息だったらしいわ。年齢が若くて、身元を示す物が何も無いって事で、ウチに照会が来たって訳。」

「そうか……。」

「柴……本当に引き取るのね？」

「ああ。」

「今度捨てたら、児童虐待で引っ張るわよ！？」

「おつかねえな。」

「冗談抜きで……。」

「大丈夫だ。」

「わかつたわ、付いて来て。」

連れて行かれた病棟の個室で、ネコは酸素マスクや点滴、色々な機械に繋がっていた。

「治るのか？」

「少し時間が係るそうだけど、大丈夫よ。」

「そうか……。」

安堵する俺に、京子は書類を渡して言った。

「取り敢えず、柴の妹って事にしてあるわ。書類書いて出して置いてね。私は、必要な物揃えて来るわ……下の売店で買えるそうだから。」

「ああ、宜しく頼む。」

京子が出て行くと、俺はベッドの横に有るパイプ椅子に座り、ネコの頬を指でそっと撫でた。

ピクリと反応したネコは、俺の方に向いて寝返りを打ち、うつすらと目を開けた。

「ネコ…大丈夫か?」

酸素マスクの下でくぐもった声は聞き取れず、俺が頭を撫でてやるとネコはそのまま目を閉じた。

それから毎日俺は病院通いを続け、ようやく今週末に退院しても良いと医者に告げられたのは、12月の中旬だった。

ベッドの上で医者を見送ったネコに、俺は今後の事を切り出した。

「ネコ、退院した後の生活だがな…。」

「柴さん…医療費…。」

「心配するなと言つたろう?」

「でもさ…保険入つてねえし、個室だし、1ヶ月も入院してたし…凄いよ、きつと…。」

不安そうに窺うネコに俺は言った。

「俺は、案外金持ちなんだ。」

「やつぱり嘘つきだな、柴さん。金持ちら、あんなボロビルに住んで無いって。」

「確かに…でも、金持ちは本当の話だ。実家が、だがな…だから心配するな。それより、退院後の生活の話だ。」

「…躰も元気になつたしさ、大丈夫だつて。少しづつ、返すよ…仕事探してさ。」

「どうやつて仕事を探す?」

「…。」

「住む場所も無い、保証人も居ない未成年を雇う所なんて、無いだろ?」

「そりや、そうだけど…。」

「ウチに来い、ネコ。」

「でもさ…これ以上、迷惑掛けらんないよ。」

「今更だらうよ?金も、俺の所に来て躰で返せば良いだろ?」

「…躰で?」

訝しげな視線を送るネコに、俺は慌てて訂正した。

「馬鹿野郎！労働だ、労働！事務所で働けって事だ。」

「ああ…ソッチね。」

クスリとネコは笑い、少し寂しげに肩を上げた。

「でもさ…身元もわからんねえ奴雇つて、アンタ平氣なのかよ？」

「じゃあ、話してくれるのか？」

「…。」

途端にバツの悪そうな顔をして、ネコは俯いた。

「名前も駄目か？」

「…駄目だよ。」

「お前が頑なに自分の身元を隠すのと、お前が怪しい奴等に追われているのは、何か関係があるのか？」

「何でそれを…ああ、そうか…アンタ、元デカだつたんだよな。」

「お京に聞いたのか？」

「オキヨウ？」

「幸村刑事だ。」

「ああ、そつそつ…京子さんだもんな。」

「なあ、ネ口…俺の仕事、ボディーガードもするつて言つたわつへ。俺ならお前の事を、奴等から守つてやれるぞ？」

「…無理だよ…筋者だつて、気付いてんだろう？」

「なら尚更だ。見付かった時、お前どうするつもりだ？」

「それは…。」

「ソッチ方面の「ネも持つてるんだ。安心しろ。」

「本当に？」

「ああ…表から裏迄顔が広くなきや、何でも屋なんか出来ねえからな。」

「危なくねえの？」

「お京から聞いて無いのか…自分で言つのも何だが、俺は結構強いんだぞ？」

大きな目を見開いた後、ネコはクシャリと顔に皺を寄せて笑つた。

「なあ、柴さん…何で…引き取つてくれんの?」

「それは、お前が…。」

「え?」

「…お前が言つたんだろう?」

「…何か…言つたつけ?」

「…あの田…俺の所がいいと…お前が言つたんだろう?」

「つー? 柴さんつー?」

「俺の言葉に真つ赤になつて俯くネコに、俺は尋ねた。

「俺の所がいいんだ?」

しばらく考えあぐねて、コクンと額くネコの頭を撫でてやる。

「宿無しじや無くなるんだ…もつ、無理して男言葉使つんじやねえ

「…やつぱり、無理があつた?」

「まあな。」

「やつか…。」

「ネコはベッドの上に正座すると、手を付いて俺に頭を下げた。

「柴さん、お世話をなつます。」

「おうよ。」

「何か、気が抜けちゃつたよ。」

そう少女らしく笑うネコに、俺は再び尋ねた。

「お前、今年幾つになる?」

「言わなきゃ駄目?」

「其位なら良じだらう?」

「じゃあ、家を出たのはー?..」

「…16。」

「…14。」

「名前…教える。」

「だから…。」

「下の名前…呼び方だけでいいから。」

「…絶対に秘密なの!! 人前で呼ばないって、約束してくれる?」

「ああ。」

「絶対だよ！？」

「わかった、約束する。」

「…『ナオ』つていつの…。」

「そうか…いい名だ。」

そう言って、ネコの頭を引き寄せ、背中に手を回して抱いてやる。

「長い間…辛かつたな、ナオ。」

そう声を掛けると、

「その名前で呼ばれるの…2年振りだよ…。」

そう言って、ネコは俺の胸で泣いた。

退院の日、俺に荷物を預けると、京子とネコは2人で出掛けで行った。

夕方、ネコを探すのに骨を折った奴等への礼と、ネコの退院祝いを兼ねた食事会の席に現れた時、全員が呆けた顔をして2人を迎えた。

「総長…此方が…その、ネコさんですか？」

「…ああ。」

「何よ、揃いも揃つて！何か言つ事無い訳！？」

京子が腰に手を当てて怒鳴ると、ネコはクスクスと笑い、

「皆さん、本当にお手数をお掛けして、申し訳ありませんでした」と、深々と頭を下げた。

「あ…イヤイヤ、俺達は何も…。」

「そうです、総長の命令は絶対なんで…。」

と口々に言つと、俺の隣の席にネコを誘つた。

「どう、柴？ネコちゃん、可愛いでしょ？」

得意氣な京子が、ニヤリと笑つて俺を覗き込んだ。

ざんばらだつた髪は綺麗にカットされ、Tシャツに黒のVセーター、赤いチェックのスカートにスパッツといつ出で立ちは、渋谷辺りの女子高生そのものだ。

「素材が良いから、何着せても似合うのよ…ついに張り込んだわよ。必要な物は、一通り揃えといったから。」

そう言って、京子は俺が預けた現金封筒をそっと返した。

「済まなかつたな。」

「良いわよ～、いつでも言つてー女同士の買い物つて、楽しいから！ね、ネコちゃん？」

ハイと答えながら、俺を窺う様に見上げるネコに、

「良く似合う…良かつたな、ネコ。」

と言つて頭に手を置くと、嬉しそうに頷いた。

「アンタ達、ネコちゃんは私の妹分でもあるんだからね！手え出しだら、承知しないよつ！？」

「わかつてますつて、お京姐さん！！総長にも、散々言われてるんっすからー。」

「総長？」

ネコが、不思議そうに首を傾げると、座に座つた1人が語る。

「そうです。此の方は、関東連合の歴代総長の中でも飛び抜けた、伝説の総長なんですよーー！」

「関東連合つて？」

「それはねえー。」

酎ハイのジョッキを片手に、京子がズイッと顔を出す。

「関東最大の暴走族の名前よお～。柴は、そこへヘッジやつてたの。」

「柴さん、族してたんだあー。」

「目を見張るネコに、俺は苦笑いを漏らした。

「昔の話だ。」

「強かつたのよ～。喧嘩番長で、迎える相手を千切つては投げ、千切つては投げ…。」

「お前も一緒にうが？レディースのヘッジしてたんだからな。」「京子さんも！？」

「コイツは鎖振り回してたんだ…。」

「…よくそれで、刑事になれたね？」

「その腕を見込まれたって事かしら？」

「さあな。」

フフンと笑う京子に、ネコは無邪気に問いかけた。

「京子さんと柴さんって、恋人同士なの？」

俺と京子は酒を吹き出し、他の奴等は水を打つた様に静まり返る。

「じょっ、『冗談じや無いわよ…』こんな奴！？」

「ネコ…えらい誤解だ。」

「そうなの？」

「そうねー」トイシとは、中学の時からの腐れ縁で、元同僚だつただけの事よ…

「ふうん。」

ネコが意味深に笑うのを見て、俺はトイレに立つた。

帰つて来ると、座敷の入口で帰り支度の京子と鉢合わせた。

「どうした、もう帰るのか？」

「嫌な奴等が来たからね…アンタもネコちゃん連れて、とつとと帰んなさいよ！」

座敷の中には、派手な数人の女達が乱入し、俺が入るとすかさず両側から腕を絡めて席に誘う。

その様子を見て、ネコは何も言わずにそつと下座に移動した。

「柴さん、久し振りじやない！どうじしたのあ？」

「色々とな。」

「噂で聞いたわよ。あの子なんでしょう？探してた子つて。」

「ああ…。」

ネコは下座に座っている奴等と何やら談笑し、メニューを見ながら注文をしていた。

「可愛い子ねえ…妬けちゃうわ。」

「あら、まだ尻の青いガキじやない！柴さん、あんなの好みなお？」

「マコちゃん、失礼よ。」めんなさいね、柴さん。マコちゃん近頃

「柴さんが来て下さらないから、お冠なのよ。」

「あつて、柴さんはみんなの物なのよ。」

「ネコちゃん」と仰るのね。わたくし一寧にじい挨拶頂いたのよ。」

「そうか。」

「でさあ、柴さん…あの子、事務所で飼うの?」

下座で一心不乱に銀杏の皮を剥いていたネコの手がピクリと止まり、一緒に居た奴等が女を睨み付ける。

俺は何も言わずに立ち上がると、買い物袋をかき集めて言った。

「ネコ、帰るぞ…！」

ネコは黙つて立ち上がり、一回に頭を上げて大股で部屋を出る俺の後を慌てて追い掛けた。

「柴さん…柴さん、びしきたの?」

「…何でも無い！」

「みんなまだ飲んでたのに、置いて来て良かったの?」

「ああ、大丈夫だ。」

「何か…怒ってる?」

小走りで付いて来るネコが小さく咳き込むのを聞いて、俺は慌てて歩を止めた。

「大丈夫か!?」

「…平氣だよ。」

「悪かった、今田退院したばかりなの」「無理させたな。」

「何謝つてるの?変なの、柴さん。」

「だがな…。」

「今日は、楽しい事ばっかりだったよ?ありがとう、柴さん!」

「…そうか。」

事務所兼自宅に帰り着くと、荷物を下ろして寝室のドアを開けた。

「さて、これからどうあるか…。」

「何が?」

「お前の部屋を確保しないとな。隣の部屋も借りるかな…。」

「何で?私、此処でいいよ?」

「そういう訳にも行かないだろ？」

「ネコは、いきなり俺の腰に手を回し、真剣な表情で見上げた。

「…此処がいい。」

「ネコの瞳から涙が溢れた。

「…ネコ。」

「柴さんの所がいい！」

腕の中でネコが抱き付いて穏やかな寝息を立てて……俺はその背中と腰を抱き寄せた。

素直に人恋しいと感情を溢れさせるネコに、戸惑いながらも受け入れた俺は、その腕の温もりにそれ以上の想いが沸き出しそうになるのを抑え込もうとしていた。

それにしても、この抱き心地は堪らない。

しつとりとした肌の柔らかさ、腕に添う躰の軟らかさ、腕の中に収まる大きさといい、若い躰から立ち上る芳香といい……。

頭の中で警鐘が鳴る……ネコは16歳の未成年で、そんなつもりで抱かれている訳では無いのだ。

ヤバいな……そう思つた時には、もう遅かった。

布団の中で寒いと懐に抱き付いて来る様に、寝室の暖房をわざと切る大人の小狡さを企てている自分がいる。

微睡むその躰を撫でると、手を追つて顔を擦り寄せて来るその仕草に口許を綻ばせた。

「……おはよう、柴さん……もう起きてたの？」

「ああ……寒くなかったか？」

「暖かかったよ……柴さん、体温高いの？」

胸に顔を擦り寄せられゾクリと背筋に走る感覚に慌て、気付かれまいとネコの鼻を摘まんで答えた。

「さあな。」

酷いと笑いながら腕をすり抜け、寝室を出て洗面所に向かうネコを見送り、溜め息を吐いた。

俺は……いつ迄耐えられるだろ？

師走の慌ただしい空氣は、商店街から少し離れたこのビル迄風に乗

つてやつて来る。

クリスマスイブの土曜日、事務所の応接セットでのんびりとネコと共に遅めの朝食を取つていると、突然入口のドアが開いて黒服の男達がドヤドヤと入つて来た。

どう見ても堅気に見えないその一団に、ネコは飛び上がって事務所の窓を開け放ち、空中にダイブした。

「ネコつ！？」

慌てて窓に駆け寄ると、下に停めてあつた黒のセダンのボンネットに跳ねたネコは、転がる様に逃げようともがいていた。

「何だ？ 何があつた？」

黒服の1人が、同じ様に窓から身を乗り出し下を覗き込んだ。

「クソツッ！！ 飛び降りたんだ！！」

「飛び降りたつて… 此処は2階だろ？ あーあ、ボンネット凹ませやがつて…。」

俺が入口を飛び出し階段を駆け降りると、セダンの横で黒服の男達に羽交い締めにされたネコが大暴れしていた。毛を逆立てた猫の様に正面から捕まえ様とする男を蹴り上げ、後ろから羽交い締めにした男の腕に噛み付いている。

「待て、待てつ…！ 離してやつてくれ…！」

男達が腕を弛めた途端、後ろの男の喉を引っ搔き、身を翻して逃げようとするネコを抱き締める。

「ネコつ、ネコ… 落ち着けつて… 此奴等、お前を捕まえに来た奴等じゃ無い！ 大丈夫、大丈夫だから…。」

フーフーと息を荒げるネコを何とか落ち着かせ事務所に上がると、背後に黒服の男達をズラリと従えた男がドッカリとソファーにふんぞり返つていた。

「やつと帰つて來たか。」

「…來るなら、一報寄越してからにしてくれ。」

ビクビクと震えるネコを見詰めてニヤリと笑つた男は、ヒヨイヒヨイと手招きをする。

「来いよ、仔猫ちゃん。」

「…おい。」

「良いじゃねえか…コツチは、車をお釈迦にされたんだ。」

そう睨み付けると、もう一度ネコを呼んだ。

「来るんだ、仔猫ちゃん！」

ネコは俺の顔と田の前に座る男の顔を見比べ、不安そうに男の前に立つた。

「車をお釈迦にしたお仕置きをしないとなあ？」

男はそう言って自分の膝を叩き、ネコにそこに座る様に指示した。恐る恐る膝に座りながらも田だけは男を睨み付け、男に顎を引き上げられ親指で唇に触れられると、ネコは思い切りその指に噛み付いた。

「オイツ！？」

黒服達が熱り立つのを制した男は、ネコと田を合わせて思いきり大きな笑い声を上げた。

「いいなあ、健司！…」の氣の強さ、氣に入った…！」

「…いい加減にしろよ、兄貴…。」

俺の言葉を聞いた途端、ネコは噛み付いていた指を離して振り向いた。

「ネコ、それは俺の兄貴だ。」

みるみるネコの大きな瞳が涙で潤み、兄貴の膝の上で大粒の涙を流しながら声を上げて泣き出した。

「いい加減、可愛い物を見たら泣かす迄弄くる癖、治せよ。」

「いやあ、堪らんだろうよ！？こんなに可愛いひや尚更なあ？」

そう言つて泣きじやぐるネコの髪をグシャグシャにして撫でると、キュウウッと抱き締める。

慌てて奪い返して同じ様に膝に乗せると、ネコは俺の前に腕を回して顔を埋めて泣き続けた。

「抱き心地も良いじゃねえか。」

「つるせえよ…で、何の様だ？」

「いや、今度の正月はコッチに来ないかと思つてな。」

「行かねえよ…わかつてんだろうが？」

「まあな…じゃあ、温泉旅行なんてどうだ？」

「断る。自分達だけで行つてくれればいいだろ？？」

「つれねえな…。」

兄貴はニヤニヤと俺達の様子を見ると、

「一緒に暮らしてると？」

と聞いた。

「ああ…。」

「じゃあ、2人で行つて來い。予約はしておいてやる。」

「…。」

「その子を泣かした詫びだ。どうだ、仔猫ちゃん？」

何も言わずに怯えるネコの代わりに少し考えさせると兄貴に伝えると、明日返事を寄せと大拳して押し掛けた一团は帰つて行つた。勿論、帰りがけにネコの髪をグシャグシャにする事は忘れない…。

「怖い思いさせて悪かつたな。」

泣き止んだネコは、膝に乗つたまま微かに震え続けながらも首を振つた。

「柴さんのお兄さんつて…ヤクザ？」

「そうだ。あれでも組長でな。」

「だから、ツテが有るんだ。」

「そう…俺とは腹違いの兄貴なんだが、何だかんだと可憐がつてくれるてる。」

「実家が、お金持つて…。」

「兄貴の事だ。」

「そつなんだ…。」

「嫌か？」

ふるふると首を振りながら、ネコは少し強張つた笑顔を見せた。

「車も、あの人達も…平氣？」

「ああ、気にするな。それより、お前財平氣なのか…？」

「…多分。」

上着をめぐり上げて躰と腕とを確認する。

骨は折れでは居ないようだが、肩や腕、腰が赤くなつて腫れていた。

「もう一度と窓から飛び降りたりするなよっ！－！たまたま下に車が有つたから良かつたが、地面に激突してたら死んじまう所だつたんだぞ！？」

「…うん。」

「全く…肝が冷えたぞ…絶対だからなつ！？」

「…わかつた…ごめんなさい。」

ネコの躰に湿布を貼つてやりながら、俺は優しく尋ねた。

「温泉どうする？」

「2人で？」

「何だ、不満か？」

「怖い人達、来ない？」

「多分な…。」

「来るかもしれない？」

「ん…。」

「来るんなら…ヤダ。」

余程怖かつたのか、ブルリと震える。

「そうだ、京子さん達も誘つ？」

俺が眉を寄せるのを見て、ネコは不味い事を言つたのだろうかと不安な表情を見せた。

「別に構わないが…基本ヤクザと刑事が同席するのは不味いからな。

「じゃあ、族の皆さんは？」

「…馬鹿騒ぎしたいのか？」

「ううん…怖いだけ。」

「ネコ…大丈夫だから…兄貴の組の奴等は、お前を守つてくれる。」

「本當？」

「ああ…その内に事情を話すから…打ち身に良く効く温泉を頼もう。

「 ウンと頷いたネコは、その前に話をなきやね…と、小さく呟いた。

クリスマスプレゼントこと携帯ショップに連れて行き、ネコに機種を選ばせる間に、俺は自分の機種変更の手続きを取っていた。

「 どれにするの、柴さん? 」

「 さて、どうするかな? 」

「 一緒のがいいな…。 」

「 一緒の? 」

「 ウン…駄目? 」

同機種の色違いを2台手続きしている間に食事をし、帰り道にある雑貨屋で歩を止めた時、ネコは不思議そうに俺を見上げた。

「 …ストラップ、選んで来い。 」

「 良いの! ? 」

「 ただし、2本だ。 」

「 2本? 」

「 …一緒のが良いんだろ? 」

ネコは嬉しそうに頷くと、店の中に走つて行った。

家に帰り、初めて携帯を持つネコにあれこれと教えると、流石に若者だけあって直ぐに操作を飲み込んだ。

「 柴さんから貰うばかりで、私から何にもプレゼント無いよ…。 」

俺の携帯にストラップを付けながら、パジャマ姿のネコが申し訳無さそうに俺を窺う。

「 …そんな事は、無いんだがな…。 」

ベッドの上に座つた俺が呟くと、ネコは俺の所に這つて来て再び窺う。

「 私、何にも上げてないよ? 」

「 飯作つたり掃除したり…事務所の事も手伝い始めたひつ…。 」

「 クリスマスプレゼントの話だよ! 」

「何か、贈りたいのか？」

「つて言つても、たいした物は上げれないけどね…。」

そう言つたまま、俺は這つたままの躰を起こさせ、布団の上に座らせた。

「目、閉じてろよ。」

「何？」

「良いから…。」

正座をして目を閉じたネコをやんわりと抱くと、俺は顎を引き上げてその唇に軽くキスをした。

「…しうわはん…。」

唇を重ねたまま、ネコが話を始めたので、俺は仕方無く唇を離す。

「…何だ？」

「…柴さんってさあ… 恋人居ないの？」

俺は顎を上げたまま目を閉じたネコの顔を見詰め、ハアと溜め息を吐いた。

「お前…ここの状況で、このタイミングで、それを聞くかあ？」

薄目を上げたネコは、目を開けても良いと判断したのか、真剣な眼差しで俺を見上げて言った。

「だつて…大切な事だよ？」

「…萎えた。」

「だつて…。」

赤くなりながら、ネコは力説しだす。

「お付き合いしてる人居たら、その人に申し訳無いし…こいついう事つて…恋人同士しかしちゃ駄目なんだよ…。」

「…居ねえよ、恋人なんて。見てたら、わかんだらうが…。」

「だつて…柴さん格好良いし…モテるだらうしや。ここの前だつて…。」

「」

「ここの前？」

「綺麗なお姉さん達が…言つてたし…。」

「…気にしてたのか？」

「柴さん、私が来てから夜飲みにも行つて無いし…何か…悪いなつて。」

赤くなつて下を向き、モジモジと恥じらつネコの頭に手を乗せて、俺は言った。

「俺は、自分がしたい様にしか行動しない男だ。お前が、そんな事で気に病む必要は無い。それよりも…だ。」

「何?」

「嫌じや無かつたか…さつきの?」

再び真つ赤になつたネコは、しどろもどろで答えた。

「い、嫌じや…無いよ…し、柴さんの事…好き…だし…でもそれ

…。」

「なら、今度…」田を開じてみ。」

「…え…。」

「クリスマスプレゼント貰うんだからな?」

「あ…うん。」

「…喋んなよ。」

大人の狡さを駆使して、俺はもう一度田を開じたネコの唇を奪う。軽く啄む様なキスをして、頑なに歯を食い縛るネコの鼻を摘んだ。息苦しさに口を開けた途端、舌を侵入させて貪る。

「…ンンン。」

迎え入れた舌に逃げ惑うネコの舌と躰を、しつかりと抱き締めて絡ませる。

空気を求めて喘ぐ口を覆い刃くし、再び鼻を摘まんやると、ようやく鼻で呼吸を始めた。

強張つていたネコの躰が、ふにやりと力を抜き俺の腕に添つ。

舌を絡めピチャリという水音に僅かに震えるネコの躰と、上氣した顔の眦に涙の雫が溜まつた時、口唇を味わい刃くしした俺はゆっくりとネコを解放した。

「…柴さん…。」

トロソとした瞳で見上げるネコを布団に入れてやり何時もの様に抱

き寄せると、やがてネコは穏やかな寝息を立て始めた。
大人つて奴は…全く…。

翌日、ドラッグストアで湿布を買った俺が家に戻ると、京子がベッドの枕元に座りネコの頭を撫でていた。

「来てたのか？」

「ネコちゃんに、クリスマスプレゼント渡して来たのよ。それより…ちょっとコツチに来なさこよ。」

京子は俺を事務所に引き揺ると、襟元を締め上げた。

「しい～ばあ～つ！？」

「何だ！？あのアザか？あれば昨日、ネコが窓から飛び降りて…。」

「それは聞いたわよつ…！」

「じゃあ何だ！？」

「アンタ…クリスマスプレゼントつけて、ネコちゃんの髪奪つたって…！」

「あ…。」

「あ、じゃ無いでしょ！？全く…。」

「喋ったのか？」

「喋ったわよ…。」

「全部？」

「全部…つて、アンタその先も遣つしまつたなんて事！？」

「それは無い。」

「アンタねえ…。」

京子は襟元を離すと、疲れた様にソファーに座り込んだ。

「仮にも、この間迄警察官だったんでしょ？？」

「…もう違う。」

「マジなの！？」

驚いた様に俺を見詰めた京子は、ハアと溜め息を吐いて言った。

「無茶な事するんじゃ無いわよ！？ネコちゃんには、嫌な事された

ら金蹴りして、私に直ぐ連絡する様に言つといたわ。」

「そうか。」

「そんなつもりで引き取つたとは……私もまだまだ読みが浅いわね。」

そう言つて、京子は苦笑した。

バレる

「凄いよ、柴さん！！露天風呂も有るんだって！？」

小さなロビーに置かれてあるパンフレットを見て歓声を上げるネコを見詰め、連れて来て良かつたと安堵する。

昼過ぎに東京を発ち、レンタカーを走らせて南房総の宿に着いたのは、夕方にはまだ早い時間だつた。

小さいが設備の整つた料理旅館：本館には客室の他、宴会場や大浴場や露天風呂もあり、広い庭に離れも数戸建つてゐる。

「柴様のお部屋は、離れをご用意させて頂いております。」「そうですか。」

「本日のお食事は、お部屋の方に運ばせて頂きますが、明日からはどういたしましょう？」

「は？」

「明日からは、皆様と一緒に宴会場の方で宜しいですか？」

「なる程、そう言つ事か。

「いえ、ずっと部屋の方でお願いします。」

「承知致しました。」

「あの…明日からは、何名来る予定なんですか？」

「佐久間様ですか？約20名と…当田変動が有るかもしないと言つ事で、本日より正月三箇日は、貸し切り頂いておりますから、どうぞごゆっくりお寛ぎ下さい。」

にっこりと笑う支配人に愛想笑いを送ると、仲居が荷物を持つて離れまで案内してくれた。

「うわあ…。」

高級な数寄屋造りの日本家屋に入ると、玄関間に続き12帖の和室、小さな次の間に続いて8帖のベッドルームが有り、洗面所に内風呂の他に広縁の向い側には専用の露天風呂まで有つた。

「…凄いな。」

「いつもは、佐久間様にご利用頂いております。露天風呂、内湯共に、源泉掛け流しの黒湯でござります。」

「黒湯？」

「此処の湯は、ナトリウム炭酸水素塩泉でしてね。コーヒー色の黒湯で、入浴中のトロットした肌触りと浴後の爽快感が特徴なんですよ。『美肌の湯』として評判が高いんですが、飲めば慢性消化器病、糖尿病、通風、肝臓病などに効果があるんです。飲む温泉は、本館の方にご用意しております。今回は佐久間様より、こちらの奥様がお怪我をなさつておられるという事でしたので…。」

「おっ、奥様あ！？」

「はい…美肌効果の他、保湿効果、冷え性、神経痛、痛風、リウマチ、打ち身、捻挫、筋肉痛、運動麻痺などにも効果的だとお伝え致しましたら、是非にという事でございました。浴衣は、こちらにご用意致しました。女性用の浴衣は、全柄用意せよとのご要望でしたので、10枚ござります。どうぞ、お好きなだけお召しになつて下さい。」

「…ありがとうございます。」

「お食事は、何時頃にご用意致しましょう？」

「ネコ、腹減ったか？」

首を振つたネコを見て7時に夕食を頼むと、仲居は承知しましたと退室した。

「露天風呂入るか？」

「…奥様つて言った。」

「ああ…兄貴が、そう説明したんだろ。」

「絶対怪しいと思われてる！」

「何が？」

「だつて…。」

ネコは立ち上がり、ベッドルームのドアを開けると、中に置かれてあるキングサイズのベッドを指差した。

「此処、スイートルームつて事でしょう！？」

「やうだな。」

「…変だよ、やつぱり。」

何が言いたいのかは、わかるが…此処は納得させて、これから先の事を考えさすチャンスかもしけない。

俺は足を投げ出して座ると、少し涙田になつて膨れるネコを呼び寄せた。

「…ひつち来い、ネコ。」

手を差し伸べてやると、ネコは素直に俺の手を取り股の間に座り込んだ。

自分に背中を預ける様に座らせた腰を抱き込んでやると、クスンと頭をもたげてくる。

「お前が気に入らないのは何だ？」

優しく聞いてやると、ネコはモジモジとして呟いた。

「柴さん…援交親父だと思われてるよ…やつと。」

「そうだな。」

「嫌いや無いの…？」

「今更だらう？街で歩いていても、隠つ奴はそつ隠つ。」

「…嫌だよ…柴さんが、そんな風に思われるの…。」

「俺の事か？」

「…ウン。」

「お前は？」

「私は…そう思われるの慣れてる…。」

クスリと笑いながら、寂しい瞳でネコは俺を見上げた。

「でも…やつぱり、これは良くない様な気がする…。」

「何が？」

「家で一緒に寝てるから、今迄何とも思わなかつたけど…やつぱり変だよね？一緒に部屋に泊まるのも、本当は変なんだよ…。」

「それこそ今更だろ？それとも、別々がいいのか？」

「…。」

「一緒に住んでいいのか？」

「…一緒が…いいけど…。」

「なら素直に、気持ちのまんま居ればいい。余計な事は気にするな。

俯いて俺の手を弄びながら頷くネコ。俺は尋ねた。

「お前、これからどうしたい?」

「どうしたいって?」

「これから先の生活も、お前自身の事も…。」

「…わかんない。」

「住む場所と仕事は手に入れた。次は何がしたい?」

「別に無いよ…逃げなくていいって、柴さん言ってくれたから。」

「それだけ?」

見上げたネコが、甘える様に言った。

「柴さんと一緒に居れたら、それでいい。」

「可愛い過ぎるだろ?」

ネコの背中を支える様に抱き、その場に寝かせ、その躰に覆い被さる。

「…もつと望め、ネコ。」

「え?」

「俺は、お前が望む事…何でもしてやるから。」

「私が望む事?」

「そう…お前の望み…欲しい物は何だ?」

「何も無いよ…柴さんこ、いっぱい貰つたよ?」

俺はネコの首筋に顔を寄せ、耳許に囁いた。

「…もつと貪欲になれ…ネコ。」

「だつて…柴さん、欲しい物も、して欲しい事も…全部くれてるよ?これ以上、何を望むの?」

俺は堪らなくなつて耳朶に軽く歯を立てると、ピクッとネコの躰が跳ねる。

そのまま顎のラインに唇を這わせ、ゆっくりと顔を離してネコを見下ろした。

「…お前、俺の事…どう思ってる?」

大きく見開かれた瞳が俺を見上げ、微かに揺れる。

「俺に…どうして欲しい?」

ゆっくりと顔を近付け、唇が触れる瞬間、

「…ナオ…。」

と呼び掛けた。

息が吸い込まれた瞬間、舌を口腔内に侵入させ上顎を擦り舌を絡めて軽く噛む。

息を上げ上気したネコの腰を抱き寄せ、首筋に唇を当てた時、俺の肩口のシャツを握り締め微かに震えていたネコが、小さな掠れた声を上げた。

「…柴さん…胸…。」

「…ん?」

「…胸…苦しい…。」

慌てて身を離すと、喘ぐ様な息をして、震えながらネコが泣いている。

「大丈夫か!?」

浅い息を繰り返し、涙を流すネコを抱え上げてベッドに運び、力を抜く様に諭して鼻を摘まんで口から息を送り込んでやる。

「どこか痺れるか?」

フルフルと首を振ったネコの額に手を当てて、隣に寝てもいいかと聞くと、コクンと頷いた。

隣に横たわり腕枕をしてやると、いつもの様に懷に潜り込んで来る。

「…話せるか?」

「…ウン。」

「怖かったか?」

「…」

ネコはしばらく考えてコクンと頷いて言つた。

「…怖くて…胸が痛くて…悲しかつた。」

「悲しい?」

「…ウン。」

「何故？」

「…わかんない。」

そう言つてネコは俺の背中に手を回し、胸に顔を擦り寄せて泣き始めた。

そつと背中を撫でてやると、やがてそのまま寝息を立てる。

欲しがつてゐるのは…貪欲なのはネコでは無い…この状況を変えたい、進展させたいと考えてゐるのは、自分なのだ。

ネコは…このまま満足しているというのに…。

怖い思いをさせたにも係わらず、嫌われてはいない様だが…悲しかったとはどういう事か？

何か、悲しませる様な事を言つただろうか？

夕食後に、部屋の露天風呂では無く、わざわざ本館の露天風呂に行つたネコが戻つ来た時、部屋には1人の来客があつた。

「帰つて來た、帰つて來た！」

と喜ぶと、入口で立ち竦むネコを肩に抱き膳の前に座ると、そのままネコを自分の胡座の中に座らせた。

「止めるつて、兄貴！ 況えてるだろうが！？」

怯えて半泣きで逃げようともがくネコを、後ろから抱き締めると、

「やつぱり仔猫ちゃん、抱き心地いいな…。」

そう言つて顎を捉えると、顔を引き上げた。

「温泉旅行はどうだ、仔猫ちゃん？」

怯えるネコは、唸り声を上げて兄貴を睨み付ける。

「お礼を貰わなきやなあ？」

「兄貴、何を…。」

嫌な予感がして兄貴の隣に歩を進めた時、低い声で兄貴がネコに尋ねた。

「…名前を教える、仔猫ちゃん。」

青くなつて怯えるネコは、顎を捉えた兄貴の手を引き剥がすと、滅

茶苦茶に暴れ出す。

その耳許に顔を近付け、兄貴は静かに言つた。

「お前の名前…オトベナオ…つていうのか？」

ビクツと痙攣したネコはガクガクと震え出し、短い息を吐きながら空気を求めて喘ぎ出す。

「ネコつ…?」

兄貴の腕から奪い返し、抱き上げてベッドに運んでやると、腕の中に潜り込んで声を上げて泣き出した。

「心配するな、ネコ…俺が守つてやると言つたのつへ」

パニックを起したネコは、唸り声を上げては泣き続け、とうとう最後は意識を飛ばした。

「…寝たか？」

「ああ…どうやつて身元を調べた？」

「あの田だ…どこかで見た記憶があつてな…昔の写真を引っ張り出して探し出した。」

そう言つて、兄貴は懐から一枚の写真を出した。

そこには、どこかのパーティー会場で撮られた女性の姿が写っている…振り袖姿の瓜実顔の美人。

20歳位だろうか…全体的に大人しい和風美人なのだが、目だけは黒目がちのアーモンド型の勝ち気な瞳…。

「誰だ？」

「恐らく、あの子の母親だ。名前を…榎沙夜と言つ。」

「榎…つて、あの榎組か！？」

「そうだ。沙夜は、榎の娘で…22年前に駆け落ちした。相手は当時榎組の顧問弁護士をしていた、音戸…という若いが遣り手の男だった。」

「詳しいな。」

「当時、ちょっと関係があつてな…沙夜は、もしかしたら俺の嫁に来ていたかもしれない女だつたんだ。」

「どういう事だ？」

「神組は特殊な理由で、どこの会にも所属していない単体の組だ。元々は神官の家系らしくてな、それが生き残る為に数代前の当主が組を起こした。」

「神官が、ヤクザに？」

「神は…神の女は、特別な力があるとされて来た。昔の神託みたいな物が出来るつてな…それが時代が変わると、神の女と交わると…運気が上がるつて話になつて行つた。」

「何だよ、それ！？」

「実際、色々実績が有つたから噂が広まつたんだろうが、組を立ち上げる前から、神の女は特殊な育て方をされて来たらしい。」

「育て方？」

「生まれた時から、逃げ出さない様に座敷牢で育てるんだ。俺も沙夜と最初に会つたのは、座敷牢の牢越しだつた。」

「…？」

「その写真は、俺との婚約を祝つパーティーで撮つた…恐らく、初めて外に出た時の写真だな。」

「破棄したのか？」

「どうとか、された側だ。この直後、沙夜は弁護士と逃げ出した。」

「よく抗争にならなかつたな？」

「…知つてたからな…このパーティーで沙夜に言われた。自分の事を抱いてもいいと…その代わり、嫁には行けないとな。あの日で言われた…。」

「惚れてたのか？」

「どうかな…印象的ではあつたが…。」

「それで？」

「神とは、島を半分佐久間に貰い受ける事で手打ちをした。元々は、神が組を存続する為に希望した縁組みだつた。佐久間の後ろ楯が欲しい為のな。その後神の跡取りの長男が病死して、今又先代が組を仕切つてゐる。」

「…。」

「2年前、沙夜が実家に戻った…未亡人としてな。その頃、今は結構有名になつた代議士先生の、妙な噂が流れた。」

「どんな噂だ?」

「自分が代議士になれたのは、榎の女の力があつたからだというんだ。」

「!?」

「事の真意はわからない…だが、噂を真に受けた連中も大勢居る。勿論榎は、沙夜が出て行つてからずっと行方を探し続けていた。」

「…。」

「沙夜が娘を産んだらしい事は、部外者の俺の耳にも届いてる。だが2年前に実家に戻つたのは、沙夜一人だ…これは間違い無い。」

「健司、仔猫ちゃんはどういう経緯で出会つた?」

「…ネコは…俺が新宿の公園で拾つた。」

「拾つた?」

「ネコは、路上生活をしていた。新宿署の少年係の…京子の所の常連で、その縁もあつて引き取つた。」

「お前の、女なんだな?」

「いや…まだ、そんな関係じゃ無い…。だが、大切な女だ。」

「…ふん。」

兄貴は俺を見詰めて、鼻を鳴らした。

「まあ…厄介な拾い物をしたもんだが…拾つちまつた猫は、野良にはさせられないからな。」

「…兄貴。」

「だが、知らなかつたとはいえ、榎の承諾無くあの子を佐久間の身内が困つてるんだ…これは事だぞ?」

『音戸乃良』と書いて『オトベナオ』…ネコは、そう布団の中で告白した。

そうか…『音戸』は『ネコ』と、『乃良』は『ノラ』と読める。だから野良猫だったのかと聞くと、コクンと頷いた。小さな頃から住居を転々とし、学校には行けなかつたと云つた…勉強は、親が見てくれていたらしい。

逃げ回つていたのだ…当然、住民登録等出来ない生活だつたのだろう。

それでも、両親の婚姻届けと、自分の出生届けは、きちんと出してくれてるんだつてど、ネコは嬉しそうに笑つた。

そんな当たり前の届け出でこんな笑顔を見せる程、家族の生活は緊張の連続だつたのだろう。

「やうなのがな…でも、それが普通だと思つてたから…お父さんもお母さんも、いつも笑つてたし…夜寝る時には、お父さんが私を挟んでお母さんの事ギューッとして寝てたんだあ。」

「だから、抱かれて寝るの好きなのか？」

「ん…お父さん細くつて、柴さんみたいに大きく無くつて、力も…喧嘩も弱かつたけどね、ギューッとしてくれる時は、力強かつたんだよ。」

そう言つてモゾモゾと腕の中で動いて俺を見上げると、ネコは照れた様な笑顔を見せる。

「柴さんの声…ちょっとだけ、お父さんに似てる…。」

ネコは…俺に父性を感じていただけなのかもしれない…そう思つと、俺の胸は疼いた。

「父親は、亡くなつたらしいな？」

「…あの日の事…思い出したく無い…。」

ブルリと身を震わせ、涙声のネコは俺の胸に顔を埋めた。

「お前が、家を出たのは？」

「…お父さんが、死んだ日。」

「…もしかしたら、変な奴等が訪ねて…。」

そこまで言つと、ガクガクと震え出した。

「ネ」「…一度しか聞かない…話してくれないか？」

震える躰が段々と丸まり、ネコは自分の腕に歯を立てて唸り声を上げた。

「…落ち着いたらでいい…ゆつくりでいいから…。」

俺は声を掛け続けて、その躰を撫で続けた。

どの位の時間が流れただろう…ゆづやくボソリボソリと小さな声が語り出した。

「…あの日…夕食の買い物をした帰り道で、知らない男が声を掛け來たの。音戸さんの娘かつて聞いた。以前お父さんと一緒に働いていた、お父さんに会つて話したい事が有るつて言つたから…家に…。」

「連れて行つたんだな？」

「私がバカだつたの…絶対知らせちゃいけなかつた…男は家に連れて行つた途端、私に…襲いかつて…着てる物全部…。」

「…?」

「お母さん、叫んで止めようとしてくれた…でも、他にも男の人入つて來たの。その内変な親父が私の上に乗つかつて躰を触つて來た。私、嫌で…大暴れしてたら、お父さんも帰つて来て…お父さん怒つて男達に掴み掛かつて…だけど反対にボコボコにされちゃつた。」

ネコは啜り上げながら、一言一言思い出しながら話し続ける。

「お父さんも捕まつて、変な親父が又私に触り出した時、お母さんが…お母さん、自分が変わるつて…子供より自分の方がいいだらうつて、着てる物全部脱いで親父に言つたの。親父が私の事放したから、私お父さんの所に飛んで行つた。お父さん…私の事抱き締めて震えてた。」

「…それで？」

「…お母さん、お父さんと私を部屋から出してってくれって言ったの…でも、男達は許してくれなかつた。お父さん、畜生畜生つて…私の事抱き締めて泣いてた。」

そうか…代議士の噂で出た榊の女といつのは、沙夜の事…彼女は、娘の身代わりを申し出たのか。

不謹慎にも、話を聞いて胸を撫で下ろす自分が居た。

それにしても、夫と娘の目の前で、妻を凌辱したといつのか…?

「お母さんね…ずっと前から心臓悪くて…発作起こしたの。お父さん慌てて心臓マッサージしながら、男達に救急車呼ぶ様に言つたの。自分は弁護士だつて、もしお母さんがこのまま死んだら、傷害遺棄致死で訴えてやるつて叫んでた。」

「男達は、救急車呼んだんだな？」

「うん…私は、お母さんと一緒に救急車で病院に行つたの。お父さんは…車で追い掛けるからつて…でも、お父さん…来なかつた。」

俺は静かにネコの腰を抱き寄せて、髪を撫で続けた。

「…お母さんが病院で治療してる時…警察が病院に来て…お父さん事故で死んだつて、確認して欲しいつて…警察の車で連れて行かれて…冷たくなつたお父さんと会つた。」

「警察は、何て言つてた?その…お父さんの死因について?」

「…交通事故ですつて…駐車場に行く前の道で、飛び出して来た所を跳ねられたつて…即死でしたつて言われた。」

「…それで?」

「警察が…病院迄送つてくれた。治療終えて、病室に移つたお母さん…に…言えなくて…。」

グスグスと泣き出したネコの眦の涙を親指で拭き取つてやると、手に顔を擦り寄せて来る。

「でも…お母さんわかつてた…『お父さん死んだの?』って私に言つたの。頷いたら、私の事抱き締めて…今から言つ事、よく聞きなさいつて…絶対誰にも、話しちゃ駄目つて…。」

「何て言われた?」

「…今日来たみたいな男達が、私の事追つて来るつて…捕まつたら犯されて閉じ込められるつて、乃良の自由は無くなつて、一生牢屋に入れらるつて言つたの。お母さんが、ずっと牢屋に入れられてた事聞いてたから…凄く怖かつた。このまま…家にも帰つちゃ駄目つて、お母さんに会いに來ても駄目つて…人の沢山居る所で、逃げて逃げて生き延びろつて言つて、持つてたお金全部くれた。」

「…。」

「多分、お父さんも殺されたつて…知らない人にも、身内だつて言つて来る人にも、絶対に捕まるなつて…自分の名前も、親の名前も絶対言つうなつて言われたの。言つたら、今日みたいな目に合つつて警察にも、絶対に何も言つうなつて言われた。」

「…それから、ずっと逃げ回つてたのか？」

「最初は、病院の近くをうろついてたの…そしたら、黒い大きな車が来て…お母さん乗せて行つちゃつた。ナンバー・プレートに『新宿』つて書いてあつたから、東京に連れて行かれたんだと思つて…。」「ちょっと待て、お前…それ何処で起きた話だ！？」

「…仙台。」

「仙台から、電車で來たのか？」

「…お金、そんなに無いもん…。」

「…歩いて…來たのか？」

「コクンと頷いたネコの躰を思わず力一杯抱き締めると、小さく苦しいと喘ぐ声がして、慌てて腕を弛める。

「お前、どうやって生活してたんだ？」

「旅の間？お寺とか神社とか探して…お掃除とか手伝つから、一晩泊めて下さつてお願いしてた。運が良ければ、お風呂も食事も、布団にも寝かせて貰えたよ？」

「…そうか。」

「東京に來て…最初はね、渋谷に居る事が多かつた。若い人が沢山居て、紛れてわからないかと思って…警察にも何度も捕まつたし、変な男達にも…追われて…それで…。」

縋り付くネコを抱いた手がピクリと反応するのに気付いたのか、ネコが小さく謝る。

「「めんね、柴さん…気持ち悪いよね？」

そう言って、躰を離そうとするのを、俺は腕に抱え込んだ。

「お前が謝る必要は無い…悪いのは、お前じゃ無いだろ？！」

躰を固くしたネコが、フニャリと俺の胸に躰を添わせた。

「…渋谷のね…赤十字センターでね…HIVの検査…怖くて、何度も何度も調べたんだよ。そこのお姉さん優しくて…普通だと結果は自宅に送るらしいんだけど、そこで預かつてくれたの。犯れたら、いつでも調べに来いでって…無料だからって。ハンバーガーも食べれるし、お菓子もジュースも飲み放題で…雑誌とかも置いてあって…私みたいな子…男も女もいっぱい居たの。そこで、色々な事教えて貰ったよ。」

「…そうか。」

「渋谷のホームレスの人達にも助けて貰つた…女のままだと危ないからつて、男の子の格好させて貰つて…古着屋さんで、商品にならない洋服貰つたり、ホームレスに賞味期限切れのおにぎりとか差し入れてくれる人が居たり…でも、炊き出しとかに行くと、ボランティアの人達が未成年者だつて警察に連絡しちやうの…参つたよ。」

クスリとネコは笑い、上目遣いで俺の顔を窺つた。

「その内にね、渋谷より新宿の方が襲われたりする確率が低いって聞いて…酔っ払いの親父が多いけど、若い人が少ない方が安全だつていうんで、新宿に来たの。2丁目では、男の子つて間違えて誘われる事多かつたけど…新宿で補導されて、京子さんに会つた。」

「新宿御苑で、木に登つてたつて？」

「聞いたの？何度も補導されて…その内に、路上生活してる人達にクスリ売つたり、売春斡旋してくる奴等の情報買つてくれる様になつたの。私達にしても、そんな奴等は追つ払つて欲しかつたから…一石二鳥だつたよ。それに…いい事もあつたしね。」

「いい事？」

フフフと笑つた後、ハアと溜め息を吐き、ネコは恥ずかしそうに胸に顔を擦り寄せた。

「私ね…好きな人がいたの…。」

ツキリと胸に痛みが走る…そうだ、京子が以前言つていた…ネコには、初恋の相手がいると…。

「京子さんに会う時には、その人にも会えるかもしれないって、いつもドキドキしてた。」

「…どんな奴だ?」

「スーツ着てたから…サラリーマンだと思う。いつも、遠くから見るだけだつたから、顔もよくわからないんだけどね…。」

「顔もわからなくて、どこに惚れたんだ?」

「その人ね…いつもつて訳じやないけど、公園の決まつたベンチにお昼頃に座つて…その人が座ると、決まつて猫がね…寄つて来るの。餌もやらないし、抱き上げたりもしないのに、猫の方からその人に擦り寄つて行くんだよ…不思議でしょ?」

「…。」

「柴さんみたいに躰も手もおつきくて、指が長くて…足元にじゅれついた猫を撫でるの…柴さんがするみたいに…。」

そう言つて、俺がネコの頬を撫でる手に顔を擦り寄せる。

「優しい人なんだなあつて…あんな風に撫でて欲しいなあつて、ずつと思つてた。2月頃から、寒いのにしょつちゅう姿見せる様になつて…何だか、ちょっと背中が寂しそうで気になつてたんだけど…3月も、結構会えたんだよ…でも、4月になつてパツタリ姿が見えなくなつたの…ずつと待つてたんだけどね…どつか行つちゃつたんだ…。あの人…どうしてのかな…。」

ネコの頬を撫でていた手を外すと、俺は自分の口を覆つた。

「…どこだ?」

「何が?」

「どこの公園だ?」

「新宿中央公園だよ?中央公園のねえ…北口の花時計ん所から入つ

て…凶民ギャラリーの有る所知つてる?その外れ…あんまり人の通らない所にあるベンチでね…。」

そこまでネコが話した時、俺は堪らずその唇を奪つた。

ネコは驚いた様に身を引こうとしたが、俺は腰をしつかりとホールドして離さなかつた。

「…柴さんつて…。」

唇を離した時、トロソンしながらもネコは不思議そうに俺の目を覗き込んだ。

「…どうして、私にキスするの?」

眉を寄せて見下ろした俺の顔を、ネコの細い指が撫でる。

「…嫌なのか?」

「ううん…私は嫌いや無いよ…でも、柴さん…何で?」

訳がわからずもう一度唇を近付けると、触れる瞬間に再び言葉を紡ぐ。

「…私の為?」

「え?」

「…私…」じつやつて…抱いて貰えるだけで…十分だよ?「何…言つてる?」

「…私の…為なら…無理…しないで…。」

話し疲れたのか、そのままスウと寝入るネコに、俺は愕然とした。ネコは…全く俺の気持ちに気付いていないのだ…今迄の俺の行為は、善意としか受け取つて無いという事か!?

大人の狡さを駆使して行つて来たのが裏目に出了か…俺は、込み上げる笑いを抑え切れなかつた。

そうなのだ…いくら路上生活で、男に躰を奪われる事もあつた生活をしていたとはいえ…ネコは子供で…恋愛とは遠い所で生きて来て…。

「ストレートに勝負した方が、良かつたか…。」

言葉が勝手に口を突いて出た。

俺が、一番苦手とする手なんだが…。

「…お前の初恋の相手は、此処に居るだ…。」

兄貴の組と警察の癒着が取り沙汰され、組対4課に有らぬ疑いを掛けられてくさつていた頃、よく新宿中央公園に気晴らしに行つた。人の居ないベンチでぼんやりとしていると、決まって野良猫が擦り寄つて來た。

あの時、近くにネコが居たとは、一体どこから見ていたんだろう？ネコを撫でると顔を擦り寄せる仕草は、自分がして欲しかった行為の願望だつたのだ。

「…ナオ。」

胸の中で穏やかな寝息を立てるネコが、クフンと鼻を鳴らして擦り寄つた。

穏やかに躍るネコの柔らかい唇に、啄む様にしてキスをする。ふくらとしたその下唇を優しくくわえた時、ネコはまつりすじ田を開けて少し眉を寄せた。

「起きたか？」

「……おはよう。」

「違うぞ、今日はおめでとうだ。」

「……明けましておめでとう、柴さん。」

「ああ、おめでとう。」

「で、何してるの？」

「お前に、キスしてた。」

ネコが、少し悲し気な表情で俺を見上げるのを見て、俺は苦笑を漏らした。

「正月から、そんな悲しい顔するな。この一年が悲しい年になっちまうぞ？」

「タベ言つたよ？」

「だから？」

「前にも、クリスマスの時にも言つた……」じりじりしたやうの、黙だよ。」

「お前は、嫌じや無いんだろ？？」

「柴さん……そんなの嫌だよ……。」

「ん？」

「私の為なら……要らないって言つたよ？」

真剣な瞳で詰め寄るネコが可愛くて、つい焦らす様な受け答えをしてしまつ。可愛い物を弄ぶ癖は俺にも有るかも知れない。

「ネコ……俺は、自分のしたい様にしか行動しないと言わなかつたか？」

「……言つたけど。」

「お前、俺がキスするのは、お前の為だけだと想つたのか？」「ネ口は再び眉を寄せ、不安な表情を見せる。

「俺がお前を抱き締めるのも、お前を撫でて甘やかすのも、お前にキスをするのも…俺がお前を愛したこと思つてこるからだとは思わなかつたのか？」

「…柴さん…からかつてゐなら…。」「

「ネ口は、いろんな親父は嫌か？」

「…。」

「俺は、そつちの方が心配だ…お前は、ビリ弾ひてゐる。」「

「…好きつて…言つた…でもつ…。」

「でも、何だ？」

話している途中から、ネ口の顔中にキスを降らせると、ネ口は真つ赤になつて反論を試みる。

「柴さん大人だし、モテるしつ…？」「

「…お前がいい。」

「乳のデカイ女が好みつて…。」「

「…言つたか？そんな事？」

「私が聞いたの…そしたら、そつだなつて言つた…。」「

「そんな事…大丈夫だ、今からデカくしてやるから…。」

ネ口はワタワタと慌てながら、俺の胸に手を当てて押しやる。「変な親父に追い掛けられてるんだよ…。」

「…守つてやると言つたろ？」「

「…私…犯られちゃつた事有るつて…。」「

「お前が悪い訳じや無いつて言つたろ…？…それに、俺だつて、初めてつて訳じやねえしな…。」

「…それ、普通だし…。」「

「…ネー口、出し切つたか？」

少し笑つたネ口に俺が尋ねると、ちよつと真剣な目差しで見詰められた。

「柴さん…私の…どこが好きなの？」

額にキスをして、ネコの視線から逃れる。

「お前はな……いちいち可愛くて仕方無えんだ……。」

「え?」

「……やる事なす事……その声も仕草も……すっぽり腕に収まつちまつ躰も……その田も……。」

少し躰を離してネコを見下ろすと、口を歪めて笑つた。

「可愛い癖に妙に色っぽい……逃げ出した時、俺が何故探し回つたと思つてゐるんだ、お前は?」

「ええつ!?

「……大体……俺の所がいいとか言つて抱き付いて来て、先に俺を煽つたのはお前だらうが……ああつ、もう、畜生つ!! 全部寄越しやがれつ!!」

ネコの躰を奪う様に舌を絡めて貪り、腰を抱いて密着させ、浴衣の上からネコの乳房を手で覆つ。

「んんつ!?

途端にネコの躰が硬直して臉をきつく結び……唇を離すと、震えて浅い息を繰り返す。

「やつぱりそうか……お前、男に抱かれるのが怖いんだな?」
髪を撫でながら優しい声音で話しつけると、きつく結ばれた臉がゆっくりと開いた。

「怖がらせて悪かった……お前の嫌がる事はしないから……。」

「……本当?」

まだ震えながら、潤んだ瞳で見上げるネコの頬と顎を撫でてやる。

「ああ……諦める気は無いが、少しずつ慣らして……怖く無い様にしてやるから……。」

少し笑うと、ネコは俺の手に顔を擦り寄せた。

「キスは、平気なんだな?」

「うん……でもね……柴さんにキスされると、ドキドキしてフワフワになつて……眠くなる。」

「眠くなる?」

「うん… ホワアーフとして眠くなるの…。」

俺は笑いを噛み殺しながら、ネコの躰を懷に抱いた… そうか、まだまだ開発する楽しみが有る様だ。

「…ナオ… 俺は、お前に惚れてる… 覚えとけよ?」

ネコは俺の胸に縋り付いて、コクンと頷いた。

夕方から行う新年会に参加する様にという冗貴の伝言を受けて、俺はネコを説得して宴会場に向かっていた。

「健司さん。」

突然呼び掛けられて振り返ると、2人の浴衣の男性がにこやかに立つていた。

「いらしてたんですね? 気付きませんでした。」

「離れに籠つていたからな…。」

俺と背の高い方の男が話していると、互いの背後で掛け合つ声がした。

「リンさんつ!…?」

「ネコちゃん!…どうしたの、こんな所で!…?」

駆け寄り抱擁し合う2人を見て驚いている残された男達を無視し、2人の矢継ぎ早な会話が始まつた。

「リンさんつ、リンさんつ、どうしたの? こここの組長さんに捕まつたのつ!…? 酷い事されたり、苛められて無い!…?」

「ネコちゃん!…セ、どうしてこんな所に居るの!…? あの人には、捕まつたの?」

「違うよ… 私は、柴さんに拾つて貰つたの。リンさん… お店は?」

「ああ、年末年始で休みなだけ。其より… 大丈夫なの!…? 酷い事はされてない? 幸村刑事は知つてるの?」

「大丈夫だよ… 柴さんは、京子さんの友達で元々は刑事さんだし…。」

「幸村刑事の友人で、柴さんつて… 関東連合のファンクラブなんじゃ無

「

いだろうね！？」

「ファング？ 知らないけど… 伝説の総長って言つてたよ？」

「ネコちゃん… 君偉い人に拾われて… 本当に大丈夫なの！？」

「大丈夫だよ？ 柴さん優しいしね… 病気も治してくれて、住む所も仕事もくれたの。 それに、私… 柴さんの事、好きだし…。」

「ネコちゃん！？」

「鈴、大丈夫だよ。」

ネコと抱き合つ華奢な青年に、俺の隣に立つ学者肌の男が声を掛けた。

「健司さんは、僕の叔父なんだ。大丈夫、心配無いよ。それより…

君が、父の言つてた仔猫ちゃんかな？」

「父つて… 柴さんのお兄さん？」

ネコが、鈴と呼ばれた青年の腕に抱かれたまま、訝しげに窺つた。

「そうだよ… 君の怪我の原因を作つたね。 酷い事されたりしなかつた？」

「… あの人… 怖い。 苛めるんだもん…。」

「そうかあ… 苛めるかあ…。」

そう笑う男の隣で、俺はネコを呼び寄せた。

「ネコ、此奴は佐久間聰だ。」

ネコがピョコーンと頭を下げるが、聰の後ろから華奢な青年が挨拶をした。

「先程は失礼しました。 僕は新宿で小さなバーを経営してる、伊庭鈴と申します。」

「柴健司だ。 ネコと知り合いなのか？」

「そうだよ… リンさんには、いっぱいお世話になつたの…！」

「いえ… 僕は、逃げ込む場所を提供していただけですよ。」

「そうか… 世話になつた。」

そう頭を下げるが、鈴は目を剥いて頭を振つた。

揃つて宴会場に行く道々、聰の済まなそうな瞳が寄せられた。

「苛められてるんですね？」

「ああ……兄貴は可愛い物を見ると、弄くり倒して泣かせるからな。
……今日も、覚悟してもらわないといけないかもしません……。」

「何か有るのか？」

「少しね……父の意に染まない事がありまして……若干フラストレーシヨンが貯まつてます。」

聰は後ろの2人を窺い見て、そう言った。

「こつちも……厄介事が発生してる……ネコには、少し耐えて貰う事になるかもな……。」

既に宴会が始まっている会場に入った途端、上座に座つていた兄貴が立ち上がり、俺達を押し退けてネコを肩に抱き上げた。

唖然とする下座の面々を尻目に、嫌だと叫ぶネコをさつと上座の自分の胡座の中に抱き込んで、こちらに向かつて手招きをする。

「止めて下さい、お父さん！嫌がつてるじゃないですか！？」

「俺は、こいつ可愛いのが好みだ……。」

「その子は貴方の物じゃ無いでしょーーー？」

「こいつ、可愛い娘が欲しかったんだーーー！」

暴れていたネコが、会話を聞いて幾分落ち着いたのを見て、兄貴の隣に座つた俺は苦笑いしながらネコの頭を撫でてやつた。

「……鈴だつて、十分可愛いと思いますが？」

「俺は、男のケツなんぞ膝に乗せたくねえぞーーー？」

「例え僕に普通の嫁が来ても、貴方の膝なんかには乗せたくありませんよ。それに僕の嫁は、鈴以外に考えられません。」

上目遣いで話を聞いていたネコが、前屈みになつて聰の向こう側に座る鈴に声を掛けた。

「リンさん、結婚するのぉ？」

鈴は照れた様に笑い、聰は満面の笑みでネコに話し掛けた。

「そうだよ……鈴と僕は、結婚するんだ。」

下座がどよめき、兄貴の顔が歪む。

ネコは、ふうんと言つて不思議そうに聰に尋ねる。

「男の人同士つて、結婚出来るの？」

「普通の婚姻は、無理だね。日本の法律では、まだ許されていないんだ。」

「そりだ！結婚は出来ない……」

頭の上から吼える兄貴に、ネコは眉を寄せた。

「だから同性同士の結婚は、年長者の籍に養子縁組をして行つんだ。」

「へえ……そりなんだ……おめでとう、リンちゃん……」

「……ありがとう。」

無邪気に喜ぶネコに、兄貴が慄然として言つた。

「だが、子供はどうするよ！？女じやなこと、子は産めねえだろ……。」

「何で？」

不思議そりにネコが兄貴を見上げた。

「何でつて……女しか子供は産めねえだろつよ、仔猫ちゃん？」「お孫さんが、欲しいの？」

「ああ欲しい！物凄く欲しいぞ！？」

…ネコが何を言うか…俺は予想が付いて、手で口を覆つた。
案の定、ネコは満面の笑みで、無邪気に兄貴に言つた。

「じゃあ、良かつたじやない！」

「え？」

「だつて、息子さんが養子縁組するつて事は、柴さんのお兄さんにお孫さん出来るつて事でしょうー？おめでとう、良かつたねー！」
一瞬静まり返つた次の瞬間、宴会場は爆笑の渦に包まれた。
呆気にとられた兄貴と、何が可笑しいのか理解出来無いネコに、下座の1人が声を掛けた。

「組長…完璧に一本取られましたな。」

「…つるせえ…ああ、もうつーーーお前は、可愛いなあーーー？」

そり言つてネコを抱き締めると、今迄大人しくしていたネコが又暴れ出した。

「そろそろ返せ、兄貴…俺の女だ。」

そう言つと、再び座がどよめぐ。

兄貴からネコの躰を奪い返し、自分の胡座の中に抱き込んでやると、
ネコは嬉しそうに収まつた。

「チキシヨー、おいつ、さつきのアレ持つて来い！」

兄貴が叫ぶと、手下の1人が紙袋を持って来る。

「聰の結婚、許してやってもいい……。」

「本當ですか！？」

「ただし、仔猫ちゃんが俺の言つ事をきいてくれたら……だがな？」

「……何？」

ネコが、俺の袖口を掴んで小さく尋ねると、兄貴は紙袋から出した
物をネコの頭に装着した。

「今日1日、仔猫ちゃんがソレを付けてくれるなら、許してやるー。
ネコは頭の上に手をやると、装着したものを触つた。

「……猫耳？」

「そうだ、可愛いぞ仔猫ちゃん！――」

ネコは俺を見上げて、小首を傾げる。

黒のタイツに赤いギンガムチェックのホットパンツ、黒のモヘアの
セーターを着たネコに、その黒い猫耳は似合ひ過ぎて……。

「似合う？可笑しく無い、柴さん？付けててもいい？」

口許を押されたまま、俺は何度も頷いた。

「……いいよ、付けても、嫌いじゃ無いし。」

「決まりだな、今日1日だぞ？」

「寝る迄でいいんでしょう？でも、お風呂の時は外すよ？」

「ああ……いいなあ……ニヤアつて鳴いてみ？？」

「……嫌だよ。」

「何だよ……健司には鳴くんどうが？」

「柴さんが、鳴いてつて言つたらね？」

「……ネコ……あつちで、2人に祝いを言つて來たうどつだ？」

ウンと、嬉しそうにネコは聰と鈴の元に行つた。

「ありやあ、天然のタラシだな、健司？」「

「ヤニヤと兄貴が俺の杯に酒を注ぐ。

「端から許してやるつもりで、『口ネて見せたのか?』

「決めちまつたんだろ? 彼奴は、俺が反対しても利く様な奴じや無い…だが、組にとっちゃあ大問題だ。跡取り息子に子供が出来ねえつてのはな…。」

「方法は…有るだろ?」

「それより、手つ取り早い手がある。」

「何を言うか予想して、俺は眉を寄せた。」

「元々聰は、堅気の道を選んでる…やつぱり、お前が繼べのが一番いいんだよ。」

「俺にその氣は無い…知ってるだろ?」

「仔猫ちゃんの為でも?」

「何だと?」

「神も、佐久間の次期組長になら、仔猫ちゃんをすんなり渡すかもしれないねえ。」

確かにそうかもしれないが…俺はネコを見詰め、溜め息を吐いた。

調べる（前書き）

【お詫び】

えへ、昔は赤十字センターでAIDSの検査もしてくれて、結果も知らせてくれたと記憶しておりますが…何せん十年前の記憶です。（^__^;）

現在は、HIV検査つて…献血センターでは結果は教えてくれない
そうで…検査の為に献血しちゃ 駄目だと謳つてます。

そりゃ そうだよね…。一（ 3 ）一

HIV検査は、保健所でやつてくれるやつで… 全国巡回の無料検査
があるらしいです！

その場でわかる簡易検査も有るけれど、一番安心できるのは、
疑いの有る日から3ヶ月以上してからの検査だそうで… 2週間位で結果
がわかるらしいです。

行為後直ぐにはわからない… 3ヶ月経たないとキャリアかどうか確
実にわからなんて… ドキドキしながら待つのは耐えられないと思
います（T_O_T）

怖いですね…自分の身は、自分でしつかり守りましょー…

（ （ （ ． 。 ） ） ）

調べる

「健司……お前、俺の跡を継ぐ気は無いか？」

「冗談止めろよ！？ 何で俺が…。」

「度胸も有る、力も統率力も申し分ねえ… 何より、そのカリスマ性… 極道の親分つてのはなあ、子分達に惚れられなきやいけねえ… 命懸けの仕事だからな。お前には、その器量が有る。」

年の離れた腹違いの兄貴は、親父の死後も、親父の妾だったお袋が病に倒れて死んだ後も、俺を息子の聰同様の扱いで面倒を見てくれていた。

「止める、気色の悪い… 大体、跡取りなら聰が居るだろ？ が！？」
「お前もわかるだろ？ アレは、極道には向いて無い… 嫌つてるしな。」

聰が嫌つてているのは… 極道という職業もそうだが、艶福家としての父親に対する反抗だろ？。

聰の小さな頃に離婚して以来正妻を持たない兄貴には、常に数人の愛人が居た。

それでも、聰以外に決して子供を作ろうとはしなかった。

「まだ、わかんねえだろ？」

「わかるさ… アレは極道の上に立つ器じやねえ。」

「じゃあ、他に子供作りやいいだろ？ 産んでくれる女は星の数程居るだろ？ が！？」

「なあ、その気はねえか？」

「ねえよ… 絶対にな…。」

暴走族に入つたのは、高校時代に付き合つていた女が、他の男に乗り換えて振られたという陳腐な事がきっかけだつた。

自暴自棄ファンクになつた『柴犬』が『狂犬』となり、狼の群れのボスになつて『牙』と呼ばれる様になつた。

だが、俺が族の総長等になつたのも、多分佐久間の名前による影響が大きい。

「そんな俺に、死んでも付いて行くと言つてくれる仲間が大勢いるのも事実だ。

兄貴ばかりでは無くそんな仲間迄もが、密かに俺が佐久間組に入る事を望んでいる。

もし俺が組に入つたら…俺が佐久間の組を継ぐ立場に立つと知れたら…一体何人の仲間が佐久間組に入りたいと言つて来るか…。少なく見積もつても：15、20は下らないだろう。

未成年の暴走族では無い…本物の極道の世界に、それだけの人間を引き摺り込む恐怖…。

未成年の暴走行為で、若い頃に馬鹿な事をしていたと思い出を語る事の出来る、全うな人生を仲間に送つて欲しいと思う。

何より仲間の子供達に、親が極道者だと後ろ指を指される様な思いを…自分と同じ思いをさせる訳にはいかなかつた。

20歳を前にして、スッパリと族から足を洗い、専門学校を経て警察官になつた時には、仲間も兄貴も、裏切られた感が強かつたに違いない。

だが、それでも慕つてくれる仲間は多く、兄貴も『お前の人生だ』と言つて理解を示してくれた。

跡目の話が再浮上したのは、俺が警察を辞めてからだ。

既に堅気として大学の助手を勤める聰は、組の跡目には全く興味を示さない…その上、同性と結婚となれば直系は絶える。

最近兄貴が熱心に誘うのは、佐久間の血を絶やしたく無いのか、それとも組の存続の為か？

「…ん…んん…。」

温泉から帰つて来て日常生活に戻つた頃から、ネコは寝ていてうなされる事が多くなつた。

夜中に風が吹く音や、特に外に居る人の話し声や足音に敏感に反応し、それらが通り過ぎるまで耳の緊張が解けない。

それは、今迄ひたすら隠していた事を話したせいだ…閉じ込め様と
していた記憶が、警戒を怠らなかつた生活が、再び鮮明に甦つた事
に他ならない。

そしてそれは… 一番思い出したく無い記憶迄も、鮮明に甦らせてしまつた。

「…や…や…だ…」

油汗を滲ませ寝返りを打ち、息を荒げて眉を寄せたネコに、静かに
声を掛けてやる。

「ナオ…ナオ…大丈夫だ、安心しろ…。」

本名を呼ばれる事で少し覚醒しかけ、俺の腕を確認して安心すると、
ネコは再び深淵に落ちて行く。

兄貴の言つた様に、俺が次期組長となれば、榊がネコを渡す事も、
それ程難しい事では無いのかもしれない。

ネコの為には、それが一番いいという事も承知しているが…。

総長を辞めると自分で決めた時、後に残る奴等の事を考えて、永年
の抗争相手にも終止符を打ち、仲間も組織化をしてやつた事が『伝
説』なんて尾鱗を付けてしまつた。

そして、いつの間にか『伝説』は独り歩きをし始める…自分の全く
知らない後輩迄もが、未だに俺に忠誠心を見せる…若い頃の暴走か
ら未だに脱け出せ無い奴等が、『伝説』に縋る様に俺の回りをうろ
ついた。

中には、佐久間組に入つた奴等も居る。

正直言えば、迷惑な話だ…俺に取つては、とつぐに過去の話なのだ
から。

だが結局放つて置く事も出来ず、仕事を世話したり自分の仕事を手
伝わせ小遣い錢を与える。

「そんな事をしているから、奴等はいつまでたつてもお前の傍から
離れないんだ…！」

毎度の様に、松田が苦言を吐く。

松田の言う事は正しい…だが、堅気の世界から弾かれながらも、最

悪の道にも堕ちきれずギリギリの所で踏み留まつてゐる仲間の何と多い事か…。

「総長に叱つて貰えるから、俺達もう少し頑張つてみます！」

そう言つて来る仲間を集め、事務所を立ち上げた頃から自警団を作り、新宿の街を見回るボランティアをさせている。

酔っぱらいの喧嘩の仲裁、カツアゲや落書きの見回り、ゴミの清掃…人様の迷惑にならない、ミカジメを取らない、組関係には手を出さない、絶対に法は犯さない…。

少しずつ認められ始めた活動と共に、働きを認められ正規に就職し退団する仲間も出始めたのは喜ばしい限りだ。

実際に自分が活動する訳では無いが、俺が最初に組織したという事で、トラブルや事務的な事等はウチの事務所で行い、仲間達も出入りをしていた。

「柴あ、アンタの事務所つて警察関係者と族上がり、果ては組関係と賑やかだけど、いくら何でも最近は人の出入りが多過ぎるんじゃ無い？」

年明けから変更された『オフィス柴』と書かれたドアを開け、大勢がたむろつ事務所の中を見て、京子が大声を出した。

「原因は、アレだ。」

黒服の一団が応接セツトを陣取り、ネコを構つてゐる兄貴の後ろにズラリと並ぶ。

「又来てるんだ…。」

「最近、3日と空けずに来てる。」

「アンタを口説き落とすのを諦めて、ネ『ちやん懐柔作戦に変更し

た訳ね。』

「だろうな。」

「手馴付けられてるの？」

「…どちらかというと、兄貴が…だな。」

「あらあら…。」

「アレは、本質も猫そのものだ。」

兄貴なりの可愛がり方を心得たネコは、ヤクザの組長に臆する事無く対応する様になつた。

「美味しい物でも食べに行かないか、仔猫ちゃん？」

「行かなーい。」

「じゃあ、洋服を買いに行こーつー春物の洋服、渋谷がいいか？それとも原宿か？」

「要らないよ、着る物沢山あるもん…それより、電話番してるの。お兄さん、邪魔しないで！」

「つれねえなあ…せめて、正月にやつた猫耳付けて向かえてくれりやあいいのに…。」

「付けてるよ、アレ。」

「何だよ、持つて来いよ！」

「駄目え〜。」

呆れた様に2人の会話を聞いていた京子が、声を潜めた。

「何…あのキヤバクラみたいな会話！？」

「いつも、あんな感じだ。」

苦笑した俺は、改めて事務所を見回した。

夕方からのパトロールの連絡事項や、見回る商店街のルート等を確認する為、自警団の連中と兄貴の組の奴等で、狭い事務所はひしめき合つていた。

「ネコ、お前欲しい物有るつて言つて無かつたか？」

「無いよ、別に…。」

「ほら…電子辞書欲しいって、この前言つてたろ？。」

「…別に…絶対必要つて訳じゃ無いし…。」

「それ！それ買いに行こつ、仔猫ちゃん！？」

「でも…電話番は？」

「大丈夫だ。お京が来た。」

「…あ〜、ハイハイ。私が電話番致します。行つておいで、ネコちゃん。ついでに、何か美味しいお土産宜しくね。」

「良く言つた、サーべントの！期待して待つてな！」

「いや……その渾名は、もう勘弁して下さい……一応これでも公儀なので……」

「行こう、仔猫ちゃん！」

「田代の隣となりの山道」が「田代みどり」の「一瀬」出島から放つ。

あげない！」

わかつた、わかつた！なら、抱いて行こう。

抱くのも禁止！」

ワアワア言いながら、黒服の一団が事務所を出て行つた。

「ともあれ、怖からずに仲間へせいでねみたして、戻かうたわ。」「可愛くて仕方無いんだろうが…あの分じゃ、又嫌われるかもな。それより、お前…何かあつたんじや無いのか？」

「……音戸沙夜さんの居場所、判明したわ。」

「どこだ？ 榎の自宅か？」

「ネコちゃんの言つてた通り、入院してた…心臓病らしいわ。」

「どこの病院だ？」

「成城の鷹栖総合病院。でも駄目よ……バツチリ見張りが張り付いてるらしいわ。」

「 そうだろうな… お京、当分ネコには黙つてくれ… アレに言つたら、駄目だとわかつていっても飛んで行くだろうからな。」

「了解。こつちは平氣なの？」

「今の所はな……兄貴が大っぴらに連れ歩くつて事は、神にバレてるんだろ?」

「大丈夫なの！？」

「牽制掛けてるつて事だ……佐久間の組長直々のな。この建物なんかも、ガードされてる。」

「え？」

「元警察官の事務所をヤクザがガードしてるなんてな……ありがたくて、涙が出るぜ。」

生活が落ち着き、兄貴にも馴れ、自警団や俺の仕事を手伝つ族上がりの奴等とも上手く付き合つ様になつたネコの最大の敵は、松田だつた。

「柴さん…私…検査受けたい。」

「検査?」

「うん…HIVの検査。」

事務所のパソコンの前に座つたネコが、パソコン画面を見詰めたまま言つた。

「…お前、前に受けたつて言つてなかつたか?」

「ネットでね…調べたら、時間が経たないとちゃんとわからない検査も有るって…ちゃんとね…調べたいの。駄目?」

「いや…駄目つて訳じやねえが…そんなに気にしなくて…。」

「嫌なの…!」

「ネコ…。」

「…嫌なんだもん。」

「…俺の為か?」

「…。」

「だからか、最近キスも嫌がるのは?」

「…だつて…粘膜感染…。」

「今更だらう?感染するなら、もう手遅れ…。」

「…嫌あ…。」

ネコが顔を覆つて泣き出してしまつたので、俺は慌てて隣に立つとネコの頭を抱いてやる。

「悪かつた…お前の氣の済む様にすればいい。多分、松田の所で詳しい検査が出来る筈だ。」

「…松田さんの所?」

「ああ…嫌か?」

ネコはしばらく考えて、頭を振つた。

松田の診療所に連れて行き検査を依頼すると、松田は見下した様にネコを見詰め頭を振った。

「そり見ろ……やっぱりウリをしてたって事だろ？！？」

何も言わずに俯くネコに変わり、俺は松田に食つて掛かった。

「違う、松田！！ネコは、襲われただけだ！」

「お前…犯られたの、一度や一度じゃ無いだろ？！」

「お前…犯されたの、一度や一度じゃ無いだろ？！」

ネコの肩が、ビクリと震えた。

松田は薄いゴム手袋をはめると、採血の為にネコの腕をゴムチューブできつく縛りながら言った。

「食事や寝床を得る為に、誘つた事も有るんじゃ無いのか？」

「松田…いい加減に…。」

ネコの腕をアルコール綿で拭き、注射器を刺してゴムチューブを外す。

「金も貰つたんだろうが？そういうのを、売春つて言つんだ…淫売が！」

ネコは何も言わず…自分の血が抜き取られるのを見ていた。

「松田っ！？」

「柴、いい加減に目を覚ませ！？いつまでこんな奴の面倒見てるつもりだ！」

「大きなお世話だ！…」

「コイツを探し回ってる男達も居るやうじやないか！？大方どこの組か、ソイツの客なんだろうが？馬鹿馬鹿しい、お前はいいように騙されていいだけだ！」

「いい加減にしろよ、お前…。俺の我慢にも限界がある…。」

「こんな奴等は、大人を騙す事なんて何とも思つて無いだろ？！お前達はいいように弄ばれて…。」

俺は松田の胸ぐらを掴むと、その躰を壁に叩き付けた。

「黙れ、松田…殴られ無かつた事を、幸運に思つんだな！」

床にへたりこんだ松田は、それでもネコを睨み付けて憎々しげに言った。

「…お前のせい…柴も中学以来の仲間に手を上げる羽目になつた
んだぞ…。」

「まだ言ひののか！？」

「…柴…お京の事…お前、どうするつもりだ？あにつけ、今でも…。」

「関係無いだらうー？」

ネコがビクリと痙攣する。

「結果は、2週間後だ。頼むから、ひとつと新宿から出て行つてくれつー！」

松田の悲痛な叫びが響いた。

事務所に戻つても何も言わないネコの背中を抱くと、ネコは平氣だと言つて俺の手を優しく叩いた。

「…済まない。」

「何とも無いよ…何で柴さんが謝るの?..」

「アレは…俺の友人だ。」

ネコは俺の腕をスルリと抜けると、事務所の窓を開け空を眺めた。

「新宿つて…星が見える所無いのかな…。」

「星が見たいのか?」

「…空…明るくて、星なんか見えないか…。」

しばらく黙つて空を眺めていたネコの堪え切れない涙が、眦からボタリと落ちた。

「松田先生の妹さんの話、京子さんに聞いたから…柴さんが気にする事無いよ。」

母子家庭で、水商売をしていた母親を嫌つた松田の妹は、今のネコと同じ歳に家を飛び出した。

松田が発見した時には、薬欲しさに路上で袖を引く生活をしていたらしい。

どれだけ更正施設に入れても脱け出せず、最後にはHエイに感染しボロボロになつて亡くなつた。

その後の調査で、妹に薬を教えたのも、袖を引く生活を教えたのも、共に路上で知り合い生活を共にしていた同年代の仲間達らしいとう事だつたが、詳しい事は何もわからなかつた。

「アイツは、ホームレスも、路上でたむろう若者の事も憎んでる…。」

「…うん。」

「それ以上に、妹を救えなかつた自分を憎んでるんだ。」

「帰れないのも、待つのも…どちらも辛いね。」

「済まない。」

「…柴さん…少し、出掛けで来てもいい?」

「…これからか…?」

「…うん。」

「一緒に行こう。」

俺が再び上着を手にすると、ネコは首を振った。

「1人がいい。」

「…ネコ。」

「1人じやなきや駄目なの。」

「…駄目だ。」

眉を寄せる俺に、ネコは曖昧な笑顔を向けた。

「大丈夫だよ、柴さん…ちゃんと帰つて来るから。」

ネコは自ら俺の懷に入り込んで、背中に腕を回す。

「私の帰る場所は、柴さんの所だけだもん。」

「ネコ…お前を追つている奴等に、ここに居る事はバレてるんだ! もし、1人で居る所を襲われたら…!…?」

「…ちやんと逃げて帰るから…」には、安全なんでしょう?」

「あ…兄貴も守つてくれてる。せめて、誰か護衛を…。」

「駄目だよ、1人じやなきや。携帯持つて行くから…マナーモードにして音は鳴らない様にするけど、電源は落とさないから。」

「…潜りに行くのか?」

何も言わず、ネコは俺を見上げた。

「出で行つちまう訳じゃねえんだな!…?」

「違うよ…帰つて来る…出来るだけ毎日帰るから。」

「…どうしても、行かなきやならねえか?」

「…行きたいの…駄目? 行つたら、もう置いて貰えない?」

「そうじゃねえ…だが、もしそう言つたら…行くのを止めるか?」

ネコは、小首を傾げると少し寂しそうな顔をして微笑んだ。

「…ちゃんと戻つて来い…何かあつたら、いや…何も無くても連絡を入れる…いいな!…?」

「うん、出来るだけ入れるから。」

「絶対だぞっ！？」

俺はネコの躰を抱き込んで唇を奪つた。ネコが「」のまま眠くなつてくれれば… そう思いながら舌を絡めて吸い上げ、口唇を貪つた。唇が離れると、ネコはスルリと腕を脱け寝室に籠り… 出て来た時は、始めて来た時と同じ格好をしてドラムバッグを抱えていた。

「冗談じゃねえ！！」の2月の寒空に、そんな格好で… 何考へてるつ！？」

「平気だつて… 心配症だな、柴さん… 」 しんなの、普通じゃねえか？「… ネコ、お前…。」

来た時と同じ男言葉で喋るネコに、俺は背筋が冷たくなつた。
「上着だけでも、ちゃんと暖かいのを来て行け…。」

「平気だつつたろ？」

「お前… わかつてねえのか？ 一度飼われた猫は、野良には戻れねえ… 外の風は冷た過ぎるからな…。」

「… ネコは、制服で戦闘服なんだ。もつ一度捨てられた野良猫にならないと、潜れない場所も有るつて事さ。平気だつて… 京子さんだけは、連絡しといてくれよ？ じやないと、アンタが叱られちまつからな。」

「せめて、コレを巻いて行け…。」

俺は部屋の隅に投げてあつた自分のマフラーを、ネコの首に巻いてやつた。

「何しに潜りに行く？」

ネコはニヤリと笑い、質問には答えずと言つた。

「2週間後の検査の結果、ちゃんと聞きに行くからさ… 結果も、ちゃんと連絡するから心配すんなよ。」

「… ネコ。」

「大丈夫だつて、心配すんなよ… あ… そつだ… 探したりしねえでくれよ… それこそヤバイから…。」

ニヤリと笑い、じゃあなどネコは入口のドアをすり抜けて行つた。

「連絡は？」

「…丸4日間…何も無い。」

「携帯は？」

「電源が切れた様だ…。」

電話の向こうで、京子が深い溜め息を吐いた。

最初の内、ネコは2日置き程で部屋に戻っていた。

明け方に戻つてシャワーを浴びると、俺の腕にスルリと入り込んで爆睡する。

俺は、帰る度に痩せ細つて、疲れ切つて行くネコの躰を抱き込んでやる。

夕方迄爆睡したネコは、何も食べずに又同じ格好をして出掛けで行く。

「柴…アンタ、あの子に何調べさせてんの？」

「俺がさせている訳じゃねえ…ただ、無理に止めると…出て行つちまう覚悟だけはわかつた…だから、好きにさせてるだけだ。」

「…私の事、誤解したままなんでしょうか？」

「…。」

「言えば良かつたのよ…そしたら、松田だつて…。」

「…俺が言うべき話じゃねえだろ…。」

松田も昔の仲間も、京子が俺の事をずっと想つていると誤解している…確かに、そんな時期もあつたし、本人から直接言われた事もある。

「柴…アタシにしどきなよ…アタシならアンタの事裏切らないし、理解だつて出来る…。」

「…悪いな、お京…今更お前の事を、女には…。」

「失礼な奴…。」

「俺は、ダチを失いたくねえんだ…。」

「それ、スッゴイ残酷な事つて…アンタわかってる?」

「済まねえな。」

「あー……アンタって、昔から『カイ女』にや興味無わよね！？」

「……ああ……俺は昔から、小さくて可愛い女が好みだからな……。」

女に振られて族に入つて荒れてる頃、京子とそんな会話をした……それ以来、2人の間に恋愛を感じさせる会話や行動は一切無い。そういう割り切りの出来るさっぱりした気性が氣に入つて、中学以来ずつとつるんでいるのだ。

その京子が恋をした……相手は、当時警察で俺とバディを組んでいた男・族上がりの俺達に色眼鏡を掛けない、優しい気遣いの出来るイイ奴だった。

気が合つた3人でよく飲みに出掛け、色々な事を言い合つて……気が付けば、2人の間に恋愛感情が芽生え恋人同士になつていて。

問題だつたのは、相手の男に妻子が居た事……警察官の不倫は御法度だ……だから、2人の関係を知るのは俺だけだった。

「……柴……人事が動いてる……。」

その男が青い顔をして、俺に告白した。

『『人事が動く』』とは監察が動く事……他にやましい事の無いソイツの狙われる理由は、京子との不倫以外に無かつた。

「何か言つて来たのか！？」

「いや……まだ、証拠固めの段階だらう……。」

監察に睨まれ証拠が固まると、上からやんわりと自主退職を勧められる。

それを断れば……年金も付かない免職処分にされてしまう。

そんな時、事件は起きた……拳銃を持った凶悪犯を追跡中、無茶な行動に出たソイツの腹に、犯人の発砲した銃弾で風穴が開いた。

「いつも慎重なお前が、何やつてる！？待つてろ！……すぐに救急車を……。」

「柴……いい……どうせ助からん。このまま、逝かせてくれ……。」

「お前……まさか、わざとか！？」

「このまま殉職したら……2階級特進で、妻子に名誉と金が残してや

れる……。」

「馬鹿か、お前！？そんな事……誰も喜びやしねえ！！」

「可哀想なのは、京子だ……俺は、京子に何も残してやれない……。」

「なら、生きて残してやれよ！？諦めるな、馬鹿野郎！！！」

「柴……頼む……今迄通り京子の傍に……アイツに本当の相手が見付かる迄……傍に……。」

「わかつてる……お京は、俺のダチだ……お前に言われなくても……。」

「……頼んだ……柴……。」

そう言つて、京子の恋人は俺の腕の中で逝ってしまった。

以来京子は仕事に没頭している……最近は、少しずつ肩の力が抜けて來たが、浮いた噂はついぞ聞かない。

「何を調べてるか、検討……付いてるんでしょ？……やっぱり、松田の？……多分な。」

「そう……私は当分署に泊まるわ……」ひちに来る可能性も有るからね。

「ああ……頼む。」

「了解……アンタも、ちゃんと躰休めなさいよ……？」

受話器を置いて、溜め息を吐きながら窓の外を眺めた。

昨夜は冷たい雨が、今日は寒冷前線が南下し、夕方からのミゾレ混じりの雨が、夜になつて本格的な雪に変わつていた。

あの薄着で……どんなに寒い夜を過ごしているだろうか？
俺は事務所の入口の鍵を開けたまま、寝室のベッドに入った。

夜半、妙な音が聞こえた気がして目が覚めた。

何か、濡れた雑巾を引き摺る様な……事務所の中を確認し、入口のドアを開けた途端に、俺は叫び声を上げた。

「ネコつ！？……どうしたつ！？」

廊下の壁を背に、崩れ落ちていたネコの躰は、今水から上がつて来たかの様に頭の先から爪先迄グズグズに濡れていた。

「……ただいま……柴さん。」

「何て格好だ、お前……。」

慌てて抱き上げ、風呂場に運んでやる…濡れそぼった躰は氷の様に冷え、ネコは眉を寄せてガクガクと震えていた。

「…脱がせるぞ。」

そう断つて洋服を脱がせると、背中や腰、足や腕に至る迄、暴行の後が見られる。

「どうしたんだ、コレ！？」

「…ひょっと…ドジつちまつた…大丈夫、腹は遣られて無いから…」

「大丈夫つて…。」

「ちょっとせ…前から曰え付けられてた…奴等に…フクロにされて川に捨てられただけだよ…。大丈夫…今回は…犯られなかつたし。」

「…お前…。」

足先からぬるま湯を掛けてやり、段々と熱い湯に慣れさせて躰と髪を洗うと、抱いて布団に連れ込んだ。

「病院行かなくて平氣なのか？」

「…ん…。」

「待つてろ、今湿布を…。」

「…いい…要らない…これ以上冷えたら…死んじまつ…それより来て…。」

ベッドの上で、力無く横たわった全裸のネコが、潤んだ瞳を投げ掛ける。

「…暖つためてよ…柴さん…。」

「…馬鹿野郎…真ッパで誘うな…エレクトしちまうだらうが！？」

「…悪い…そんなつもり…。」

「わかつて…。」

俺はネコの隣に潜り込み、いつもの様に腕枕をして抱いてやる。

「調べ物は…終わったのか？」

「…。」

「まだ寝るな、ネコ！躰が暖まる迄、寝るんじやねえ…！」

「……もう少しで……金貸して……柴さん……。」

「幾ら？」

「……3000。」

「3000万か！？」

首筋で、クスリと笑うネコの息がくすぐつた。

「3000円だよ……ハンバーガー奢るつて……約束したんだ。デッカイハンバーガー……そしたら……最後の話……聞け……る……。」

「ネコ、寝るなつて！」

俺はネコを仰向きに寝かせ、上から躰を密着させて覆い被さつた。

「苦しくねえか？」

「……へーキ……あつた……かい……。」

耳許で本当の名前を呼ぶと、俺の胸の下でネコの心臓がドキンと跳ねる。

そのまま唇を奪おうとすると、冷たい手で俺の口を塞がれた。

「駄目……口ん中……切れて……。」

仕方無く首筋に唇を這わせ、鎖骨に下りて来ると、ネコは力無く抵抗した。

「……嫌だあ。」

「怖がるな……最後迄しねえから……躰暖めるだけだ……。」

「柴さん……怖いよ。」

「ネコ……触つてるのは俺だから……。」

スルリと躰を撫で下ろすと、触れる毎にネコは息を上げていく。

「……柴さん……何か……。」

「力抜いて……感じてん……。」

「……足に何か……当たつて……。」

「……そつちは、気にするな。」

震えながら息を上げるネコの躰が、ほんのりと暖かみを増していく。

「柴さんつ……柴さんつ……。」

切羽詰まつた様な声を上げるネコの腕を、自分の首に回す様に導いてやると、俺の首にしがみつきながら、ネコは悩ましい声を上げ続

けた。

「…柴さあ…ん…。」

「お前…反則だぞ…。」

啜り泣きながら腰を持ち上げ、喉を仰け反らせるネコの首筋を甘噛みしてやると、ネコはカクカクと震えて布団に沈んだ。

「…大丈夫か?」

すっかり暖まり、しつと汗を滲ませる躰を抱いてやると、そのままネコは深い眠りに落ちて行つた。

「柴さん…行つて来るね。」

翌日の昼過ぎ、俺から金を受け取りながら、ネコは恥ずかしそうに言つた。

「帰りに、松田先生の所行つて来るね。」

あの時、何故付いて行かなかつたのか…俺は後々迄後悔した。

夕方、京子から連絡が入った。署の方に、ネコが訪ねて来たらしい。「事件のあらましが、わかつたわ。松田の妹が所属していたグループも、そこに薬を流してゐる奴等も、あの子、全て洗い出して来たのよ。」

「… そうか。昨日ネコを襲つたのも、其奴等なのか?」

「多分ね… うつかり昔の事話したつて、後悔してたわよ。」

「… 邇されたのか?」

「それでも、渋谷の時よりマシだつて、以前笑つてたわ。」

「…。」

「それより、松田の妹が家を出たのつて… 母親のせいじや無かつた
そうなのよ。」

「どういう事だ?」

「母親の店で、筋物に薬を打たれて犯られたつて… バラしたら店を
潰すつて脅されて… 母親にも松田にも、相談出来なかつたつて。」

「何だと!??」

「仲間に打ち明けてたのよ。店のホステスの情夫でね、松田に連れ
戻された時も、そのホステスがまだ店に居る事を知つて、怖くて帰
れなかつたそうよ。」

「松田は、知らないんだな?」

「ええ… 内容が内容なだけに、私から松田に話してくれつて言われ
たわ。あの子、相手のヤクザの名前迄調べて來たのよ… 流石に驚い
たわ。」

「どこの組だ?」

「佐久間じゃ無いわ… 堂本よ。」

「堂本!??」

「ただし… 当のご本人は、壇の中。薬の密売やら殺人教唆やらで、
当分は出て来れそうに無い… 組からも放り出されて、行き場も無い

らしいわ。」

こんな所で、堂本の名前が出て来るとは……現在組長である堂本清和

……奴の細面で色白の、整った顔が脳裏に浮かんだ。

「これから松田の所に行くって……少し緊張してたわ。アンタも行くの？」

「いや……此處で待つてやろうと思つ。」

「そう……結果がわかつたら知らせて。」

「わかつた。」

京子との電話を切つて、射し込む夕陽に目を細めた。

昨日の雪は全て溶け、春が……直ぐそこまで近付いて来ていると……あの時は思つたのだ。

2度目に京子からの電話を受けた時、俺の中でブリザードが吹き荒れた。

「柴つ！？直ぐに松田の診療所迄来てつ……」

「どうした！？」

「ネコちゃん……拐われたわ！！！」

どこをどうやって走つたのかも、覚えていない……ただ歌舞伎町にある松田の診療所に入った途端、俺は松田の首を締め上げた。

「どういう事だつ！？松田つ！？」

「止めて、柴つ！……松田は……騙されたのよ……。」

俺が手を離すと、松田は力無く荒らされた診療所の床に座り込み、俺に済まないと謝つた。

「榊が、先回りして……ひつけに網張つてたのよ。」

「何！？」

「1週間前……弁護士を名乗る男が来たんだ。あの子の祖父が、心配して行方を探している。見付けたら一報欲しいと……。」

「で、ネコちゃんが来院して直ぐに、弁護士に連絡を入れたら……やつて来たのは祖父と名乗る爺さんと、黒服の厳つい男達だったそう

よ。」

「何故…何故弁護士が来た時点で、俺に知らせなかつた！？」

「仕方無いだろう！？あの子の身内が探してると言われたんだ！未成年の…家出娘だ…身内に知らせるのが筋だろう！？」

俺は、力任せに診療室の壁を殴つた。

「ネコは…あの家に帰ると座敷牢に入れられて…無理矢理客を取られる。ネコの母親が、自分と同じ日に合うのを案じて、敢えて奴等から逃げ回る生活をさせていたんだぞ！？」

「…そんな。」

「柴…松田には話して無かつたもの。常識的に考えれば致し方無いわ。それより、今後の事を考えるべきよ！」

俺は、その場で兄貴に連絡を入れ、事の顛末を話した。

「柴…あの子は、自分で時間を稼いだ…。」

「どういう事だ？」

「あの子は、自分で祖父だと名乗る男と渡り合つた。自分が今日此処に来たのは、HIV検査を受ける為だと言つたんだ。」

「…？」

「路上生活で、男と散々遊んで来た…今になつてキャリアかも知れない怖くなつて、HIV検査の予約を入れていたと…俺に採血をさせて、2週間後に又来ますと言つて男達と出て行つた。」

「今日の検査の結果は！？」

「それは、伝えてある。」

「どうだつたんだつ！？」

「…陰性だ。」

京子と俺の口から、深い溜め息が吐かれた。

「結果表は？ネコちゃんに渡してたら…。」

「それは、此処に有る。」

「なら、2週間は大丈夫つて事ね…。」

「今、ネコの躰は癒だらけだからな…それが治るのも、2週間程掛かるだろ？…。それまで、無事で居てくれたらいいが…。」

「まずは、作戦会議よ！佐久間さんも交えて、今後の事相談しましょうー！」

「…柴…俺に出来る事があれば…言つてくれ。」

「あ…」

「…済まない。」

「それは、直接ネコに言つてくれ。」

診療所を出た俺と京子は、事務所に向かつた。

「どういう知り合いか、聞いていいか？」

俺は、目の前を歩く髪の長い、恐ろしく綺麗な男に声を掛けた。

「学生の頃に…ナンパされたんですよ。」

「お京にか！？」

「ええ…ただし、あの人の入っていたグループに入らないかつて誘いだつたんですがね…。」

「それって…。」

「そう…女に間違われたんです、俺。」

振り向いて笑つた顔が、見惚れる程美しい…今でこれなら、学生時代はさぞや美少女に間違われただろう…。

「俺、結構気が短くて…それにその頃、色々あつて鬱積してたからキレちまつて。連れが止めてくれたから良かつたんですけど、お互いに少し怪我をして…ウチで治療したのがキッカケかな？」

「はあ。」

「何だかんだで、10年以上の付き合いです。」

肩の下で束ねられた髪には、藤色と茄子紺の組紐が結ばれ、真っ白な白衣のアクセントになっていた。

「さて…じゃあ行きますよ、柴先生？」

目指す病室に近付いた俺達は、姿勢を正した。

入口に居た警備の男達に会釈をし病室に入る…明るい個室の中に居た男が、すかさず立ち上がる。

「診察をしますので、外に出て頂けますか？」

「あの…貴方は？」

「私は、外科の鷹栖と言います。」こちらの音戸さんの手術を担当しますので、その前に症状を把握しておきたくて…聞いてませんか？」

「…はあ。」

「手術に関しては、そちらのご家族から再三申し入れがあると聞いていましたが…しかも、父と僕を指名していると…。」

「あの…先生のお名前をもう一度…。」

「鷹栖小次郎です。父は、此処の院長をしております。」

「失礼致しました！…どうぞ、宜しくお願ひ致します！…」

「あの…クランケは、手術を承諾していないとお聞きしましたが？」「はい…なかなか承知して頂けません。」

「それでは、その件も含めゆつくりと話をしたいので…部屋の外でお待ち下さい。」

「…わかりました。」

付き添いの男が部屋を出ると、カーテンに遮られたベッドから声が掛かった。

「先生…申し訳ありませんが…手術をする気はございません。」

意外な程ハッキリとした口調に対し、小次郎は失礼と言つてカーテンを開け放つた。

ベッドに座つていた女性…確かに年齢は40を少し越えている筈…だがそこに居た女性は、どう見ても30過ぎにしか見えなかつた。

「音戸さん、先ずはお詫びしなくてはなりません…。」

「何でしちゃう？」

「今日お話をさせて頂くのは、僕では無く彼なんです。」

小次郎に促され、俺は掛けていた伊達眼鏡とマスクを外して頭を下げた。

「柴健司と申します。音戸沙夜さんですね？」

「…はい。」

「音戸乃良さんの、お母様ですね？」

途端に沙夜の顔が引き攣つた。

「私は…先日迄、乃良さんと生活を共にしておりました。」

「乃良は…乃良は、どうしています！？」

「乃良さんは…今、ご実家にいらっしゃいます。」

青白い顔が再び引き攣り、ネコと同じ…アーモンド型の黒目がちの瞳からパタパタと涙が零れ落ちた。

すかさず小次郎が脈を取り、俺に向かつて頷いた。

「あの子は…貴方に、話しましたか？」

「はい。」

「全て？ 何もかも！？」

「はい…お聞きしました。そして、私はそれを知るべき立場にいました。」

「…どういう事でしょ？」

「私の兄は…佐久間憲一郎です。」

一瞬見開かれた大きな瞳から、柔らかな光が溢れた。

「あの方には、本当にご迷惑をお掛けしました…そう、歳の離れた弟さんがいらっしゃるとお聞きしていましたが…。佐久間さんは、お元気ですか？」

「元気過ぎて困ります。乃良さんの事も…可愛くてしようがない様で、構い過ぎて嫌われないか心配です。」

俺が少し笑いながら話すと、表情を緩めて沙夜は少し笑つた。

「あの子が、あれからどう過ごしていたか…貴方はご存知ですか？」

俺は、ネコが仙台から上京し、渋谷、新宿で生活していた事、俺と出会つてからの事をかいつまんで話した。

「柴さん、お窺いしたい事があります。」

「何でしょ？」

「貴方は…乃良の様子を知らせに来て下さる為だけに、此処にいらしたのですか？」

「いえ…私は…。」

俺は沙夜の痛い程の視線を浴びて、ゴクリと唾を飲み込んだ。

「私は……これから自分が起こす行動と、乃良さんの今後の事について、貴女に許しを得たくて此処に来ました。」

「乃良を……助けて下さるのですか?」

「貴女の『実家に、多大な』迷惑をお掛けするかもしません。」

「構いません!あの子さへ無事でいてくれたら……。」

「貴女から、再びお嬢さんを奪う事になつてもですか?」

「……それは、あの子の為ですか?」

「いえ……私の為でもあります。」

何も言わず窺う様に見詰める瞳に、俺は正面から向き合つた。

「お嬢さんを……乃良さんを、私に頂けませんか?」

正直、もう少し驚くかと想像したが、沙夜は驚く程静かに言つた。

「柴さん……それは、あの子が『榊の女』だから……という訳では無いのですね?」

「私には、正直乃良さんが何者でも関係ありません。」

「貴方、お幾つ?」

「32になります。乃良さんは、倍も離れています。」

「あの子は、承知しましたか?」

「気持ちは確かめ合いました……が、結婚となると、まだ彼女は戸惑うかもしれません……。」

「まだ……申し込んでいらっしゃらないんですね?」

「……はい。」

「でも、柴さんのお気持ちは、決まっていらっしゃる?」

「はい。彼女は未成年です……先ずは、母親である貴女に窺うのが筋だろうと思いました。」

「私には、母親の資格はありません……乃良には本当に可哀想な事をしましたが……致し方無い親の思い……わかつて頂けますか?」

「はい。」

「あの子の事を、想つて下さっているのですね?」

「私は……乃良さんを、愛しています。」

「あの子は、貴方と一緒に居て、幸せでしたでしょうか?」

「どうでしょ、私は不器用な人間で、思い遣れて無い部分も多く、贅沢をさせてやる事も出来ません。周囲には、余り品の良く無い仲間も大勢居る…だが、乃良さんは私の所がいいと…私と一緒にいと言つてくれました。私にはそれで十分です…その想いに応えたい。何より、私が彼女を手放したく無いのです。」

今の想いの丈を、自分で驚く程素直に沙夜にぶつけた、彼女は嬉しそうに微笑んで、目を潤ませた。

「…ありがとうございます。あの子の事を…宜しくお願ひ致します。」

「一つ宜しいですか?」

「何でしあう?」

「堅気にしか…嫁に出したくは無いですか?」

「…佐久間さんの跡を継がれるのですか?」

「…わかりません。今の状況で乃良さんを助けるには、最善の策で有る事は確かなのですが…。」

「それは、貴方にお任せします。あの子と相談して、お決めになつて下さい。」

「ありがとうございます。」

「私に協力出来る事は、何でも致します。」

「…宜しくお願ひします。先ずは、彼女の住民票や戸籍謄本を取り寄せて頂けますか?」

「承知致しました…ですが…私は出歩けません。一体どうすれば…。」

「警察関係で、協力を仰げる所があるかもしません。」

「警察?」

「申し遅れました…私は現在『オフィス柴』という、何でも屋を生業としていますが…前職は、警察官でした。」

「まあ!佐久間さんも、大変な弟さんをお持ちなのですね!…?」

「…そう言つと、沙夜は朗らかに笑つた。

色々打合せて部屋を出ると、小次郎が俺を見上げてニヤリと笑つた。

「世話になつたな。」

「いえ…いいものを貰せて頂きました。わたくし涼子さんと早速連絡しなくては…。」

「お、おこつ…?」

「言われてたんですよ…どんな風に涼子さんの秘密をそこへ申し込むか、逐一報告しろとな…」

小次郎は愉しそうに笑い、おめでとうと喜んだ。

「再三の面会申し込みにも、病気を理由に蹴りやがる…全くあの強
突く爺い！？下手に出てやりやあいい気になりやがつて…！」
「困りましたね…『榊の女』っていうのはタブーらしくて…上方
でも存在は知つても、おそれと手を出してはならない物らし
くて…。」

「政治家なんかが絡む話だからな…今迄奴等がやつて来た事をバラ
されてみる…世の中ひっくり返っちゃまつ。」

兄貴と京子が眉を寄せ合つて見て、俺は堪らず声を上げた。

「じゃあ、どうしろつてんだ！？」

「…潰すしかねえだらうな。」

「潰すつて…榊をか！？新宿の街の中で、抗争するつていうのが！？」

「じゃあどうする…沙夜に迄申し込んで、仔猫ちゃん諦めるつ
てこうのか？」

「待つて下さい！警察としても、抗争は困ります！…」

「…何か…手は…？」

「今…知り合いを通して…上に掛け合つて貰つています。」

「署長か？」

「ううん…もつと上に…。」

「誰だ？」

京子は気まずそうに、俺に耳打ちした。

「何だと…？」

「ちょっと…信頼出来る先輩のツテがあつてね。」

「…誰だ？」

「…アンタも知つてる人…アノ時の…私のバディ。」

「…ああ。」

恋人が殉職した時、一課の刑事だった京子は、連續婦女暴行殺人事

件を追つていた。

その時の彼女のバティ…キャリアで躰の大きなギョロ目の先輩は、恐らく事情を察してくれていたのだろう…捜査でも、道場でも、京子が何も考えずに済む位、へ口へ口になる迄彼女を扱き使つた。その後海外に研修に行き、本店の組対に入り…俺が辞める頃、どこかの署長に納まつた筈だ。

「まだ付き合いがあつたのか？」

「まあね…キャリアで気が合うのは、あの人位だもの。」

「で…上手く行きそなのか？」

「春にあの人…が捜査本部長になつた事件…新宿署の手柄にしてもらつて…裏があつてね。署長は大きな借りが有るのよ。」

「春の事件…ヤク絡みのか？」

突然兄貴が話に割り込み、京子は驚いて頷いた。

「確かに、ロシアと上海が絡んだ事件だつたな…堂本の所が被害につた…」

「堂本が？」

「何だ、お前…知らなかつたのか？新宿が激震した事件だつたんだぞ？確かに、堂本の組から逮捕者も出た…ヤク絡みで付き合いのあつた会社の社長も逮捕されたろ？」

「ああ…何か…あつたみたいだな。」

「あの頃、アンタ…自分の事で目一杯だつたから…。松田の妹の話で出てきた情夫…その時の堂本から逮捕された奴よ。」

「…そうか。」

「…ちよつと待て…そうか…堂本か！？」

兄貴は思い付いた様にニヤニヤと不気味に笑い出した。

「サーゲントの…その時の事件に深く関わつた人物…面識あるか？…誰ですか？」

「Panther…裏の世界でも表の世界でも、ちよつとした有名

人な筈なんだが…確か…連城…。」

「連城検事ですか？連城仁？」

「そ、そ、そ、堅気だが裏事情にも詳しく、絶対に敵に回したく無い
人間だ。」

「昔、担当検事としてお会いした事はありますか…多分あちらは覚
えていらっしゃらないと思います。先輩は…知り合いだと思います
が…余り充てにはなりません。当時もかなり険悪でしたから…。」

「そうか…やっぱり堂本に噛ませて引っ張り出すしか無いかな?」

「どういう人物だ?」

「元検事で弁護士で、企業や有名店のオーナーだが…色々な2つ名
を持つてる。通り名はPanther…俺もパーティーでチラツと
拝んだだけだが…確かに黒豹だな、あれは。」

「検事としても、弁護士としても一流でね…一度も負けた事が無い
のよ。」

「一度も?」

「そう…それだけの調査や取り調べをしての結果なんだけど…私達
も、何度も納得する迄再調査依頼されて…でも、法廷では必ず勝つ
てくれる…大変だったけど遣り甲斐の有る仕事だったわ。」

「健司…お前は不満かも知れないが、堂本に協力を願い出るぞ!」

「兄貴!?」

「他人の女房になつた昔の女と仔猫ちゃん…どっちが大事だ!?!?」

通学途中の電車で見掛けるお嬢様校の制服…男子高校生垂涎の高嶺
の華…時任しずかと付き合い始めたのは、電車の中の痴漢を撃退し
た事がきっかけだった。

何の取り柄も無い普通の男子高校生と、光輝く純潔の白百合…名前
の通り静かで大人しく、フワリと笑う笑顔が天使の様で…手を触れ
る事もおこがましく、大事に…本当に大事にしてきたのに…。

そんな彼女に、兄貴の組と対を張る堂本組の息子、堂本清和が目を
付けた。

「俺の女になれ!?!?」

彼女の学校の校門や自宅前、俺と一緒に居る時にも堂々と口説く堂本に、初めしづかは怯えていた。

それが段々と態度が変わつて來たのだ。

「思つた程、怖い方では無いのかもしれない。」

「私の嫌がる事は、絶対にしない方だから…。」

それを聞いて、迂闊にも少し安心したのだ。

気付いた時、しづかの心は堂本に傾いていた…それは、坂から転がり落ちる様に…止め様が無かつた。

何故と問う俺に、しづかはハラハラと涙を溢した。

「私は…誰かに、私の殻を破つて欲しかつたのかもしません。」

そして、許して欲しいと何度も何度も詫びた。

堂本とタイマンも張つたが、同じ極道の息子でも跡取りとして育て上げられた堂本と、普通の学生として過ごして來た俺とでは、歴然とした差が有り過ぎた。

「俺は、詫びる気は欠片も無い…！しづかが、俺を選んだ…それだけの話だ！」

悔しくて情けなくて、男としての矜持を取り戻す為に組の連中に喧嘩を教わり、族に入つてがむしやに突き進んだ結果、総長に上り詰めてファング等と呼ばれる様になつた。

あれから15年以上経つのに、目の前でニヤける優男の顔を見るとムカツ腹が立つ。

神楽坂の料亭の一室…撫然とした俺の隣で、兄貴が堂本と若頭の森田という男に話を進めていた。

「一枚噛む気は無いか、堂本の？」

「ウチに何をさせたいんです、佐久間さん？」

「神の土地家屋…アンタんとこの抵当に入つてるんだつてな？」

「ええ…正確には、森田の抵当に入つてます。」

「ウチに譲つてはくれねえか？」

「何の為に？」

「ちょっとな…あの家をぶつ壊して、探ししたいモノがあつてな…。」

「佐久間さん…ウチとの境界線、いや…森田の所が持つ抵当物件って事は、ウチの島ですよね。そんな所で、宝探しでもおつ始めるんですか？」

「それは、Pantherが来てから話そつ。」

「もしかして…『神の女』に絡む話ですか？」

堂本の隣で、森田が静かに尋ねた。

「何か聞いてるか？」

「『神の女』が帰つて來たという噂を、神は広めている様です。あそこの収入源は、昔から『神の女』に頼っていますから…ウチの組長にも、神組長直々に連絡が入つたそうです。」

「成程…差し出して、抵当をチャラにして欲しいってか？」

「何考えてるんだか…出戻りに、そんな価値ありやしませんよ。」

カラカラと笑う堂本の隣で、森田が眉を寄せた。

「しかし、入院中だと聞いていましたが…確かに心臓が悪く『神の女』としての務めが出来ないという話で…全快したんでしょうか？」

「いや…彼女じや無い。」

「は？」

「沙夜じやねえ…新しい『神の女』は、沙夜の娘だ。」

その時、廊下に続く障子がスパンと開け放たれた。

「…その話、詳しく窺おつ。」

高級なブリティッシュコットンを着こなした長身の男が、俺達を見下ろしていた。

堂本は片手を上げてコウと声を掛け、森田はわざわざ向き直り深々と頭を下げた。

「『じ無沙汰致しております、連城さん。』この度は、『』婚約おめでとうござります。」

「ありがとう…所で森田さん、お宅の組長に『』安く声を掛けるなど伝えてくれないか？」

「申し訳ありません。」

「来月も、呼びもしないのに一家揃つて出席すると連絡があつた様

だが？」

「当たり前だ！黄龍が上海から招待されるのに、何故慎の所に招待状が来ない？漏れている様だから、わざわざこちから連絡を入れてやつただけだ。」

「…じゃあ、息子だけ寄越せ。」

「馬鹿野郎、4歳の息子だけを結婚式に出席させる親がどこにいる？当然俺達も出席するー！」

「…好きにしろ。」

用意された席に座ると、連城は兄貴に名刺を差し出した。

「失礼致しました…弁護士の連城です。」

「佐久間組の佐久間です。こちらは、私の弟で柴健司です。」

そう紹介され黙つて頭を下げる俺に、意外な挨拶が返つて来た。

「久し振りだな…柴刑事。」

「は？」

「何だ…覚えて無いか？一度挨拶を受けた…佐伯の所の女刑事と、よく連んでただろう？」

「…幸村を、覚えていると？」

「当たり前だ。共に事件を追つた仲間を、忘れる筈無いだろう…それにお前達は、異色で結構有名だったからな。」

「異色で有名なのは、お前だろ？Panther？俺の友人の中でも、3本の指に入る。」

「黙れ、堂本…お前に友人呼ばわりされる覚えは無い。」

「じゃあ、何でお前この場に来たんだよ？」

苦笑する森田の隣で、口を尖らせて子供の様に拗ねる堂本に、連城はサラリと言つた。

「佐伯から連絡があつたからに決まつているだろ？だから、弁護士としてやつて來たんだ。」

「話の内容は？」

「佐伯から、概ねは…『神の女』の救出と、神組の壊滅が望みだと？」

「そうなのか!? 佐久間さん、潰すのか? 榊を? 「その積りだと言つたら、どうする… 堂本の?」

「佐久間組長、そうなると島の取り合いで互いの上が出て来ます。今の均衡が崩れる恐れが有る… それでも、榊を潰すんですか? 「森田が、思案顔で尋ねて来る。

「互いの上が文句を付けない様に、折半するつて事でどうだ?」

「… 佐久間さん… ウチはいい。黙つて座つていて島が増えるんだからな。だが、それでお宅に何のメリットが有る… 『榊の女』か?」兄貴はニヤリと笑うと、堂本に身を乗り出して声を潜めた。

「沙夜は元々、俺の女房になる筈だつた女だからな… 娘共々返して貰おうつてだけの話だ。」

じつと兄貴を見詰めていた堂本が、ゆっくり俺に視線を向けた。

「柴… お前… 何故この場に居る? 佐久間組に入つた訳じやねえだろう?」

「ああ… 俺は、堅気だ。」

「じゃあ何故だ? お前には、関係の無い話だろつが?」

「関係は有る… ナオは… 俺の女だ。」

「ナオ? 女? 誰の事だ?」

「今、榊に囚われている女だ。音戸乃良… 俺の女だ。」

「『榊の女』がか!? その為の画策か!?」

「それがどうした? お前達極道の手慰み者や、悪徳政治家の邪な思ひの為に利用されていい様な女じや無い。あれは… 俺の女だ。」

ハツキリと言い切つた俺にその場は静まり返り… 連城が静かに俺に尋ねる。

「柴刑事… いや、刑事は廃業したんだつたな。柴… その娘、歳は幾つだ?」

「… 16です。」

「… 」の話、引き受けよう。佐久間さん、何を計画していますか?」

「堂本の許可があれば… 榊の屋敷を解体して、座敷牢から奪還する積りだつたんだが…。」

「あーー、好きにしてくれ。俺達は、高みの見物とさせてもらひ。」

堂本は立ち上がる、ニヤリと笑つた。

「佐久間さん、島の件…後日ゆっくり話しあいましょう。それから、柴…。」

「何だ?」

「手に入れたら会わせろ…じずかどどつちがいい女か、とくと見分してやる…」

「大きなお世話だ!」

馬鹿笑いする堂本と、一礼する森田が退室すると、俺達はその後の計画について話し合つた。

「柴…お前、乃良さんを取り戻してどつするつもりだ?」

兄貴を先に帰らせると、差し向かいで杯を上げながら連城が聞いた。

「結婚するつもりです…ナオさへ承知してくれたらですが。」

「組は?跡を継ぐのか?」

「…思案中です。」

「お前には、無理だな。」

「何故ですか?」

「組を束ねるには、もつと狡猾でなければ無理だ。それに、理不尽な上の命令に、お前は耐えられんだろう?」

「…。」

「警察も、指定広域暴力団も…検察の様な組織も…全て伏魔殿だからな。お前には無理だ。」

「そうでしょうか?」

「真つ直ぐ過ぎて傷付きやすい…そんな男には、精々族のヘッドか社長が関の山だ。」

「…。」

「それよりは、惚れた女を守つてやれ…若くして苦労しているなら尚のことだ。己の選択を間違えて、惚れた女を傷付ける様な事はするな。」

「経験者ですか?」

連城は、寂し氣に笑つて言つた。

「ああ……本当に長く苦労を掛けたが……ようやく贖罪を経て手に入れる。」

杯を見詰める瞳が、優しく瞬いた。

助ける

榊組長の自宅…広い座敷に上げられた俺と兄貴は、その閑散とした屋敷に息を飲んだ。

広い敷地ではある…建物も古く堂々としているが…。座敷に向かう廊下を進むと、伸び放題の庭木にジャングルと化した雑草、庭に面した廊下は雨露で腐り落ちている箇所も有り、掃除も行き届いていない有り様で…。

何より驚いたのは、人の気配が感じられない事だ。

案内して来た老女が退室すると、屋敷内を吹き抜ける風の音と鳥のさえずり…遠くから、敷地外で行われている工事の音がする。

「…偉く荒れて…人の気配もねえな？」

「以前は、こんな事は無かつたんだがな。格式の有る…。」

先程の老女が、湯呑み茶碗を運んで来た。

「榊組長は？」

「程無くおみえになりますんで、今しばらくお待ち頂けますかねえ…。」

少し間延びした話し方でヒヨコリと頭を下げる、老女は再び出て行つた。

「…お前、榊が来ても…。」

そう兄貴が言い掛けた時、縁側の廊下とは反対側の襖が開いて、1人の老人が入つて来た。

土色の顔をし、瘦せた頬と窪んだ目…神経質そうな瞳が俺達を睨み付ける。

「お久し振りです、榊さん。お駄の調子は如何です？」

頭も下げる、兄貴は榊大善に挨拶をした。

「…何、たいした事は無い。貴方の所と違つて我々の様な弱小の組は、色々と気苦労も多くてね。」

ピリピリと青筋を立てながら対応する大善は、兄貴から俺に視線を

向けた。

「佐久間さんの弟だな？」

「柴健司です。」

「…孫が、世話になつたそつだな？」

顔色を窺つように覗き込まれ、口端が引き上げられた。

「榎さん…その事も含めて、アンタに話があつて來たんだ。」

兄貴が足を崩して片膝を立てた。

「…沙夜を返して貰おうと思つてな。」

「何だと！？」

「驚く事たあねえだろう？沙夜は、今もつて俺の婚約者だ。あれから22年…そろそろ嫁に貰つてもいい頃合いだろうが？」

「しかし…あの話は…。」

慌てる大善に、兄貴はくつろぎながらニヤリと笑つた。

「解消は、されてねえよなあ？そんな話は無かつた…だから俺は2年もの間、操を立てて独身を貫いてるんだぜ？」

「だが、沙夜は結婚して…。」

「亡くなつたんだつてなあ、氣の毒に…アンタの所にいた弁護士、音戸つつたか？まあ、亭主がいるつてんなら仕方ねえが、亡くなつた後アンタの所に引き取つてるんだろう？胸患つて、入院してつて言つじやねえか？俺は…聞いてねえよ、榎さん？」

「…佐久間。」

「あの話は、アンタの所から是非にと持つて來たんだ。今更反故になんか出来ねえよなあ？それに…沙夜が出て行つた後、俺に島を半分渡すと手を打つた席で、アンタと當時組長だつたアンタの息子が言つたんだぜ？」

「…な…何を？」

「沙夜を必ず連れ帰る…そして、俺の所に連れて來ると…煮るなり焼くなり好きにしてくれつてな。」

ギラギラとした瞳を投げ掛けて、喉の奥から絞り出す様な声が吐かれた。

「…わかつた…沙夜はお宅に渡そつ。」

「そうかい…じゃあ、沙夜の娘も返して貰おつ。」

「アレは駄目だ…！」

「何言つてる？沙夜の娘だ…俺が連れ帰る。」

「アレは『榊の女』だ…！榊の財産だ…！お前の娘では無いだろつ！？」

「ああ…まだな。だが、沙夜の娘で…結婚すれば俺の娘だ。正統な…正妻の産んだ佐久間の跡取り娘だ。お前達が…こんな今にも潰れそうな組がどうこうしていい女じやねえぞ！？」

「断るつ…！」

「極道の理屈は、通用しねえつてか？」

「アレは、榊のモノだ…！」

「仕方ねえな…。」

兄貴が目配せし、俺は携帯を取り出すと通話ボタンを押して、一言お願いしますと相手に伝えた。

程無くして3人分の足音が廊下に響き、障子が開かれたそこには、老女に案内された沙夜と連城の姿があつた。

「沙夜つ…？」

沙夜は何も言わずに兄貴の隣に座り、兄貴は自分の敷いていた座布団をそつと沙夜に押しやつた。

「榊大善さんですね？私、弁護士をしております連城仁」と申します。

「俺の隣に座つた連城は、大善に名刺を差し出しながら話を続ける。

「本日は、そちらの音戸沙夜さんの代理人として、お話をさせて頂く為に参りました。」

「代理人？」

「はい。こちらにいらっしゃる、音戸乃良さんの身柄を引き取りに参りました。」

「何！？」

「未成年である乃良さんを、保護者である沙夜さんが引き取る…何

の問題も無いと思いますが？」

「…だが、沙夜は入院中だ。身内である儂が面倒を見ても、不都合は無いと思うが？」

「しかし沙夜さんより、…こちらには預けたく無いと…」こちらに預けると、乃良さんの身に危害が及ぶとの心配で、柴健司さんの元で預かって頂きたいという依頼なのです。」

憎々しげに田の前に座る面々を睨み、青筋を立てた大善が怒りに震えながら言つた。

「…全て…お前達の画策か！？」

「何の話だ？」

「6日前、堂本から連絡があつた…5日の内に借金を返済出来なければ、屋敷を引き渡せと…これ迄一切催促等して来なかつたのに、今更何故と思っていたが…。」

「そんな事は、俺達には関係ねえ…だがなあ神さん、あの折にも言つたが、そろそろ潮時なんじゃねえか？いつ迄も『神の女』に頼つてもいられねえだろ？」

「…乃良さんは、まだ16歳です。わかつておられると思いますが、貴方のなさうとしている事は、児童虐待になります。」

兄貴の言葉に、連城が追い討ちを掛けると、大善はギリギリと歯を食い縛つた。

「お父様…乃良は…」

「おらんつ…！」

大善の言葉に俺は立ち上がり、屋敷の中を探し回つた。

「ネ口つ…！…どこだ、ネ口つ…！？」

沙夜が廊下に出ると、無言で俺を導いた。

邸内の奥まつた所にある土蔵…変わつた造りだ…屋敷の中央に造られた中庭に、かなり大きな土蔵と、それに対になる様に神殿が建てられていた。

「…多分、この中です。」

「此処が、座敷牢なのか？」

「加代…鍵を。」

「いえ、お嬢様…鍵は、旦那様が…。」

いつの間にか沙夜の後ろに控えた老女が、申し訳無さそうに言った。

「ネコつ…？居るのか…？居たら返事しろ…。」

土蔵の入口を叩きながら俺が叫ぶと、背後から冷たい声が掛けられた。

「無駄じや…誰もおらん。」

「お父様、鍵を…。」

「鍵は無くした…そこは、お前が出て行つてから、使われておらん。」

「あくまでも、しらを切り通すつもりか…？」

「知らんモノは知らん…！」

「仕方有りませんね。」

俺達の話を聞いていた連城は、そつまつと携帯を取り出してどこかに電話を掛けた。

「…もしもし、私だ…ああ、仕方無い…裏の方が近いだろ…宣しく頼む。」

そう言いながら、裏の庭の方に歩を進めた途端、屋敷の外から何かが近付いて来る音がする。

「な、何だ…？」

驚く大善が連城の後を追うと、やがて屋敷を囲うの白壁の塀が物凄い音を立てて崩れ去った。

そこに現れたのは、巨大な蟹の爪の様な圧碎機を受けた油圧ショベル…バキバキと容赦無く白壁を壊すと、裏庭にその巨大な車体を現した。

「何なんだ、一体…？人の屋敷に何をしている…？」

青ざめた大善に、連城は胸ポケットから一枚の紙を引き出し大善に渡しながら言った。

「屋敷の解体については、堂本組長より委任状を頂いております。」

「何だと…？」

「因みに…貴方が『榊の女』を提供しようとしていた政界の方々ですが…彼女が未成年と聞いて一様に驚いていらっしゃいましたよ。あの方々には、スキヤンダルは『法度ですかね。今後も『榊の女』に頼つて来られる方は、皆無かと思います…私が、絡んでしまいましたからね。」

「…。」

「まだ鍵を出して頂けない様なら、このまま建物も解体致しますが？」

「…好きにするといい。」

大善の言葉に、連城と俺は眉を寄せて顔を見合せた。

何か…嫌な予感がする。

直ぐ様指示がなされ、母屋の一部を圧碎機が破壊してゆく…そして、中庭の土蔵の壁に巨大な蟹の爪で穴を開けていった。

人が通れる程の穴が広がった所で、俺は土蔵の中に入り込み、声を限りに叫びながらネコを探した。

2階建ての土蔵には、明かり取りの窓の光しか届かず薄暗い…その1階の半分に太い組み木で牢が拵えられ、中には畳が敷いてあり、簾笥や机等一通りの生活用品が揃えられている様だった。だが、肝心のネコの姿が見当たらない…何故だ…此処以外に監禁出来る場所は無いと聞いていたのに…。

穴から出て来た俺に、連城と兄貴が不審な目を向けた。

「…中は…蛻の殻だ。」

その言葉を聞いて一番に反応したのは沙夜だった。

青白い顔を余計に青ざめさせ、目を吊り上げて大善に食つて掛かった。

「お父様…まさか…まさか、神降ろしをしているのでは無いでしょうね！？」

「神降ろし？何だ、それは！？」

「巫女の躰に…神を…でもあれは、あれは…拷問以外の何物でも無い…恭順させる為だけの拷問に…。」

「何を言つ……あれは、神聖な儀式だ。あの娘は気が強い……恐ろしくは神が……。」

「何日になりますーー? 神室かみむろに入つて、何日経つんですーー?」

「…今日で5日。」

「そんなに…いけない…狂つてしまつーー!」

沙夜は縛れる様な足取りで神殿に入り込み、祭壇裏に回り込んだ。そして床下の隠し扉を開けると、置いてあつた燭台を手に俺に付いて来る様に言つた。

「…此処は?」

「神室と申します…先程お話しました、巫女の神降ろしをする場ですが、本来は…歴代の巫女の墓所です。」

「墓なのか? だが…。」

「神家は代々巫女の家系…『神の女』が家を守り継いで来たのに…その女達には、戸籍が無いのです。」

「え?」

「表面上は存在してはいけない者…だから、神の戸籍では代々養子を迎えている事になつていてるんです。死して尚密葬される。何故だかわかりますか?」

「…いえ。」

「それは『神の女』の出自が…不明だからです。要は婚外子という事では神聖な巫女には相応しく無いのでしきう。」

「だからですか、貴女方夫婦の婚姻届と、乃良さんの出生届に拘つたのは?」

「乃良が話しましたか? 私の戸籍は、主人が手を匂くしてくれました。あの子だけです…生まれながらに戸籍を持つ『神の女』は…。地下に下る階段を下りた所にある、大きな門の付いた鉄の扉の前で沙夜は言つた。

「中は暗闇で…音も何も無い…1日過ぐすだけでも耐えられません。もしかしたら、本当に壊れてしまつているかもしれません。」

「…構いません。」

「音にも光にも、全ての感覚が敏感になります。どうか…優しく呼びかけてやつて下さい。」

「承知しました。」

門を開けて中に入ると、すえた様なカビ臭い様な何とも言えない籠つた空気が流れ出した。

蠟燭の揺らめく光にぼんやりと映し出された部屋は、思いの外広さがあった。

部屋の中に整然と並べられた柩…中には朽ちて中の骨が見えている物もある。

そして棚の様に掘られた壁には、無数の髑髏が並んでいる…中には髪が生えたままの物や、明らかに子供と思われる小さな髑髏が物言わぬ瞳を向けていた。

部屋の入口に水の入ったペットボトルが数本転がっている。沙夜は、燭台を翳して部屋を照らした…何かが動く気配がして目を凝らす。

「ネコつ…?」

「行つてやつて下さい…異々もそつと…。」

柩の並べられた部屋の隅に、薄汚れた浴衣姿のネコがうずくまつていた。

「…ネコ…大丈夫か?」

そつと声を掛け隣に膝を付いた。

何も反応しないネコの頬をそつと撫でてやると、ピクリと反応し膝に埋めた顔をユルユルと上げた。

「遅くなつて済まなかつたな…ネコ、俺がわかるか?」

「…………ば…。」

俺は上着を脱いでネコの躰に掛けてやり、その上からそつと華奢な躰を抱き締めた。

「迎えに来たぞ、ナオ。」

ネコは俺の胸に躰を預けると、大きな息を吐いて意識を飛ばした。ネコを抱き上げて沙夜と共に神室からると、大善は憎々しげに俺

を睨み付けたが、やがて力尽きた様にその場に崩れ落ちた。

「儂は、諦めて切れん… その娘なら…。」

「拉致監禁遺棄も罪状に付けますか？」

連城の冷たい声を、兄貴が遮った。

「なあ、榊さん… ウチか堂本か、どちらかの傘下に入っちゃくれねえか？ 無用な争いをして、互いに傷付くのは得策じやねえ。今なら、手下丸」と引き受けるぜ？」

「…しばらく… 考えさせてくれ。」

そつ言つて頃垂れる大善を残し、俺達は榊邸を後にした。

救出されたネコは、脱水症状や検査等で3日程入院した。

「脱水は大した事は無いんですよ… ただ精神的ストレスが酷くてね。暗闇を怖がる、夜も寝れないじゃ、体力も奪われるばかりだし… 反応もしてくれないしね…。」

精神科の医師は、そう言って柔らかな笑みを見せた。

「彼女の母親は、心臓を患つて余り芳しく無い… 負担を掛けれない状態だし、誰に相談しようとかと思案していたら、弟が貴方の名前を出したものだから…。」

「弟？」

「ああ… 先日お会いしたと… 鷹栖小次郎、覚えていらっしゃいますか？」

「はい。『ご兄弟なんですか？』

「ええ、鷹栖武蔵です。宜しくお願ひしますね、柴健司さん。」

「宜しくお願ひします。」

「で… 彼女とは、どういづい関係になるのかな？」

「え？」

「本来は病状等も含めて、『ご家族の方にしかお話し出来ないんだけど… 柴さん、ご親戚では無いんでしあう？』

「違います… 私はナオの身元引受人です。」

「ふうん… それだけ？」

「それだけつて…。」

「彼女の反応見てるからね… で、彼女に何があつたか、話して貰えるかな？」

「それは…。」

「… いつたいどこから話せばいいか、全てを話すには憚られる事が多過ぎて、俺は逡巡した。」

「… 面倒だね、全く… ちょっと待つてて。」

溜め息を吐きながら、武藏は受話器を持ち上げて「こ」かに連絡を入れた…15分、20分も待たされただろうか、ようやく受話器を置いた時、武藏は再び溜め息を吐いた。

「はい、だいたいは把握出来た…大変だつたんだね、乃良ちゃん。」「あの…どに？」

「え？ ああ…連城だよ、連城仁。ここに連ばれて来た時、一緒だつたつて医局の人間が言つてたから。事件絡みだなつて…。」「お知り合いでですか？」

「昔からのね…高校の後輩なんだよ。それよりも…。」

武藏は俺に向き直り、俺を睨み付け激しい剣幕で捲し立てた。

「連城の知り合いらしいし遠慮無く言わせてもらうけどね！俺達医師は患者の事しか考えて無いんだよ…背後に何があつたか、どんな目にあつたかを聞くのは、全て患者の為にやつてる事なんだ！特に精神科つていうのは、心のケアが仕事なんだから…患者の為を思つて、本当に治してやりたいなら、全てを話してもらわなきゃ治療出来ない！わかつたか！？」

「…はい。」

「…宜しい。当然守秘義務があるから、患者の秘密は漏らさないから安心しなさい。で、恋人で一緒に暮らしてるつて？」

「口りと態度を豹変させて、武藏は再び柔らかな笑みを見せた。

「…はあ。」

「いいなあ、あんな若い子と…最近は、歳の差カップル流行りなんか？何歳差？」

「あ…倍です。16歳。」

「そつかあ…いいねえ。可愛いでしょ？」

「あの…。」

「ああ…慣れてるんだよ。連城の所に嫁に行く子ね、俺の親友の妹なんだけど14歳差でね。」

「そなんですか…。」

「独り身としては、寂しい限りさ。所で治療の話…看護師や医師は

勿論、母親にも反応を示さないのに、君にだけ反応する理由は理解出来た。で、結論的には、退院させて君の手元に置くのが最良の策だろうね。」「わかりました。」

「住環境は？」

「え…事務所兼自宅ですが？」

「じゃあ、人の出入りが激しいよね…ん~。」

「静かな環境の方がいいですか？」

「しばらくはね…手も掛かると思いますよ。まずは、安心させてやらないと…」

武蔵の忠告を素直に聞き入れ、兄貴の家の離れに生活して3日、ネコは昼も夜も俺の懐から離れない。

暗闇を極端に嫌がり、瞼を閉じる事すら恐怖を感じる。

ただ俺の温もりだけを頼りに、虚ろな生活を続けていた。ようやく懐から啜り泣きが漏れたのは、4日目が終わる頃とする頃だった。

「ネコ？」

「…」めんね…柴さん。」

「何謝つてる？」

「色々…いっぱい…。」

俺は、懐から顔を上げたネコを抱き締めると、こめかみにキスを落としながら尋ねた。

「怖かったか？」

「…うん…でも、柴さん助けてくれるって思つてた…だけど、あの地下に閉じ込められて…骸骨いっぱい…暗くて…息が…。」

「もういい、もういいんだ…もう大丈夫だから。」

「柴さん…お母さんは？」

「ああ…病院に居る。心配無いから。」

「…良かった。」

数日後沙夜の病室で、親子の涙の対面が実現した。

しかし、それは感動から来るものではなく、互いの謝罪の会見だった。

「何故でしょうか？沙夜さんが、ナオに対して済まないと思う気持ちはわかるんですが…何故ナオ迄母親に対して、そんな感情を表すのか…？」

「本人に聞いてみた？」

「何も言いません。済まないと泣くばかりで…。」

そうかと言いながら、カウンセリングルームで武藏は俺に珈琲の入ったカップを差し出した。

「自分のせいだと…思ってるんだろうね。」

「何がですか？」

「母親が凌辱されて入院する羽目になつたのも、父親が死んだのも…今回、祖父が組を潰す事になつたのも、自分の責任だと思つてゐるんだろうね。」

「そんな事は…。」

「あるだろ？」

「…。」

武藏は俺の肩を叩きながら、一の句を告げなくなつた俺に視線を投げ掛けた。

「当時は幼くて、逃げるのに必死で考えられなかつたのかも知れないが、逃亡生活の中ですつと思つていたんじゃないかな？今後は、君がフォローしていつてあげなきやね。」

久々に帰つた事務所の有り様に、俺とネコは驚きを隠し得なかつた。

「鉄、どういう事だ！？」

「申し訳ありません、総長！いらっしゃらない間に、手が足りなくて…その、色々と手伝いを頼んでおりました。」

留守を預かっていた河田鉄也は、申し訳無さそうに頭を下げる。事務所には自警団の連中ばかりで無く、数人の派手な女達が寝室に迄入り込んでたむろしていた。

「新しい依頼も入っています。しばらくは、人手が必要になります

ので…。」

俺はネコを見下ろして、眉を寄せながら窺つた。

「…佐久間に戻るか?」

ネコはフルフルと首を振つて、ニッコリと笑つた。

確かにネコが拐われてからこちら、俺自身の仕事も自警団の仕事も、鉄也を初め仲間達に頼り切つていた。

それからのしばらくの間、俺は慌ただしい生活に追われ、ネコは出入りする人間に揉まれ所在無さげに病院の沙夜と事務所を往復していた。

「柴さん、お願ひがあるの。」

沙夜がようやく心臓の手術を承諾したと兄貴から連絡があつた翌日、ネコは真剣な面持ちで風呂上がりの俺に言つた。

「私、アルバイトしたいの。」

「事務所で働いてるだろ?」

「人手足りてるし…駄目?」

「…何かあつたか?」

最近の少し寂し気な様子が気になつていた俺は、ネコの隣に座ると頬を撫でた。

「つうん…違うの。お金稼いだと思つてね…。」

「金?お前、まさか…母親の手術代か?そんな事、気にする必要は…。」

「…。」

「気にするよ。私のお母さんだもん。」

「兄貴が、言つてたろ?」

「うん…お兄さん、入院費も手術代も出してくれるつて言つてた。でも、少しずつでも返したいし、それに…退院した後の生活もあるし…お金稼ぎたいの。」

「…ネコ…出て行くつもりか!?」

「お兄さんがね、もう誰も追つかけて来ないつて言つてくれたの。だからね…お母さん退院したら、一緒に暮らせるでしょ?お母さん手術しても働けないだろうから、私が頑張つて仕事して…。」

「俺に、面倒見させてくれねえのか？」

「え？」

「お前と…母親と…俺に面倒見させろって言つてんだよ…」

じつと見上げるネコの瞳が、不安気に揺らめく。

「惚れてるつて、言つたらうひへ。」

「…柴さん。」

「全部寄越せつて…俺の物にするつて言つたらうひへ。」

「…。」

「結婚しよう、ナオ…俺の嫁に来い。俺が全部…。」

「…駄目だよ、柴さん。」

「ナオ？」

「…駄目。」

「何故だ、ナオ！？」

寂しさを滲ませた笑みを浮かべて、ネコは俺の躰を押しやつた。

「俺の事嫌いになつちまつたのか？それとも、俺とは…考えられな
いつて事か！？」

「違う…違うよ、柴さん。柴さんの事、大好きだし…すつじい嬉し
い！」

俺の胸に抱き付きたながら、頬を擦り寄せてネコは言つた。

「だけどね、今一番しなきやいけない事…違つと思つ。」

「…ナオ。」

「私ね、自分の力でお母さんの事、幸せにしたいんだあ。」

「俺と一緒にじゃ…駄目なのか？」

俺はネコを胸に抱き込んで、静かに尋ねた。

「…「じめん、柴さん。」

「待てばいいか？1年か？2年か？」

「…。」

「わかつた…お前の気の済む様にすればいい。それ迄、俺は待つか

5°。」

「…柴さん、あの…。」

「お前は若い……結婚なんて考えられる年齢じゃねえのはわかってる。だから気にするな。」

「でも……。」

「今迄通りに、俺の手元に置いて待ちたかったのは、俺のエゴだ。だが出来れば、俺の目の届く範囲に居てくれ。」

ネコは何も言わずに俯いて、俺の胸から身を離した。

「お前、俺が居なきや働く場所も、住む場所借りるのも出来ねえだろつが？」

黙つて頷くネコの顎に手を添えて持ち上げると、ネコは泣き出しそうな寂しい笑顔を見せた。

「お前……いつからそんな笑い方しか出来なくなつちまつたんだ？」

「え？」

「もう追われる事もねえ、母親との再会も出来て、母親の手術も決まって……本来なら、幸せ一杯の筈だろうが？」

顎に添えた手を真っ直ぐに下ろし、心臓の上を指で軽く突く。

「……何溜め込んでる？」

「何も……何も無いよ。嬉しい事しか無いもん。」

「じゃあ、何で泣いてんだ？」

ポタリポタリと落ちる涙に気付き、慌てて拭いながらネコは笑う。「柴さんが泣かせたんじゃん……優しい事ばっかり言つてや。」

「……ナオ……愛してる……。」

ネコの口唇を奪う様に唇を落としながら押し倒し、パジャマのボタンに手をかけると、ネコは嫌だと黙つて胸元を搔き回わせて恥じらつた。

「今更だろ？佐久間の家で、着替えも風呂に入れたのも俺だらつが？覚えてねえのか？」

「……覚えてるよ。」

「じゃあ……。」

「……柴さん……アレは無理だよ……。」

「何がだ？」

「だからさあ…。」

ネコは起き上がりつて布団に正座をすると、赤くなりながら俺の股間に胡を見詰めた。

「…無理だつて。」

何を言わんとしているか理解して、俺は笑いながらネコの正面に胡座をかいた。

「風呂に入った時に見たのか？」

「いや…あのさ…。」

「初めて見たのか？」

「…そうじゃないけど…無理矢理見せる奴もいたし…。」

「本番は、あんなモノじゃ無いんだがな？」

ゲツと言つ様な顔をして俺を窺つネコを見て、俺は久々に大爆笑した。

「あんなあ、大丈夫なんだ。女の躰は、大丈夫な様に作られてるんだつて！」

「だあつて…。」

「お前、子供がどうやつて産まれるか知つてるか？」

「…柴さん、馬鹿にしてるでしょ？？」

膨れるネコの頭に手を置くと、俺は笑いながら続けた。

「じゃあ、どこから産まれるかもわかるな？」

「…うん。」

「子供の頭が出て来る場所なんだぞ？俺のナニのサイズが幾らデカくとも、子供の頭の大きさには敵わねえだろ？」

「…そつか…そつだね。」

「しかし…女抱ぐのに性教育するとは、流石に思わなかつたな。」

「…ごめん。」

赤くなつて俯くネコの頭をポンポンと叩きながら、腰に手を回して引き寄せた。

「で…説明が終わつた所で、実習するか？」

「えつ…？…いや…それは…。」

「つれねえなあ…大丈夫、無理強いしねえって言つたのうへ・今日も添い寝だけ…。」

「…じめんね。」

「気にするな。その内、お前の方から欲しくて堪らなくしてやるから。」

「…そういうもの?」

「ああ…そういうもんだ。」

腕枕をしてやり、ネコの躰を抱き寄せて撫で擦りながら、実際にネコがそうなった時の事を想像する。

躰をくねらせながら欲しがるネコの前にしたら…理性も何も吹っ飛んでしまうに違いない。

「…柴さん…足に…。」

「…気にするな。」

こういう時は、理性の利く年齢と前職の戒めが有難いと思いながら、ネコの躰を抱き込んだ。

俺の紹介で、昼の搔き入れ時に近所の蕎麦屋のバイトを始めたネコは、慣れて来ると常連客達のツテを頼りに空いた時間帯に違うバイトを入れていった。

母親の見舞いとバイトの生活を続け、沙夜の手術が無事成功し退院時期を検討する頃には、小さな部屋を借りれる位の蓄えが出来ていた。

「1Jの部屋、幾らで借りたんです?」

「4万だよ。」

「格安ですね!いいなあ:俺も越して来ようかな?」

「隣に空いてた部屋も、埋まっちゃったよ。」

「敷金礼金は?」

「敷金だけだ。こんなボロアパート、礼金なんか取らせるか!/?
ネコの引越しの手伝いに駆り出された鉄也は、6帖にキッチン、バ
ストイレ付きの角部屋の窓を開けて羨ましそうに言った。

「本当に近いんですね…殆ど斜向かえじやないですか!/?」

窓の外に見える事務所の入ったビルを見て、鉄也が笑った。
たまたま直ぐ近くのアパートに空き部屋を見つけ、知り合いの不動
産屋が管理しているのをいい事に、格安で借りられる様に交渉したの
だ。

「此処だと、何かあつても直ぐに飛んで来れるからな。」

「…過保護ですね、総長。」

「何もないよ、柴さん…。」

2人の冷たい視線を浴びて、俺は事務所に残った衣装ケースを取り
に戻った。

「…だろ?済まない、ネコちゃん。」

「ううん、鉄さんが気にする事無いよ。」

「だけどね…。」

「平気だよ、慣れてるんだよ。」

衣装ケースを持つて部屋に戻った俺の耳に、ネコと鉄也の会話が聞
こえた。

「何が慣れてるつて?」

そう言いながら部屋に入った俺に、ネコが笑いながら答える。

「独り暮らしだよ。ずっと、独りで暮らして來たから。」

「母親が退院する迄、俺の所で暮らせばいい。」

「折角借りたんだもん、今日から「シチで暮らすんだ。」

そう言いながら、ネコは包装紙をバリバリと剥いで、布団袋に入つたままの布団を押入れに納めた。

「後は何かありますか、総長？」

「事務所の入口に置いてある、カラー ボックスだけ運んでくれるか

？」

「わかりました。」

そう言って鉄也が部屋を出た途端、素早くネコの躰を抱き締めて唇を奪うと、少し膨れる顔を覗き込んだ。

「鍵、寄越せよ。」

「鍵？」

「合鍵、貰つたんだろう？」

「…貰つたよ。」

「一本寄越せ。」

「…強引だなあ、柴さん。」

「…いいから…夜這いに来てやるから。」

「嫌だよ、上げない！」

ドタンバタンと息を上げてふざけあう俺達の姿を見て、玄関から呆れた様な声が掛かった。

「アンタ達、いい加減にしなさい！下のお宅に「迷惑でしょ！」？」

「京子さん、柴さんが虐めるよ～！」

俺に組み敷かれたネコが笑いながら声を上げる。

「しい～ばあ～！！アンタがそうしてると、狼が子羊襲つてる様にしか見えないから、止めなさい～！」

俺はネコの手から奪つた鍵を、すかさず自分のキー ホルダーに付けながら言った。

「早かつたな。」

「行くんでしょ、病院？車用意して來たわ。」

世話になつた京子には非会いたいといつ沙夜の希望で、俺達は揃つて病院に向かつた。

病室には、先に来ていた兄貴が沙夜のベッドの横に座つていた。今迄居た部屋とは違い、大きな応接セットの置かれた広い部屋で俺達がソファーに座ると、兄貴は沙夜に手を添えてエスコートし対面のソファーと一緒に腰を下ろした。

一通りの挨拶と京子に対する礼を沙夜が話す間も、兄貴が甲斐甲斐しく背中にクツショーンを当ててやつたりする姿を見て、俺と京子は目配せしあつていた。

「お母さん、あのね…。

ネコが話を切り出した時、沙夜が静かに遮つた。

「乃良…話があるの。」

「なあに？」

「お母さんね…退院したら…。」

ネコはうつすらと頬を染め、瞳を煌めかせて次の言葉を期待していった。

「…佐久間さんのお宅で、お世話になる事にしたの。」

俺と京子は顔を見合せ、2人の間に座つて色を無くしたネコを見下ろした。

「お母さん、退院しても直ぐには動けないし…乃良の世話もしてあげれない。佐久間さんがね…離れがあるから、そこでゆっくり養生すればいいって…何なら乃良も一緒につて仰つて下さつてるの。」

「…そう。」

「乃良？」

「…私もね…。」

膝に乗せたカバンの下で、ネコが手をギュッと握るのがわかつた。

「…少しあ世話になつたんだ…とっても素敵な離れでね…いい所なんだよ。」

「じばりぐく、お母さんと一緒に来ないか、仔猫ちゃん？その方が、

お母さんも安心するが……」

兄貴は、いつに無く優しい声音でネコを誘つた。

「……私は、いいよ……私は……柴さんの所がいいから。お兄さん、母の事……宜しくお願ひします。」

「いいのか、ネコー？」

俺が堪らずネコを見下ろして問いただすと、ネコは俺に手を重ねて寂しさを堪えて笑つた。

「いいんだよ、柴さん……お兄さんの家大きいし、お母さんのお世話をしてくれる人も沢山居るし……お兄さん優しくしてくれると想ひ。そしたら、お母さん幸せだしね。」

「……ネコ。」

ネコは無言で何も言わないのでくれと俺に懇願し、震える手で俺の手を握ると、努めて明るく言つた。

「遊びに行くな、お母さん……美味しいお菓子沢山……持つて行くから……。」

「……乃良。」

「私、もうすぐアルバイトの時間なんだあ。そろそろ行くね。」

立ち上がったネコに続いて、京子が一緒に立ち上がつた。

「私もこれで失礼します。送つて行くわ、ネコちゃん。」

京子は俺を制して、ネコと一緒に病室を出て行つた。

「……無理強いだつたかな？」

ボソリと兄貴が言うのを聞いて、俺は堪らず唸り声を上げた。

「……話してあつたうが……アイツの行動も、想いも……。」

「健司……だからこそだ。」

「何だと？」

「柴さん……佐久間さんからお話を聞いて……私が……お願いしたのです。」

「何故ですか？」

「乃良の世話をになる事は……出来ません。」

「沙夜は、涙を溜めながら俺を見詰めた。

「先程話した様に…退院出来たからと言ひて、私の躰が直ぐに動ける訳ではありません。乃良と一緒に暮らした所で、日々の生活も私の世話も…全て乃良に頼る事になつてしまつ。それでは、あの子があの子が余りに不憫です。」

「…沙夜さん。」

「アルバイトも私の為にしている事でしよう。昔からそう…あの子は、私の為にずっと我慢のしどおしなんです。私は…あの子に普通の子供らしい生活をして欲しい…あの子に幸せになつて欲しいんです！」

「親心だ…わかつてやれ、健司。」

「…子供の心は…どうなります？ナオは…自分の力で貴女を幸せにしたいと思つて…。」

「無理させた所で、生活が破綻すれば辛い思いをするのは仔猫ちゃんなんだぞ！？それに、沙夜だつて…折角手術して良くなつたのに負担を掛けられねえだらうが！？」

「柴さん…きっと乃良は、全てわかつた上で何も言わないでいてくれたのだと思います。」

「そつとしておいてやれ、健司。」

「失礼します。」

俺は沙夜に一礼して、病室を出た。

「待て、健司！！」

兄貴の呼び止める声に、俺は振り向かずに歩を止めた。

「…わかつてやつてくれ。」

「わかつてたら、何で俺に言わなかつた！？ナオは…今朝、引越し済ませちまつたんだぞ！？」

「…そうか。」

「兄貴…沙夜さんの事…。」

「お前達にも相談してからと思つてな…聰にはもう話した。別に構わないよ。」

「沙夜さんには？」

「まだ…仔猫ちゃんをへり…K…してくれたら…な。」

「ナオには、まだ言わないでくれ…動搖が大き過ぎるだらうが！？」

「お前達は…どうなんだ？」

「申し込んださ…だが、結婚より先に自分の手で母親を幸せにして」と言つたんだ！」

「なら、母親は俺に任せろと言つてやつてくれ。」

「そんな簡単な話じやねえだらうが…。」

俺は今度こそ兄貴を置いて、病院を後にした。

12時を過ぎても、ネコの帰つて来る気配は無い。

俺は溜め息を吐きながら、ネコのアパートの部屋の前に座り煙草を燃らせていた。

「泣いてたわよ…。」

夕方、京子が電話を掛けて來た。

「何も言わないで、景色を眺めて涙だけ流して泣くのよ…佐久間さんの気持ちも、気付いたみたいよ。」

「あれだけ、あからさまじやな…。」

「本気だつて？」

「そうみてえだな…。」

「兄弟揃つて…まあ、兄弟だから好みも似てるのかも知れないけど沙夜さんつて幾つなの？」

「確か…41かな？」

「反則だわね、あの若さ…？同じ位かと思つたわ…庇護欲をそそるのも遺伝かしらね？」

「さあな…。」

「聞き捨てならない事…言つてたわよ。」

「何を？」

「『私、又捨てられちやつたのかな？』って…不味いわよ、柴！？」

明け方、階段を登る音に顔を上げると、少し驚いた様な顔をしてネ

「が帰つて來た。

「…來てたの？」

何事も無かつた様に鍵を開けながらネコは言った。

「…中に入つてればいいのに…鍵持つてるでしょ？」

スルリと部屋の中に入つたネコを追い掛けると、何も言わずにいる俺を振り向かずに、ネコは言葉を紡いだ。

「大丈夫だよ、柴さん…私、案外平氣かも。」

「ネコ…この部屋、解約しよう。戻つて又一緒に暮らそう…」

「何言つてゐる、柴さん…契約したんだから駄目だよ。それに、私はこの部屋出る氣無いよ？」

「…ネコ。」

俺は、後ろからネコの肩と腰を抱き締めた。

「お前の居場所は、俺の所だらう？お前の帰つて來るのは、俺の腕の中だらうが？」

「…そうだね…柴さんの腕の中にいられたら…それでいい…それだけいいよ。」

腕の中でクルリと振り向くと、ネコは自分から抱き付いて來た。

「…柴さん…ギュッとして…キスして…。」

「ああ…お前の望むだけしてやる。」

俺はネコを抱き締めたまま腰を下ろすと、膝に乗せてやんわりと唇を重ねた。

いつもより切羽詰まつた様なネコの舌使い…幾分熱をもつた唇は、少し塩辛い。

絡める舌も口腔内も、縋り付く躰も直ぐに熱を増し、息を上げたネコが潤んだ瞳で俺を見上げた。

「…柴さん…私…。」

「ネコ…お前は後悔しないのか？寂しさを紛らわす為に俺に抱かれて…それでいいのか？」

見合せた瞳が揺れて、ネコはスンと鼻を鳴らして俺の胸に顔を埋めた。

「…」めんなさい、柴さん…。」

「謝るな…わかつてゐから…。」

もう一度唇を重ねる…先程とは違い、穏やかな甘える様な柔らかな唇と息を呑み込むと、ネコは俺の頬に擦り寄り首に腕を回して囁いた。

「…好き…柴さん…大好き…。」

「…ナオ…。」

やがて腕の中で穏やかな息を立てて眠るネコを撫でながら、俺は日々と明ける朝焼けに溜め息をついた。

「ちょっと貴方…あの2階に住んでる女の子の、お知り合い?」

アパートの前で、俺は2人の中年女性から棘の有る声を掛けられた。

「そうですが、何か?」

「…あの子、どういう子なの?学校にも行つて無いみたいだけど?」

「独りで暮らしているみたいだけど、親御さんは?」

「事情があつて、親とは別に暮らしていますが、彼女はちやんと働いています。」

「実は私達…困つてゐるのよ…ねえ?」

「そう…何か…ねえ?」

「何か有りましたか?」

「いえね…実は…。」

「止めましょ?今日だつて、あんなモノ…報復されても怖いし…。」

「それもそうね…問題起こさない様に言つて貰える?頼んだわよ!」

何だと、慌てて退散する女達を訝しく思いながら、俺はアパートの外階段を上がつて行つた。

「よう。」

「柴さん…どうしたの?」

「休みだろ?昼飯でもどうかと思つてな…掃除か?」

玄関のドアを雑巾掛けしていたネコは、嬉しそうに笑いながらバケツの水を排水溝に流した。

「夕方からバイト入ってるから、それ迄ならいいよ？」

「夕方から？聞いてねえぞ。」

「紹介して貰つたの。ちゃんとした所だから、心配無いよ。」

「何の仕事だ？」

「ビルの掃除…あんまり大きくないビルなんだけど、オーナーさん

がいい人でね。紹介して貰つたの。」

「誰だ？」

「柴さんの知らない人…大丈夫、出版社の入ってる2フロア分だけ

なんだあ。働いてる人達もいい人ばっかりだよ！」

「…遅くに、そんな会社員が居る様な環境…若い女が危ないだらうが！？」

「大丈夫だつて…大丈夫な環境だからって、オーナーさん紹介してくれたの。それにオーナーさん女人の人だし…。」

「本当に大丈夫なのか？」

「心配性だなあ…、オーナーさんも同じフロアで仕事してるから、平氣だよ！」

ネコは遺る気満々な笑顔を見せて、ガツツポーズを決めた。

「そういえば、アパートで何か有つたか？」

「えつ！？」

「さつき下で、こここの住人らしきババア共が、何か言つてたが？」

「そう？別に何も無いよ。」

そう言つて、ネコは部屋に入った。

「何やつてるんだ、お前はつ！？」

曖昧な笑みを浮かべるネコを見下ろし、俺は真剣に怒つていた。

「大丈夫だつて…心配無いよ。私、若いしい。」

「そういう事言つてつから…。」

「…平氣だつて。」

エヘヘと笑いながら見上げたネコの目の下には隈が出来、足元もおぼつかない。

明け方の5時に帰宅したネコをアパートの前で捕まえて、強引に部屋の玄関を開けると、部屋のムツとした空気がドアから溢れた。

「お前…今、バイト幾つ掛け持ちしてる？」

ネコが何も答えずに窓を開けると、明るくなつて来た空の光と幾分涼しい空気が部屋に流込んだ。

「…幾つだ？」

「…4つ。」

「何だとつ！？」

「柴さん、声大つきいよ。」

「お前がデカくさせてんだろうがつ！？」

怒りの治まらない俺に、ネコは「めんなさい」と言いながら頃垂れた。

「何やつてんだよ、お前…躰壊しちまうだろ？が？」

「大丈夫、寝る時間も小まめに取つてるし…。」

「小まめにして…どんなスケジュールで…。」

ネコの部屋には、カラー・ボツクスと鉄也が家から持つて来た折り畳み式のテーブル、それにへたれたクッショングが一つきり…。

折角買つた布団も、母親が来た時に使わせようと、布団袋に入つたままだ。

本人はクッションを枕代わりに雑魚寝でしか眠らない…先日訪ねた折りには、靴も脱がずに玄関で倒れ込む様に寝ていた。

「… 僕前から昼過ぎ迄お蕎麦屋さんでしょ？ それから夕方迄がコンビニで… 夜中迄、ビルの掃除してえ… 朝迄が朝刊の広告差し込み…。」

「 賴むから… ネコ…。」

「え？」

目の前で正座しながら指折り数える手をグイと引き寄せ、驚いた様に口を見開くネコの唇を奪う。

「… 何…。」

突然の事に驚くネコが抵抗を見せるのを、俺は力付くで押さえ付けながら尚も唇を重ねる。

口腔内で絡める舌迄逃げようとするネコに、俺は思わず舌打ちをした。

「… 嫌あ… 柴さん…。」

「つるさいつ…！」

半泣きのネコを押し倒し、足を絡め上から覆い被さる。抱き締めた躰は痩せ細り、肋が浮き出でるのがわかる… 何故そんな無茶な生活をするのか…。

「… 馬鹿野郎が…。」

啜り泣き始めたネコの首筋に悪態を吐き、顔を埋める… 苛ついているのだ… 俺は…。

ネコの無茶なバイトと俺自身の仕事のサイクルが合わず、なかなか会う時間が取れない… 俺が明け方に待ち構えて捕まえない限り、顔を見る事も出来ずについた。

そして… どんなに誘つても、ネコは事務所に顔を出さなくなつてしまつたのだ。

真夏の暑さと湿度の高さ… 昼間に照り付ける太陽で煮えた屋根のせいで、閉め切つていた部屋は、窓を開けてもサウナの様だ。俺に組み敷かれ、とうとうしゃくりあげ始めたネコに、ぐつたりとのし掛かり俺は言った。

「… 事務所に戻ろう、ネコ… 暑くて死にそうだ…。」

泣いていたネコは、慌てて躰の下から抜け出ると、台所の流しで勢いよく水を流し始め、しばらくすると濡れタオルを2本持つて戻ってきた。

「大丈夫、柴さん！？」

「…ああ。」

ゴロリと仰向けになつた俺の額にタオルを乗せると、ネコは細い指で俺のシャツのボタンを外し始めた。

「どうするんだ？」

「ん…ちょっと顎上げて。」

言われた通りに顎を上げると、ヒヤリとした感触が首筋を覆う…そのまま頃、胸とネコは丹念に俺の躰をタオルで拭いていく。

「…気持ちいい。」

「そう？良かつた…。」

だが本当に気持ちいいのは、タオルを持つ反対のヒヤリとした手が、俺の素肌を撫でる様に異動する事だ。堪らずその手を引き寄せるが、今度は抵抗せずに俺の胸に躰を預けた。

「暑いって言つた癖に…。」

「なあ…夜と明け方のバイトだけでも、辞めれないか？」

「何で？時給いいんだよ？」

「…会えないだろうが。」

「ただけど…。」

「俺は、当たり前に夕飯を共にして、夜お前を腕の中に抱いて寝たいだけだ。」

「暑いって…。」

「夏の間だけでも、事務所に戻つて来い…此処じや熱中症になつちまう。」

「…。」

「お前、何で事務所に来るの嫌がるんだ？誰かに、何か言われたか？」

「…」

「…そんな事無いよ。」

眉の間を指で撫でてやりながら問うと、ネコは眠そうな声で答える。

「…事務所帰るぞ…今日は、抱いてでも連れ帰る…」

「何でえ？今日に限つて…。」

「眉の便で九州に飛ぶ。1週間程出張だつて、この前話したる？」

ネコは観念した様に、わかつたと言つて戸締まりをした。

事務所迄の短い道程を、腕を絡めて嬉しそうに甘えるネコに田を細めながら、入口の鍵を開ける。

途端に寝室から白いモノが飛び出して来て、俺の胸に抱き付いて来た。

「やあつと帰つて来たあ！！健司い、お帰りい～！！」

虚を付かれ、立ち竦む俺に対し、ネコは絡めた腕を振りほどき後ろに下がつた。

「あれえ～、ネコちゃん居たの？何してんのよお、そんな所で！？」

咎める様な口調の女に、ネコは何も言わずに俯いた。

「…何なんだ、お前？」

やつとの思いで言葉を発した俺に、女は己が身を俺に極ましく擦り寄せる。

「もう、やあだあ～健司つたら…自分が待つてろつて言つたんじやん！ねえ…さつきの続きい、早くしてよう…私もう焦れちゃつて待ちきれないよお～。もつ回してくれるんじょ～？」

素肌に俺のYシャツだけをまとつた姿でしなだれ掛かる女を見て、背後でボソリとネコが呟く。

「…何だ…そういう事か…。」

「えつ～？」

「…人が悪いなあ、柴さん……それならそいつと…言つてくれたら…。」

スルリと入口のドアをすり抜けるネコの後を、胸の女を引き剥がして追う。

「ナオつ！？待てつ、ナオつ！？」

階段の踊り場で追い付いて肩に手を置いた途端、ネコの躰が硬直し小刻みに震えているのが伝わる。

「……この為に……わざわざ事務所に呼んだの？」

「お前、何言つてる！？」

「こんな……見せ付ける様な事しなくても……一言……終りだつて……言つて……くれたら……。」

「いい加減にしろよ、お前つ！？俺の事が信じられねえのかつ！？」下から上がつて来る足音が止まり、不意に呼び掛けられる。

「総長？」

「鉄つ！？事務所の中の女、何とかしろつ！？」

鉄也は顔を歪めて、事務所に駆け上がつた。

俺はネコの肩を引き振り向かせると、俯く顔を覗き込む様にして問い合わせた。

「答える！俺の事が、信じられないか！？」

「……。」

「答える、ナオ！？」

俯いたまま肩を震わせて大粒の涙を流すネコを、覆い被さる様にして抱き締める。

「答えるよ、ナオ……。」

「……信じたい。」

「なら、俺の言葉だけ信じてろ……他に耳傾けてんじゃねえよ……。」

鉄也に連れ出された女が、悪態を吐きながら階段を下りて来る。

「全く！？何なのよ！？拾われた捨て猫の癖して、いつまでも甘えてんじや無いわよつ！？」

何も言わずに俺のシャツを握り締めるネコを庇つ様に女から距離を置くと、鉄也に引き摺られながら尚も女は捲し立てた。

「アンタとなんかじや、釣り合わないんだからつ！？…とつとと、田の前から消えて無くなつちまえばいいのよつ！…いつまでも田の前うろついてたら、新宿の街に沈めるわよつ！？」

「…テメエ…いい加減にしろよ…? 誰が、新宿の街に沈めるだつ
! ?」

ネコを抱く手を離し、鬪志を剥き出しにして女に掴み掛かるうどす
るのを、鉄也とネコが必死で止める。

「止めて、柴さん! もういいから…。」

「総長、相手は女です! !」

「…テメエ…そのシラ、俺の前に一度と見せんじゃ ねえぞつ! !?」

「何よ、いい子ぶつて…覚えてなさいよつ! !?」

捨て台詞を吐きながら階段を下りて行く女を憎々しげに見下ろし、
俺の腹に腕を回して背中に縋り付くネコの手をギュッと握った。

「…心配すんな。」

「…ウン。柴さん…私、帰る。」

「寄つて行かないか?」

「今…事務所行きたくない。」

腕を解き歩き始めるネコの躰が、いつもより一回り小さく心許なく
見える。

「ナオ…帰つたら引越すぞ。」「
え?」

「引越しだ…2人で暮らせる部屋に引越す…いいな?」

「柴…さん…?」

「アルバイトも…やりたかつたら毎晩だけに絞れ。わかつたか?」

「だつて…事務所から離れたら…柴さんだつて、みんなだつて不便
になるよ?」

「みんなつて誰の事だ! ? 鉄か! ? 自警団の奴等か! ?」

「…みんな…仲間の人達の迷惑に…なりたく無いよ。私は平氣だつ
て…今迄通りでいいよ…。」

寂しさを堪えた様な笑顔を見せるネコの躰を、今一度覆う様にして
抱き締める。

「…俺が堪らない…俺が我慢出来ない…わかれよ…それ位…。」

「で…誰なんだ、あの女…?」

「アキつて娘で…俺達の次の代のヘッドの…自警団の取りまとめをさせてますが、妹です。昔から我儘で…仲間の事も顎で使うんで困つて…。」

「何で、そんな奴に入り込まれてる…?」

「…父親が…佐久間のお身内なんです…」存知ありませんでしたか?」

「知るか、そんな事…!…」

鉄也は、やつぱりと溜め息を吐いた。

「ネコちゃん、半年程前から嫌がらせ受けっていた様で…まあ、あの娘に限つた事ではありませんが…。」

「嫌がらせ?」

「俺も気を付けていたんですが、結構激しかったみたいで…ネコちゃんが引越しを決めたのも、1つにはそれが要因だったと思われます。」

「何だと…? 何故言わなかつた!…?」

「絶対知らせ無いでくれと…泣かれました。仲間の結束を壊したく無いと…自分はよそ者として疎まれるのは慣れていると…。佐久間にいらっしゃる、母親の事も気にしてまして…。」

「何だつて…そんな事に…。」

「ネコちゃんの事件の折り、総長が掛かりきりになつていていた事に…不満を持つ仲間の居た事が発端でしうが、女柄みになつて来て…何というか俺達では踏み込めない雰囲気になつてきまして…。」

「はあ…?」

「そもそも…総長のお相手は、お京姐さんだと誰もが思つていた訳で…。」

「お京とは、そんな仲じやねえつて、散々言つて来たるひつが…?」

「しかし、一番身近な女性だった事は事実ですよね?」

「まあ…そうだが…。」

「そのお京姐さん公認で、しかも一緒に暮らし始めた…ネコちゃんが子供だという事もあって、最初はただ面倒見ているのかと…誰もが思つてました。」

「…。」

「その内に、総長の態度で、総長の女だと皆が気付いた。面白く無いと思つていた女達は多かつたと思ひますよ。お京姐さんには怖くて手を出せないが、ネコちゃんは子供で…しかも総長に告げ口する様な子では無かつた。」

「そんなに…酷かつたのか?」

「アパートに引越しして治まると思つてたんですが…アパートやバイト先にも嫌がらせされてたみたいで、何度もバイト先に迷惑を掛けられてクビになつてる筈です。」

「アソシ…一言もそんな事…。」

「言えなかつたんだと思ひます…子供の様で、気配りの出来る子ですから…。」

「鉄、出張している間…宜しく頼む。」

「ですが、自分も明日から東京を離れます。」

「いつまでだ?」

「今の所、5日間の予定です。」

「帰りは同じ頃か…仕方ないな。鉄、帰つたら俺は引越すから、そのつもりでいてくれ。」

「わかりました。必要なら、俺が事務所に引越ししますが?」

「それも含めて、帰つたら話し合おう。じゃあ、そろそろ行つて来る。」

「お気を付けて。」

事務所を出た俺は、そのまま機上の人間になつた。
まさか…そのままネコに会えなくなる等と…この時は微塵も考え無かつたのだ。

「いつから連絡が付かなくなつたんですか？」

「5日前だ…電話にもメールにも反応しない…！」

鉄も仕事で東京を離れ、京子も大きな事件で手が離せない状態が続き、俺が事務所に帰ると時を同じくして戻つた鉄也と2人で、ネコのアパートに向かつた。

妙な胸騒ぎと嫌な予感…何かがあつたと、刑事の頃の勘がピリピリと耳を襲う。

鍵穴に鍵を入れた途端、フツと手応えの軽いノブにゾワリと悪寒が走る。

「総長？」

ポケットからハンカチを出してノブを握る俺を、鉄也が訝しむ。ドアを開けた途端に流れ出す、凄まじい臭氣…。

「鉄…お前、下でパートカー来るの待つとけ。」

「総長！？」

「行けつ！！」

転がる様に駆け出す鉄也を見送り、俺は携帯を取り出した。

「お京、俺だ。今すぐ鑑識連れて、ネコの部屋迄来てくれ。」

「何があつたの！？」

「まだ確認して無いが…凄まじい腐敗臭がする。」

「わかつた、直ぐに行くわ！！」

消える

「酷でえ顔してるが、休めてるのか、健司？」

鉄也が入れた珈琲を啜りながら、兄貴が俺の顔を覗き込んだ。

「沙夜さんには？」

「言えるかよ…避暑地にバイトに行つてるつて事にした。連絡は、一切来てない様だ。」

「…そうか。」

「死体が出た訳じゃねえ…生きてるさ。身の危険を感じて、逃げ回つてるんだろうよ？逃げるのは得意技だし…今は夏だ…外で生活していたとしても、凍え死ぬ事も無い。」

「ああ…。」

氣の無い返事を返す俺を見詰め、兄貴は鉄也に話を振った。

「仕事の方は、大丈夫なのか？」

「一応、前から依頼があつた分に関しては、全て捌けました。今は、自分が回れそうな都内の小さな依頼のみ受けています。」

「済まねえな…当分使い物になりそうにねえし…宜しく頼むわ。」

「承知致しました。」

「所で健司、問い合わせて来たアキって娘だがな…。」

「何がわかつたか！？」

「チビ政の所の、戸越の妹の娘だと。」

チビ政とは、兄貴の組の本部長…その身内の姪という事か。

「チビ政が恐縮してなあ…沙夜の娘でも有るし、戸越の首持つて来そうな勢いだつたんだがな、俺が止めといた。チビ政と戸越が、お前の所に詫びに来るつていうのも、お前に殺されつから止めておけと言つといたぞ。」

「で、娘は？」

「結構なアバズレでな…遊び歩いてるらしくて、母親も行き先は知らないとよ。まあ、直に見付かる…ウチと警察、自警団も動いてん

だらうが？」

「…。」

「でもまあ、今回はお前が悪い…何故乃良の身分をちゃんと示してやらなかつた！？」

「身分つて？」

「お前が嫁に貰つ予定の女だと、皆に言つて置けば防げた話じゃねえのか？」

「それは…。」

「お前は自覚がねえのかも知れねえがな…組の中でも、お前の嫁にどうだつて話を持つて来る奴は、掃いて捨てる程居るんだ…特に正月からこつち、お前にロリコン趣味が有るつてんで、今迄諦めてた小学生の娘を持つ奴等からも話を持つて来られて、俺は大変なんだぜ！？」

「何だそれ…。」

「それだけ次期組長に望まれてるつてこつた。本物の身内になりたい奴はごまんと居る…娘達の方で暴走する今回の様なケースも、今後起きる可能性が有るつてこつた。ちゃんと公表した上で守つてやるんだな。」

「だが、本人はまだ…。」

「いいじやねえか？お前の気持ちが固まつてゐなら…乃良がどうしても嫌なら、お前が振られて終いになるだけの話だらうが？」

事も無げに言い切る兄貴を見ながら…呆気にとられながらも、俺は感動していた。

「俺達みたいな立場の人間はなあ…そつやつて、大事なモノ守つて行くしかねえんだよ。」

「ああ…。」

「何かあつたら連絡して來い。こつちも情報入つたら知らせるから…。」

兄貴はそつ言つと、颯爽と事務所を去つて行つた。

「失踪人届けは、きちんと受理されてたわ。」

「そうか。」

「放り込まれていた猫の死骸・死後5日って事は、12日に事件が起きたと考えていいみたいね。」

「事件になつたのか！？」

「一応ね…色々出て来たから。」

「…何が出た？」

京子は眉を潛め、俺を窺うとポツリと問う。

「柴…冷静に聞ける？元刑事として聞くか、ガイシャの縁者として聞くか…どつち？」

「大丈夫だ…元刑事として。」

「…わかつた。玄関のドアの鍵は壊されてたわ。土足で踏み込んだから、下足痕も取れた。ホシは、女1名を含めた4人組。1人はパンプス、残りはスニーカー痕だった。付近の聞き込みでそれらしい男女が目撃はされているけれど、身元もホシのかも不明。12日はお盆の初日で、下の部屋の住人も帰省していて無人だった。隣の住人は会社に泊まり込みで留守だつたそよ。隣の人の会社で、ネコちゃんバイトしてたつて知つてた？」

「いや、そうなのか？」

「ええ。夜に会社の掃除のバイトしてたらしいわ。12日も来る予定だつたのが連絡も無く休んだんで、携帯に連絡を入れたらしきけど、繋がらなかつたつて。」

「隣なら、家に訪ねなかつたのか？」

「出版会社でね…校了前で今も泊まり込んでいて、家には戻つて無いらしいわ。目撃証言もバツチリ。」

「そうか…続けてくれ。」

「聞き込みで、嫌がらせの話しもアパートの住人から出て来たわ。玄関前に煙草を吸いながら若者がたむろしていたり、生ゴミがぶちまけられたり…猫の死骸置かれて、玄関に血文字書かれた事もある

みたいよ？」

「…。」

「バイト先に大挙して押し掛けで、あの子のツケで飲み食いされたり、商品を滅茶苦茶にされてクビになつたりね。」

「…そつか。」

「部屋に散らばつてた洋服や布団を裂いたのは、鋭利な刃物であるのは間違ひ無い。猫の死骸から、多分ナイフだらうつて…それと…。」

「…何だ？」

京子は幾分顔を歪め、一息置いて話を続けた。

「血痕が見付かつたわ…畳と血染めのタオルが数本…調べた結果ガイシャの物と判明した。で、傷害事件に格上げになつたの。」

「怪我してるつて事か…。」

「それだけじゃない… 少量だけど肉片と体液、焼け焦げた跡が発見された。」

「体液？」

「主にはリンパ液… それらが発見されたのと同じ場所で、サラダ油の容器も発見された…。」

「焼かれた… つて事か！？」

「範囲は小さいけれど、多分間違ひ無い… 彼女、失禁してるのよ…。」

「…

「！？」

「…拷問… 受けたのかもしない…。そのまま拉致されたか、自ら消えたか… 銳意捜査中よ。」

「…続ける。」

腹の底から響く様な声に、京子は一瞬たじろいだ。

「…柴やバイト先の人にも確認して貰つたけど、ガイシャの荷物…いつも持ち歩いてたドラムバックから無くなつてているのは、財布と携帯電話、通帳と、多分印鑑も紛失してゐる。部屋からも見付からなかつたしね… バイト代を狙つての犯行つて線も上がつてはいるけれど…」

ど…怨恨が有力ね。本人が持ち出した線も捨て切れないけど…。」

「それなら、バックごと持つて行つてるだろ?」

「情報貰つたアキつて娘の行方と、連んでた仲間の身元と行方を洗い出してるわ。多分、族仲間の名前や自警団の連中の名前も上がる自警団の方には、聞き取りに刑事が向かうわ…いいわね?」

「ああ…徹底的にやつてくれ。」

「柴…大丈夫?」

「…お京…お前、気付いてたか?」

「虧めの話?」

「ああ…。」

「まあね…女の嫉妬は怖いから…。情が絡むと、女つて生き物は時に残酷な事も平気でやつてのける…私は昔から、ごまんと見てきたわ。」

「いつの間にか…寂しい顔してしか笑わなくなつてた…わかつてたのに…全く気付いてやれなかつた。」

「我慢強いのも考え方だわ…泣き言一つ言わなかつたんでしょう?」

「氣いばっかり遣いやがつて…。」

「鉄也から聞いたわ…2人で引越し予定だつたつて?」

「ずっとすれ違ひの生活してたしな…あの女の嘘の芝居で…俺が別れたい為の画策をしたと誤解された。」

「それで?」

「一緒に居られない事に…俺が堪えられないと…。」

「それ、ちゃんと伝えた?」

「ああ…。」

「そう…アンタ昔から言葉足らずだから…でも伝えたならいいわ。」

「これから、どうする事になつてる?」

「付近の病院には、治療に来る事を想定して連絡を入れてあるわ。後は、交友関係を洗い出してる。逃げ込める場所とかね…。」

「…お前、伊庭鈴つて知つてるか?」

「誰、それ?」

「向こうはお前の事を刑事だと知っていた。ネコは『リンさん』と呼んでいたが、新宿でバーを経営してると言っていた。」

「ああ…『Bell』のマスターね。知ってるけど…アンタ、会つた事有るの?」

「一度な…俺の甥と結婚すると言つていた。」

「嘘お…?聰さんつて、柴の身内…?」

「知らなかつたのか…佐久間の…兄貴の息子だ。」

「…世間つて…案外狭いわ。さつき話した、ネコちゃんのバイト先の出版社…夜の掃除してたつていう。」

「それがどうした?」

「私、そこの社長と飲み仲間でね…名前が上がつた時には驚いたんだけど…『Bell』は、彼女のビルの地下に有るのよ。」

数日後、俺と京子は『Bell』のカウンターに座つていた。

「申し訳ありません。」

鈴は俺の顔を見た途端、カウンターの中で頭を下げた。

静かにスタンダードジャズが流れる店内は、照明を幾分落としてあり大人の雰囲気を漂わせている。

店内の奥に広がるバー、カウンター、店の壁面をぐるりと巡らせたカウンター席。

中央には小さなソファー席が幾つか置かれ、そこかしこに置かれたモニターには、昔のハリウッド映画が無音で流されていた。

京子以外は全員男性客…それもその筈で、『Bell』は新宿ではちょっと知られたゲイバーなのだそうだ。

「…3日程、此處に居ました。」

「今は…?」

「わかりません…買い物出しに出でている間に、居なくなつてしまつて…。」

兎に角、ネコが生きている…しかも自分の意思で逃げている事がわ

かり、俺と京子は顔を見合させて安堵した。

「どういう状態だったか、教えて貰えるか？」

「…申し訳ありませんが…絶対に話さないと約束しましたので…。」

「怪我の具合は？」

「…命に係わる怪我では無いと思います…丸2日間は…高熱を出していましたが。」

要領を得ない鈴の答えに、苛々が募る。

「何故俺に連絡しなかつた!? 聴に聞けば、連絡先は知れたらうが？」

「約束したんです…それに、彼女の気持ちを考えると…貴方に一番知られたく無いだろうと判断しました。」

「リンさん…警察に来てもらつても駄目っ。」

「申し訳ありませんが、黙秘権行使させて頂きます。」

「そう…。」

その時カウンターの奥に続くバックヤードから、幽霊の様にフフフラと歩く女が出て来た。

「リン～、飯食わせて…ガツンと腹に溜まるヤツ～。」

「真、仕事終わったの？」

京子が、女に向かつて声を掛けた。

「…京子さん、来てたの? まだ駄目…今日で3日寝てないよ…口から魂が抜け出そう…。」

「大変ね…いつなの、校了明け?」

「上手くいけば、明日の夕方…ずれ込むだらうけど…明日中には終わる。そしたら飲もうよ?」

「そうね…疲れてる所悪いんだけど、紹介したい人がいるのよ。」

「なあによう…イイ男連れちゃつて…彼氏?」

「私のじゃないわ。ネコちゃんの彼氏。」

カウンター内のスツールに座り込み、死んだ様にカウンターに突つ伏していた女は、ガバリと起き上ると俺の顔をマジマジと見詰めた。

「嘘おつ！？マジ！？噂の柴さん！？…イイ男じゃない…じゃなくて、はじめまして！私、ラピュタ書房の天宮真です。」

「はじめまして、柴健司です。ナオが、お世話になつてていたそうでした。」

「いえ…」じゅうじゅう。ネコちゃん、まだ行方不明だそうで…、心配ですね。」

「その後、連絡ありませんか？」

「京子さんにも話したんですが…」じゅうじゅうには何も…。」

「…ですか。」

「あの…。」

真は、俺の顔を覗き込む様にカウンターから身を乗り出した。

「11日に…ネコちゃんが最後に来た日に、夜の掃除のバイト辞める事になるかもしけないって言つてたんです。何かあつたのって聞いたら、嬉しそうに笑つてたんですけど…関係あります？」

「あ…いえ…それは、関係無いと思います。」

「そうですか…まあ、嬉しそうにしてましたしね…。」

2人で暮らす部屋に引越す事を、ネコは受け入れて夜のバイトを辞めようとしていたのだ…。

鈴が出したパスタに手を付けながら、真は話し続ける。

「高い所が好きで、よくウチのビルの屋上に登つてました。何か少し…自分を見失つてたみたいで。」

「自分を見失う？」

「そう…大きな目標が無くなつて安心出来たのはいいけど、この先自分が何をしたらいいのか、わからないつて。」

「…。」

「貴方の事を好きなだけに、迷惑掛けなく無いつて…健気な子ですね？」

「そうよね…今時珍しいわ。」

「学歴も無いし、何をしたらいいのか全くわからないって言つから、何ならウチの会社手伝つてみる気ないかつて誘つたのよ。」

「掃除のバイト？」

「違う違う…出版の方。掃除は、出版の仕事がどういった物か、見
学がてらのバイトだったの。収入も入って、一石二鳥って喜んでた
んだけど…。」

「そうでしたか。」

「戻つて来たら、真剣に出版の仕事考えてみないかって聞いて貰え
ます？」

真はパスタを食べ終えて、ニヤリと笑つて見せた。

通話する

ネコの通帳から足が付き、新宿を徘徊している若者が2名逮捕され、彼等の証言で首謀者の戸越亞季と、自警団の北川悟の名前が上がった。

12日未明からネコが帰るのを待ち構え、帰つて鍵を開けた所を4名で進入、猫を殺害し部屋を荒らした後、北川を見張りに出して残りの3名でネコを脅したという。

「戸越亞季も、先日逮捕されたわ。北川は…現在に入院中よ。」

「どこか悪いのか？」

「精神を病んでるんだって。…戸越亞季に言われて、暗証番号の情報を得る為にネコちゃんの携帯を持っていたらしいんだけど、ネコちゃんが持つてるつて見せ掛ける為に、電源を切らずに管理してたんだつて。…その携帯の、毎日毎日鳴り響くホール音に…堪えられ無かつたそうよ。」

京子がチラリと俺を窺い、フンと鼻を鳴らした。

確かに、ネコが携帯を持っているかもしれないという思いから、日に何度も電話を鳴らした…留守録も何度も登録し、メールも何度も送つたかしれない。

「鑑識と捜査員が…呆れてたわよ…。」

「見たのか？」

「まあね…証拠品だし。でも柴の名義で借りてるし、生きてる携帯だから直に帰つて来るわ。」

「アキや他の仲間は、犯行を認めたのか？」

「それがね…家宅侵入や器物破損なんかは認めたんだけど、傷害をね…認めないのよ。」

「…誰かの、入知恵か？」

「…明察。若者の1人が、金持ちの馬鹿息子でね、親が少年法に強い弁護士を雇つたのよ。」

「… 肝心の被害者が居ないでは、当然討つて来る手だらうな。」

「警察としては、北川に吐かせたいんだけど… 話を聞ける状況じゃ無いのよね。」

「… そうか。」

手に持つたグラスが空になり、氷がカラーンと音を立てた。

「何か、胃に入れるものをご用意致しましょつか？」

鈴が新しいウイスキーの入ったグラスを差し出しながら、心配そうに声を掛けた。

「お願い出来る？」この馬鹿男、あれから酒量ばっかり増えちゃって、ネコちゃんが見付かる頃には肝硬変になつてないか心配なのよ…」

「かしこまりました。」

北川が事件に関与しているとわかつた時点で、俺は自警団と手を切る決心をして事務所も閉鎖した。

今迄見棄て切れずにいた仲間達の中にも、ネコを疎ましく思い、バイト先に乗り込んでいた若い奴等が居る事を鉄也が調べ出してきたからだ。

「今、何してんのよ？」

「新しい事務所の立ち上げ準備だ。」

「今度は、何するの？」

「調査事務所…。」

「探偵？」

「まあ、そんなもんだ。警察崩れなんて、潰しがきかねえもんだ。」

「S Pの話…断つたの？」

「連城さんの所のか？ガラじやねえだろ？S P兼運転手なんて…然も奥方のだぜ！？」

「…アソコなら安定してゐるのに…。」

「まあな…暇だらうつて、時折呼び出されて運転手してゐる。アソコの奥方も躰が悪いらしくて、主に病院の送迎だが。」

「物凄い美人だつて聞いたわ。」

「確かに…ハーフだろ、ありや。医師免許持つてゐる秘書が付き添

うんだが、そいつじゃ抱いて運べないってんで駆り出されてる。連城さんが居る時は、あの人抱いて運ぶらしい。」

「…それって、車椅子かストレッチャー替わりって事?」

「そうだな…偏愛してるからな。」

「…理解出来るんだ?」

「…今度の調査事務所も、出資を申し出てくれている。というか、連城さんはアソコの調査部として立ち上げたい意向なんだが…。」

「そりなんだ? イイ話じゃない! ? …つて、不満なの?」

「あのビルの中で事務所を持つて欲しいと言われてな…。」

「問題あるの?」

連城本人に不満は無い…彼の周囲の人間もかなり癖が強いが、連城と強い信頼関係に結ばれているのは、見ていて気持ちがいい。自分もその仲間に入る事に、憧れは感じるが…それにしても、住む世界が違うすぎる。

話を聞くと、連城は昔施設で育ち、大変な苦労の後に今的生活を手に入れたらしい。

歳の離れた奥方にしても苦労人という事で、金持ち特有の偉ぶった所等微塵も無い人物だ。

だが…あのビルの中は眩しすぎる。

ビルの中にある住居に鉄也と一緒に暮らしていたが、先日鉄也は堪え切れずに引越した。

「で、鉄也との蜜月は、終わりを迎えたって?」

「気色の悪い事言つな! 鉄が、堪えられないんだと。」

「あんなセキュリティのビルに、ハンバーガー買って帰れませんつて、涙目で訴えてたわ。」

「確かに…。」

「所でね、さつきの携帯電話だけビ…。」

「ネコのか?」

京子は、空になつた自分のグラスを鈴に渡しながら、俺に視線を送つた。

「アンタ、自分の携帯以外から掛けた事つて有る?」

「事務所から数回掛けたかもしれないが…殆ど携帯からだな。それ

がどうした?」

「ネコちゃんの携帯…最初の頃、公衆電話から数回掛かって来てるのよ。最近は、非通知の番号から時折掛かって来る。アンタの所に居た頃には無かつた事だから、少し気になつてね。」

「…お京、携帯いつ頃戻つて来る?」

「だから直に…。」

「出来るだけ早く返してくれ!」

「ナオ…ナオ、愛してる…戻つて来い、俺の腕に…。」

コツコツと2回、電話口を叩く音がする。

確信があつた訳では無い…ただ携帯電話を持つ様になつて、人は他人の電話番号を覚えなくなつたと依然何かの情報番組で見た事があった。

しかし、自分の番号だけは他人に尋ねられたり、書類に書く事も多いから覚えるものだ。

ネコの携帯電話が返却され、常に充電をフルの状態にして、その電話が鳴るのをひたすら待つた。

初めて掛かつて来た時には、興奮の余り捲し立て、電話の向こう側の物言わぬ相手に苛立つたが、最後に聞いた言葉の反応にネコだと確信した。

「…ナオ…ナオなのか?」

そう尋ねた途端、電話はブツリと切られた。

それから俺は、時折掛かつて来る電話を待つ様になつた。

変わらないのは、相手が一言も喋らない事…それでも俺の声を聞いて啜り泣く様に鼻を鳴らす相手に、ネコだと確信を強くしながら語り掛けた。

犯人が捕まつた事、皆が心配している事、事務所を閉鎖し新しい事

務所を立ち上げる準備をしていいる事、それに伴い引越しした事…。一方的な近況報告を、相手は黙つて聞いている…そして、堪らずに啜り泣くのだ。

対話をしたいといつ思いから、イエスなら1回、ノーなら2回、わからなければ3回電話口を叩くといつ合図を決めて、色々と質問をしてみた。

「ナオ…ナオなんだろ?」

少し躊躇する様な間の後、コツンと1回電話口を叩く音がした。それから色々と質問を重ねた結果、少しずつではあるがネ口の置かれた状況が把握されて来た。

躰は元気だが、声が出ない状態である事、誰かと共に暮らしている事、酷い扱いはされていないが、どこかわからない場所に監禁状態にある事…そして、逃げ出したいと思っているが、俺の元に戻る気が無い事…。

「何故だ?もう俺の事は嫌いになつちまつたか?」

コツコツと断続的に2回叩く音が響く。

「なら何故だ?お前を守つてやれなかつた事を…仲間達の仕打ちを許せないからか?」

再び、コツコツと2回叩く音がする。

「ナオ…言つたろう?俺がお前と離れる事に堪えられない、我慢出来ないつて。必ず見付け出す…だから、俺の元に帰つて来い!」

グスグスと鼻を啜りながらコツコツと2回叩かれる。

最後は、いつも同じ様な遣り取りが続くのだ。

「帰れない理由が有るんだな?」

躊躇の末にコツンと1回合図が送られた。

「俺が取り除いてやる…お前の不安な事、全て取り除いてやるから…ナオ…帰つて来るんだ!」

グスグスと鼻を啜りながら、荒い息遣いをするネ口に、俺は毎回懇願している。

「ナオ…ナオ…愛してる、結婚しよう…。」

何も合図の無いままに、いつもと同じ様に突然、ブツリと通話が切れた。

「携帯電話のキー局は青梅方面、奥多摩でしょうか。電波の届かないエリアも有るので、絞り込みが難しえですね。」

連城の個人事務所の所長室で、俺は秘書の山崎の報告を受けた。

「ありがとうございます。早速幸村に連絡して、青梅署に捜索の協力を要請して貰います。」

「その辺りで、1年近く監禁出来る施設を所有し、尚且つ監禁している人間に携帯電話を与えるなんていう醉狂な事をやつて退ける人物…一体どんな人物なんだかな?」

「興味がお有りですか、クローネ?」

「そうだな…。」

そう言いながら、連城はニヤリと笑つて俺を窺う。

「飛んで行きたい所だろうが…範囲が広過ぎて絞り込みが難しいだろう?」

「先ずは、周辺に別荘等を持つている人物、地元で大きな屋敷を持つ人物等の洗い出しを始めようと思つています。」

「そうだな…もうじき1年になるが、焦りは禁物だ。大事な事を見落とさない様に、慎重にな。」

「ありがとうございます、クローネ。」

俺は一礼すると、所長室を出た。

「リストアップは、済んだの?」

「一応はな。付近の聞き込みを掛けている最中だ。」

「そう…その後、電話は掛かつて来る?」

「このひと月程、掛かつて無い。」

「何かあつたのかしらね…。」

「..」

溜め息を吐く俺と京子を見て、隣に座った聰が心配そうに窺つた。

「溜め息は、吐く程に老け込むそうですよ？」

「アラ、それどういう意味！？私が、老けてるって事！？」

「そんな事は、ありませんよ。京子さんは、いつも溌剌としていてお若いじやありませんか？」

鈴が、熱り立つ京子をやんわりと宥めた。

「何騒いでるの？」

いつもの様にバックヤードから現れた真が、カウンターに座る面々に挨拶を交わした。

「見て欲しいモノって何なの、真？」

「そうそう、京子さん…西嶋康生って画家、知つてる？」

「ゴメン、そっち方面全く明るく無いのよ。」

「西嶋画伯は洋画家の大家で、若い頃には日展の総理大臣賞を取つた程の方ですよ。」

「詳しいのね、リンさん！？」

「鈴は、美大を出てるんですよ。」

聰が、柔らかな笑みを湛えて説明した。

「その西嶋画伯、つい先日亡くなつたのよ。で、今度遺作展をするつて聞いて、ウチの人間が取材に行つたの。」

「ゲイ雑誌で、美術特集！？」

「ああ～、馬鹿にして…ウチは元々はコミコニティ誌作つてたつて言つたでしょ！？今も細々と続けてるのよ！」

「ゴメン、ゴメン…。」

「話戻すね！その遺作展に出品される人物画に、今注目が集まつてるんだつて。」

「人物画？西嶋画伯は、風景画を好んで描かれていた筈ですが？確かに昔は、亡くなつた奥様を描いていたと聞いた事がありますが…。」

「鈴が不思議そうに、話に加わつた。」

「そちらしいわね…だから注目されるつて事。この1年程、1人の

女性をずっと描き続けて来たんだって…中には、連作も有るって話よ。」

「そんなに凄い事なのか？」

真や鈴の興奮する訳がわからず、俺は質問した。

「画家の大家が、今迄のスタイルを変えるつていうのは…普通考えられませんからね。価格的にも法外な値が付くでしょう。然も最晩年の作品となれば…幾ら位の価値が出るのかな?」

聰の説明を聞きながら、全く興味の無い俺はファンと聞き流そうとした。

「西嶋画伯のマネージメントをしていた息子が、画廊と結託して企画した展覧会らしいんだけど…どうも顧問弁護士と揉めてるみたいでさ。」

「何で?」

「それは、わからない。ただ、刷り上がつて来たばかりのチラシをウチの人間が持つて帰つて来たのを見て、驚いて連絡したのよ!」興奮する真が、俺達の前にチラシを置いた。

「見て、コレ!?」

若葉に埋もれる様な東屋に柔らかな光が降り注ぐ美しい画面に、白いドレスを来た若い女性が床に座り込みベンチに腕を乗せて俯せ、こちらを窺う様に顔を向けている。

その微睡む様な、泣いている様なアンニユイな表情に、瑞々しくもアンバランスな大人の色気を感じる…。

「……ナオ!?」

「やつぱり!…? ネ「ちゃんよね? 私もそうじやないかと思つて、連絡入れたの!」

カウンター内で興奮する真に、京子と聰が2人でストップを掛ける。「ちょっと待つて、似てるだけかもしねないでしょ?」

「それに写真じゃ無く油絵ですし、画家の想像の域を出ないので?」

その時、少し顔を強張らせた鈴が、俺を窺い静かに言つた。

「西嶋画伯は……潔癖な迄の写実主義の画家な筈です。ネロちゃんじや無にしてても、そつくりなモーテルが居るのは間違ひ無いでしょ。」

『西嶋康生遺作展』と銘打つた展覧会が、有楽町マリオンで開催されたのは、11月手前の土曜日だった。

SPの堀川が運転する連城専用の黒いセンチュリーで、連城と妻の椿と共に会場に赴いた。

「先ずは、一通り見て確認するべきだろう。柴、椿と一緒に回つて来るといい。俺は足止めを食うだらうからな。」

「承知致しました。」

俺の前に立つていた薄明るい髪の女性が振り返り、宜しくと微笑んだ。

「連城様、宜しければご案内致しましょうか？」

受付に控えていた、画廊の人間である案内嬢に付いて会場に入る。入口付近に展示してあるのは、少し前に描かれた作品だそうだ。秋の紅葉の美しい木立や、凍てつく風の感じられる様な冬の寒村。「何か物悲しい感じがするわね……。」

「15年前に奥様を亡くされてからの西嶋画伯の画風は、少し寂しいトーンの物が多かつたですね。」

次のベースには、優しい雰囲気の女性が微笑みを浮かべこちらを窺う人物画と、穏やかな色合いを好んで使われた風景画が並ぶ。

「こちらが奥様かしら?」

「はい……とてもお優しく、理解の有る方だつた様です。まだ無名だった頃の画伯の生活を支えていらしたそうで、その無理が祟つて躰を壊されたと窺っています。」

「優しい色に溢れてるわ……幸せな結婚生活をしてらしたのね……。」

絵を見入る椿の横顔に、思わず見とれる。

余り女性の顔をマジマジと見るのは失礼だと思つ……初対面でも無いのだが、目を奪わずにいられない美しさ……視線に気付かれ、椿にクスリと笑われた。

「…申し訳ありません。」

「いいの…慣れてるから。」

「絵は、詳しいんですか？」

「私は、以前広告代理店に勤めてたのよ。専門知識も何も無いんだけど、クリエイターの作る作品は結構見て来たの。絵やデザインを見るのが好きなのは、その影響かしらね？」

歩みを進めながら次のブースに進むと、案内嬢が少し興奮気味に説明する。

「ここから先が、今回初めて発表される、この1年に画伯が描かれた作品です。」

このブースだけ先程迄とは違い、人が溢れていた。

「これが、ポスター やチラシに使われていた絵ね？」

東屋に俯せる女性の30号の絵の回りには、人だかりが出来ていた。

「…綺麗…光が溢れて、浮き上がりつて来る様だわ…。」

チラシで見た時とは迫力が違う…俺は少し離れた位置で、田を細めた。

「どう、柴さん？」

椿の鳶色の瞳が、俺を窺う。

「…わかりません。少し離れてますし。」

案内嬢が、すかさず声を掛ける。

「あちらに、今回の目玉である連作がござります。100号の大作

ですでの、こちらよりは鑑賞しやすいと思いますよ。」

「1年で、かなりの作品数を作られたのですね？」

「そうなんです…画伯は最近、年に2作品程度と、なかなか描いて頂けなかつたのですが…余程モデルの方が気に入つたんでしょうね。亡くなつた時も、絵筆を握つたままだつたとか。」

「絵筆を握つたまま？」

「ええ…連作は本来4枚の予定で、描かれた順に『秋』『冬』『春』となりまして、画伯は最終作『夏』を描かれている時に倒れられたと聞いています。…こちらが、連作『四季』になります。」

描かれた順に秋から春迄の作品が並ぶ。

『秋』は、燃えるような落葉が舞う中を、右手を高く上げながら天を仰ぎ見る、横向きの白いドレスの女性。

『冬』は、白い布を被り、顔を半面だけ出した半透明の女性の後ろに、冬の雪景色が広がる。

『春』は、一面の花畠の中に、半裸の女性が俯せる様な構図で、横向きの顔の視線だけがこちらを窺っていた。

「…凄いわね…今迄と違つて、何か不思議な雰囲気。愛情と哀しみと、寂しさと…色々な感情が押し寄せて…胸が痛いわ。ね、柴さん？」

食い入る様に絵を見詰めていた俺は、しばらく椿の呼び掛けに気付かなかつた。

「このモデルさんは、プロの方なの？」

椿の質問に、案内嬢がいいえと微笑んだ。

「素人の方だと思いますよ。画廊のオーナーの話では『ある日突然天から舞い降りた』と、画伯が話されていたそうです。たしか、アトリエで一緒に暮らしていらっしゃるとか。

「何という方かしら? ウチのモデルをお願いしたいのだけど、調べて頂ける?」

「少しあ待ち頂けますか? 直ぐにお調べ致します。」

「それにしても、一枚も笑つている絵が無いのね?」

「…泣いています…どの絵も…。」

俺がポツリと呟くと、椿がポンポンと俺の腰を叩いた。

「何か、違和感が有るの…気にならない?」

「何がでしようか?」

「彼女の笑顔が無いのもそうだけど…この構図…ほら、これも…何かしら?」

会場に展示された絵は、小さな物も含めて油絵が6点、その他に風景のスケッチや、女性の全体像のデッサン、各パートのデッサン等がかなりの数展示されていた。

「意図的…みたいね。」

デッサンも詳しく見ていた椿が、俺に耳打ちした。

「彼女に間違ひ無い?」

「はい…間違いなく、ナオです。」

「そう…あのね、柴さん…。」

椿がそう言い掛けた時、先程の案内嬢が戻つて来た。

「お待たせ致しました。モデルの名前ですが、安寿さんと仰るそうです。」

「安寿?」

「ええ、画伯はそう呼んでいらしたとか…芸名なのかもしませんね。」

案内嬢がフフフと笑うのを見て、椿は合点がいった様に頷いた。
「成る程ね、『ある日突然天から舞い降りた』アンジュ…天使の事ね。彼女にコンタクト取れるかしら?」

「ポスターやチラシに掲載された後、問合せが頻りなのだそうです
が…画伯と一緒に暮らしていたという以外に、何も情報がありませ
ん。マネージメントをさせていた『ご子息の敏文氏が、顧問弁護士の
先生にお尋ね頂くのが良いと思いますよ。でも…。』

「何かあつたの?」

「こんな事は、申し上げてはいけ無いんですけど…先日からずっと
揉めていらして…。」

「あらあら…原因は?」

「何か、今回の遺作展も、顧問弁護士の先生が反対していらした様
で。先程、『ご主人様とご一緒にでしたので、詳しくは直接お尋ね頂け
ますか?』

「そうね、ありがとう。柴さん…もう少し鑑賞する?」

椿が気遣つたが、俺は襟を正して答えた。

「いえ、もう十分です。」

「なら、連城の所に戻りましょ。その顧問弁護士の先生が、まだ
いらっしゃるといいんだけど…。」

「こちらが西嶋画伯の顧問弁護士をしていらした、松原弁護士だ。これは妻の椿と、仕事のパートナーの柴健司です。」

互いの挨拶を済ますと、松原は苛ついた様子で連城に話を続けた。 「先程お話しした様に、相続人の許可無く遺作展をする事になつてしまつて…敏文氏は、当然の様に自分が相続人で有ると主張されし、遺作展が決まつたのは遺言書の公開前だつた訳で…。」 訳がわからず聞いていた椿が、連城を見上げた。

「何の話なの？」

「描かれていた人物は？」

「間違ひ無く、彼女だそつよ。今は、安寿と呼ばれてるそつだけど…。」

「そうか…柴、今回の遺作展に展示された彼女の絵…油絵もデッサンも、彼女を描いた全ての絵は、モデルである安寿こと、音戸乃良に相続されるらしい。」

「何ですつて！？」

俺と松原は、同時に声を上げた。

「彼女の名前、判明したんですか！？間違ひ無いんでしょうか！？」

「その確認の為にも、彼女に会わせて頂けますか、松原さん？」

「わかりました…敏文氏とも相談し、早々にご返事致します。」

「その折りには、私は彼女の弁護士という立場で立ち会わせて頂きましよう。松原さんも、西嶋画伯の顧問弁護士という立場上、その方が宜しいでしちう？」

「是非、お願ひ致します。私は西嶋家側の立場ですし、何かと難しくて。彼女の取つた行動で、敏文氏も態度を硬化しているのです。」

「ナオが、何かしたんですか？」

「連作である『四季』の最終作…完成間近の『夏』を、彼女は切り裂いたんだそうだ。」

呆気に取られる俺と椿を見て、連城は苦笑いしながら言い、引き続

いて松原が説明した。

「勿論、勝手にという訳ではありません。画伯が、自らパレットナイフを彼女に手渡され、『好きにして構わない』と仰つたのです。その場に、私も敏文氏も居りましたので、間違ひ無いのですが…。」

「何か、問題が…？」

「西嶋画伯の作品といえば、それだけでも凄い価値だ。然も最晩年の作品で連作となれば…少なく見積もつても、億は下らない。」

「画伯は、海外でも高い評価を受けています。現存している作品の取引額を考えると、法外な値が付くでしょう。然も彼女が描かれた作品は皆…画伯の代表作になり得る程の物です！！既に問合せも多数来ているというのに…。」

「彼女は、全て燃やしてしまいたい意向らしいぞ？」

「はあ…？」

「考えられません…確かに彼女が相続るべき物ですが…あの作品は皆、文化遺産だ…それを…。」

松原は、頭を抱えて溜め息を吐いた。

「松原先生、少しお尋ねしたいのですが…。」

椿が柔らかな笑みを湛えて、松原に話し掛けた。

「モデルの安寿さん、何か…障害が有るのではありますか？」

途端に、松原の顔が曇る。

「声が出ないのは、承知しています…その他に…何か有るのですか…？」

俺は、松原と椿の顔を見比べた。

「作品の…デッサンも全て…顔の左側半面と、左手首から先だけは、どこを探しても描かれていませんでした。敢えて避けていた…そうですよね？」

椿の言葉に顔を歪める松原を見て、俺は封印してしまいたい記憶を思い出した。

「…傷か…火傷の痕か…？」

観念した様な松原は、目線を斜め下に向けたまま語り出した。

「画伯が彼女を拾つたのは、昨年の夏です。彼女は…画伯の乗つていた車に、文字通り落ちて來たのです。」

「落ちて來た？」

「歩道橋から…飛び降りて。」

「自殺未遂かつ！？」

頷いた松原は、顔を伏せたまま話を続けた。

「その時の怪我は大した事は無い、打ち身と擦り傷だけでした。それでも驚かれた画伯は、氣を失つた彼女をアトリエに連れて帰られた。目覚めた彼女を見て、画伯は再び驚かれたのです…物言えぬ彼女の左手は…火傷を負つて開かれぬ状態でした。それに彼女は左頬に…。」

息を殺して聞き入つっていた俺は、堪らずに低く唸る様な声で松原を脅した。

「…どうだといふんだ！？」

「…左…頬に… 10センチ程の… 刃物で切られた傷が…。」

「畜生っ！！」

拳を握り締め、何度も己の足を殴り付ける。

その様子を見て、松原が恐る恐る連城を窺つた。

「彼は、そのモデルの安寿…音戸乃良の恋人で…婚約者です。」

目を見張る松原に、連城は言つた。

「彼女は未成年で、搜索願いが出されている。西嶋画伯は…彼女を監禁していたのではありませんか？」

「… そうとも言えるでしょ。搜索願いの件は知りませんでしたが、画伯が彼女の魅力に取り付かれてしまつたのは事実です。画伯は…ご自分の寿命をご存知でした。その命の灯の消える間際に、創作意欲を掻き立てるモデルに出会つた…だから彼女を安寿と呼んで、命を削つて彼女の絵を描き続けたのです。しかし、彼女は嫌がつた…アトリエに居る事も…何より自分を描かれる事を極端に嫌がつた結果、彼女は囚われの天使になつてしまつて…あの作品は、画伯の偏執的な愛の結晶です。だから、画伯は彼女にあの作品達を贈つた

のですよ。」「

「…そんな…勝手な……そんな理由で、1年以上拘束したといふの
か！？」

俺がギリギリと奥歯を噛み締めるのを、松原は申し訳なさそうに窺
つた。

「松原さん、捜索願いが出てる理由は、彼女が家出しているばか
りでは無い…彼女が障害事件の被害者だからです。もしこれ以上彼
女を拘束したり、彼女の身柄を隠したりした場合、貴方や敏文氏だ
けでなく、西嶋画伯も事件に関与されたと疑われます。呉々もその
事、敏文氏に釘を刺して置いて頂きましょう。」

「わかりました。」

「お伺いする時には、警察関係者も同行をさせて頂きます。宜しいで
すね？」

「承知致しました。敏文氏と相談の上、早急にお返事致します。」

松原は俺達に一礼すると、そそくと会場を後にした。

「良く気付いたな、椿。」

連城が、椿の髪をクシャリと撫でて微笑んだ。

「構図に違和感があつたから、確認したの。可哀想に…若い女の子
が傷なんて、辛いでしょうに…。」

「柴、幸村刑事に連絡しておけ。」

「了解致しました。」

見付ける

青梅署のパトカーに先導されて、新宿署の京子達の乗った車、連城の車と、3台が連なつて青梅街道をひた走る。

「綺麗ですね。やはり、この辺りは下界より時期が早いのかなあ？」助手席に座る七海が、のんびりとした声を上げた。

奥多摩に入ると、辺りは色付き始めた紅葉が益々美しさを増して来たが、俺には車窓の景色等を楽しむ余裕は無かつた。

「緊張してるのか？」

不意にそう尋ねられ、咄嗟に言葉に詰まる。

「堀川に運転を任せて正解だつたな。」

「全くです。柴に任せて、事故でも起こされでは堪りません。」

クックツと笑う連城の言葉に、運転中の堀川が憮然と答える。警視庁警備部出身のこの先輩と仕事を共にしたことは無いが、政府の要人や海外からのVIPの警護を担当し、何度も修羅場を潜り抜けて来たベテランだつた筈だ。

「…申し訳ありません。」

「先ずは、本人確認だ。それから、俺を弁護士として承認させなければな…。今、幾つだ？」

「17です…あと数日で、18になります。」

「17歳は…女の厄年なのか？」

「違いますよ、クローネ。女性の厄は、19、33、37歳だった筈ですよ。」

助手席から七海が振り向いて笑った。

「…気にし過ぎです。それより、見えて来ました。あの鉄柵の向こう側が、西嶋画伯のアトリエとして使われている別荘の敷地だそうです。」

先頭のパトカーが、門番の男に話すると、大きな扉がギギギーという音を立てて開かれた。

「広大な敷地ですね……何でも旧華族の別邸を、そのまま使っているそうですよ。」

吸い込まれた3台の車は、敷地の木立を通り抜け、大きな洋館の前に止まつた。

「随分と…先客がいる様ですね。」

屋敷の前にすらりと停められた乗用車を見て、連城は眉を潜めた。車を降り立つた俺に向かい、京子が目配せをする。

「新宿署生活安全課少年係の幸村と申します。西嶋敏文さんは、ご在宅ですか？」

玄関に出て来た使用人に付いて、俺達はゾロゾロと広間に入つた。

「又か…お前達は一番最後だ！大人しく待つてろ！！！」

「全く…どこから聞き付けて来たんだか…一体何人やつて来るんだ！？」

「何の話ですか？西嶋敏文さん、若しくは松原弁護士はいらっしゃいませんか？」

広間の先客達は、苛立つて言葉を返す。

「だから、安寿の所だよ！！お前達も、大人しく順番待ちしてろ！！」

「順番待ち？」

眉間に皺を寄せた連城は、先客に鋭い視線を投げた。

「…だから…彼女の相続する絵を…取引きしようど…。」

踵を返す連城の背中に、広間の男達の声が縋る。

「おっ、おいつ！？」

「警察です。」

京子が男達に警察証を提示すると、男達は目を見張り追撃を止めた。使用者の案内で彼女の部屋に着くと、連城は俺と2人だけで先に入る許可を京子に取り、ドアをノックし入室した。

「松原さん、これはどういう事です！？」

「連城さん、いい所に…。」

「誰だ、お前！？」

中に居た男達はベッドを取り囲み、俯せて寝ている女に詰め寄っていた。

「弁護士の連城と申します。」

「ああ、松原さんの言つてた…。」

「西嶋敏文さんですね？扉の向こうに、刑事が話を窺いたいと来ていますよ。」

「何だ、もう来たのか…面倒だな。」

敏文はそう言つて、案外と素直に退室した。

「貴方も出て頂こう…！」

「しかし、私はまだ交渉の最中で…。」

小太りの画商は、汗を拭きながら粘つたが、連城がひと睨みするとコソコソと鼠の様に退散した。

「しばらく、この部屋には誰も近付け無いで下さい。」「わかりました。」

そう言つて松原も退室した後、連城は俺に囁いた。

「1時間で、説得出来るか？」「

俺が無言で頷くと、肩を叩いて一やりと笑つた。

「何かあつたら、電話しろ。」

背後でパタンとドアの閉まる音がして、俺は静かにベッドに近付いた。

俯せて枕を抱き込む様にして顔を埋める女性の隣に座ると、ベッドの軋む音と共に女性の躰に緊張が走つた。

「…ナオ。」

ビクリと彼女の躰が痙攣し、小刻みに震え出す。

緩いウエーブの掛かつた柔らかい髪を掻き上げ、クシャリと頭を撫でて遣りながら再び声を掛けた。

「ナオ…迎えに来た。…顔を見せてくれないのか？」

枕に顔を埋めたまま被りを振るネコの肩に手を置き、背中にゆっくりと覆い被さる。

「…ナオ…。」

「……嫌あ。」

「お前…話せる様になつたのか…?」

「…嫌だ…会いたく無いって…合図したのに…」

愚図るネコの背中に腕を回し、やんわりと抱き込む。

「俺の事、嫌いになつて無いって…まだ好きだつて、合図したうつ

?」

「でもつ…会いたく無い…。」

「何故?」

「…もう…好きでいて貰えない…。」

「ナオ…。」

「…捨てられるの…やだから…逃げてたのに…。」

「捨てる訳無いだろ?が…!…惚れてるつて、愛してるつつたるつ
!?」

「もう駄目なんだもんつ…!」

ハツキリと拒否するネコを力一杯抱き締めて、耳許で囁く。

「傷の事なんて…俺は何とも思つて無い…。」

途端にガクガクと震え出したネコは、唸り声を上げながら叫び出した。

「ナオ…ナオ…落ち着け、大丈夫だから…。」

「ヤダつ…!…ヤダつ…!…中も外もグチャグチャで汚くて醜くて…絵
と一緒に燃やしちゃえればいい…!…私もつ、あの絵もつ…!…みんな
燃えて灰になっちゃえつ…!…」

悲痛な叫び声を上げ続けるネコを、無理矢理仰向けにすると、その
左頬にはベッタリと布製のガムテープが張られ、左腕には包帯がグ
ルグル巻きにしてある。

「しつかりしろ、ナオ!…?」

田の焦点が合わず泣き叫ぶネコに舌打ちをし、強引に唇を合わせると下唇を強かに噛まれた。

暴れるネコを押さえ込み、合わせた唇の鉄の味が口腔内に広がると、
ネコはやっと力を抜き始め舌の侵入を許した…ゆっくりと味わい尽

くす様に舌を絡めると、怯える様におずおずと応える。

どの位の時間そうやつていたのか…ようやく頬が離れた時、ネコはハウと溜め息を吐き、毒氣を抜かれた様な表情を見せた。

「何だ？キスだけで達つちまつたのか？1年3ヶ月ぶりだからな。

「…柴さん…瘦せた？」

トロンとした目を細め、右手で俺の頬を撫でながら尋ねられる。

「…そうかもな。」

「何か…違う人みたい…スーツにネクタイなんて…髪型も…。

「そうか？お前も…大人になつた…。」

「…」じめん、柴さん。」

「全くだ！…どんだけ心配したと思つてる…？」

「…」じめんなさい。」

「約束も破つたろうが！？」

「約束？」

「歩道橋から…飛び降りたつて…。」

「何で知つて…。」

「約束したろつ！？」

「だつて…もう絶対駄目だつて思つて…何も考えられなかつたんだもん。」

再び涙を流してしゃくじ上げ出したネコに再び覆い被さり、耳許に馬鹿野郎と囁いた。

「済まない、ナオ…この傷は俺の罪だ。」

「…違うよ、柴さん。」

「俺が、お前に負わせたも一緒なんだ…許してくれ。」

「…柴さん。」

「なあ…責任取らせるよ…。」

頬に貼られたガムテープの上からキスを落しながら囁くと、

「…いいつて…傷見て無いからそんな事言えるんだよ。」

「…むすがる。」

「…こんな物貼つてたら、被れちまうだろ？が…？」

「…」

「いいよ…どうせグチャグチャになつたつて、どうして事無い…。」

「お前、いい加減にしろよつ！？」

俺が本氣で怒りを表すと、ネコはピクリと固まつて怯えた。

「お前…俺が、お前の容姿だけに惚れたと想つてんのか！？馬鹿にするんじゃねえぞつ！…」

「……だつて…。」

「だつてもヘチマもねえ…！それに…全部寄越せつたろ…？」

「……言つた。」

「じゃあ、お前の躰は俺の物だ…粗末に扱うんじゃねえよ…。」

「…」めんなさい。」

「わかりやいい。」

そう言つて顔中にキスを降らす。

「少し…熱っぽいな？」

「…そうかも。」

「風邪か？」

「…違うと思つ。」

曖昧な笑みを浮かべるネコに、俺は眉を潜めた。

「何だ！？ちゃんと言えよ！」

ネコは黙つて、俺に包帯を巻いた左腕を差し出した。

慌てて包帯をほどくと、左手は熱を持ち、腕迄赤黒く腫れ上がつていた。

「医者に診て貰わなかつたのか！？」

「診て貰つたけど…手術しなきやいけないって。画家のおじいさん、時間が無かつたんだよ。だから…。」

「クソつ！…」

俺は携帯を取りだし、連城に連絡を入れた。

「あ…。」

ネコは、その携帯に釘付けになり、通話が終わつた途端に俺から取り上げた。

「コレ…付けてくれたんだ…。」

嬉しそうにストラップを撫でながら、頬擦りをする。

「ああ… そういえば、お前の携帯には、付いて無かつたな。」

「持つてるよ、ちゃんと。」

ネコが嬉しそうに答えた時、ノックの音がした。

部屋に招き入れた連城と七海の姿を見て、ネコは途端にガクガクと震え出し、その様子を見た連城は眉を潜めた。

「柴、抱いて安心させてやれ。」

連城が声を掛け、俺は慌ててネコの躰を抱き込んで言った。

「安心しろ、この人達はお前を守ってくれる。」

「初めてまして、僕は医者の七海です。ちょっと腕を診せて貰う?..」震えるネコが頷くのを確認し、七海は左手と腕を診ると、連城に向かって首を振った。

「かなり化膿してますね… フレグモーネです。多分掌の傷から来るんだと思うんですが。」

「フレグモーネ?」

「蜂窩織炎(ばいわせきえん)と言つて、進展性の化膿性炎症の事です。普通は1、2週間の抗生物質の投与で済むんですが、ここ迄ないと入院を余儀無くされるでしょうね。掌も… 愈着してますし。多分、爪で表皮を傷付けてるんだと思いますよ。痛くて寝れなかつたんじゃない?」

ネコは俺の胸に縋り付き、不安気に見上げて言つた。

「手、切り取っちゃう?」

「心配するな、手術すれば治るから。」

「治らなくともいいから… 中の物だけ綺麗なままで取れる?..」

「お前、又そんな事…。」

「中つて? 何か握つてるの?」

ネコは何も答えず、照れた様な笑みを見せた。

「ナオ、こちから弁護士の連城さんだ。神の家からお前を助ける時にもお世話になつた。」

「そなんだ… ありがとうございました。」

「今回も、お前の弁護士としてお願いする事にした。」

「何の？」

「君の相続する、西嶋画伯の遺産について… 松原弁護士に聞いた。この屋敷も君の相続に入ってるそうだな？」

「そうなんですか！？」

俺は、驚いてネコを見下ろした。

「松原弁護士に確認した。この広大な別荘の敷地、建物と家財や美術品一切、彼女が描かれている絵と『テツサン… 一体幾らになるんだか…』ざつと見積もつても30億は下らんだろう。」

「それは凄いですね… 敏文氏が躍起になるのもわかる。」

七海が感心した様に言うと、ネコは事も無げに言つてのけた。

「いらないよ、こんな家…。」

「放棄するのか？」

連城が方眉を上げてネコに尋ねながら、俺の顔を窺つた。

「ナオ、落ち着いて… ゆっくり考えた方がいい。」

「柴さん、欲しい？ 欲しいなら、柴さんに上げる。」

「そういう問題じや無い…。」

困つて連城を見上げると、口端を上げて楽しそうに様子を窺つていた。

「君は、借金があつたんじや無かつたか？」

「あ… そう！ 柴さんのお兄さんに上げたらい…！？」

「ナオ、だから… 繼ら何でも払い過ぎだ。」

「直ぐに決める必要は無い… その為に私が居るんだ。」

「わかりました… でも、一つだけお願ひしたいです。」

「何かな？」

「絵は… 全部欲しいの。全部焼いちゃいたい…！」

「油絵も、『テツサンも？』

「下絵も、切り裂いた『夏』も、全部焼きたい…！」

その話を初めて聞いた七海が、驚いて声を上げた。

「凄い価値が有るんだよ？ 文化遺産なのに…。」

「みんなそう言うの… 全国で展示会するとか、海外に持つて行くと

か。美術館や画商の人達が沢山来て……嫌なの……あんな汚い絵……誰にも見られたくないのに……！」

「……ナオ。」

ネコは俺の胸に縋り付いて、再び泣き始めた。

「クローネ、鷹栖に連れて行つた方が宜しいですね？」

「そうだな……連絡してくれ。」

「承知致しました。」

七海が退室すると、連城はベッドの横にしゃがみ込んで、ネコの頭を揉む様に撫でた。

「君の気持ちはわかつた。取敢えず、私に任せてくれるか？悪い様にはしないから。」

ネコは、俺の胸に顔を埋めたまま頷いた。

「ナオ……お京も来ている。会えるか？」

やっと顔を上げると、ネコは笑つた。

諦める

鷹栖総合病院の一般病室、カーテンに囲まれたベッドでネコは静かに寝息を立てている。

西嶋画伯のアトリエからネコを連れ帰り、そのまま入院し手術をするに当たり、6日前から沙夜が娘の面倒を見ていた。しかし今朝病院から連絡が入ったのだ…沙夜が倒れ、ネコが暴れています…。

慌てて病院に駆け付けた俺は、担当医師に説明を求めたが要領を得ない。

ただ、当初入っていた個室を母親に明け渡し、自分は直ぐに退院をすると言うのを、武蔵が宥めずかして一般病室に入れたらしい。鎮静剤を打たれて眠るネコの枕元には、手術の承諾書が置いてある。同意者の欄には、既に沙夜の名前と住所が書かれてあった。

しかし…患者本人の欄は空白のままだ。

左頬のガムテープは綺麗に取られ、今はガーゼが貼られていた。
「さて困った…どうした物かねえ…？」

此処に来る前に立ち寄った精神科のカウンセリングルームで、武蔵は溜め息を吐いた。

「退院するって、一体どういう事ですか！？」

「担当医が、不用意な事言つたらしくてね。沙夜さんが倒れた責任を感じたんだろうが…物凄い勢いで怒り出したんだ。いや、本当に申し訳無い…。それにしてもね…ちょっと困つてるんだよ。」

「何がですか？」

「入院当初は、人を怖がるもの、相続する絵を醜い物として認識するのも、傷を受けられた事から来る、PTSDだと思つてたんだけどね…。」

「違うんですか？」

「確かにそれも有るんだよ…絵を醜いと思い込んで、燃やしてしま

いたいと思つてゐるのは、そなうなんううけどね…。沙夜さんに会わせたのは…不味かつたかなあ？」

「どういう事です！？」

「あの母娘、関係性が複雑だから…母親の想いを受け止める、あの娘は自分の辛さも想いも全て飲み込んで諦めてしまう。然も相続の件は…金錢的な事が絡むから、医者は立ち入れない領分だしね。「相続の件、何か言つてたんですか？」

「全て放棄するつて言つてた…沙夜さんに何か言われたのかもしないね。」

「…そうですか。」

「何かに、追い込まれてゐる様でね…手術も嫌がつてゐるし、目が離せないかな…。」

俺はその瞬間、背筋が凍り付いた。
ネコの睫毛が微かに動き、ゆっくりと瞼が開く。

「ナオ…気付いたか？」

「…柴さん…何で…仕事は？」

「大丈夫だ。」

「…嘘…武蔵先生に呼び出された？」

「気にするな。」

「気にするに決まつてゐ…！」

「ナオ…。」

「…『じめんなさい。』

カーテンの外から、咳払いが聞こえる…面会時間前に特別に入室を許可されて、他の患者は迷惑しているのだろう。

「…柴さん、外に行こつか？」

「お前、躰は平気なのか？」

「平氣だよ…多分。」

そつ言うとネコはベッドを降りて、他の患者の目を逃れスルリと廊下に逃げる。

そして、自動販売機で飲物をねだりながら窓の外を眺め、天気がい

いから屋上に行こうと誘つた。

「気持ちいいね…でもあそこは、空気の匂いが違う。建物も車も…人もいっぱい居るからかな？」

「…何があった？」

屋上の一級高くなつた段差の上に腰掛けたネコは、ウーンと伸びをして、ゴロリと上半身を倒した。

「武藏先生に聞いたんでしょ？」

「詳しく話せよ。」

「…担当の先生が、お母さんの事…虧めたの。」

「虧めた？」

「手術の為の検査してたら、結果があんまり良く無かつたらしくてね…路上生活してたからしがないのに…先生、お母さんの事を責めるんだよ。何でこんなになる迄放つといったんだつて…監督不行き廻しがだつてや。」

「…。」

「…お母さん、ずっと先生に謝るんだあ。お母さんが悪い訳じゃ無いのに『申し訳ありません』ってずっと謝り続けて…お母さん、倒れちゃつた。」

「だから怒つたのか？」

「…お母さん、何も悪くない…悪いの私なのに…あんなお母さんの姿、見たく無いよ。」

ネコは遠い瞳で青空を見詰めて、まるで他人事の様に吐いた。

「私、お母さんの事も…柴さんの事も…迷惑掛けばっかりだね…。」

「ナオ？」

「私さあ、物知らずだから…知らなかつたんだけどさ。遺産つて相続すると、お金掛かるんだつて。あの屋敷なんていらない。敏文つて人、お金に困つてるつて…本宅は借金で取られちゃうつてさ。」

「抵当に入つてるつて事か？」

「何か、そんな事言つてた。画家のおじいさんの絵も売つてたみた

いで、よく親子喧嘩してたから……だからおじこやん、私に呉れる気になつたんぢやない?」

「やうだつたのか……。」

「でも、絵もね……貰ううとお金掛かるんだつて。燃やしたいだけなのにね……。」

「いいのか、お前……あんなに嫌がつてたのに。諦めるのか?」

「払えないよ……凄い金額になるんだつて。それに連城さんにも、お金払わなきやいけないし、此処の支払いも有るし……又頑張つて働くよ。」

「ちょっと待て!/?弁護料や入院費は、俺が……。」

「嫌だよ、柴さん。」

「何故!/?」

「ネコは話しながら、一切俺に手を合わせなかつた。」

「お母さんの入院費は、柴さんのお兄さんでお願いするね。お兄さん……お母さんと結婚するんでしょ?」

「……。」

「お兄さんなら、お母さんの事お願いしても安心だしね……お母さんも幸せになれると思つうんだ。お互に、好きみたいだし。」

「お前、自分の事は……俺達の事は、どうするつもりだ!/?」

「お母さんわあ……。」

ネコはスンと鼻を鳴らし、皿を締めた。

「私が近くに居ると……幸せになれないんだよ。ずっと、ごめんねつて……私に遠慮して、お父さんの事死なせたのも、自分だつて責めてる。神の家の事も、病気の事も……私の傷の事も、自分のせいだつて思つてゐる。それに、今迄お兄さんと結婚しなかつたのも、私の為でしょ?ずっと我慢してさ……。」

「ナオ……我慢してるのは、兄貴や沙夜さんだけじゃ無い……わかつてるだろ?うがー?」

「柴さんもさ……私に拘つてから、気持ちザワザワして落ち着かなくて……仲間の人達とも別れちやつて……迷惑掛けばっかりでごめん

ね。

「ナオ！？」

ネコはチラリと俺を見て、寂しそうに笑つた。

「お母さんに聞いたの……『神の女』って、昔は巫女だつたんだって。昔から神様の声を聞いたり、『氣』を操つて病氣を治したり、占いしてたんだつてさ。」

「それがどうした？」

「私ね……見える様になつたの。神から帰つてから、色々な物に流れれる『氣』が見える……人や物や、森羅万象の『氣』が見えるの。人に流れれる『氣』位なら、操ることも出来る。」

「……え？」

「『氣』つてね、それぞ違うの……色も濃さも、強さも違う。柴さんは、白くてサラサラして……とても強いの。渾々と溢れてて……とっても綺麗。」

目を細めながら、ネコは憧れを込めた視線を寄越し、直ぐに寂しそうに俯いた。

「『氣』を操る者は、強い『氣』を発するモノに引寄せられるんだつて。……私が……柴さんと一緒に居たつて思ったのも……本当は『氣』に引寄せられたのかもしれないって思つたらさ……何か凄く悲しくて、申し訳無くて……惨めでさ……一緒に……居られないって思つたの……。」

「そうと決まつた訳じやないだろう！？」

「吸い取るんだつて……何かさ……蛭とか……寄生虫みたいで……気持ち悪いよね。……気持ち悪いの……もう無くなつちやえればいいよ……このまま空に溶けちやえればいい。そしたら、あの絵だつて見ずに済むし……」

「

俺は慌ててネコの腕を掴むと、屋上の出入口に向かつて歩き出した。

「痛いよ、柴さん！」

「病室に……いや、カウンセリングルームに行くぞ！……」

「柴さん、私狂つた訳じやないよ！？」

「そんな事は、わかつてん！……今は、お前を1人にしたくないだけ

だつ！！

半ば叱り付ける様にしてネコを引き摺り、精神科のカウンセリングルームで武蔵に説明をしてネコを預けると、俺はその足で沙夜の病室を訪ねた。

「お待ちしてました。」

沙夜はベッドの上に座ると、開口一番でそう言つた。

「乃良に、お聞きになつたのね？」

「貴女は…何故、ナオが不安になる様な事ばかり吹き込むのですか！？ナオは、貴女の娘でしょう！？」

「だから…言わなくてはなりません。あの子に伝えて遣れるのは、私しかいないので。それに、今なら貴方がいらっしゃる…貴方があの子を支えて下さるでしょう？」

「逆効果だ…ナオは貴女の話を聞いて、俺から離れようとしています！！」

「それは…それはいけません！！あの子は田覚めてしまつた…神降ろしは成功し、あの子は巫女になつてしまつたのに…」

「一体、何を話したんです！？」

俺が一通りネコの話をした事を伝えると、沙夜はハラハラと涙を流しながら振りを振つた。

「違います！…そんな積もりで話したのではありません！！知つて置かなくては…あの子の命に係わる事だから…。」

「どういう事です！？」

「私の祖母は、とても強い力を持つ巫女でした。しかし母は普通の…少し『氣』を感じる程度の『神の女』でしか無かつた。母は自分に無い力に…祖母の力に強い憧れを持ち、独自に古い文献等を色々と調べ研究していました。父が『神の女』に拘つたのは、多分に母の影響が強かつたのです。やがて兄が生まれて…母は落胆しました。男に力は宿らない…ましてや次に女が生まれたとしても、力は削がれているだらうと。実際、私にも母と同様の力しか授からなかつたのです。」

「ナオには？」

「あの子の力が強いのは… 乃良の小さな頃から予感していました。だから逃げる様に言つたのです。もしも力が発動してしまつたら、乃良は死んでしまつかもしません。」

「何故です！？」

「強い力は大量の『氣』を消費します。ですから代々『神の女』には、『氣』を補充する者が付き従つていました。小柄な乃良自身の『氣』は、決して大きな物では無い。しかし大きな力を持つ巫女には、大きな慈悲の心が宿ると言います… 弱つているモノに、自然と力を放出してしまつ。」

「そんな…。」

「あの子は、今迄も人からの『氣』を吸収せず、自然界の『氣』を吸収し生活して來た… だから、貴方を選んだのかもしません。貴方の『氣』は、とても強く清浄ですから。」

「どうやつて『えればいいのです！？』

「同じ空間に居ても『えれる事は出来ますが、触れ合つ事が一番でしょうね。『神の女』と床を共にすると、運気が上がり幸運が訪れるという話を聞いた事はありませんか？』

「以前、兄がその様な事を… しかし…。」

「強ち、間違ひでは無いのですよ。『神の女』は、房中術が出来るのです。」

「房中術？」

「身体を強健にし、生命力を高め、身心に潜在する力を開発し、不老長生、智慧の果を得て、運命を超克する事を可能とする…。」

「不老長寿という事ですか！？」

「普通の性行為とは一線を画するのですが、そつとは知らぬ方々が多くて困ります。ともあれ『神の女』は、『玉女採戦』が出来るのです。」

「何ですか、それは？」

「本来、互いの『氣』を巡らせ交わりを持たせるのが房中術なので

すが、片方が一方的に『氣』を『与える』『玉女採戦』が出来るのです。しかし、奪われる側は体をひどく損ねてしまつ……だから、補う為に強い『氣』を持った男達から『与えて貰つて』いたのです。』

「房中術で？」

「そうなりますね……一番確実で、多くの氣を巡らせ注ぎ込む事が出来ます。」

「しかし……。」

「まだ……交わりを持たれていませんね？それどころか、触れるのも儘ならない……というか、あの子は貴方の『氣』を受け取る事を……拒んでいる様ですね。」

「わかるのですか？」

「私には、読み取る位しか出来ません。乃良の中に貴方の『氣』は少ししか感じられない……でも、貴方の中には感じるのです。乃良は……貴方に施術を行つてていたのでしょうか。」

「えつ！？」

「躰が楽になつたり、軽く感じたり……具合が悪いのが、突然平氣になつたりした事が……乃良と暮らし始めて、そんな経験はありませんか？」

「……それは。」

「無意識に施術していたのかもしれません……貴方が近くに居るならそれも良いでしょ。しかし、離れるなら……乃良は命を削る事になります。慈悲の心が強いだけに、何とかしてやりたいと命を削ります。然も『氣』が弱れば、己が病になり心も弱る……人は癒せても、自分に対しては何も出来ません……与えて枯れるだけの存在なのです！」

「そんな……。」

「健司さん、どうか……あの子の手を離さないでやつて下さい……！」
沙夜は悲痛な叫びを上げて、俺に取り縋つた。

受け入れる

カウンセリングルームに戻ると、一人で珈琲を飲んでいた武藏が俺に向かつてカップを上げた。

「飲むかい？」

「ナオは？」

武藏は珈琲を注ぎながら、黙つて奥の部屋の椅子を指差した。

「リラクゼーションシアでね…風の音を聞いている。」

「風の音？」

「人にはね、それぞれ心地好いと思われる音が有るんだよ。心象風景に繋がりがある場合が多いんだけど、乃良ちゃんの場合は風の音…風が葉を揺らす音が、心地好いと感じるみたいだね。」

「路上で生活していた時も、よく木に登つていたそうですから。」

「成る程ね…この間迄、自然の中で生活していたのも有るのかな？」

…面白い話をしてくれたよ？」

「何ですか？」

「西嶋画伯の畠を、治したつて…。」

「えつ…？」

「症状を聞いたら、多分白内障だね。画伯は癌で余命1年だと知つていた様で、死ぬ前に思いきり絵が描きたいと願つたらしい。畠を治したら、喜んで彼女を描き始めたらしいんだけど、それは乃良ちゃんには有り難迷惑だったみたいだね。」

「…信じますか？」

「僕も一応医者だから…科学的で無いものは信じない積りなんだけどね。」

そう言つて、ニヤリと武藏が笑う。

「彼女が言つたんだ。『武藏先生は、どいつも悪くないから治せない。』って…それで、慢性の肩凝りを治して貰つた。」

「…どうでした？」

「連れて帰りたい位だよ。」

アハハと武蔵は笑い、急に真面目な顔になつた。

「無闇矢鱈と人に見せてはいけないと、釘を刺して置いたよ。利用されてしまいかねないからね。」

「施術は、ナオの命を削る事になりかねません。」

「それは…申し訳無かつたかな。疲れてそうだつたから、あつちに座らせたんだけどね。」

俺は隣室に置いてある、スピーカーの内蔵された細長く黒い繭の様な椅子に近付いた。

膝の上に置かれた右手に触れ、そのヒヤリとした冷たさに驚く。

「…柴さん？」

薄つすらと目を開けるネコの頬をスルリと撫で、そのまま顎の下を撫でると、ネコは俺の手の甲に頬を寄せながら右手を差し出し、顔を近付けた俺の首に腕を回して引寄せた。

「…柴さんだつたんだね…。」

スピーカーから流れる風が葉を揺らす音…「じ」か懐かしいその音と、ネコの心臓の音が重なり心地好い。

ネコの手がスルスルと首から下りると、俺の背中を優しく撫でる。

「…私の…好きだった公園の人。柴さん、気付いてたんでしょ？」
ドキリとした…だがそれ以上に、その何とも言えない心地好い感覚に蕩けそうになりながら、床に膝を付きネコの腰に腕を回しその華奢な躰に縋つた。

「…ああ。」

「やつぱり馬鹿だね、私…何でもつと早くに気付かなかつたのかな…こんなに近くに居たのに…。」

それはしようがないんだ、ネコ…何でも屋を始めてからは、スース等着る機会は殆ど無かつたのだから。

「躰…大事にしてね、柴さん。」

「…ん？」

「煙草…程々にして…お酒も…飲み過ぎちゃ…駄目だ…よ…。」

「え！？」

俺の背中を撫でていた手が、ストンと落ちる。心なしかゆつくりとなつたネコの心臓の音に思わず顔を上げると、浅く喘ぐ様な息をする蒼白い顔。

「…[冗談じやねえぞ…おいつ！？ナオつ！？】

抱き起こすと、力を無くしちゃりとなつた躰が腕に沿つ。

「どうかした？」

武蔵が顔を出し、眉を寄せた。

「ベツド…個室無いか、先生！？今すぐ『気』を送り込んでやらな
いと、コイツ死んじまつ…！」

「『気』を送り込むつて…ビツヤつて…？」

「房中術つて言ひらしいが…抱いてやるのが一番らしい。そこまで
じや無いにしても、抱き締めてやるひにも、今の相部屋じや何も出
来ねえ…！」

「房中術つて…。」

驚き目を丸くする武蔵の前で、俺はネコを抱き起こすと唇を覆つた。
しかしネコは歯を食い縛つたまま、微かに首を振る。

「受け入れろ、ナオ！？俺の『気』じゃ不満だつていうのか！？」
薄く目を開けると、悲し気な眼差しを送るネコに、俺は叫び続けた。
「許さねえぞ、ナオ！？俺が…どんだけ待つたか、お前ちつとも
わかつちゃいねえだろ！？2人で暮らすんじゃ無かつたのか！なあ
つ、ナオ！？答えろつ…！」

「…い…ば…。」

喘ぐ様な息を吐き、瞳を潤ませたネコが俺を見上げる。

「許さねえ…お前は俺のモノだ！…金輪際離さねえからな！？」

無理矢理顎を抉じ開けて舌を浸入させ、どうすれば良いのかもわからぬままに、想いだけを溢れさせ、まるで蹂躪する様な口付けを
えた。

ネコが白い喉を仰げ反らせゴクリと嚥下する毎に、その蒼白い顔色
に色が差す。

「…部屋の確保が出来た。連れて来れるかい？」

武藏が背後から、遠慮がちに声を掛けて来た。

ネコを抱き上げて、本館病棟の最上階、一番奥の『マルーム』とプレーントの掛かる部屋に武藏と共にに入る。

「此処は？」

「ああ、身内がね…入院する時に使う特別室なんだ。個室は一杯だつたし…此処ならベッドも大きいし、2台あるしね…。」

まるでホテルのスイートルームの様なその部屋は、以前沙夜が入っていた部屋とは比べ物にならない位に豪華でゆつたりとしていた。

「いいんですか、お身内用でしょ？』

少し臆して尋ねると、武藏は何を今更と言う様にニヤリと笑つた。

ネコをベッドに寝かせると、武藏は様子を窺つ様に脈を取つた。

「本当に、大丈夫なんだね？」

「その筈です。」

「確かに、さつきよりは安定してるが…様子がおかしくなつたら、直ぐにナースコールするんだよ？それと…此処は病院だつて事を忘れない様にね。まあ…外に音が漏れる心配は無いけど…。」

「ありがとうございます。迷惑掛け序でに、ナオの母親に来て貰えないですかね？」

「止めた方がいい…乃良ちゃんの為にね。」

武藏は眉を寄せるとネコを見下ろし、溜め息を吐いた。

「この子には、親離れが必要だ…普通の親に依存する様な物じゃなくてね。精神的に…独立した人間としての幸せを歩ませないと…自らつて物が無いだろ？」

「人の為にばかり動いてます。自分は何をしたらいいかもわからず、悩んでいたらしいんですけど…。」

「じっくり考える時間を与えてやればいい。それまでは、君の庇護の下で甘えさせてやればいいんだ。本来は、甘えん坊なんだと思うよ…時々、凄く人恋しい素振りを見せる。我慢してるんだろうねえ。」

「

「… そうですね。」

「明日は9時に回診に来るよ。食事は後で差し入れる。一応人払いさせておくから。」

「申し訳ありません。」

「連城夫妻も、以前この部屋に入院してたんだよ… 色々あって、今幸せを手に入れたんだ、あの2人もね。」

そう言って、武蔵はニンマリと笑った。

「… ナオ…。」

覆い被さる様にして何度も口付けても、ネコは眉を寄せながら本気で『氣』を受け入れ無い。

浅い息を繰返し、グッタリとするネコを田の前に、このまま『氣』を送り込むのが良いのか、医療的な施術を行うべきなのか判断に迷う。

しかし、もし医療的な施術を選べば、俺が直接『氣』を注ぎ込むのは難しくなるだろう。

此処は『氣』を充满させた上で、医師に引き継ぐべきだ… その為には、可及的速やかに『氣』を送り込む必要がある…。

「ナオ… 聞いてくれ。今から、お前を抱くから。」

ネコは、ぼんやりと俺を見上げながらも、微かに歎きを振った。

「これしか方法が無い！ 房中術とつて、これがお前に『氣』を送り込む一番確実な方法なんだ。本来なら… お前が受け入れる迄待つ積りだつたが…。」

そう言いながら俺は自分の上着を脱ぎネクタイを引き抜くと、素早くシャツを脱ぎ捨て、ネコのパジャマを脱がせた。

「… 済まない、ナオ…。」

華奢な躰に覆い被さるのとすると、俺の胸に手を付いてネコが抵抗する。

「ナオ… 仕方無いんだ、堪えてくれ。」

「……や……や……だ……。」

「ナオ、お前を助ける為だ！」

「……やつ……や……やだ。」

「ナオ！？」

ネコの膝に分け入り、自分のベルトに手を掛けると、その力チャチャヤという音に、ネコは全身を震わせて怯えた。

「……ナオ……愛してる。お前の為だ、受け入れてくれ……。」

何も言わずに涙を流し、ただ震えて見上げるネコの瞳を見て、俺は背筋が凍り付く程ゾツとした。

それは、いつも俺を見上げる信頼と愛情を湛えるものでは無く……ただ強姦魔に襲われて、恐怖に怯える少女の瞳だつたからだ。こんな状態で躰を重ねて……本当に房中術が成功するのか？ ネコの信頼を裏切り、一度と触れ合う事も、言葉を交わす事も出来ず、今度こそ本当に姿を消してしまうんじゃ無いのか！？

「畜生っ！……どうすればいいんだっ！？」

俺はネコの胸に崩れ落ち、その身を搔き抱いて叫んだ。

「何故だ！？何故受け取らない！？お前が死んで、誰が喜ぶってんだ……何でそんな風に考える？」

薄い胸が、短く上下しながら震えている。

「お前が死んでも、誰も幸せになんてならない……沙夜さんも……俺も……生きて行けない……！」

言葉尻が震え、思わずネコの胸に顔を押し付ける。ネコの右手が俺の頭を撫で、指が髪を撫で梳いた。

「俺を置いて行くな！お前は、俺を捨てるのか！？」

「……そんな事。」

「有るだろう？俺はお前を捨てようと思った事等、ただの一度も無いぞ！？捨てるのは……お前だ、ナオ……お前が、いつも俺を置いて行く……。」

髪を撫で梳く指が、ピクリと止まった。

「俺も連れて行け……お前の行く所に……これ以上離れるのは、堪えら

れ無い……。」

「……泣かないで。」

「……泣いて無い。」

「胸が……熱いよ……濡れてる……。」

物心着いてから泣いた記憶なんて無い……極道の子と揶揄されても、母親の手前泣く事は出来なかつた。

父親譲りの体格と強面で恐れられ、肉親の死にすら涙する事を我慢して來たというのに……。

「私……柴さん……苦しめてる?」

「ああ……凄く苦しい……。」

「「めんなさい……やつぱり、私……。」

「違う……俺が苦しいのは、お前が俺から逃げるからだ……何故わからぬい!」?

「……迷惑掛けたく無い。」

「迷惑なんて思つて無い! それに、迷惑を掛けられているのは、お前の方だらう? 榎から逃げる事を強要され、俺の事で傷付けられて……。」

「平気だよ、そんな事……。」

ぐるりと寝返りを打ち、身を丸める様にして横向きに縮こまるネコを、俺は背中から抱き寄せる。

「平気じゃ無い……お前は自覚が無いかもしないがな、お前はとも傷付き易く弱い……だから、毎回トラブルが有ると逃げ出していたんだらうが?」

腕の中で、ネコが益々身を丸くする。

「弱い癖に我慢して、身も心もボロボロにして壊れちまつてゐ……俺が、放つとけると思つてゐのか! ? 弱い奴はな、ナオ……強い奴に護らせろ! ! 俺が護る……一生護つてやるから。」

俺は、ネコを撫でながら頬に貼られたガーゼに手を翳した。

「傷、見せる……ナオ……。」

「嫌だ。」

「お前、」の傷付けられた時、奴等に何か言われたろ？」

ピクリとネコの躰が痙攣する。

「俺から離れる、新宿から出て行けって言われたのか？」

「クンと頷きブルリと震えながら、ネコはキュッと瞼を閉じた。

「他には？何言われた？」

「……相応しく無いって……こんな醜い傷……もつ、柴さん……私の事撫でてくれないって……」

そつとガーゼを貼つたテープを剥がす……ネコは小刻みに震え、身を固くして俺の腕に爪を立てた。

目尻の下、頬骨辺りから真っ直ぐに下ろされたナイフの痕……10センチはあるその傷は、薄暗い部屋の中でもハッキリとわかる。

既に傷が塞がつているにも係わらず鮮やかで……艶かしい程の紅い傷。

「……良かつた……思つた程酷く無い……」

そう言いながら、傷に口付けを降らしながら舐めてやると、薄つすらと皿を開けたネコが躰の緊張を解く。

「……ホント？」

「ああ……それより、ガーゼはもう貼るな……テープの痕が被れてる。」

水蜜桃の様な頬を舐めると、ヒクンと肩が揺れた。

「肌、弱いんだな……敏感で……」

「……柴さん……駄目え。」

カクカクと震えながら甘い息を上げるネコに、俺は驚いて身を起こした。

「どうした、ナオー？」

「駄目え……そんな……一気に流し込んだら……。」

「えつ？」

潤んだ瞳で見上げるネコが、恍惚とした表情を浮かべて喘ぐ。

「いやあ……溢れちゃう……。」

「全く、お前は……反則だつて言つたろ？！」

氣を許した途端に『氣』を受け入れたのか、首に腕を回し艶かしい声を上げ続け、ネコは俺の腕の中で果てた。

手術する

久々に夢を見た……夢の中で、何故か俺は大きな白い獣で……ある日、人間から供物と共に、貢物として1人の少女を献上された。白い着物を着せられ祭壇に座られた少女は、俺の姿を見上げると驚いた様に目を丸くした。

今迄献上されて来た女達は、ここで皆泣き叫び逃げ惑つ……だから鬱陶しくて皆食つてやつた。

だが少女は違つた……『大きい』と言って笑つたのだ。

変な奴だと思ったが、泣き叫ばなかつた褒美に、その場に捨て置いた。

しかし2日経つても3日経つても、少女は祭壇の上に座り続ける。

5日目、気になつて仕方がない俺は、とうとう堪らずに声を掛けた。

「何をしている？」

「ぬしさま主様を待つてた。」

「何故？」

「主様の所に行けと言われた。」

「何故逃げぬ？折角捨て置いてやつたものを……。」

「逃げる場所も、帰る場所も無い。」

「変わつた奴め……名は？」

「無い。」

「何だと？」

「私は捨て子故、名を付けてくれる親も無い。籠に乗せられ川に流されたのを拾われた故、村人は皆好きな様に私を呼ぶ。」

「アと溜め息を吐き、その小さな少女を見下ろした。

ぞんざいな口をきくが、真つ直ぐに俺を見詰める目が気に入った。

「儂と共に来るか？」

「どこに？」

「山の上じや。」

「主様の家か?」

「家…とは呼べぬが、住処じやな。」

「行く!」

そう言つて、少女は嬉しそうに笑つた。

「それでは、お前に名を付けてやろう。お前の名は…。」

ブラインド越しに射し込む朝の光が、柔らかに病室を照らす。

俺は、腕の中で息衝くネコのしなやかな躰を、今一度抱き込んだ。どれだけこの時を待ち焦がれただろう…この躰を腕に取り戻す為に、この2年近く悶々とした日を送り続けて来たのだ。

なのに、この小悪魔ときたら…。

昨夜も、あのまま俺の首に腕を回し、艶かしい声を上げ続けて果ててしまつた。

その色香たるや…絶対に誰にも見せたく無い。

思い切りこぢらを欲情させておいて、満たされてさつと幸せそうな寝息を立てる。

ネコがキスをしたり、愛撫を施すと眠くなるのは、多分『氣』が満たされるからだろう…とすると、これから的生活に支障は無いのか

!?

それとも、自覚の問題なのだろうか?

一人前の気配りを見せ、震い付きとなる様な色香を漂わせる癖に天然で、考えたり行動したりする時には、中学生並みだつたりするこのアンバランスな少女に…首つたけなのだからしようがない。頬に走る傷痕をネロリと舐めると、夢の中の獣になつた様な心地がした。

あの少女はネコだ…あの後、少女と獣はどうなつたのだろう?

舌で辿る肌の感覚が心地好い…何となく甘く感じるのは気のせいかな?

そういうえば、度々結婚を申込んでいるが…昨夜も答えてはくれなか

つた。

焦り過ぎなのは重々承知しているが、ネコが16歳の時からプロポーズしているのだ。

嬉しいと言しながら引き延ばされ、自殺を考えて断られ、今又受け入れて貰えた気がする…だが、例え断られ様と、今度こそ離す気は無いのだ。

あの楼閣の様なビルは、指紋認証と掌型、静脈認証が無ければ入り込めないし、出る事も不可能だ。

いざとなつたら、あのビルの自室に閉じ込めて…。

「…柴さん…くすぐつたいよ。」

腕の中で、ネコが肩を竦めてむずがる。

「何してるの?」

「…舐めてた。」

「何で?」

「甘い様な気がして…。」

「変なの…夢の続きだと思つたよ。」

「夢の?」

「…大きな白い…神様に舐めて貰つてる夢…。いつもの夢だよ…。」

「神様? 獣か?」

「知つてるの?…あの昔話…悲しいから、あんまり好きじや無い。」

「どんな話だ?」

「好きじや無いの…馬鹿な女の子の話。ヒシリでさ…此処、ヒシリ? 病院…だよね?」

「覚えて無いのか!?」

「何か…ほんやりして…屋上から、武蔵先生の所に行つたよね?」

「そこから先は?」

「ん…あんまり…でも、駄々漏れしてる柴さんが、山の神様に見えた…だから、あの夢見たんだよ…きっと。」

「そう言って、ネコは笑つた。」

「駄々漏れつて、お前…。」

「今も、漏れてるよ…凄いねえ…。」

そつ言いながら、いきなり俺の顎をペロリと舐めると舌舐めずりをする。

全く、コイツは…。

「お前…今の状況、わかっちゃいねえだろ?」

「何が?」

「俺とお前は、今ビリビリ状況に居る?」

「え?」

「マツパで誘うなつたるうが!?」

ギヨツとして口をへの字に曲げて俺を睨んだネコは、次の瞬間ニヤツと笑い、自分だって舐めてた癖にと俺の胸に抱き付いた。

「今だけ…柴さんの胸で寝るの久し振りだし…柴さん、凄くいい匂いするし…。」

「匂い?」

「うん…何か甘い様な匂い…駄々漏れだから?光ってるし…。」

「『氣』が、匂つたり光つたりするのか?」

「わかんないけど…多分。」

スリスリと胸に頬を擦り寄せ、見上げたネコの顎を捉えて口付ける。歯列をなぞり、口腔内に舌を深入させると、ネコの小さな舌が俺を迎えた。

おずおずと絡める毎に、腕に抱く体がほんわりと熱を持ち力が抜ける。

腰を強く引寄せると、甘い呻きを漏らすネコの頬に手を触れた時、それは突然に起こった。

いきなり顔を離すと体を硬直させ、目を見開き酷く怯えた表情を見せ…次の瞬間的目を伏せて視線を泳がせた。

「ナオ…。」

「…何でも無い…。」

熱を孕もうとしていた体は、冷水を被った様に冷たくなり、緊張を解こうとしない。

堪らずに抱き締める俺に向かって、ネコは憐り抵抗を試みる。

「何でも無いたら！」

「ナオ…武藏先生のカウンセリングを受けよ。」

「必要無い！」

「心が悲鳴上げてる…わからないか？」

「平気だつて言つた！」

優しく抱き込み、時間を掛けて髪と背中を撫でてやり、緊張を解く。

「武藏先生の部屋に行つたら、珈琲飲ませてくれるんだろ？？」

「…ん。」

「あの黒い椅子で、風の音聞くの好きだり？？」

「…好き。」

「じゃあ、ナオの好きな事だけすればいい…話したく無ければ、話さなくていいんだ。」

「…ん、わかつた。」

撫でられて、幾分トロロンとしたネコの頬を舐めてやると、ネコは嫌がる素振りも見せず、ゆっくりと目を閉じた。

「手術だけは、受けよう、ナオ。」

「…手術？左手の？…私、別に…。」

「受けろ…受けってくれ、手術。俺の為に、受けくれないか？」

「柴さん…又舐めてる。」

「あ…舐めるのは、怖くないんだろ？」

「…うん。」

「元々は動物は、舐める事で愛情表現を行つて来たからな…人間が撫でると、同じ行為だから…。」

「…そつ…か…そつ…だね。」

「ナオ…それより。」

「わかつた…受けるよ、手術。」

「やつと同意してくれたんだ、良かつたよ。」

朝の回診時にネコの荷物を持って来た武藏は、引き続いJの部屋を
使う様に言つた。

何でもネコの使つていた相部屋のベッドは、新たな入院患者で埋ま
つてしまつたそうだ。

病院側の都合だから個室料は必要無いこと嘗ひの武藏に、ネコは何度も
何度も念を押して確認していた。

手術の同意書にサインをさせてナースステーションに提出すると、
訪れていた武藏が笑顔を見せた。

「さつさき、音戸沙夜さんの所に行つて来たよ。佐久間さん…君のお
兄さんにも会つた。」

「来てたんですか。」

「そつくりだね…まるで、君達を見てるみたいだつたよ。」

「それは…。」

「しばらぐ、乃良ちゃんに会つのは控えてくれと頼んだら、泣かれ
てね…佐久間さんが居てくれて助かつた。」

「そうですか…。」

「佐久間さんが、全て心得たと…此方から用が有る時には、弟に連
絡を入れる伝えて欲しいつて言われたよ。沙夜さんの事は心配す
るなつて…素敵な人だね。」

「極道ですがね。」

「いや…何か、大人の器の大きさを見せ付けられたつていうか…正
直そういう職業の人は、もっと横柄だと思つたから。沙夜さんに
対しても、細やかというか…。」

「昔から艶福家で、女の扱いには慣れてますし…それに、ベタ惚れ
してますからね。」

「やつぱり似てる…」

武藏はゲラゲラと笑い、羨ましいと散々冷やかした。

「乃良ちゃんの担当医は替えたから、安心して手術に臨んで下さい
つて伝えて上げて。そうだ…事前の検査で撮つたレントゲン見たん
だけど、やつぱり何か握つてるね。」

「何でした？」

「わからない……何か細長い様な不規則な形の物だね。検査の度に、綺麗に取り出して欲しいって……自分の手よりも、そっちを優先して欲しい旨要望が出てるんだよ。何だかわかるかい？」

「いえ……」

3日後、ネコの手術は行われた。

傷付けられた時の再現にならない様な配慮から、特別に全身麻酔で手術は行われた。

手術中、心配して手術室の前で待機していた沙夜は、無事に成功した事に安堵して、呉々も娘を頼むと言い残し佐久間の家に帰つて行つた。

麻酔が覚めた後病室に戻り、再び寝入つたネコの枕元には、先程形成外科の医師が持参したガーゼにくるまれた物が置いて有る。

「癒着も少なくて、無事に取り出す事が出来ました。少し腐蝕しますが、彼女との約束を果たせて良かつた。しかし、何故こんな物を握つていたのでしょうかね？」

そう言いながらいぶかしむ医師の後ろで、武蔵が眉を寄せた。

形成外科の医師が退室した後、俺の顔色を窺いながら武蔵はガーゼにくるまれた金属を見詰めて言った。

「乃良ちゃんが拘つた心当たり……有るんだね？」

「……これは、ナオの携帯に付けてあつた物です。」

「ああ……金具も無くて、何かと思っていたんだけど……そうか、ストラップだつたのか。」

「多分、手を焼かれた時に握つていたのでしょうか。」

「携帯を……取られまいとしたんだね。」

「それに……。」

顔を歪める俺に、武蔵が眉を寄せた。

「何だい？」

俺は黙つて自分の携帯を見せると、武蔵は合点がいった様に溜め息を吐いた。

「そつか…女の子なんだなあ。君との絆を、ずっと握り締めてたんだね…。」

病室のドアを閉めると、ネコの腕に手を添えて目覚めるのを待つ。そつと左手に触ると熱を孕み、頬も幾分赤味が強い…熱が出て来たのだろうか？

少し呻くネコの額に口付けると、俺の名を呼びゆづくじと瞼を開いた。

「大丈夫か？辛く無いか？」

「平気…少し痛いけど…お水飲んでもいいのかな？」

抱き起こしペットボトルを渡してやると、音を立てて一気に飲み干す。

「…やつさ、先生が持つて来た。」

ガーゼに包まれたままのストラップを渡してやると、ネコは嬉しそうに受け取つてそつと撫でる。

「ずっと…握つてたのか？」

「…うん。携帯は取られちゃつたけどね…油垂らされても離さないからつて、火付けられちゃつた。」

自虐的な笑いを浮かべるネコに、俺は思わず声を荒げた。

「何で！？そんな物の為に！？」

「そんな…物？」

「そうだ…離しやえすれば、手を…手を焼かれるなんて事は無かつたんだぞつ！？」

何も言わずに黙つてストラップを撫でていたネコが、顔を上げずに静かに言つた。

「…柴さん、もう帰つていこよ。」

「えつ？」

「帰つて…明日も仕事でしょ？忙しいんだから、毎日来なくとも大丈夫だし…。」

「ナオ？」

「帰つて！！」

ストラップを握り締めるネコが、肩を震わせ大粒の涙を溢す。慌ててベッドに上がり抱き寄せるが、ネコは腕の中で何も言わずに泣きじやくつた。

「悪い…傷付けたか？」

「手術なんて…するんじや無かつた…。」

「何言つてる！？何だ…何を傷付けた？言つてくれ、ナオ…。」

振りを振り続けるネコに、俺は焦りを覚えて言つた。

「なあ、ナオ…心の中の物、吐いちまえよ…我慢するなつて言つたろう？」

しばらくすると、ネコは大声を上げて泣き始めた。

「……宝物だったのに…このストラップがあつたから、我慢して来れたのにい……柴さんの馬鹿あ！！」

ネコはオンオンと泣きながら、俺の胸を叩き続ける。

「悪かった、そんなつもりで言つたんじや無いんだ…だかな、ナオ。例えそれがお前の心の支えでも、お前の身を傷付ける物なら、俺は排除しようとするし、疎ましく思つてしまつ。それは、仕方無いだろう？」

「…。」

「お前が大事だ、何よりも物には代わりが利くが、お前の代わりは誰もいないんだ。大事にしろ…身も、心も…。」

涙の跡を舐めてやりながら、俺は黙つてネコを撫で続けた。

最近見る夢は、いつも同じ…ドラマの様に続きを見るのが、何となく楽しみになりつつある。

出でるのは白い獣の俺と、ネコと思われる小さな少女だけだ。俺は少女に『ナギ』といつづを『』える、山の上にある住処に連れて行った。

共に生活を始めて気付いた…人間とは存外に手間が掛かる。水や食料を与えないと倒れてしまうし、濡れたまま放置すると病気になる。

普段はよく喋り、俺にまわり着いているナギは、具合が悪くなると途端に静かになり、住処の隅で横になつたまま動かなくなる。

「お前は何故、助けを求める事をせぬのだ、ナギ？」

「…主様に助けて欲しいと願う人は、沢山居る故…。」

「お前は、厄介な童よのう…。」

病魔を食らい、気を満たしてやりながら俺が呟くと、ナギは済まぬと言つて笑つた。

この少女は、よく笑う…その笑顔を、喜ぶ顔を見たさに、俺はナギの世話を焼く。

「ほれ、こつちに来て休め…そんな所で寝て居ると、又病魔に巢食われる。」

己の躰に添わせる様にナギを寝かせ、大きな尾を被せてやると、ナギは暖かいと笑つて穏やかな顔をして寝入る。

時には川に、花園に…ナギを背に乗せて山を飛び越えると、歓声を上げて喜んだ。

「村で、いつも主様が空を駆けているのを見ていた。」

「いつも？」

「空ばかり見上げておつた故…だから主様がこんなに大きな方だとは、思うても見なかつた。」

そう言つてナギは笑つた。

この穢やかな日々が続くといい……俺とナギと、永遠に……。

「やつぱり、アンタ馬鹿でしょー?」

「何だと?」

「乙女の気持ちを、何も理解して無いって言つてんのよ、朴念仁!」

「！」

仕事の合間に久々に顔を合わせた京子が、ネコの様子を報告した途端に呆れて大声を上げた。

苦虫を噛み潰した様な顔をする俺に、京子は盛大な溜め息を吐く。「で、どうなのよネコちゃんの様子は?」

「少し……鬱い……」

「まあね、親とも会えない、外に出る事も怯える、頼みのアンタと喧嘩したとあっちゃあねえ?」

「喧嘩に等、なって無い。」

「でも、大嫌いって言われたんでしょ?」

「そりゃ……まあ……」

「気に病んでるじゃ無いの?初めてでしょ、柴に感情ぶつけたの。」

「そうだつたかな。」

「とりあえず、これ……頼まれてたネコちゃんの洋服や、必要な物一式ね。」

ガサガサと大量の袋に入った荷物を俺に押しやると、京子は心配そうに尋ねた。

「一緒に暮らす事には、〇・Ｋ・した訳?」

「……迷つてる風ではあるな。」

「何よ、それ……」

「だが実際問題、あの状態で一人暮らし等出来ないだろ?」

「まあ……そうかもしないけど。気持ち、納得させてからの方がいいんじゃないの?」

「なら、一先ず俺の家で落ち着いてから、考えればいい。」

「そりじゃ無くてと、京子が俺を覗き込む。

「大丈夫なの？そんな状態で、あそこへ引き取つて？」

「どういう意味だ？」

「だつて…下界から隔離されるのよ？柴が仕事してる間は、1人ぼつちでしようよ？」

「大袈裟だな。」

「やっぱり、わかつちゃいないわ…。」

京子は、呆れて頭を振つた。

仕事を終えて病院に向かつと、ネコは病室のテラスに出てほんやりと月を見上げていた。

「どうした、そんな格好で？風邪を引くぞ？」

「…柴さん、仕事終わつたの？」

「ああ…こんなに冷えて…。」

「平気だよ、この位。」

何となく霸氣の無いネコに、自分の上着を脱いで着せると、暖かいと言つて薄く笑う。

「何考へてる？」

「別に、何も考へてないよ？」

「嘘付くな…話せよ、なあ。」

「本当だつて…月が綺麗だなつて、見てただけだよ。」

疑い深いなあと言つて笑うネコに、何となく釈然としないものを感じながら、俺はネコの肩を抱いて室内に誘つた。

「ナースステーションで、言われたぞ。お前、食事殆ど取つて無いのか？」

「食欲無かつただけだよ。」

「お前、一体…。」

「柴さん、どうしたの？」

「え？」

ネコは俺を見上げると、少し眉を寄せて尋ねた。

「何かあった？誰かに、何か言われたの？」

「…何故？」

「仕事忙しいの？疲れてる？どこか辛い所有物の？」

「ちょっと待て、どういう事だ？」

「だつて…柴さん、少し変だよ…。」

「俺が！？」

「そう…。」

変なのは、俺じゃ無い…ネコの方だ！

何か心に抱え込んだまま、口を開けているのはネコじゃないか…！

「ナオ…まだ、俺の家で暮らすのを渋つてるのか？」

又その話しかと言つ様に、ネコは少し剥れた顔をして俺を睨んだ。
「嫌だなんて言つてないもん…ただ、鉄さんの話聞いて、そんな上等な所つて住み慣れないから…だから、本当に行かなきゃ駄目つて聞いただけだよ。何怒つてるの、柴さん？行くつて事になつたんでしょう？いいじやん、それで…！」

「ナオつ！？」

「…行かないつて言つたら怒る癖に…何で行くつて言つても怒るの？私…どうすればいいのよ…。」

そう言つて激しく泣き出したネコを、俺はやんわりと抱き込んだ。
「怒つてる訳じや無い。俺は、お前が本当はどうしたいのか知りたいだけだ。住む場所にしたつて、あそこが嫌なら他を探したつてい…」だが、お前が自分の目で見ない内に嫌がるから…。

「嫌じや無い…柴さんと一緒に…どこでもいいもん…。」

「最近は、お前を泣かせてばかりだ…折角一緒に住めるの…。」

何かが違う、何かがおかしい…狂つた歯車は、直らないのか…？

つた途端、その物々しい警備とセキュリティーにネコは怯えた。

無理は無い…此処のセキュリティーは、警視庁を上回る。

連城の弁護士事務所には、政財界の名だたる面々が依頼に来る…特に連城個人への依頼は極秘である事が多いと言うのだから、この警備とセキュリティーは必要だと言う事だらう。

「大丈夫だから…。」

怯えた表情を見せるネコの背中に手を添えてエレベーターの指紋認証を行うと、田を見開いてじっと窺う。

エレベーターに乗り込み、コンソールパネル掌を翳し29階のボタンを押す。

「…何なの…此処…。」

「お前の弁護を引き受けてくれた、連城さんのビルだ。事務所や会社や飲食店なんかが沢山入ってる。俺の事務所も、このビルに入ってるんだが…。」

「此処で仕事してるの?」

「そうだ。仕事場も住居も、このビルにある。連城さんの家も、このビルにあるからな…弁護士事務所には、偉いさんも沢山来るから、それで警備もセキュリティーも凄いんだ。」

「…何か、怖いね。」

「大丈夫だ。お前の事も守つてくれる。」

「何から?もう、誰も追つて来ないんでしょ?」

「そうだな…だが、此処だと不審者も入つて来れない。安心だろ?」

29階に到着し廊下を進むと、幾つものドアが並ぶ…その中の一室のドアの前に立ち、ネコに鍵を渡した。

「此処が、俺達の家だ。」

ネコは渡された鍵でドアを開けると、お邪魔しますと中に入つた。

2LDKにしてはゆつたりとした間取の部屋を珍しげに見て回るネコは、リビングに広がる眼下の景色に驚きの声を上げた。

「…高いねえ。」

「高い所、好きなんだろ?」

「え？」

「ラピュタ書房の社長に会つた。お前が、高い所が好きだと聞いていたぞ？」

「ちょっと…高過ぎて怖いよ。」こんなに高い所、初めてだもん。」

「東京タワーや都庁は？登つた事無いか？」

「無いよ…。」

「昼間よりも、夜が綺麗だ。光の絨毯みたいだぞ。」

「へえ…窓は…開かないんだ。」

「そうだな…風が強いからだろ？…落ち着いたら、上に挨拶に行こう。」

「上？ビル？」

「連城さんの自宅だ。奥方も居る…西嶋画伯の件では、奥方にも世話になつた。ちゃんと挨拶するんだぞ？」

「わかつた。」

ネコは緊張しながらも、小さく笑つた。

「いらっしゃいませ。」

迎え入れた縁無し眼鏡の固い表情の男に、ネコは緊張の色を濃くする。

「ナオ…連城さんの秘書の山崎さんだ。」

「…初めまして。」

「中で、クローネがお待ちかねです。」

「クローネ？」

「側近の人達は、連城さんの事をそう呼ぶんだ。」

「柴さんも？」

少し笑つて頷くと、ネコは目を丸くした。

「遅くなりました。」

「ああ…待つてたぞ。いらっしゃい、躊躇はどうだ？」

「ありがとうございます。」

ネコは連城に向かつて深々と頭を下げ、隣に立ち上がった美しい女性に驚いて少し震えた。

「初めまして…音戸乃良です。」この度は色々とお世話になり、ありがとうございました。」

「いえ、此方こそ。退院した所なのに、躰は辛く無い?大丈夫?」

「はい…ありがとうございます。」

語尾が震えるのを気にしつつ、ネコは左側の髪をしきりに触つて傷を隠そうとしていた。

俺達の話している横で、所在無さげに俯き目を泳がせるネコを見て、連城は眉を寄せ俺に囁く。

「対人恐怖症は、治つて無い様だな。」

「申し訳ありません…今日は外に出て、知らない人間と顔を合わせ事が多かつたので、些か緊張が強くて…。」

「無理させるな、抱き込んでやればいい。」

手を差し伸べると、ネコは嫌だと被りを振り、小刻みに震えながら膝の上の手を握り締めた。

「西嶋画伯からの相続の件だが…。」

「その事は…もういいです。…何も…要らない。」

「放棄するのか、全て?絵は?」

「絵も…もういいです。私、相続税なんて払えないし。」

ネコを見詰めていた連城は、視線を俺に移して少し眉を寄せた。

「連城さん…手続きのお金と、連城さんに払つお金…柴さんじゃ無くて、ちゃんと私に請求して下さい。」

「え?」

「だから、ナオ!それは…。」

「嫌だつて言つた!病院のお金も…ちゃんと払つ!連城さんへの支払いも…一氣には払えないけど、少しずつちゃんと払います。それでいいですか?」

「…柴、ちょっといいか?」

連城は席を立ち、俺と共に書斎に入った。

「どういう事だ?上手く行つてないのか?」

「申し訳ありません。色々抱え込んで、少し意固地になつてます。」

「絵は、いいのか?あんなに頑なに嫌がつてたんじゃ無いのか?」

「母親に、相続するには金が掛かると聞いたそうで…諦める様に諭された様です。」

「それで…しかし本心は?まるで、以前の椿みたいな顔をしている…心が壊れそうな。お前も…。」

その時、リビングからガシャンと何かが碎ける音がして、俺達は慌てて戻る。

「大丈夫よ、平氣だから…。」

「…ごめんなさい…ごめんなさい…。」

床に砕け散つた珈琲カップの欠片を拾い集めるネコと、それを押し留める椿が、共に床に座り込んでいた。

「どうした?」

「乃良さんが、カップを落とされただけです。大事ありません。それより、乃良さんの指が切れています。」

「あら、大変!」

山崎が床に散らばつた欠片を掃除し、椿はネコをソファーに座らせ傷の手当てを始めた。

傷を消毒する為に椿に手を取られたネコは、ギョッとした顔を椿に向けると、泣き出しそうな声を上げる。

「…何で…どうして?」

「何?どうかしたの?」

「…貴女みたいに綺麗で…幸せな、恵まれてる生活してる人が…どうして、そんなに薄いの?」

「何の事?」

椿は訳がわからず、ネコの顔を見詰めている。

「連城さんの奥さんなんでしょ?連城さんは、あんなに濃いのに…そんな薄い『氣』だと、死んじやうよ?」

「何だとつ…?」

「…止める、ナオ！？」

連城が叫ぶ横で、俺が叫んで止めるのも聞かず、ネコは椿に抱き付いた。

「…大丈夫、私が分けて上げる…。」

「…ああ…。」

恍惚とした表情を浮かべる椿の背後から、連城が彼女を抱き込んだ。

「椿っ！？大丈夫か！？」

「…平気よ、ジン…何か…暖かい物が流れこんで…。」

「ナオ、止める…離れろ…！」

「どういう事だ、柴！？」

「ナオが、椿さんに『氣』を送り込んで…このままでは、ナオの命に関わります…！」

思い切りネコの躰を引き剥がした時には、既にネコは喘ぐ様な息遣いでグツタリしていた。

「馬鹿野郎！…無茶な事しやがって！？」

驚く面々の前で、俺はネコに口付けて『氣』を送り込む。

山崎に呼び出された七海が、俺に抱かれたネコの脈を取る。

「弱いな…救急車の手配は？」

「必要ありません。今ナオに必要なのは、俺の『氣』を注ぎ込む事です！…」

俺はネコを抱き上げ、自分達の家に戻った。

ナギと暮らし始めて、どの位経つただろうか？

ある日山菜を取りに山に入つたナギが、病に苦しむ男が倒れているのを見付けた。

聞けば、東国から流れて来た猟師だと言う。

俺と長く時を過ごし神氣を浴びたナギは、躊躇に巢食う病魔を取り除き、氣を与える術を得ていた。

病を癒して貰つた猟師は、美しい娘に成長したナギを見初めたらしい。

「こんな山奥に、娘の一人暮らしは忍びない。一緒に山を下りようナギ！」

「私は主様と共に有る。行く訳にはいかぬ。」

「何を言つ？あの岩室で、お前は一人で暮らしておるでは無いか？」

「貴方には、主様が見えぬのか？」

猟師には、俺の姿は見え無いらしい。

「お前のその力、人の為に役に立てたいとは思わぬのか？」

「わからぬ…この様な力、有ることも私は知らなんだ。」

「病で苦しむ者を救いたいと思わぬか？癒された者は、皆お前に感謝するだろう。」

「感謝？私が…有難がられるのか？私の力が喜ばれる？」

「そうだ、ナギ…皆がお前の力を喜ぶ。」

山で起こる事は、どんなに小さな事でも俺の耳に届く…それが、どんなに小さな会話でも…。

「主様、猟師が私と共に山を下りようと言つて来た。」

「ナギ…お前の力は人外の物。人間は、お前を恐れるやもしけぬ。」

「猟師は、私の力が人を救い、人に感謝されると言つた。」

「お前は、どうしたいのか？」

「わからぬ…私は主様と一緒に居たい。だが、疎まれ続けて来た私

に、人が感謝するという事等、本当に有るのだろうか？」

「ナギ…お前は、人里が恋しいのか？人間は、お前を捨てたのだと！？」

「主様…私はどうすればよい？」

ナギは泣き出しそうな声を上げ、俺の腹に縋つた。

ナギを手元に置きたい…いつまでも、永遠に…。

だが、俺では人としての幸せは与えてやれ無い…人として夫婦になり子を作る、当たり前の生活は与えてやれ無いのだ。

「…お前の…好きにすればよい。」

「主様！？」

「人としての幸せを追うのも、良いかもしだぬでな。」

「主様は良いのか？私が御山を下りても、何とも思わぬのか？」

「儂は元々一人で暮らしておつた故…又元の気楽な生活に戻る迄よ

…。」

三日三晩ナギは住処の隅で泣き続け、翌朝早くに猟師と共に山を下りた。

それから何年の月日が流れただろう？

ふらりと訪れた東国の神が、酒の肴に人里の噂を話して聞かせた。
東国の社に、人外の力を持つ巫女が居た…神託を行い、病を癒し力を与えるその巫女は、神の生い茂る社の奥深く、逃げ出さない様に座敷牢に囚われていたという。

社の神主は、巫女の御業で大金を儲けていたが、先日巫女は力尽きて亡くなつた。

巫女の力は娘が引き継ぎ、新しい巫女になつたその娘も又、座敷牢に囚われていると…。

「馬鹿な娘よ…どこぞで神氣を浴びたのだろうが…いよいよに弄ばれ利用された挙げ句、我子に迄禍根を残すとはのう…。」

猟師が見始めたのはナギでは無く、ナギの力だったという事か！？

俺は傍らに置いてあつた酒樽を、思い切り壁に叩き付けた。

じつとりとした寝汗を搔き、痙攣して目覚める。

何だ… 今の夢は…?

あれは…『神の巫女』の話だったのか…?

「…柴…さん？」

俺が痙攣した事で目覚めたのか、ネコは早鐘を打つ様な俺の心臓の音に眉を寄せて見上げた。

「どう…したの…苦しい…大…丈夫？」

「その言葉、そのまま返す。大丈夫なのか、お前！？」

「…くえ…き。」

「平気じゃねえだろ！？そんな苦しそうな息遣いしやがって…だいたい、今日退院した所なんだぞ！？無茶な事しやがつて…。」

「「ごめん…」「ごめんね…」又…迷惑…。」

「そんな事は、どうでもいい…もう少し休め。」

言いたい事、聞きたい事は山の様にあった。

だが先ずは『氣』を満たし、体力を回復してやらないと…俺はネコの躰を再び抱き寄せた。

翌日、元気になつたネコに近所を案内する為、2人で外出した。地下2階のエントランスでは、相変わらず怯えた素振りを見せる。

「あそこ、どうしても通らなきや駄目なの？」

ビルを出た途端に、ネコは俺を見上げて尋ねた。

「そうだな…プライベートスペースに上るエレベーターは、あの1基だけだからな。」

「… そうなんだ。」

「怖いか？慣れて貰うしか無いが…。」

ムウと口を尖らせるネコの鼻を摘まむと、痛いよと言つて笑つた。

広尾駅の周辺を案内して昼食を取り、明治屋で買い物をし帰路に着くと、ネコは突然俺の腕に縋り公園を指差した。

「柴さん、あそこに行きたい…！」

広大な敷地を誇る有栖川宮記念公園は、元々陸奥盛岡藩下屋敷の跡

地を明治になつて富家の敷地とし、後に公園として東京都に寄贈したものらしい。

多くの木々が茂り四季の移ろいを味わえ、湧水が溪流となつて西南側の池に注いでおり、園内には図書館も配されている。

「気持ちいいね…木も水も…。」

「お前は、本当に公園が好きだな。」

「前はさあ、あんまりわからなかつたんだけどね…木や水や土がある所つて、やっぱ『『氣』』が満ちてるからなんだよね…。」

「…そ、うか。」

風が揺らす木の音を、ネコは空を見上げ氣持ち良さそうに聞いている。

「ナオ…お前、絵の事…本当にいいのか?」

「ん?…いこみ、もう…どうでもいい。」

「お前…。」

「ああ、そ、う、い、つ、意、味、じ、や、無、く、て…嫌、い、だ、し…燃、や、し、た、い、と、は、思、う、よ?…でも、あの、絵、見、て、も、誰、も、こ、ん、な、汚、い、奴、が、モ、デ、ル、だ、な、ん、て、思、わ、な、い、で、し、ょ?」

「いや…悪いが、それはどうかな?…實際、あの遺作展のチラシを見て、お前を見付けたんだから。」

「そ、う…でも、払、え、な、い、も、ん。し、ょ、う…が、な、い、じ、や、ん?」

「何なら、相続税の代金も分割払いにするつて手もあるんだぞ?」

「誰かに借りるつて事?…お兄さんか…連城さん?」

「ああ…頼むとしたら、どちらかだらうな。」

「嫌だよ、どつちも。お兄さんに借りるかもしれないつて思つたから、お母さん諦める様に言つたんだと思つ…連城さんには、もつと借りたく無いかな。」

「何故だ?」

「何故つて…仕事絡みの付き合ひなんでしょ?…やつこへこじやん…。ネコはハハハと笑いながら、

「それにねえ…払わなきやいけない物を払えないつて事は、分不相

応つて事だよ。」

そつ言つて、遠い田をして水面を見詰めた。

「弁護料や手続きの金も、自分で払うつもりか?」

「そう、少しずつだけど…ちゃんと働いて返すよ。」

「何故、俺を頼らない?」

「何言つてゐるの?頼つてばつかじやん!…?」

「金の話だ!…!」

すこし声を荒げるが、ネコは口端を上げて氣だるさうな視線を投げる。

「何怒つてゐるの、柴さん?」

「水臭いって言つてるんだ!」

「親しいのと、お金の問題つて…別だよ、柴さん。」

「ただ親しいつてのと違つだろ?が!…?」

「結婚の事?」

ストレートに質問され、俺は言葉を飲み込んだ。

「…拘るね、柴さん。」

「…嫌…なの?」

「そうじや無い…でも私は…お母さんみたいには、拘つて無いかな。柴さんは…。」

「俺は拘る。俺の母親は妾だったから…俺は…お袋の苦労も見て來たし、自分が婚外子としてしか戸籍に記載されない悔しさも知つてゐからな。」

「コンガイシ?」

「そう。結婚して子供が生まれると、その夫婦の『長男』とか『長女』と記載されるが、結婚せずに生まれた子供の戸籍には、ただの『子』としてしか記載され無い。」

「…悔しかつたの?」

「まあな…子供の時も『極道の子』『妾の子』と呼ばれて悔しい思いをしたが、大人になつても味わうとは正直思わなかつた。」

「私も前はね…自分の出生届の事、嬉しかつたんだあ。私の出生届

の為に、お父さんとお母さん婚姻届出してくれたのも知つてたから。

『神の女』には、戸籍無いからね……。』

「じゃあ……。」

「でもね……その役所に提出した書類の為にずっと逃げ回つて、挙げ句お父さん殺されちゃつたんだよ……たかが、紙切れの為に……。」

「……ナオ。」

池の畔に有るベンチに腰掛けると、ネコは俺を見上げて隣に座る様に促した。

「路上で生活してた時もね……色々なホームレスの人と知り合つたの中には、結婚して子供も居るのに、家族と別れてホームレスしてて人沢山居た。……帰りたい人、帰りたく無い人……家で待つてる人……紙切れに翻弄されてる人、沢山見たんだあ。」

「……。」

「それが正しくて、それが正しく無いのか……私にはまだ正直わからんないけどさ。今確実にわかるのは、私このままでも十分過ぎる程幸せだつて事……。」

目線を上げて俺を覗き込むと、ネコは「イイツと笑つて見せる。

「そりやもう、怖い位にね!」

「……子供は、どうする?」

「子供お?」

「一緒に暮らしてたら、出来るだらうが!……?」

「……欲しくない……特に女の子はね……。」

その声と瞳が、瞬間暗闇に飲まれたと思つ程の冷たさを孕む。

「だからか?俺との事を拒むのは?」

「あ……違うよ!それは違う!……違うと思ひます……柴さんと、そうなつてもいいつて……思つてます。」

急に赤くなつて恥じらうネコの頭を、俺は優しく撫でてやつた。

「ただ子供は……私と同じ様な事になつたらさ、可哀想だよ。」

「もう誰も追つて来ない……神は潰れたからな。」

「でも、あの時みたいに乗り込んで来る男達だつて居るし……力の方

だつて…消えて無くなつた訳じや無い。」

「…お前、変な事考えてんじや無いだろうな？」

「変な事…つて?自殺するとか?」

「ナオつ…?」

「考えてたよ、ずっと…消えて無くなりたいつて…画家のおじいさんの家でも、ずっと考えてた。でも寂しくなつて、直ぐに柴さんに電話して…ズルいんだよ、私…。」

「そんな事は無い!!」

「柴さん…幾つになつた?」

「え?」

「34歳だつけ?本当は、そろそろ結婚した方がいいんだよね…柴さんも、結婚したいつて思つてるし…。」

傾き始めた陽の光が、水面に反射して柔らかな光が揺らめいた。

「私…最初に柴さんと出会つた時、まだ15だつたんだあ…もうすぐ18になるけど、まだまだガキでさあ…。」

「…。」

「結婚しなよ、柴さん…誰かいい人見付けて、結婚して子供作つて…私、それまでの繫ぎでいいからさあ。」

「繫ぎ?」

「そう…結婚相手見付かる迄の繫ぎ…。」

「…仮に俺に結婚相手見付かつたとして、その後お前は…どうするつもりだ?」

「何とかなるよ、きっと。18になるし…仕事出来る場所も増えるしね…。」

「…昨日みたいに、人の事助けて…倒れちまつだらうが!?」

「ああ…人の役に立つて死んじやうなら、それはそれで価値が有る事だと思つけど…。」

俺を窺い、申し訳無い様な顔を見せたネ「は、視線を空に向けると感情を押し殺した様な聲音で言つた。

「誰にも…迷惑掛けたく無いんだよ…。そうだなあ、人の余り住ん

でない山奥で、静かに暮らすつてのもいいかもね。スローライフっていうの?」

「…帰るぞ。」

ベンチから立ち上がると、無言でネコの手首を掴み、俺は自分達の家に強引に連れ帰った。

「…お前の考えてる事はわかつた。」

玄関の鍵を掛けると、静かに俺は言った。

「だが、納得したなんて思うな…。」

「柴さん?」

ネコの躰を担ぎ上げ、ベッドの上に放り投げると、俺は鬼の様な形相で捲し立てた。

「ふざけやがつて…何が繫ぎだつ!…誰と誰が結婚するつてつ!…?」

「…柴さん…。」

「お前は、俺が誰でもいいから結婚したいと思つてるとでもこいつのか!? ふざけんなつ…!」

「…。」

「挙げ句、人の役に立つて死にたいだと、山奥で隠遁するだとか…いい加減にしろよ、ナオ!…?」

怯えるネコを追い詰める様にベッドに上がり、小さな胸倉を掴む。

「俺を翻弄する為に吐いてる言葉なら…どんなにいいか!…?だが、お前にそんな計算が無くて吐いてる言葉だとわかるだけに、始末が悪い…。」

「…柴…さん…。」

「…今日からお前を…この部屋に監禁する。」

「えつ!…?」

「お前も知つての通り、このビルは出入りに幾つもの認証システムを通らなきやいけない…幸いお前の登録は、まだされていないからな…エレベーターは動かない。因みに、非常階段での脱出も無理だぞ…途中鉄格子が填まってる。解除には、下の警備システムからの操作が必要だ。残念だつたな…。」

悲しげに瞳を潤ませるネコを、俺は尚も追い詰める。

「逆らうな…この上お前を縛りたくはない…。」

俺は、乱暴にネコの唇を奪つた。

「マジでさあ……アンタが、こんなに馬鹿だとは思わなかつたわよー。」電話の向こうで、京子が呆れた声を上げる。

「アンタ……私に、拉致監禁で引っ張られたい訳じゃ無いでしちうね？」

「そんな訳があるか！」

「まあ、私に自由に連絡取らせてる位だから、大丈夫だとは思つてるので……。」

「俺は、ナオの安全の為にしてるだけだ！」

「嘘だわね！アンタ、ネコちゃんが自分から離れそつで、怖かつたんでしょ！？」

「五月蠅い！……」

「柴…ネコちゃんより、アンタがカウンセリング受けた方がいいんじゃないの！？仲良くなつたんでしょ、武蔵先生と…。話、聞いて貢つたら？」

「…必要無い。」

「意固地は、お互い様つて事なんだ…とつとと襲つて、仕込んでやえば良かつたのよ…」

「お前がそれを言つたか！？ナオは、まだ17歳…トカウマだつてあるんだぞ！？」

「アンタのは単に、及び腰！…」

ガチャーンと切られた電話口を呆然と眺める…京子の奴、署内から掛けて来たんじや有るまいな…。

全く…警察官で少年係りの刑事が、17歳の少女を押し倒して孕ませるとは、何という言い草だ！？

とはいへ、自分のやつている事が誇れる事では無い事は、百も承知しているのだ。

ネコはあれ以来、家で大人しく過ごしていれる。

昼間はインターネット等をして、時間を過ごしているらしい。

寝室を別にしたいという希望は、言語道断と却下した…相変わらず添い寝の日々だが、毎晩絡み付く様にして眠る。

しかし、以前の様な充足感は得られない…苛立ちが募り、少し悲しきなネコをいたぶり、その罪悪感に又落ち込む日々が続いていた。ある日、仕事中に珍しくネコの携帯から電話が入った。

「…どうした、ナオ？ 何かあつたか？」

「柴…俺がわかるか？」

ネコの携帯から男の声が聞こえて来た事に、俺はたじろいだ。

「誰だ、お前つ！？」

「俺だよ…佐伯だ。以前、新宿署で一緒だつた佐伯啓吾だ。」

「佐伯…警視正…でありますか？」

「お…知つてたのか？ そつそつ、その佐伯だ。久し振りだな。」

躰の大きなギョロ目の先輩が目に浮かんだ…が、何故ネコの携帯で話しているのか！？

「ナオは！？ 何かあつたのですか！？」

「落ち着け、柴…彼女なら隣に居る。何も心配無い…変わらうか？

「いえ…何故、ナオと一緒にいらっしゃるのか、お聞きしてもいいですか？」

「ああ、彼女とは廊下友達でな。お前の部屋の隣、俺の隠れ家なんだよ。ここ数日、廊下デーートを楽しんでたんだが…。」

「はあ！？」

「最初は、かなり怖がられたんだが…お前とも幸村とも知り合いでと話したら、一気に仲良くなつてな。それで、さつき幸村に電話して…事情を聞いたんだ。」

「…はあ。」

「今から彼女をデーートに誘いたいんだが…駄目か？」

「…佐伯さん？」

「どこか行きたい所が有るかと聞いたらな…公園に行きたいと言つてな。連れて行つてやりたいんだが…不味いか？ 彼女、お前の許可

が無いと駄目の一_ト張りでなあ…。」

見掛けに寄らず世話焼きで誠実なこの先輩の性質は、昇進して手が届かぬ存在になつても変わらないらしく。

俺は溜め息を吐いて、受話器の向こうの佐伯に頭を下げた。

「宜しくお願ひします、佐伯さん。申し訳ありませんが、夜迄付き合つてやつて頂けますか？今日は、仕事で遅くなりそうなんですか？」

「じゃあ、夕食を共にしてもいいんだな？」

「お願ひします。」

「お前、何時頃上がれる？」

「10時には、何とか…。」

「じゃあ、その後俺に付き合え。いいな？彼女はそれまでに、キチ

ンと送り届けるから。」

「…わかりました。ナオに代わつて頂けますか？」

携帯の向ひ側で話声が聞こえ、ネコの少し不安そうな声が聞こえる。

「…もしもし、柴さん？」

「ナオ…出掛けて来ていいから…夕食も、佐伯さんと食べて来い。」

「え…いいよ、夕食は柴さんと一緒に食べる。」

「いや…今日は遅くなる。佐伯さんに、旨い物食わせて貰え。その人、金持ちだから。」

俺が笑うと、ネコは安心した様にわかつたと言つた。

「一つだけ、約束…。」

「何？」

「…ちゃんと、戻つて来い…。」

「大丈夫だよ、柴さん…ちゃんと帰つて来るよ。私の帰る場所、柴さんの所だけだから。」

少し安心して、楽しんで来る様に言つと、ネコは行つて来ますと言つて電話を切つた。

10階に有るジャズ&シガーバーに入店すると、既に来ていた佐伯がカウンターで杯を上げて笑つた。

「お待たせ致しました。」

「いやいや…お疲れさん。どうだ、此所での仕事は?」

「基本的には今迄と変わらないんですが、クライアントや調査する対象が大物揃いで…。」

「だろうな…連城絡みだと、仕方が無い。」

アハハと笑いながら、佐伯は俺のオーダーか来たのを期に再び杯を上げた。

「可愛いな、乃良ちゃん。17だつて?」

「もうじき18になります。」

「公園で森林浴して…次にどこに行きたいか聞いたら、悩んじまって…ショッピングも必要な物は何も無いって言つし、カラオケも行つた事が無いって…そもそも、音楽を聞く機会が余り無いって言つんだ。…ちょっと、今時の若者とは違う雰囲気の子だな?」

「ナオは…少し前迄、有る事情で路上で生活していました。それ以前も、ずっと逃亡生活を余儀無くされていたので、生活を楽しむという感覚が無いというか…。」

「…えらくハードだな?とりあえず、ボーリングに連れて行つたんだが、初めてだつてはしゃいでなあ…可愛かったぞ?」

「そうですか。楽しかったなら、良かつた…。」

「食べたい物は?つて聞いたら、ハンバーガーとかラーメンつて言うんだ。それは柴に食わせて貰えつて言つたら、又悩むんで…バイキングに連れて行つた。驚いてたぞ?あんなに沢山の食べ物、初めて見たつて…つていうか…お前、どんなデートに連れて行つてるんだ?」

「殆ど…そんな余裕はありませんでした。そういう生活を教えてやろうとした矢先に…拉致監禁されたり、事件に巻き込まれたり…。」

「話してみろよ…愚痴も含めて…。」

問われるままに、佐伯にネコとの出逢いからの事を話すと、グラス

を傾けながらフムフムと聞き入り、時折質問された。

「お前といい、連城といい…何でそんなハードな経験してるパートナーを選ぶかな？」

「椿さんもなんですか？」

「聞いてないか？彼女も…かなりハードな経験を積んで来てる。」

「そういえば、連城さんは…やはり検事時代からのお知り合いなんですか？」

「いや…奴とは、大学が同期で…学生時代は、ずっと連んでた。検事時代は事件絡みでの付き合いしか無かつたし、その後も連絡を絶つてたんだがな…去年、ある事件がきっかけで再会したんだ。」

「新宿のヤク絡みの事件ですか？」

「知つてたか？連城というより、椿ちゃんが巻き込まれてな…まあ無事に解決して、2人もめでたくゴールインしたんだ。」

「椿さんとも、知り合いなんですか？」

「ああ…彼女の兄貴が、俺達の先輩に当たる人で…連城は、彼女をずっと育ててたんだ。」

「育ててって…ああ…確か14歳差だと病院で聞きました。大学の頃つていうと…。」

「椿ちゃんが5歳。可愛かったなあ…今も別嬪だけどな。去年のクリスマスイブに、連城がこの店でプロポーズしたんだ。あの2人も糾余曲折あつたから…信頼しあつて…いる癖に、素直になれなくて大変だった。」

「…連城さんに…何か頼まれたんですか？」

「まあな…。」

カランと氷を鳴らし、佐伯は新しい酒を注文した。

「あそこも、連城が椿ちゃんにベタ惚れだから…椿ちゃんの事となると、奴は暴走するんだ。」

「度々…ナオと2人で自宅に来る様に誘われています。」

「断つてるんだろ？」

「…来る様に、説得しろとでも言わされましたか？」

「いや…ただ、どういう事なのか知りたがってる。結婚後、椿ちゃんの体力が落ちてるのは、奴の悩みの種だ。病院で検査をしても、何も出ない。それが先日、乃良ちゃんと接触した途端に調子が良くなつた…まあ、3日程で戻つたらしいがな。」

「…。」

「乃良ちゃんの言つた言葉にも拘つて…なあ、説明だけでもしてやつてくれないか?」

「お断りします!」

「俺は構わないが…連城は多分諦め無いと思つぞ?」

「俺じゃ説明出来ません。だが、ナオを連れて行くと…アイツは又椿さんに施術して…命を危険に曝す…ナオは…それで自分が死んでもいいと思つています。そんな事はさせられません…絶対に…。」

「柴…。」

「俺がナオを閉じ込めてるのは、外に行かない様にする為だけじや無い…上の階に上がらせない為でも有るんです!」

「…なら、それも含めて説明してやつてくれ。そんな事情なら連城だつて、何が何でも治療してくれとは言わないだらうからな。」

家に帰りベッドルームに入ると、微睡んでいたネコが目を開けた。

「…お帰り、柴さん。」

「あ…起こしたか?」

スルリと右頬を撫でると、その手を追つて顔を擦り寄せる。

「今日の…怒つてる?」

「いや…行つて来ていいと言つたろ?楽しかったか?」

「うん。公園行つて、ボーリングに連れて行つて貰つた。佐伯さん、上手だつたよ!一気に全部倒しちゃうんだよ。」

「ストライクな…ナオは?上手く出来たか?」

「直ぐに、横の溝に墳まつちゃうの…佐伯さんが、玉の持ち方や転がし方教えてくれんだけど、なかなか上手く行かなかつたよ。」

「今度、連れて行つてやる。あちーひー… 一杯行こうな…。」

「…監禁は、おしまい？」

- 8 -

ネコは俺の掌にスリスリと頬を寄せ、フワリと笑つた。

「……いいよ、私……ずっと監禁されてても……。」

ナオ。

「だつて、柴さん…私の事抱き締めて、ずっと『悲しい、悲しい』『寂しい、寂しい』って思つてるでしょ？私…柴さんが、そういう風に思うの嫌だし…柴さんの事、抱き締めてあげたいって思うよ？」
「…怖くは…恐ろしくは無いのか？こんな、監禁する男の事を！？」
「そりや、最初は少し怖かつたけど…柴さん、私の嫌がる事しないし、私の事大事で…凄く好きだから…だから…。」

ネコに覆い被さり、赤い唇を熱い吐息ごと奪う。

「ナオ… 愛して… る… 。

「知ってるよ。沢山…沢山愛してもらつてる。」

「死の二どなんであるたゞ語がの為はならいしたんて……絶対に思うな……。」

10

「繋ぎでいいなんて、悲しい事言つな……俺が、お前意外に結婚等考
えられないのは、わかつてゐるだろう?」

「……柴さん……私……。」

「ナホ… もう少し歩み寄るつ。俺は、自分の想いばかりをお前に押し付けぬし、お前は血口完結ばかりしてんだけつ。」

うん。

「互いに、もう少し歩み寄って…お前は、もつと…俺に甘える事を覚える。

卷之三

：私たけえ？」

「もつと俺に甘えて…頼つて、我儘言えよ。迷惑なんかじゃ無いんだ…男は、惚れた女を甘えさせてやりたい、甘えて貰いたいんだ…わかるか？」

「…沢山、甘えてるのにい。」

ネコが胸に顔を埋めて抱き付くのを、全身でその小さな躰を絡める取る。

「もつとだ…もつと甘えろよ…。」

ネコの肩と腰に腕を回しグイッと引寄せると、ネコは甘い呻き声を上げた。

互いに驚き、顔を見合わせ…次の瞬間ネコは恥じらい、もがいて俺から逃げようとするのを再び絡め取る。

「…ナオ…ナオ…。」

…時が…満ちたか？

怖がらせ無い様に口付けを与えながら、緩やかに大人の愛撫を与えてやると、ネコは甘い息と共に鼻に掛かつた喘ぎ声を上げる。パジャマの裾から手を入れて、その素肌を辿りうつとした時、突然俺の携帯とネコの携帯、2台が同時に鳴った。

ビクリと互いに痙攣し、熱い視線を絡ませたのは、ほんの数秒だったのだろう。

互いにアタフタと携帯を掴み、上擦った声で電話に出る。

「…もしもし？」

「健司か！？乃良も出たな！？」

「兄貴！？一体どうしたんだ、こんな時間に？っていうか、3台同時に？」

「あ…沙夜と俺の携帯、2台で話してる。悪いが2人揃つて、直ぐにこっちに来てくれ！」

少し焦つた様な兄貴の物言いに、俺とネコは顔を見合せた。

「どうした、何があつた？」

「乃良、落ち着いて聞けよ？沙夜が、倒れた…妊娠したらしい。」

妊娠する

兄貴の電話でビルを飛び出した俺達は、兄貴の差し向けた車の後部座席に並んで乗り込んだ。

「…大丈夫か、ナオ？」

母親の妊娠を聞いたネコは、固い表情で膝の上の手を握り締めている。

その手に自分の手を重ねる…包み込んでやつた固く握られた手は冷たく、小刻みに震えていた。

東新宿駅に程近い場所に有る兄貴の自宅に到着した俺達は、直ぐ様兄貴の待つ座敷に駆け込んだ。

「どういう事だ、兄貴！？沙夜さんが、倒れたって！？」

勢い込んで捲し立てる俺と反対に、ネコは静かに兄貴の前に座り頭を下げた。

「…」迷惑をお掛けしました。」

「何を言つている？謝らなくてはならないのは、俺の方だ。済まない、乃良…。」

「命は…取り止めたんじょ？」

その言葉を聞いて、俺はギョッとした。

「気付いていたか…大丈夫だ。すんでのところでな…。」

「どういう事だ…ちゃんと説明してくれ、兄貴！？」

兄貴のこんな表情を見るのは久し振りだ…親父が亡くなつた時以来だろうか？

「…」こんとこ体調が優れなくてな…今日病院に行つてわかつた。3ヶ月と言われたそうだ。俺が帰つた時には、鬱いまま寝込んでな…子供は産めない、乃良に申し訳無いと泣き崩れて…目を離した隙に、以前病院から処方されてた睡眠薬を飲んだ。幸い発見が早く、胃洗浄をして今は休んでいる。

「…子供は？無事なのか！？」

「今の所はな……ただ、精神状態が不安定だ……妊娠初期には危ない状態では有る。」

「お兄さんは……お母さんと、結婚するつもりなんでしょう？」
ネコは、兄貴を正面から見据えて言った。

「乃良さく、承知してくれたらな。」

「お母さんは？」

「沙夜も、同じ考え方だ。」

「子供は？欲しいの？」

「ああ、欲しい！！組の為にも、絶対に欲しいのも事実だが……それ

よりも、俺は沙夜との間の子供は諦めていたから、嬉しくてしうがねえ！！！」

「……それが……女の子でも？」

「……男でも女でも、関係ねえぞ？」

じつと兄貴を見詰めるネコの瞳が揺らめいた。

「……それが……『神の女』でも？」

「違うぞ、乃良。『神の女』じゃねえ……『佐久間の女』だ。例え力を持った子供が生まれたとしても、佐久間の家の娘であれば、護つてやる事が出来る。そう思わねえか？」

「……そうだね。」

ゆつくりと頭を下げるネコが、膝の前に手を置いて身を屈めた。

「母と結婚して……籍を入れてやつて下さい。」

「いいのか？」

「お願いします。」

「……お前達は？」

その質問に、ネコは顔を上げて小首を傾げる。

「私達？お兄さん、その事とは……別問題だよ。」

驚いてネコを見詰める兄貴が、俺に視線を移した。

「何だ、健司！？……説明して無いのか！？」

「……もう少し、時間をくれ。」

「沙夜が妊娠した以上、これ以上引き延ばす気はねえぞ！？」

「…もう少し待ってくれって…！」

「説明だけでも、しておるべきだるうがつ！？」

「止める、兄貴！？今は何も言つなつ…！」

「…何？…何の話？」「

兄弟の激しいやり取りに怯えながらも、ネコは眉を寄せ俺を窺つた。

「…実はな、乃良…。」

兄貴が説明しだしすと、俺は堪らず席を立ち、驚くネコを残して座敷を出た。

兄貴や沙夜が、俺達の結婚に拘るには理由が有る…兄貴達が結婚するど、兄貴と兄弟である俺と、沙夜の娘であるネコの関係は、義理とはいえ戸籍上叔父と姪の関係になつてしまつからだ。

実際に血縁関係には無いので、法律的な婚姻は問題無いのだが…それでも、義理とはいえ叔父と姪の結婚となれば世間体はかなり悪い。兄貴達は、そうならない様に、俺達の結婚を見届けた上で自分達の結婚話を進めようとしていたのだ。

結婚という…婚姻届に縛られたく無いといつネコの気持ちを聞いてしまつた後なのだ。

出来れば、今はこの話を聞かせたくは無い…やつと、歩み寄りつと気持ちが傾き掛けた矢先なのに…。

「…柴さん？」

背後から小さく呼び掛けられ、俯いていた視線を上げた。目の前に広がる庭に、無造作に置かれた庭石や灯籠がボンヤリと浮かび上がる。

「…聞いたか？」

ネコは何も言わずに背後に近付き、俺の腰に腕を回した。

「焦る事は無い…世間体なんかも気にしなくていい。お前が納得する迄考えて、答えを出せばいいんだ。」「

「…ん。」

俺の背中に顔を擦り寄せたネコの手を、俺はやんわりと包み込んでやつた。

「お母さんの所…一緒に来てくれる?」

「あ…。」

俺達は揃つて、離れの沙夜の元に行つた。

「…お母さん。」

「乃良!?」

ネコの姿を見た途端、沙夜は娘に抱き付いて涙に暮れ、ネコはそんな母親を優しく受け止めた。

「乃良…乃良…どうしましよう?…お母さんね…。」

「おめでたなんでしょ?良かつたね、お母さん。」

「良くなんか…良くなんか無いわ!…どうすればいいの!…?」

「心配しないで、お母さん。お兄さん…佐久間さんが、お母さんの事も、お腹の赤ちゃんの事も幸せにしてくれるよ?」

ネコが沙夜の背中を優しく撫でると、沙夜はむずがる子供の様に頭を振つて啜り泣く。

「まさか…子供を授かるなんて…もう嫌なのよ!…あの時の様な、あんな不安な日々は…。」

「お母さん?」

「…女の子かもしれないと怯え…力が有るかも知れないと心配し…貴女が生まれた時、私がどんなに…どんなに…。」

何を言つているんだ…この女は…自分の産んだ娘を全否定する様な…。

それでもネコは、母親の背中を撫で続け…何度もごめんねと謝り続けた。

「怖いわ…恐ろしくて仕方が無いの…。」

「大丈夫…大丈夫よ…佐久間さんが約束してくれたの。男でも女でも関係無いつて!お母さんとの間に子供が出来て嬉しいって言つてくれたんだよ。大丈夫、今度は護つて貰えるから…お母さんも…赤ちゃんも…ちゃんと佐久間さんが護つてくれるよ。」

「本当に?…産んでも大丈夫なの?女の子でも?」

「大丈夫!…『神の女』じゃ無い『佐久間の女』だつて言つてくれた

よ…佐久間さんの事…好きなんでしょう?」

「…それは…。」

「護る事の出来なかつたお父さんより…好きなんだよね?」

「…そう…あの人は…私を連れ出してくれたの。でも…。」

「知つてたよ、私…お父さん、弱かつたもんね…でも、一生懸命だつたでしょ? 許してあげてね?」

「乃良つ…! 許して貰えるかしら…あの人にも、貴女にも…。幸せになる価値が有るのかしら…私達は…?」

「お父さんも、佐久間さんと結婚するなら、許してくれるよ…今度こそ幸せになつてね。佐久間さんと、お母さんと、赤ちゃんの…3人で、幸せになれる…大丈夫、大丈夫だから。」

ネコは沙夜を寝かせ目を閉じさせると、頭の先から足先迄スルスルと撫で…腹から胸に手を当てて、円を描く様に何度も撫で続け、布団を被せた。

「休んで、お母さん…。」

「…な…お…。」

「…大丈夫だよ…」これからは、佐久間さんが居てくれる。」

沙夜は大きな息を吐き、穏やかな顔をして眠りに着いた。
付き添いの家政婦にお願いしますと挨拶をしたネコは、そのまま静かに部屋を出た。

離れから母屋への渡り廊下で追い付いた俺は、ボンヤリと庭石を見詰めるネコに声を掛けた。

「…ナオ…。」

「「めんね、柴さん…お母さん、興奮してたんだよ。柴さん居たのに…悪かつたね…。」

「大丈夫か?」

「…あの庭石…取つ払つて、あそこ池造つたらいいのに…。きっと…元気な子供が生まれるよ。お兄さんに、教えて来て上げれば?」

「…わかるのか?」

「何となくね…早い方がいいよ…。」

「一緒に言いに行こ。」

「…私…しばらく此所に居るよ… 風が、気持ちいい…。」

ネコは柱にもたれ、震える瞼を閉じた。

俺はネコをその場に残し、兄貴の待つ座敷に戻ると、沙夜との会話の全てを話した。

「沙夜は、弱い女だ…誰かに護られなければ、自分の足で立つ事も出来ねえ。」

「あれじゃ…どっちが母親なのか、わかりやしない。自分の産んだ娘を、生まれる前から疎ましいと言つたも同じ事だぞ…。」

「普段は、娘の事を考えて涙する優しい母親だ…『神の女』にとつて子供を産むという事は、それだけデメリットが強いって事なんだろ。」

「ナオも…欲しくないと言つた。特に女は嫌だと…。」

「…だろうな。大丈夫なのか、乃良は?」

「…多分、今頃は逃げ出してるだろ。」

「おいっ!?

「大丈夫だ。GPSも有るし…多分、行き先は決まってる。」

「健司…。」

「一人で思い切り泣きたい時だつて有る…大丈夫だ。ちゃんと迎えに行く。」

「そうか…。許してやつてくれ、沙夜は…乃良に許して欲しかったんだろう…大丈夫だと言つて欲しかったんだ。」

俺は立ち上がり、座敷の障子を開けながら言つた。

「今回限りだ、兄貴…これ以上ナオを傷付けるのは、許さねえからな。」

「わかつて。籍は…子供が生まれるギリギリ迄待つ。」

「あ…それと、ナオから伝言だ。庭石退けて池造つたら、元気な子供が生まれるとよ。」

「…直ぐ様、造らせよう。」

照れた様な顔で笑顔を見せる兄貴を残して、俺は座敷を辞した。

兄貴の家の玄関先で、佐久間組の若頭に声を掛けられた。

何でも屋敷を飛び出そうとしたネコを、深夜で電車も動いていないからと説き伏せて、車で送り届けたという事だった。

「悪かつたな…。」

「いえ…様子がおかしかったので。先程、広尾駅の前で下ろして欲しいと言われて下車されたと、連絡が入りました。」

「そうか…悪いが、俺も同じ所返送つてくれ。」

「承知致しました。」

思つていた通りだ…GPSで確認を取り、広尾駅の前で車を降りてコンビニに寄り、俺は有栖川宮記念公園に向かつた。

迷わず以前ネコと座つた池沿いのベンチに向かつと、暗闇の中で小さな影が座つていた。

「…やつぱり此所に来てたのか。」

俺を見上げて驚いた様に見開く田は、既に涙で赤く腫れていた。

「…何でえ？」

「ん？ それだけ、お前の事を理解してゐて事だろ？」

そう言つてネコの隣に座ると、コンビニの袋から肉まんを取り出してネコに見せた。

「食うか？」

ネコは何も言わずに受け取ると、大きくガブリと食い付いた。

「…お母さんね、一つ考え出すると…他は見えなくなっちゃうんだ…。」

「…そうみてえだな？」

「お父さんはね…ずっとお母さんの事が好きだつたの。…だから、お母さんを連れて逃げたんだよ。でも、お母さんは…連れ出していくれるなら…誰でも良かつたんだ…。」

「沙夜さんに聞いたのか？」

ネコは首を振り、お父さんと答えた。

「お父さん、いつも『乃良は、お父さんがお願いして、お母さんに産んで貰つたんだ』って言つてた…お母さん私の事産むの、ずっと怖かつたんだね…。」

「ナオ…。」

「お父さんがね…『お母さんを頼んだよ』って、最後に言つたの。救急車に乗る時に…。でも、もつお兄さんにバトンタッチしていいんだよね?」

「ああ…沙夜さんの事は、兄貴に任せればいい。」

「お母さんも…赤ちゃんも、幸せになれるよね?」

「…お前…あの時、何故自分を人数に入れなかつた?」

「え?」

「沙夜さんと、腹の子と、兄貴の3人でつて言つたろ?」

急に黙り込んで肉まんを食べるネコに、ペットボトルのお茶を開けて渡してやる。

ゴクゴクと半分程飲み干すと、蓋を閉めながらネコはボソリと呟く。

「…よく聞いてるね?」

「ナオ…幸せになる価値は、お前にも有るんだぞ?」

「…。」

「お前を幸せにするのは、兄貴じゃ無く俺だつてだけの話だ。」

「…ん。」

ネコの肩に腕を回し、冷え切つた小さな躰を抱き寄せた。

「…甘えろつて言つたろ? 一人で泣いてんじゃねえよ…。」

胸にコトンと頭をもたげるネコの体温が、フワリと上がる。

「何かね…私…疲れちゃつた…。」

「休めばいい…俺の胸で休めばいいから…。」

ネコは俺の胸で啜り上げ、やがて声を上げて泣き出し、俺はその背中と髪を撫で続けた。

どの位の時間そうしていただろうか…やがてネコの手を引いて、ゆっくりとビルに向かつて歩き出した。

「今度の休み、横浜行くか?」

「…横浜？」

「中華街に、旨くて大きな肉まんが売つててな。店先で蒸籠蒸ししてゐるのを、並んで買うんだ。皆、それをかぶり付きながら街を散策する…お前の顔ほど『テカ』い肉まんだぞ？」

ネコはクスリと笑いながら、いいね…食べ切れるかなと小さく呟いた。

対峙する

翌日から、ネコは暫々と眠り続けた。

熱が高い訳でも、『気』が足りていない訳でも無い様だが、起きても躰に力が入らないらしい。

七海に診察を受けても、特に問題は無いといつ事だった。

「内科的な疾患では無く、精神的な疾患なんぢやないかな? 武藏先生に、相談した方がいいかもしれないね。」

「本人が嫌がりまして…。」

「そつか…直ぐにどうこうなる様な状態では無いけど…うん、少し様子を見るのもいいかもね。」

12月に入り誕生日が来ても、ネコの状況は変わらない。穏やかな顔をして寝入るネコの髪を撫で、その唇にそつと口付けると、ゆっくりと瞼を開けた。

「…おはよう、お姫様。」

「…おはよ…どうしたの、柴さん?」

照れた様に顔を赤らめるネコに、尚も口付けながら俺は言った。

「今日は、姫の誕生日だからな…やつと一緒に誕生日を祝える。」

「…ああ…そうだね…でも、いいよ…別に。誕生日なんて祝つて貰つた事無いし…。」

「…無いのか? 一度も?」

ネコは、天井を見上げて記憶を辿つている。

「ん…無いんじやないかな…子供の頃は、お父さんが『おめでとう』つて言つてくれて…プリン買って来てくれたよ…あれは嬉しかったなあ…。」

「ナオ…体調は? 良ければ食事に行かないか?」

「ごめん、柴さん…まだ出れそうに無いし、それに今日は平日だよ? 仕事でしょ?」

「有給貯まつてるんだ…。」

「仕事して下さい！私、出れそうに無いし。」

アハハとネコは、久し振りに笑い声を上げた。

「何か、食べたい物有るか？帰りに買って来てやる。」

「じゃあねえー、プリン食べたい！』

嬉しそうにねだるネコの頭を撫でてやり、俺はポケットから小さな機械を取り出した。

「…プレゼントだ。」

「なあに？」

イヤホンを片耳だけ填めてやりボタンを押すと、サワサワとこう音が流れる。

「音楽プレイヤー…どんな曲が好きなのかわからなかつたからな。武蔵先生の所で使つてる風の音のCDを教えて貰つて、ダウンロードしたんだ。」

ネコは瞳を潤ませて、両手で俺の首に抱き付いた。

「…嬉しい…ありがとう、柴さん…！」

それからは、昼間ずっとプレイヤーで風の音を聞いていたらしい。ようやく体調が戻り、ビル内にあるイタリアンレストランへ繰越していた誕生日ディナーに連れて行くと、ネコは喜んではしゃいだ。

「結局、体調が悪かつた原因つて、何だつたんだろうな？」

テーブルに置かれたパスタを取り分けてやりながら尋ねると、ネコは曖昧な笑みを溢した。

「多分だけどさ…『氣』が乱れてたんだと思うよ？人のは直ぐにわかるけど、自分のは…てんでわかんないんだもん。嫌になつちゃうよねえ？」

ネコは、皿に盛られたサラダを食べながら、コレも美味しいと言つて喜ぶ。

「あの時、沙夜さんに施術したからか？」

「バレてた？ そつかな…多分、違うと思つよ~。」

「もう、本当に大丈夫なんだな！？」

「本当に心配性なんだから、柴さんは…。」

ウフフと笑いながら、ジュースの入ったグラスを口に付けるネコを見てドキリとする。

相変わらず小柄だが、時折見せる表情が随分と大人びて来た。… そういえば体型も少し女らしくなって来たか？

だが、普段はまるつきり幼い中学生のままなのだ… 相変わらずアンバランスな奴め！

そういえばあの日、時が満ちたと感じた… ネコも受け入れてくれたと思ったのだが…。

「… 柴さん？ 聞いてる？」

「ん？ 「めん、何だ？」

「… 私、そろそろ外に出掛けてもいい？」

「一人でか？」

「そう。昼間、スーパーに買い物に行つたり、公園行つたり… 図書館も行つてみたい。」

「… まだ、バイトするつもりなのか？」
「何れはね… まだ駄目？ 監禁続行する？ それならそれで、構わないけど…。」

「いや… 外出は構わない。だが、バイトにはまだ早い。もつとちやんと体調が戻つてから、俺も納得する所でじや無いと駄目だ。」

「… 相変わらず過保護だね、柴さん。私もう、18になつたんだよ？」

「お前は、直ぐに無茶をし出すから… 以前の様に、事務所で働くならいいが…。」

「柴さんの所じや、給料出ないじやん！？」

「なあ… 俺が連城さんに一旦支払つて、お前は俺に支払つて行くつてのじや駄目なのか？」

「嫌だよ… なあなあにするつもりなの、見え見えだし。」

「頑固者！」

「お互い様でしょ？ はい、アーン…。」

ネコは自分の口をポツカリと開けたまま、俺に長いグリッシャーを

差し出す……全く……自覚の無い色気を垂れ流しやがつて……。

ガブリとかぶり付き、ガリガリと噛み砕きながら俺は言った。

「バイトの件はお預けだ！その前に、お前の情報を認証システムに登録しなきゃならない。」

少し眉を寄せる俺の顔を見て、カリカリと半分になつたグリッサー二をがじつていたネコは、不思議そうに尋ねる。

「何か……あつたんでしょ？」

「少しな……大丈夫、俺も一緒に行くから。」

翌日、俺とネコは連城の個人事務所の所長室に座つていた。認証システムの登録が済むと、連城は俺では無くネコに笑いながら話し掛けた。

「もう体調は良いのか？」

「はい……もう平気……です。」

「緊張しなくてもいい。佐伯に話す様に、普通に喋つていいから。」

「……わかった。」

「相続の件、そろそろタイムリミットなんだが……本当に、絵も放棄していいのか？」

「構わないよ。払えないって、この前も話したでしょ？」

「……乃良、俺と取引きしないか？」

連城がニヤリと笑いながら、俺を横目で窺つた。

「何を？」

「ん……その前に、説明して欲しい事がある。」

「説明？何の？」

「椿の事だ。お前、この間ウチに来た時、椿の事を死んでしまうと言つたろ？」

「……連城さん、怒つてるの？」

「いや……どういう事なのか、説明して欲しいだけだ。」

連城の厳しい表情に怯えたのか、ネコは隣に座る俺のスーツの上着

を握り締めた。

俺はその手を自分の膝に乗せて握り込み、大丈夫だとネコに頷いて見せた。

「『『氣』がね…物凄く薄くて、びっくりしたの。だから、私のを分けて上げたんだよ。」

「…薄いと…駄目なのか？」

「躰、弱く無い？疲れやすいとか…氣力が出ないとか…。病院に行つても治らないと思うよ？」

「治るのかつ！？どうすればいいつ！？」

「クローネ、落ち着いて下さい…！」

物凄い形相と勢いに、俺の方が慌てて止めに入る…だが、ネコは黙つて連城を見据えて言つた。

「治るか、治らないか…ちゃんと診てないし…やつてみないと、わからんないよ。」

「治せるのか！？」

「ナオつ！？」

「わからんない…多分『氣』を補充して、流れを正常にしてやれば大丈夫だと思うよ？後ねえ…此所に住むのは、ちょっととね…。」

「この場所に、何か問題が有るのか？」

「場所…ん…、場所はいいんだよねえ。たださあ…高過ぎるんだよ。」

「…」

「高さに…問題が有るのか！？」

「高過ぎて、地の『氣』がね…上がつて来れないんだと思うよ？お姉さん、何年此所に住んでるの？」

「1年半程になる…。」

「ふうん…それ迄は？」

「芝浦に住んでいた。」

「芝浦？」

「芝浦埠頭だ。」

後ろに控えていた山崎が、スッと東京都の地図を差し出した。

連城が芝浦周辺のページを出して指差すと、ネコは俺に視線を向けて尋ねる。

「此所って、昔から有る所?」

「埠頭だからな…港はあつたかもしけないが…。」

「地面は?」

「え? 地面?」

「それは…埋め立て地かとこいつ事でしょつか? こいつ事ないが…、答えはノーですが。」

「そう…なんだ。ちやんと、地面の上に住んだ方がいいよ…あのお姉さん。」

「だが、俺は長年此所に住んでいるが、何とも無いぞ?」

「そりゃあ…連城さんは…。」

そう言つて、急にネコはグラグラと笑い出した。

「柴さんもわあ、駄々漏れしてるけど…連城さんは、噴火してるもん!」

「何の話だ?」

連城がいぶかしむのを、俺は補足して説明する。

「『氣』が…溢れていると言つています。」

「金色でねえ、凄く濃くて…ハチミツみたい。飛び散つてるよ、ほら…。」

そう言つてネコは指で掬つ仕草をすると、ペロリと舐めて甘いと笑つた。

「だから、不思議なんだよね…連城さん」んなに濃くて噴火してるので、何でお姉さんあんなに薄いんだろう? 仲いいんだよねえ?」

「…それはもう。」

連城の背後から、山崎が答える。

「やつぱり、診てみないとわかんない。本当は、連城さんの『氣』を分けて上げるのが一番いいんだよ…好きな人が、一番元気になると思うよ?」

「椿を…治してやつてくれないか?」

「…お断りします、クローネ！…佐伯さんから、お聞きになつていらつしるでしょつー？」

「柴…お前が乃良を大事に思う様に、俺にとつても椿は掛け替えの無い存在だ。だから…取引きしょつと言つていろ。」

「クローネ！？」

「乃良…西嶋画伯の絵…相続税は、全て俺が持つていい。何なら、あの別荘も手に入れてやる。だから…椿を…治してやつてくれないか？頼む…この通りだ。」

床に跪く連城を、ネコは醒めた瞳で見詰め、硬い表情を見せた。

「…私…要らないって言わなかつたつけ？絵も放棄するつて…況してや別荘なんて、端から相続する事なんて考えて無いしつ…！」

「…ナオ？」

「金持ちつて、だから嫌いつ…何でもお金積めば、思い通りになると思つてつ…連城さんも、あの男達と一緒に！？自分の欲望の為にお金積んで…『神の女』を買いに来た奴等と一緒に…！」

「落ち着け、ナオ！」

俺はネコを抱き込むと、興奮して泣きじやぐる小さな躰をそつと撫で続け、大丈夫だと諭した。

「クローネ…俺だつて…貴方に金を借りて、絵を手に入れる事も考えた。だけどナオが止めたんです！貴方と仕事がじづらくなると考えて、ナオは…俺と貴方が対等で居られる様に…。」

「…済まない…だが、どんなに罵られ様が、蔑まれ様が…俺は椿を治してやりたい！その方法が有るなら…どんな汚い事だらうがやつて退けるだらう…。」

啜り上げながら俺の胸に縋り付いていたネコは、視線だけを連城に投げ掛けて言つた。

「…なら、何で取引きなんて言つの？何で、命をお金で買つみたいな事言つのよ？」

「それは…。」

「私…お医者さんじや無いし…治せるかどうかも、わかんない…。」

「それでも……可能性が有るなら、どんな事でも試したい……」

「なら……頼めばいいじゃん。」

「え？」

「一言、診てやつて欲しいって……言えばいいじゃん……？」

「ナオつ！？それは……。」

俺は慌ててネコを連城から隠す様に抱き込もうとしたが、ネコはその腕を解いて涙を拭い、居住まいを正して連城と対峙した。

「知り合い……つて言うより、友達としてなら……私は連城さんのお願い、聞いて上げてもいいよ？」

「本当かつ！？」

「但し……私一人では無理。」

「どういう事だ？」

「私一人の力じゃ無理なんだよ……柴さんの協力が無いと……無理だと思う。私の『気』が持たないから。」

連城は、ネコから俺に視線を移し懇願した。

「頼む、柴……椿を……救つてやつてくれ！……その為なら……。」

「嫌だよ、連城さん！」

ネコは、再びピシャリと連城の言葉を遮った。

「私……柴さんの『気』を、売る様な事したくない……お金に代えられる物なんかじゃ無い！！」

「そうだつたな……改めて、柴……頼めないだろうか？」

「……ナオ……大丈夫なのか？」

「治せるか？……やってみないと……。」

「違うつ！……お前自身の事だ！！この前みたいに……人の役に立てる

なら死んでもいいなんて……考てるんじゃねえだろうな！？」

連城がギョッとした顔で俺達を見詰める中、ネコはフワリと俺に笑顔を見せた。

「柴さん……。」

「許さねえからな……そんな事考えてるんなら……。」

「違うよ、柴さん。大丈夫……。大事な人の為に……出来る事をやりた

いだけだよ。でも、柴さんの力に頼らなきゃ、私何も出来ないから
さあ…柴さんが駄目だって言うなら、止めるよ?」

「……お前は…ズルいな?」

「何で?」

「俺が…お前に惚れてて…断れない事、わかってるだろ?」

「そんな事無いよ…柴さん、頑固だもん!!」

アハハと笑うネコに根負けし、俺は連城に向き合った。

「承知致しました。但し、ナオの躰を優先させて頂きます。宜しい
ですね?」

「承知した…宜しくお願いします。」

連城は俺達に深々と頭を垂れ…ネコはニーッコリと俺に笑い掛けた。

施術する

鷹栖総合病院の精神科カウンセリングルームでは、3人の男達が頭を寄せ合っていた。

「僕としては…やはり、きちんと証明されない物を信じるっていうのは…だからこそ、データを残したいって思うんですよ。音戸さん の施術前と後のデータをきちんと見て、その上で判断したいですね。」

「どうかなあ…七海先生の気持ちもわかるけどね…連城と椿ちゃん の主治医だしね。」

「それって、ナオを信用して無いって事ですか？」

「ん…僕も医者の端くれだからね。武蔵先生の精神科つてのは、心 の問題も有るから、目に見えない物でも受け入れられるかもしれない いけどね…僕は内科医だから、データ優先主義なんだ。」

「もしさあ…その連城のデータで結果が出なければ、七海先生はどうしたいのかな？」

「僕としては、椿さんの施術は反対するでしょうね…。」

「それで連城が納得すると思う?」

「怒る…なんて物じゃ無いでしょうね。クローネは、椿さんの事に なると…。」

「狂うからな、アイツは…。」

ネコが椿の施術を了解するに当り、先に連城を施術したいと言つた が、これに七海が反発したのだ。

七海にしてみれば、主治医としてネコに領海侵犯を許してはプライ ドも許さないのだろうが、怪しい施術を主に受けさせる訳に行かな いのだろう。

ネコはその遣り取りを聞いて、自分は遣らなくても別に構わないが と七海に気遣いを見せた。

途端に機嫌が悪くなる連城を見かねて、山崎が武蔵に相談してはど

うかと助け船を出したのだ。

病院に着いた途端に頭を寄せ合つて相談する男達を尻目に、ネコはさつやと血のりリラクゼーションシアに潜り込み、風の音を聞いている。

「データで結果が出たとしても…それはそれで問題なんだよね。」「どういう事ですか？」

「だって…医者の必要性無くなるでしょ？手術も薬も必要無いってこれ、医者にとつては脅威だよ？もし、データが流出でもすれば、世間も黙つて無いしね。」

「正に神の御業ですね…。」

「冗談じゃ無い！！やつと平穩な日々が送れる様になつたんですねよ！？そんな事なら…。」

「そつならない様に、細心の注意を図らないといけないって事だね？」

「彼女は…面倒さんは、どう考えているんでしょうか？」

「あ…言わない方がいいよ？」

「そつですね…面倒な事からは、極力逃げたがりますから、ナオは…。」

そう武蔵と俺が笑つた時、背後から声が掛かった。

「私が…何？」

「いや、何でも無い。」

「…感じ悪う～い！！武蔵先生、このひつて他にもシリーズ有るの？」

「有るよ。見てみるかい？」

うんと答えて、ネコは武蔵と共に資料棚を漁っている。

「柴さんは、正直どう思われます？」

「実際に俺は、ナオに施術をされている人間ですから…調べた訳ではありませんが、躰が楽になつたのは事実です。それに、西嶋画伯の件もありますし…。」

「あ…白内障を治したつていう？」

「武藏先生に聞いて気になつたので、西嶋画伯の通院していた眼科に確認を取りました。かなり進行した白内障だつた様で、とても遺作の様な絵が描ける状態では無かつたと…殆ど見えない状態であったのは事実の様です。」

「よく、その医者が話したね？」

「そこは…昔のシテが有りますから…。」

「成る程ね…。」

腕を組み難しい顔をした七海の前に再びネコが姿を見せると、心配そうに尋ねた。

「まだ、難しい話…してるのでいいかな？」

「…音…さん、ちょっと聞いてもいいかな？」

「なあに？」

「君…どいまで病を治せるのかな？」

パチクリと田を見開くと、ネコはクスクスと笑いだした。

「七海先生、私…何でもかんでも治せる訳じゃ無いよ？」

「出来る事、出来ない事…わかってるのかい？」

「少しならね。生まれた時から悪い所は無理なんだよ。あと、心の病気も無理。それから…癌みたいに、躰に巢食つてしまつた物も無理だつた。おじいさんで試したんだけどね…駄目だつたよ。」

「後は？」

「ん…取るのは得意だけど、躰に飲み込むから苦しくて、上げるのは苦手だけど、疲れるだけつて事?一番楽なのは、乱れてるのを治す事かな?」

「どういう事?」

「…わかんない。」

俺が鬼の形相で睨み付けるのを見て、ネコは小さく肩を竦めると後退りする。

「待てつー?どうこう事だつー?」

逃げ出そうとするネコの腕を掴むと、怯えた様に嫌だよと振り切ろうとする。

「躰に…飲み込むつて！？どういう事だ、ナオつ！？」

「わかんないもん！痛いよ、柴さん！？」

「わからない訳があるかつ！？お前の施術とは…病を自分に移して癒す事なのか！？そんな事をすればっ！？」

「平氣だもん！…平氣なんだもん！…ちゃんと…消えて…無くなるもん…。」

半泣きになりながら訴えるネコの様子を離れて見ていた武蔵が、七海の肩を叩いて部屋を出る。

部屋のドアが閉まる音と同時に、俺はネコの躰を抱き込んだ。

「止めよう、ナオ…そんな事迄する必要は無いんだ。」

「大丈夫なんだって、柴さん…本当に消える…淨化されるんだよ。」
「お前が…施術をする度に苦しむの見てるんだぞ！？苦しいんだろ？が…消えて無くなる迄は、その身で…病を受け止めるんだろう？そんな事…させられる訳がねえじゃねえか！？」

俺の身が震えるのをネコは優しく労ると、小首を傾げて見上げた。

「…嫌なの、柴さん？」

「ああ、嫌だ！…絶対させたくないねえ！…」

「困ったね…もう連城さんと約束したし…私、あのお姉さん助けてあげたいよ？それに、病気じゃ無いかもしないでしょ？」

「…嫌だ。」

「わかった…今度で終わりにする。今度だけ…ね？今度だけ、力貸して下わい。」

「…本当にだな！？」

「うん。」

「約束だからな！？」

ネコは俺に抱き付いて、何度も頷いて見せた。

溜め息を吐いて、ドアの外の2人を招き入れて事の次第を説明すると、驚いた七海がネコに質問をぶつけた。

「じゃあ、本当に病を吸い取るっていうのかい！？」

「ん…例えばね、熱中症の人居たとして…私が出来るのは、躰に

溜まつてゐる熱や痛みを取り去つて飲み込んで上げると、乱れた『氣』を治して、足りない『氣』を与えて上げる事だけなんだよ。水は与えて上げられないの。ちゃんと水を飲んで貰わないと、助からないんだあ。他の病氣もそう…私には『氣』しか与えてあげられないから、躰が足りない物は、薬や食べ物で取り入れないと無理なんだよ。』

「その『氣』を与えたり、治したりすると…どうなるんだい？」
「躰が、自分で治してくれるよ?元々自分で持つてゐる力を少しだけ手助けしてあげるんだって、お母さんが教えてくれた。おばあちゃんの本に、書いてあつたんだって…自然…ち…。」

「自然治癒力だね?」

「そうそう、それ…。お医者さんの薬を飲んで、よく効く様に手助けしてあげたりね。昔は、薬なんかも作つて飲ませたらしいよ?『榊の巫女』つて、お医者さんもしてたんだってさ。」

「成る程…ね。如何にも原始的かつ合理的な方法だが…一番人の躰には…。」

「何?どういう意味?」

「いや…凄い事だけど、やはり秘密にした方がいいな…リスクが大き過ぎる。」

「今回限りです…一度とさせません…!」

「その方がいいな…うん。」

七海が頷いて、武蔵と顔を見合せ苦笑いするのを、ネコは理解出来ず、不思議そうに見上げていた。

連城の施術では、高血圧氣味な結果しか出なかつた様で、相変わらず『氣』が濃くて噴火しているとはしゃいでいたネコも、椿の躰を診た途端に眉を寄せた。

「…どうなんだ?」

「薄いといつうか…何でこんなに少ないかな?それに…。」

ネコは微妙な顔をして、椿の耳元に何かを囁いた。

「…ああ…大丈夫よ。ジンも七海先生も知ってるから。でも、よくわかったわね？」

「何だ！？」

焦る表情を見せる連城に、椿が笑いながら答えた。

「避妊手術の事よ…内緒にしているかもしないって、気遣かつてくれたの。」

「影響が有るのか！？」

「女人の…力の源だからね。自分で作るには、限界が有るのかも…。」

「椿、やはり…。」

「駄目よ、ジン…」これだけは、譲れないわ。乃良ちゃん、何か別的方法が有る？』

そう言つて椿が微笑むと、ネコは真つ赤になりながら答えた。

「連城さんから『氣』を貰えればいいんだけど…お姉さんね…下手なんだよ。」

「下手？何が？」

「自分の『氣』は、連城さんに与えてるのに…他の人や…自然からも、『氣』を取り入れるの、物凄く下手なんだよ。それに…ね…。」顔を茹で蛸の様に真つ赤にして俯くと、ネコは消え入りそうな声で小さく囁いた。

「…本当はさ…エッチするのが、一番ね…効果が有るらしいんだけどさ…お姉さん、手術してるから…なかなか…ねえ？」

「他に方法は！？」

「…スキンシップ、してる？」

「ああ…。」

「…どこに…一番してる？…あ、キス以外で…。」

そこまで言つと、ネコは真つ赤になつた顔を手で覆い、床に座り込んだ。

「もう…超恥ずかしい…なんでこんな、他人のエッチな事迄、

リアルに聞かなきやなんないのつ！？信じられないつ！？

居合わせた大人達は、啞然としてネコを見下ろし…やがてクスクスと笑い出した。

「…柴…お前、一緒に暮らしてて…乃良とまだ…。」

「…」想像にお任せします。」

「あれ？そんな事言つていいんですか、クローネ？柴さんも、貴方程じや無いと思つますよ？」

「七海！？」

そつよねと、隣で椿も口口口と笑つた。

「で、一番スキンシップする場所は…何処なんです、クローネ？」

椿と顔を見合せた連城も、眉を寄せる。

「どこかしら…特にて考えた事無いから…。」

しゃがみ込んでいたネコは、ようやく立ち上がり椿の手を握つた。「遣り方覚えたら、きっと…自分で出来るから。全身で…取り込む…から…。」

手を握つていたネコの眉が、苦し氣に寄る…俺は慌てて、背後からネコの躰を抱き締めた。

「柴さん…そのまま抱いててね…。」

ネコの顔は益々の歪み、息を荒くする。

最初は平氣そうだった椿も、やがて顔を赤く上氣させ、

「…手が…熱いわ…。」

と、恍惚の表情を見せ出した。

「ナオ…そろそろ…。」

「…もう少し…もう少しだけ…。」

様子を見ていた連城が、そつとネコの頭に手を置き、頭を揉む様に撫でた。

「…乃良、無理するな。一気に治す必要は無い…徐々にでいいんだ。」

「…」ネコは頷いて、ようやく椿の手を離すと、俺の腕の中に崩れ落ちた。それから口を空けずに、ネコは連城宅を訪れて施術を行つた。

数日すると、朝からいそと荷造りを始め、俺が出社すると同時に30階に訪ねる迄になつた。

「俺が夜に行く迄、絶対に施術始めるんじゃねえぞ？」

「やらないよ。柴さんの仕事中に倒れて、呼び出したら困るでしょう？」

フフンと鼻を鳴らし、腕の中でネコは大威張りで答えた。

「何して過ごしてるんだ？」

「家に居る時は、お料理教えて貰つたり、お喋りしたり…連城さんが一緒に時は、出掛けたりもするよ？今度、家を見に行くの付き合つてつて言われた。」

「外出…平氣になつたか？」

「うん。あの2人と出掛けると田立つちやつて…嫌でも視線に曝されるから、大分慣れたよ。この分なら、近い内にバイトも出来そうだなつて思つてるんだあ。」

「それは、まだ先…椿さんの施術が終わつてからだな。お前の体力が持たねえだろ？」

施術の後はグツタリするネコを、毎日抱いて帰り『氣』を送り込む日が続いているのだ。

「それにしてもさ…連城さんって…子供だよね？」

「はあ…？」

「お姉さんと仲良くなつたらさ…焼きもち妬いて、意地悪するんだよ…？」

「だよ…？」

「意地悪？」

「美味しい物』馳走してくれるのはいいんだけど…トザートのケーキに付いてるチョコとか、フルーツとか…後で食べようと思つて避けてたら、わざと横からかつ掠つんだよ…」

「…連城さんが…か？」

「アイスキャンディー食べてたら、私の腕掴まえてかじるしつ…」

連城は…余程ネコを気に入つて、からかつているのだろうと、頬が緩む。

「施術の方の調子は？」

「『氣』を取り込む事にも、大分慣れたみたい。連城さんの『氣』を受け入れる練習も順調だしね。」

「…いつ頃迄かかる？」

「え？… そうだなあ… 2月位？3月には、もつ自分達で循環出来ると思ひよ？」

そうかと答えて、俺はネコを抱き締めた。

パーティーする

週末のクリスマスイブに自宅でパーティーをしようとした連城が言い出しき、ネコと椿は連日準備に走り回っている。

京子や真、鉄也達と集まる予定だったとネコが話すと、佐伯も参加するからまとめて皆でやろうと、連城はサラリと言つて退けた。

今日はクリスマスツリーを買って飾り付けをした、明日はケーキを注文しに行くと、毎日愉しそうに報告するネコを見ていて、やつと人並みの楽しみを味あわせる事が出来ているのかとホツとしていた。そんな穏やかな日常が過ぎる中、事務所に一本の電話が入った。

「よう、柴。元気でやつてるつてなあ？」

「堂本か！？お前、何で此所の番号！？」

「そんな事より、訃報だ。榊の組長…亡くなつたぞ。」

「！？」

「ウチの組で引き取つてたんだがな、昨夜心筋梗塞で亡くなつた。畠の上で死ねたんだ、大往生だつたんじやねえか？」

「葬儀は？」

「ウチで取り仕切る。さつき佐久間組長と、それから連城とも話しあんだがな…お前、来るなよ。」

「何故だ？ナオにとつては祖父だぞ！？」

「だから…相談したんだよ、あの2人に…！公に組長の娘として知られてるのは、沙夜さんだけだからな。その沙夜さんは佐久間に入つて、懷妊したつてな？まあ、そうなると誰も手は出せねえし、葬儀も欠席させるとよ。んで、お前の所に居る娘…乃良だつたか？」

「ナオが、どうした！？」

「存在は知られてても、顔はバレてねえからな。そこへノコノコ、孫だと名乗つて葬儀になんぞ出席させてみろ！？『榊の女』の跡継ぎの顔を、世間に公表する様なもんどううが？」

「確かに…。」

「まだなあ……諦めて無い馬鹿な野郎が居ないとは限らねえだろ？まあ、爺さんには好い感情持つてねえだろ？」「時期を見て知らせてやりやあいいんじやねえか？」

了解した旨を話すと、堂本は今度こそ会わせると笑つて電話を切つた。

「凄い家だわね……つて、住んでるのがあの2人じゃ納得つて感じだけど……。」

「まあな……だが、あの2人も多分近い内に引っ越すぞ？」「

連城宅の驚く程広いリビングには、ネコの話していた大きなクリスマスツリーが、窓辺にはキャンドル等が飾られている。テーブルには椿とネコが作ったカナッペやオードブル、佐伯が買つて来たフライドチキン等が所狭しと並んでいた。

俺の隣でシャンパンを飲んでいる京子が、愉しそうに椿や佐伯を慕うネコを見て、安心した様に笑う。

「ネコちゃんも、すっかり馴染んだみたいなのに……勿体無いんじや無いの？」

「いや……金持ちの相手は、俺の性に合わない……それに今の部屋は、ナオの躰に良く無いのはわかつてるからな……。」

「それ、高収入蹴る程の理由？」

「金持ちが、連城さんみたいな人ばかりじゃ無いのは、お前だつてわかつてるだろ？あの人の持つて来る依頼は、今迄通り受けるつもりだが……後は、庶民の依頼で充分なんだよ。」

「どこで事務所探すの？新宿に戻るの？」

「そうだな……土地勘は有るが……まあ、焦らず探すさ。」

チャイムの音が鳴り、外出していたホストの連城が帰つて来ると、一同は改めて乾杯をした。

「柴、ちょっといいか？」

隣に来た連城に誘われ、書斎に入りドアを閉める。

「「」の間の話…決心は変わらないか？」

「申し訳ありませんが、やはり事務所は辞めさせて頂きます。しかし、今の事務所に残りたい人間も沢山居りますので、事務所自体の存続には問題無いと思いますが？」

「俺はお前を信用して事務所設立の援助も、仕事も頼んで来たんだぞ？残つた人間に援助するつもりは無いが…。」

「事務所も軌道に乗つて来ましたし、折角着いたクライアントを逃すのは得策ではありません…金持ち相手に、上手く立ち回れる人間も沢山居ります。誰か良い人物を、所長に据えて存続して下さい。」

「…そんなに嫌だったか？」

「俺の性に合つて無かつただけの話です…正直、クライアントを殴らなかつたのが不思議な位ですよ。」

そう言って、俺は苦笑を漏らす連城に笑つて見せた。

「先日話した様に、クローネからの依頼は受けますが、他は庶民相手の…自分の納得行く仕事を選ぶつもりです。それに…。」

「…何だ？」

「前になオの話していた事が気になつたので…。」「え？」

「椿さんの施術を決めた時、ナオは此所が高過ぎて地の『氣』が届かないから良く無いと言いました。それは…椿さんばかりで無く、ナオの為にも良く無いと思いましたので…。」

「そうか…いつ頃を考えている？」

「まだ事務所も、住む場所も決めていません。春頃にはと、漠然と考えていますが…。今の事務所からは、河田鉄也を連れて行きます。ご了承下さい。」

「わかった…榎大善の話、聞いたか？」

「先日、堂本から電話が有りました。葬儀は…。」

「無事に済んだ。榎の自宅で執り行われた。」

「まだ、残つてたんですか！？」

俺が驚いて尋ねると、連城はニヤリと笑つて答えた。

「… とか… 手が付けられなかつたと言つべきだな。歴代の『神の女』の墓… あれが有る限り、あそこを無闇に掘り返せなかつたんだ。一番新しい遺体が沙夜さんの母親だが… あれだけの遺体が出てくれば、警察のみならずマスコミも大騒ぎだらうからな…。」

「… そうですね…。」

「沙夜さんは、前のご主人が戸籍を復活させ、書類上は遺棄児童として記載されている。だから、戸籍上神の家は絶えた事になる。堂本の若頭である森田が、神大善が亡くなる迄あの土地に手を着けなかつたのは、山程出て来る遺体を知らぬ存ぜぬで突き通す為だ。」

「… 成る程…。」

「マスコミが騒げば、乃良の耳にも入る… 対処してやれ。」

「わかりました。」

「神の土蔵だけは、取り壊したそうだ。あの座敷牢は、人の目に触れさせない様にしてくれた。中に有つた『神の巫女』に関する膨大な資料は… 全て佐久間組長が引取つた。」

「… そうですか。」

兄貴と沙夜さんがその資料を引取つたのは… 沙夜さんに生まれて来る子供の為だけじや無い… ネコの為だろつ。

「柴… 今日、西嶋敏文氏と松原弁護士に会つて來た。」

「え?」

「相続の件、正式に断つて來たぞ。」

「… ありがとうございます。」

「まあ、あつちは喜んでいた… 相当金に困つていたらしいからな。」

「ナオも… そんな事を言つていました。画伯の生前から、親子で揉めていたそうです。」

「… 此所から先は… 僕の独り言だ…。」

「え?」

胸元から赤い箱を取り出し、中の煙草に火を点けると、連城は紫煙を吐き出した。

「画伯の遺作に関して、モデルの女性より肖像権の侵害を訴えるに

はどうすればいいか、相談を受けている。画伯はモデルの承諾無しに絵を描いてるし、画伯の絵が写真並みに潔癖な写実主義なのは周知の事実だ。しかも、そのモデルに遺作を相続させるという遺言状が公開された後で、モデルの承諾無しに遺作展を行っている。この精神的な辛さは筆舌に表へし難い……どうすればいいかと相談に来られている…。」

「クローネ…。」

「まずは、肖像権の侵害を訴える手続きをし、今後その絵を世間に目に触れさせない様にすれば如何かと、私は進言した。そうすれば、展示は勿論、販売する事も出来無くなる…私には、それを勝訴に持つて行くだけの自信がある…。」

「…。」

「結果、敏文氏は…何とか穩便に事を収めて欲しいと懇願して來た。」

「しかし…。」

「柴…遺作は…全て、俺が買い取つた。」

「クローネっ！？」

「俺の手元に有る限り、あの絵が世間の目に触れる事は無いからな。」

「…一体、幾らで…。」

「それは、お前が知る必要は無い。まあ、脅しが利いて思つたより安く手に入った。俺にしてみれば、いい財産が手に入つたってだけの話だ。」

「しかし…。」

「乃良には言うなよ？少なくとも10年は寝かせる積りだ。その頃、乃良の気持ちが癒えていたら、どこかに展示するかもしけんがな。それ迄は内緒にしておけ…又物凄い勢いで怒り出すからな。」

アハハと連城は笑うと、席を立ち俺の肩を叩いた。

「…ありがとうございます、クローネ…。」

「条件が有るが…いいか？」

「…何でしょう？」

「施術が終わって、互いに引っ越した後も…乃良と椿が付き合いを続ける事を許して欲しい。」

「それは…『氣』を与える事でしょうか？」

「その必要は無い…乃良がそう言つてくれた。施術が済み、椿が俺の『氣』を受け取れる様になれば、通常の生活を送れるそうだ。」

「…そうですか。」

「俺が乃良に求めるのは、椿の友人としてあり続ける事…乃良の姉貴分として、今後も付き合う事を許して欲しい。」

「…それは、本人達が決める事でしょう？」

「だが、お前が反対すれば、乃良は…。」

少し不安な表情を見せて、立つたままの連城が俺を窺つた。俺は溜め息を吐いて立ち上がり、連城の前に手を差し出した。

「こちらこそ、宜しくお願ひ致します。」

「ありがとう、柴…。」

連城が、俺の手を力強く握つた。

「酷いよ、連城さん！？又私のチョコ食べたー！」

「コレが、一番旨いんだ。」

連城がネコの手に持つたチョコレートを半分がじり、ニヤリと笑つて見せた。

「全く子供みたいな奴だ…だが、乃良ちゃんを苛めたくなる気持ちは、少しわかるな？」

佐伯が笑いながら、俺のグラスに酒を注いだ。

「そうですか？」

「お前は、そんな事無いか？」

「どうでしょう…俺の兄貴も、ナオと出合つた当初はよく苛めて泣かせてましたが…。」

「そりだらう…少し苛めて、膨れつ面をさせてみたくなる…そんな

キヤラだな、乃良ちゃんは……。」

アハハと豪快に笑った後、少し優しい目をして2人を見詰め、佐伯は続ける。

「あの年頃の椿ちゃんと……ああやつて過ごしたかつたんだろうな、アイツは……。」

「え？」

「高校1年迄は、長い休みになる毎にああやつて過ごしてたんだ……その後、結婚する迄は……擦れ違いや、事情が許さない事もあって、あんな風なやり取りを出来なかつたから……連城も椿ちゃんも、乃良ちゃんを介して思いを繋げてるんだろうよ。勿論、充分に楽しんでる顔だがな、ありや……。」

そう話す佐伯の視線を追うと、ずっと移動して目の前の影に止まる。

「……どうして助けてくれないかな、柴さんは！？」
ネコがプウと膨れ面を見せると、隣で佐伯が爆笑した。
「どうしてつて……助けなくとも、お前強いだろ？？」
「そういう事じや無いもん！」
「何を怒つてる？」

「そりや、怒るわよ。」

京子と真が、グラスを持つてネコに加勢する。

「わかつて無いですね、柴さん……。」

「そうよ、朴念！」

「あ、それは俺も思います、総長……。」

「お前迄加勢するのか、鉄！？」

「いえ……総長が、時々……もどかしい位に……その……。」

「ハツキリ言つてやりなさい、鉄！？」アンタの総長様は、肝心な所で二ブチンなんだからつ……！」

「わかる～！…柴さんつて、そんな感じ……。」

京子と真の大虎コンビに溜め息を吐き、俺は鉄也に声を掛けた。

「鉄！…お前、この2人ちゃんと送つて行けよ！？」

「えつ…？自分がですか！？」

「当たり前だ！天宮さんは鬼も角、お京は曲がりなりにも刑事だぞ？帰りに何か仕出かしたらどうする！？」

「そうだ！！忘れてた…幸村は放つて置くと、交差点の真ん中で泳ぐ様な奴だった！！」

佐伯がギョッとした顔で、既に目が据わって一タリと笑っている京子を見詰めた。

「お京…お前、佐伯さんにも迷惑掛けたのか！？」

「あれは、初めて佐伯さんから一本取った時です！！一本取れたら浴びる程飲んでいいと…。」

「本当に…浴びたんだ、幸村は…。」

ワアワアと言い出した京子に呆れ、鉄也に耳打ちする。

「お京は…何かあったのか？」

「さあ…ですが、昨日は完徹だと言つてました。」

「馬鹿野郎っ！！直ぐに連れて帰れ！！」

鉄也が京子と真を引き摺つて帰ると、俺は連城と椿に頭を下げた。

「申し訳ありません…お騒がせ致しまして。」

「いいえ…賑かで楽しかったわ！ねえ、ジン？」

「そうだな。」

「本当に五月蠅いばかりで…。」

「私ね、柴さん…クリスマス祝うのって、これが2回目なの。去年は、ジンと啓吾君と3人で食事したんだけど…。」

「…食事だけじゃ無いだろ？？」

連城が、椿に優しく微笑む。

「でも、大勢でクリスマス会なんて初めてだったから…凄く楽しかったわ！！ありがとう、柴さん…！」

椿は、嬉しそうに微笑んだ。

翌日、ネコを誘つて街に繰り出した。

この時期の街は、クリスマスと正月の「ティスプレイ」が混在し、人出も多く賑かな事この上無い。

普段は全く化粧等しないネコが、今日はうつすらと化粧をしている。聞けば、顔の傷を上手くカバー出来る方法を椿に習つたらしく、試してみたくなつたらしい。

カフェで珈琲を運んでもると、席に着いていたネコに数人の男達が話し掛けていた。

俺に気付いたネコがニッコリ笑つて手を振ると、男達は引響つた顔を見せスゴスゴと退散する。

「何だつたんだ？」

席に着いた俺が暖かい珈琲を前に置くと、エヘヘと嬉しそうにミルクを入れながらネコは笑つた。

「…ナンパされちゃつた。」

「え？」

「だからあ、今から一緒に遊びに行かないかって、ナンパされたの！」

ブラック珈琲を啜りながら、俺は黙つて目の前のネコを見詰めた。俺の回りに居る女達、椿は別格としても、京子や真はキリリとしたキャラアーマンで、いい女の部類に入るだろう。

沙夜も男の庇護欲をそそる容姿だという事は、いい女という事だ。ネコを容姿云々で見た事は…正直言つて無い。最近娘らしくなつたとはいえ、小柄でアンバランスで…可愛らしいと思っていたのは、正直惚れた欲目だと思つていた。

「彼氏と来てるんだって言つても、なかなか信用して貰えなくてさあ…柴さんが睨んでくれて、助かつたよ。」

「睨んでたか？」

「うん…眉寄せて凄い顔してたよ?」

アハハと笑いながら珈琲を飲むネコを見て、マズイと思つた…コイツを可愛いと思うのは、俺だけでは無いのだ。

今から大人に成るに従つて、あの色香が隠せ様も無くなつた時…どれだけの男達がネコに群がるのか…まるで発情期の雌猫に群がる雄猫の如く…。

「どうかした?柴さん?」

「…いや。」

訝しげに覗き込むネコに、俺は違う話題を振つた。

「連城さんの家は、決まつたのか?」

「まだだよ…場所が良くて家が気に入らなかつたり…警備するのに向きだつたりつて…連城さんと堀川さんがワアワアやつてゐる。」

「椿さんは?」

「お姉さんは…笑つて見てるよ。自分はどこでもいいんだつて…連城さんの気に入つた所でいいつて…連城さんねえ、お姉さんの洋服迄選ぶんだつて!」

自分がネコに執着するのも度が過ぎると思つが、連城に比べたらまだ可愛いいものだと思う。

「ナオ…春頃に、引越そうと思ひ。」

「…どこに?」

「まだ決めてない。」

「仕事は?事務所と遠くなつたら、不便にならない?」

「あそここの仕事も、手を引く事にした。」

「…何かあつた?」

不安そうに眉を寄せるネコに、俺は笑い掛けた。

「何も無い…連城さんも了解してくれた。引き続き、連城さんの依頼には応える積りだしな。」

「そう…新宿に戻るの?」

「どうするかな…お前は、どこがいい?」

「私?」

「あそこから離れるのは嫌か？」

「そうじゃないけど…引越すなら、前みたいに新宿にアパート借りようかなって思って…。」

「…俺と離れたいのか…新宿に戻りたいのか…どうちだ?」

「俺の冷たい視線と声に驚いたネコは、ブンブンと頭を振った。

「言葉…間違えた?えっとね…説明するから…えっとね…。」

「そう言いながら、ネコは涙ぐみ慌てて言葉を紡ぐ。

「昨日ね、パーティーで…真さんからアルバイトに誘われて…出版の仕事のアシスタントやらないかって。前も掃除しながら見てたし、会社忙しいけど…中の人達いい人ばっかだし…だから、柴さんの仕事や住む場所が新宿の近くじゃ無いなら…前みたくアパート借りようかなって…思って…。」

真っ赤な顔をして俯くネコの頭に手を置くと、俺は溜め息を吐いた。
「なら…何故新宿がいいって言わない?新宿に住みたいって言え、いいだろ?」

「だつて…柴さんは仕事…。」

「まだ、どこで事務所を立ち上げるかも何も決めて無い…我儘言つていいんだ、甘えろつつたろ?」

「…。」

「それに…俺は、もうお前と離れて暮らす気はねえぞ!…危なっかしくて、放つとけねえからな!」

「酷い。」

「堪えられ無い…我慢出来無い…って、言つたろ?」

「…ん。」

「新宿で、事務所と住む場所を探す…それでいいな?」

「…うん。」

俯いたまま頷いて、グスンと鼻を鳴らすネコの髪をグシャグシャとかき混ぜて、幾分声を和らげて尋ねる。

「クリスマスプレゼント、何がいい?」

「え…何も無いよ?この間、音楽プレイヤー貰つたし…。」

「あれは、誕生日プレゼントだらう?」

謙虚と言つより、この物欲の無さは…時折こちらを寂しくさせる。

結局、コイツは甘え方を知らないのだ。

ネコにとつて甘えとは、精神的な物だけだと思つてゐる節がある…だが、それさえも俺の立場や仕事を理由に、殆ど自分の腹に飲み込んでしまう事の方が多い。

一緒に街を歩いていても、手を繋ぐ事は疎か隣に並んで歩く事をへ躊躇する…顔に傷を負つてからは、それは余計顕著に表れた。食事等を取る時に同席する以外は、人気の無いのを確認してしか近くに寄つて来ない。

昔飼つてた猫に似た様な奴が居た…いつも少し離れた所からじつとこちらを窺つてゐる。

他の猫が寄つて来る時には絶対に側に来ないが、誰も居ない時には俺の背中の後ろで丸まつてゐた…自分からは絶対に膝にも乗らないし、他の猫が来ると飛んで逃げるが、抱いてやるとグルグルと喉を鳴らして顔を擦り寄せる…ネコはアイツにそつくりだ。

カフェを出ていきなり手を繋ぐと、驚いた様に振りほどかれた。

「自分で彼氏つて、言つたんだろ?」

「え…そうだけど…。」

「じゃあ、恋人気分味あわせろよ?」

「でもさ…人、沢山居るし…。」

「だからだろ?誰も他人の事なんて気にして無いし、こう人が多くちゃ逸れて迷子になつちまう。」

再び強引に手を繋ぐと、最初こそ恥じらつてゐたが、直ぐに嬉しそうに擦り寄つて來た。

携帯ショップに足を踏み入れると、不思議そうに見上げ眉を寄せる。

「ボタンの調子が悪くてな…修理に出すんだ。」

店員との話の流れで、修理より機種変更の方が得だと説明されると、隣に座つて聞いていたネコの顔色が曇つた。

「お前のも、一緒に機種変更するか?」

「でも…私のどこも壊れて無いよ?」

「…一緒のがいいんだろ?」

「…。」

「クリスマスプレゼント… ハレにするか?」

「…うん。」

恥ずかしそうに頷いて、ネコは自分の携帯を出した。

2人で機種を選び、食事に行き…ハタと思い付いて立ち止まる。

「どうしたの?」

「…ナオ、ストラップ…。」

「…。」

「嫌か?お前、あれ以来…携帯に何も付けてねえだろ?」

「…柴さんのも、一緒に変えていい?」

「ああ。」

「今度は、柴さんが選んで…!」

苦手なんだが…と呴きながら、以前鉄也が彼女にプレゼントするとシルバーアクセサリーを買っていた店があつたのを思い出した。確か…ストラップもあつた様な…。

携帯を受け取り、アクセサリーショップに入ると、ネコは驚いた様に目を丸くして店内を見回した。

「どうした?」

「いや…柴さんのイメージと合わないから…ちよつと驚いただけ。」

「どうこう意味だとネコを睨みながら、奥のショーケースに誘つ。

「いらっしゃいませ。」

「ストラップが欲しいんだが?」

「当店のストラップは、お客様の好みに合わせてお作りする事が出来ます…先ずはベースとなるベルトかチヨーンをお選び下さい。」

「どっちがいい?」

「柴さんに任す…!」

俺が、携帯に合わせた赤と黒の皮ベルトをチヨイスすると、店員は

トレーの上にそれを並べて言った。

「こ」のタイプですと、最大3個迄チャームを付ける事が出来ます。ベルトの端には、名前のアルファベットのチャームをチョイスする方が多いですね。」

俺は素直にKとこ」のチャームをチョイスし、ネコには迷わず田にラインストーンを埋め込んだ猫の顔のチャームをチョイスした。楽しそうに横から覗き込むネコが、クスクスと笑いながら呟く。

「流石に、あの犬じや可愛らし過ぎるねえ？」

「選んでくれよ。」

えーっと言しながら、ネコは牙の根元にラインストーンが配されたチャームを選び、黒のベルトの横に置いた。

「何か…あんまり、お揃いっぽく無いね？」

「そうか？」

俺は猫と牙のチャームをもう一組取ると、それぞれのストラップの上に置いた。

「3個付けるんだろ？」

嬉しそうに眺めていたネコはそっと手を出して、赤いストラップの下にKのチャームを置いた。

「…こっちがいいな。」

店員がニッコリと笑いながらセッティングしている間、俺達は店内を物色した。

「柴さんって、アクセサリー着ける人？」

「いや、着けねえぞ？」

「…前に、誰かのプレゼント選ぶのに、来た事があるの？」

少し口を尖らせるネコを見下ろし、可愛らしい焼きもちに笑みを溢す。

「鉄がな…前に彼女のプレゼント選ぶってんで、付き合わされたんだ。」

「鉄さん、そんな人居たんだあ！」

「言つなよ…その後、こっぴどく振られたんだからな…。」

出来ましたと店員に声を掛けられ、支払いを済ませると、店員が一ツコリと笑つて言つた。

「オマケに、赤いストラップに鈴付けて置きました。」

「え?」

「彼女さん…あまりに可愛かつたんで…。」

「どうもと苦笑いし、俺達は店を出た。」

ベッドの上でパジャマに着替えたネコが、無心になつてストラップを付ける姿を見て、思わずデジヤヴュかと目を見張つた。

そう…2年前のクリスマス…プレゼントの携帯に同じ様にストラップを付けて…。

「又私から何にもプレゼント無によ…こつとも柴さんになつてばっかりだね…。」

そう…前にも同じ様な事を言つて…。

「来年は、ちやんと用意するね…まあ、大した物上げれないんだけど…。」

「やつぱり…同じ…。」

ギシリとベッドを軋ませて躊躇寄ると、ネコは驚いた表情を見せた。

「…柴…さん?」

「…ナオ。」

「どうしたの?…溢れて…滝みたいだよ?」

「…ナオ…貰うぞ…。」

そのまま押し倒し、唇を重ねる…驚いたまま固まつていたネコは、慌てて携帯をサイドテーブルに上げよつと、腕を伸ばして逃れようとした。

「…柴さん…携帯…。」

「…いいから。」

「…いやあん…。」

ネコの小さな甘い悲鳴を聞いた途端、俺の中の何かがブツリと音を

立てて切れた。

ふつくらとした下唇を甘噛みしながらねぶり、小さな歯を分け入つて上顎を擦ると、ネコはピクリと痙攣して息を飲んだ。

怖がらせ無い様に優しくその肌を辿りながら、舌を絡めて吸い上げる。

甘い呻き声と吐息を飲み込んで大人の愛撫を繰り返し、そつと身にまとつているものを剥がすと、薄く敏感な肌は桜色に色付いていた。唇を落とすとその肌に赤い花弁が散る…ネコは躰をくねらせて、甘い息を上げ膝を擦り合わせる。

「…ナオ。」

見下ろすと少し咎める様な視線で見上げられ、思わず口端が上がる…まだ抵抗するか…。

「…まだだ…もっと乱れて見せろ…。」

再び与え続けられる愛撫に、ネコは身を震わせて躰全体を仰け反らせた。

焦らす様に優しく躰中に舌を這わせ、ギリギリ迄追い詰めでは引く…もう決して逃げる事の叶わぬ様に、光る銀糸の蜘蛛の糸で絡めとる…。

甘く蕩ける様な嬌声を上げ、快樂だけを追う事しか出来無くなる迄追い詰めると、ネコは腕を伸ばし潤んだ瞳で見上げた。

「どうした、ナオ？」

「…柴…さん…ん。」

「どうして欲しい？」

ネコの眦から、涙がこぼれ落ちる。

「…柴…さん…何とか…してえ…。」

ネコの躰を抱え上げ、じわりじわりと口が身を沈めると、嬌声を上げ「」反りになり震えた。

「…いい子だ、ナオ。」

「駄目っ！…駄目え…。」

「大丈夫だつて教えたろ？」

「駄目よう…おつきい…。」

「…大丈夫だ…怖くない。力…抜いてろ…。」

抱き締めても喉を仰け反らせるネコを首に抱き付かせて、その喉を甘噛みしてやりながら囁く。

「…大丈夫だ…俺は、お前に…快樂しか与えない。」

甘い吐息と声が混じり合つ…互いの腕と視線が交差する…。躰の中に流れ込む…押し流され突き上げられる様な奔流。欲情とは別の、その激しい光の渦。

…そうか…これが…。

躰の下で啜り泣く、小さな声が訴える。

「躰の中…柴さんで一杯で…溺れちゃうよう…。」

全く…この娘は…。

その躰を手に入れた征服感、安堵感、充足感は、正直計り知れない物だった。

そして手放した途端、己が心と躰が渴望するのだ…まるで10代の頃に戻つた様に、飢えた野獸の如く、愛しくて欲しくて堪らなくなつた。

ネコは、最初こそ戸惑いと恥じらいに居たたまれない様子だったが、躰を重ねる毎に必死にこちらの要求に応え、凄まじい色香を振り撒き、快樂に身を任せる事が出来る様になつてきた。

腕の中で微睡むしなやかな姿態を愛で指で辿ると、撓つたそうに首をすくめて身を捩る。

その反応に田を細め、頬の傷から首筋に舌を這わせると、嫌がる声が猫の鳴き声の様で、竦める肩に歯を立てた。

「…もう…柴さん…エロ親父だ…！」

「何を今更…」

「最近お兄さんに、そつくりだよ！？意地悪だしつ…？」

「そりや、兄弟だしな。それに…お前が、猫みたいにニヤアニヤア鳴くからだろ？」

「鳴かないもん！」

「嘘付け…。」

ムウツと膨れつ面を見せるネコの鼻を摘まみ、クスリと笑いながら耳元に囁く。

「ウチの猫の鳴き声はデカイからな…新しい家は、壁が厚い所を探さないと大変だ…。」

真つ赤な顔をするネコの耳朵に歯を立てると、やはりニヤアと鳴き声を上げた。

全く…このギャップは堪らない…。

「上手く行つてゐる様で、安心したわ。」

「…相変わらず、お前に連絡してゐるのか？」

「そよおー！下手な事したら、筒抜けなんだから…」

「…全部？」

「多分ね。」

頭を抱える俺の横で、京子が腹を抱えて笑つた。

「…流石の柴も、私に頭上がらないでしょ！？」

「勘弁してくれ… そうだ、俺の事以外も相談して來てるか？」

「母親の事は少しね… 心配はしてる。子供の事も有るのに、籍はいつ入れるんだろ？って言つてたわ。」

「…兄貴が、子供の生まれるギリギリ迄待つと言つてくれた。」

「…そう。」

「他には？」

「他？別に… 何か有るの？」

「…時々、妙に怯えたりボンヤリしたり、情緒不安定氣味でな。相変わらず、自分の事は何も無い… で片付けちまつ。」

「まあ、1人で外に出る氣になつた途端、補導されそうになつたり、ストーカーされたりじやねえ… この間待ち合わせてた時も、男の子からナンパされてたわ。」

「1人で出るのを、楽しみにしてたんだがな。」

「綺麗になつたもの… 新宿に帰つたら、大変だわよー…」

「…わかつてゐる。」

「…家探し…進んでる？」

「いや… 家も事務所も… 出来るだけラピュタ書房の近くことは考へてるんだが… 中々思う様な物件が無くてな。」

「ネコちゃん中心に考えるつてのが… 笑える。」

優しい眼差しを送りながらもからかう京子に、俺はムツとして言い返した。

「お前だつて、さつと言つてたろ！？ 正直、又あの楼閣にナオを監

禁したいって思いの方が強いんだぞ！？」

「…やっぱり馬鹿だわ、アンタ。」

「何とでも言え…少なくとも、バイトへの送り迎えは、する気でいるんだ。」

「マジッ！？幼稚園児じゃあるまいし…過保護じゃなくて、アンタがストーカーだわ！？」

「んな事は、わかってる！…だが、今のアイツを見てみろ！？無防備に自覚の無いフェロモン撒き散らして、その上男に声掛けられると、怯えた目して震えんだぞ！？頭の上から食つてくれつて言つてる様なもんだろうがっ！？」

「…確かにね。気になつて、おちおち仕事も出来無い…つて事か。」

「…ああ。」

「…柴…私、物件に一つ心当たり有るんだけど、良かつたら見に行く？」

「ど二だ？」

「ん…それは、行つてみてから。話を聞いた時は、正直有り得ないつて思つてたんだけど…。少し、お金も掛かるし…。」

「高いのか、家賃？」

「ん…それは、交渉次第だと思つ。ただ…まあ、駄目元で見てみる？」

「家か？事務所か？」

「柴が望めば、両方一気に手に入る…心配事も一気に解決するけど…これが最良の策なのか、正直疑問だわ…。」

躊躇する京子を追い立てて、鉄也に外出する顔を告げると、俺達は揃つて事務所を出た。

「おー…ここつて…。」

「そ、真のビルよ。」

京子に着いてエレベーターを上がると、会社の中はどこもかしこも慌ただしい。

「真！？入るわよー？」

京子が奥まつた部屋のドアを開けると、中で髪を縛ったスウェット
スーツ姿の真が、段ボールと格闘していた。

「ああ、京子さん…手伝いに来てくれた…んじゃ無むさうね。いら
つしゃい、柴さん。」

「お邪魔します。何だか…凄い状態ですね？」

真はアハハと笑い、応接セットに俺達を誘つた。

「引越準備で、大わらわなのよ…」

「新宿から引越すんですか！？」

「ああ…仮の宿にね。このビル、建て直す事にしたの。古いし、耐
震面でも少し問題があつてね。リホームも考えたんだけど…耐震リ
ホームつて高くつて…それならいつそ建て直そつて事になつてね。」

「クリスマスの大虎事件以来、真は俺に対しても、京子同様かなりフ
ランクに接して来る様になつていた。

「そうなんですか…。」

「今度は10階建てにして、下の階は立体駐車場にするのよ！今迄
来客用の駐車スペース確保出来なかつたし、この場所立地はいいか
らコインパーキングとしても収入見込めるし…借金もとつと返し
たいしね…。」

「あの…天富さん、こちらに戻られるのは？」

「春の予定よ？あ、ネコちゃんも春からバイト入れるつて言つてくれ
てたから、当然にして待つてるわね！？そついえば…今日は、そ
の件でわざわざ？」

「違うわ、真！全く…アンタの話が終わる迄待たなきやならないな
んで…新ビルの件よ。空いた階…もう借り手着いたの？」

「ああ…その件。まあ、色々話しされてるけど…ちゃんと家賃払つ
てくれる、安心した人に貸したいんだけじね。最近この辺りも物騒
だし…やっぱり、柴さん借りてくんない？」

「はあ！？」

「事務所、探してるんでしょ？なんなら、住居込みで構わないわよ

？そうしてくれたら、同じ階に私の住居持つて来れるし…。」

「真はねえ…柴の事、番犬にしたいのよ！！」

「だつて…元警察官で佐久間組の身内なんでしょ？流石に女1人で此処に住むの怖いし。私個人だけじゃ無く、会社にとつて防犯の意味でも、対暴力団つて意味でも、柴さんに事務所だけでも借りて欲しいんだけど…どう？」

「…此処に…住んでもいいんですか？」

「今なら、設計変更可能よ？柴さんもネコちゃんも、通勤0分！これって、美味しく無い！？」

真が俺を見上げてニヤリと笑つた。

荷物を出し終わった部屋を見て、ネコが溜め息を吐いた。

「案外、荷物少なかつたんだね。」

「そうだな…備え付けの物が多かつたからな。」

「柴さん…お金、大丈夫なの？」

「お前が心配する事じや無い。」

そう言つた途端、ネコの目がスッと細くなつた。

ネコがこういう顔付きをする時は、ろくでも無い事を考へてゐる…肩に回した手を背中に下ろし、そつと抱き込んでやり俺はネコの髪に顔を寄せた。

「そんな顔するな…大丈夫なんだ。新しい事務所も、連城さんが出資してくれることになつた。」

「でも連城さん、こっちの事務所も残すんでしょう？弁護士事務所の人が引き継ぐつて…。」

「こっちの事務所の調査対象は金持ちで、新しく聞く俺の事務所の調査対象は庶民つて事だ。だから心配すんな…大丈夫だから。」

「本当に？」

「あ…だから、もう離れようだなんて思うな…わかつたな？」

少し目を見張り、ネコは俺の腰に腕を回した。

「……そんな事思つて無い……柴さんが……もう終わつて言つ迄……傍に居る……。」

「馬鹿野郎……言つ訳ねえだろ！？」

腕の中で、ネコの躰が小刻みに震える。

「……お前……まだ……。」

「……何でも無い。」

スルリと腕を逃げ出したネコを、後ろから捕まえ抱き込んだ。

「まだ……まだ駄目なのか？なあ、ナオ……まだお前は、俺のモノにならないのか？」

「何言つてゐる、柴さん！？」

俺は腕の中のネコを反転させ、噛み付く様な勢いで唇を重ねた。ガチリと歯がぶつかる音がして、口の中に鉄臭い味が広がる……それでも勢いは止まらず、壁に押し付け舌を絡めて吸い上げた。

顔を離した時、唇を切つたネコが少し困つた様に笑つていた。

「……悪い。」

「いいよ……それより、時間平氣？電氣もガスも、電話も今日来るんでしょ？」

「この車も、今日返すんでしょ？」

「ああ……急がないと……。」

港区の役所で転出届を済ませ、新宿に急ぐ道すがら、助手席からネコが声を掛けた。

「柴さん、新宿の役所なら私わかるから、手続きして来るよ。序でに郵便局も行つて来る。」

「……。」

「私、荷物運びも役に立たないしや。車の運転も出来無いからさ。」

「だが……。」

「少し、寄りたい所も有るの。行つてきちゃ駄目かな？」

「ちゃんと帰つて来るんだな？」

「信用出来無い？」

一ツと悪戯そろに笑うネコを見て、あの時腕の中で震えていたネコの様に、今度は自分が震えていた。

路肩に車を停める、俺は黙つて財布から金を出してネコに握らせた。

ネコは震える俺を抱き締めて、顎の下にキスして車を降りた。

「少し遅くなるかもしない……でも、心配しないでね。私が帰るのは……柴さんの所だけだから。」

電話やガス、電気の手続きを済ませ、荷物を運び適当な場所に納める。

ネコの衣類の他には、俺の衣類と少しの生活雑貨、タオルやシーツ等しかない。

以前の事務所を置む時、全て売り払つたからだ……あの事務所の匂いを引き摺りたくは無かつた。

持つて出たのは、少しの衣類と鉄也だけだった。

新居には、まだベッドと照明しか置いていない……家具も電化製品も、明日2人で買いに行く予定だが……。

何度も何度もGPSを確認し、ネコの居場所を追う。

役所から郵便局……繁華街からネコが次に向かつたのは……多分、榊の屋敷跡だ。

榊大善の事も、その後ワイドショーやで大騒ぎしていた『榊の女達』の遺体発見の事も、ネコは何一つ尋ねては来なかつた。

きちんと、話してやるべきだつたのだろうか……GPSの地図を指示す赤い十字の点滅を撫でながら、俺は逡巡していた。

迎えに行つた方がいいのでは無いか！？

だがネコは、『信用出来無い？』と言つたのだ……『私が帰るのは……柴さんの所だけだから。』と言つたのだ！！

その後、新宿の街を徘徊している様なネコの足跡を見て、俺は携帯を閉じた。

春は、直ぐそこまでやつて来ている筈なのに……何故こんなにも寒いのだろう？

寒いのは躰じゃ無い……心だ……。

このまま、この何も無い部屋で、心も凍り付いてしまうのでは無いか……そう思った時、玄関で小さな音が鳴つた。

「……ただいま……柴さん？ 居ないの？ 何で真つ暗？ 電力会社来なかつたの？」

俺は何も言わず玄関に走ると、帰つて来たネコを抱き締めた。

「ごめんね、本当に遅くなつて……明日のパンは買つて来たけど……柴さん？」

「……遅い。」

「ごめんつて……これでも、急いだんだけどね……晩御飯は？ 食べた？」

「何か買つて来ようか？」

「……何故電話しなかつた？」

「したよ？ 帰りにしたけど……繫がらなかつた。ごめんなさい、心配した？」

ネコを抱え上げベッドルームに連れ込み、そのまま何も言わず貪る様にネコを求めた。

驚いたネコは、それでも何一つ抵抗せず、少し強張つた躰は甘い吐息と喘ぎに溶かされていった。

「……俺のモノだ……この躰も……心も……俺だけの……。」

飛び散る汗と甘い嬌声、誘う様な微笑みに煽られる。

スルスルとネコの指が俺の躰を這つと、得も言われぬ快感に蕩けそうになる。

「……ナオつ……。」

「駄目よ……もう少し……。」

「……や……めろ……。」

「大丈夫……全て受け止めて……後で、少し分けてね……。」

ネコの甘い吐息が吐かれると同時に躰の中に流れ込む暖かな光……やがてその光が渦巻き、躰の隅々迄染み渡る。

…これは『氣』だ…『神の女』の房中術。

初めてネコを抱いた晩、その流れ込み渦巻く光に驚いた…そして、その後の自分の体調に目を見張った。

躰を重ねる毎にその術を体得したネコが、俺の上で身を仰け反らせ

る…まるで蓮の花が咲き、中から現れた天女の様な姿…。

後から後から送り込まれる光…竜巻の様に逆巻く渦が、躰の細胞迄も活性化させて行く様な感覚…。

「…綺麗だ…ナオ…。」

我が身に納まり切れず噴火する様に噴出する『氣』に慄くと、パタリと胸の上でネコが倒れた。

気を失ったネコに、俺はひたすら『氣』を送り続けた。

あの怒涛の様な『氣』の注入…その後一気に体温を下げて気を失ったネコ。

そして何より、己のこつまでも光りで包まれている様な充足感…あれは『玉女採戦』に違いない。

『榊の女』が房中術で、一方的に『氣』を相手に取れるという『玉女採戦』…だが沙夜は、奪われる側は酷く身を損ねると言っていた。無理をさせない様に優しく抱き続けると、やがて少しずつ体温を上げ顔色が戻つていった。

そして一度だけ目を開けると、ネコは満足そうに優しく微笑み、そのまま穏やかな眠りに落ちた。

腕の中の温かさが心地いい…タベのあの、凍り付いてしまうのでは無いかと思う程の寂しさは、この温もりで無ければ癒せない。

ネコは、まだ出会った時の事がトラウマになつていてるのだ…そして、あの頬に傷を負つた時の事を…まだ…俺に『捨てられるかもしれない』と心の底で怯えている。

思えば最初から、ネコは俺との事を『出会い』とは言わず、『捨てられた』としか言わなかつた。

そして、自分の中で燻る寂しさや怖れ、悲しみを、決して俺に見せてぶつけ様としない。

どうしたらその寂しさを払拭し、安心させてやれるだらう…
スルリと伸びた腕が俺の首に絡み付き、躊躇寄つたネコが顎の下にキスをした。

「…ムー。」

「起きたか…おはよ。」

「…おせよひじゅ無いんだよ。」

「何で？」

「おめでとひ、柴さん…」

「…え？」

「え？じゅ無いよ！お誕生日でしょ…？」

「あ…そうだったな。」

「忘れてたの？あ…オヤジになるの嫌なんだ…35歳だもんねえ。」

クスクスと顔の下で笑われて、又顎の下にキスをする。

「…大丈夫だよ…35になつても、柴さん素敵だから…。」

「…ナオ。」

「なあに？」

「お前、躰平氣なのか？」

「…何で？」

「タベのアレ…『玉女採戦』だろ！？」

「…なあんだ…知つてたんだ。お母さんに聞いたの？効き田…あんまり無かつたみたいだね…心配事？…私の…。」

声のトーンと共にどんどん体温が下がる…俺は堪らずネ口の躰を抱き込んだ。

「ごめんねえ、柴さん。」

「…。」

「私、逃げないから…柴さんの傍に居るつて言つたよ？」

「…お前、まだ…俺に捨てられると思つてるのか？」

瞬時に極限迄体温が下がり、強張つた躰が痙攣を始める。

「…柴さんが…そう…決めたな…。」

スルリと腕を解き起き上がつたネ口の躰が、心許無げに揺れる。

「…お前は？お前の氣持ちは！？」

「…最初に…言つた。」

「じゃあ、何故縋ら無い！…何故諦め様とする！？」

「だつて…此所は、柴さんの家だもん。」

「違つ……ナオ……」

「……」

「此所は俺の家じゃねえ……俺達の家だ……」

「俺は背後からネコを羽交い締めにし、肩口に顔を埋めた。

「……俺達の……家……」

「そう……俺達の家だ。これから2人で家具も電化製品も選んで……2人の生活を築いて行く……2人の家だ。」

「……2人の……」

「俺は、お前を決して捨てねえ……そう言つてるだろ？が……俺を捨てるのは……お前だ……」

「ヒクンとネコの躰が痙攣し、小さなくぐもつた声が聞こえる。

「……前も、そう言つてた。」

「そうだ！これ以上離れるのは、堪えられねえ……俺が苦しいのは、お前が俺から逃げるからだつて……何んでわからねえんだ！？」

「……何度も……何度も期待したんだよ……。」

「何？」「

低く静かに、それでもはつきりとした口調でネコは続けた。

「その度に……何度も裏切られた。優しくしてくれる人も……強引な人も居たけど、面倒な事や私が怖くて逃げ出したら、皆どつかに行つちゃつた。酷い奴は乗り逃げなんだよ……有り得ないよね？」

「……ナオ。」

「親にも結局捨てられてさ……生まれて来たの迷惑みたいに言われて……どこ行つても出て行けつて言われて、居場所無くて……正直、どうなつてもいいつて思つてた。」

ネコが自分の事を話すのは、いつ以来だらつ……ようやく胸に溜めた物を吐露してくれている。

「柴さんの事も、最初は気紛れで……女つてバレて、ベッドに入れて犯されると思ったんだよ？ラーメンご馳走してくれたし、それも仕方無いかなつて思つた。だけど、優しく撫でて抱き締めてくれて、お粥作つて医者に連れてつてやるつて……そんな事言つてくれる人誰

も居なかつた。まあ、松田わんに連絡されて、逃げ出したんだけどね。」

フウと息を吐いて、俺の腕から逃れた。

「その後探し出してくれて、引き取つてくれて……好きだつて、惚れてるつて言つてくれた。私……嬉しくて……でも怖くて……。」

「怖い?」

「神に捕まつても、画家のおじこわんの所に捕まつても、柴さんちやんと見付けてくれて、好きだつて、愛してゐつて、いつぱい優しくしてもらつて……でも、アキつて人の言つてた通り、私じや柴さんに似合わないつて思つて……いつぱい迷惑掛けるし……遠くで柴さんの事想つて生きてくのもアリかなつて思つてたらわ……閉じ込められた。」

「……そうだつたな。」

「あの頃からだよ……私の怖くて仕方が無い思ひが、柴さんちやつたんだねえ。柴さん、ずっと『寂しい』『悲しい』つて思つて……昨日も……そつなんでしょ?」

「……。」

「そんな柴さん見てるの、私辛いんだよ……何とか出来ないのかつて、あの頃からずつと考へてた。」

「……ナオ?」

「……終わりにしよう、柴さん。」

感情的では無い……凄く冷静なネコの聲音に、俺の躰の刻が止まつた。ネコがスルリとベッドを降りるのを止められもせざ、息をするのも忘れてネコが部屋を出て行くのを見ていた。

何をしている、俺は!?

早く……早くネコを追い掛けなければ!?

やはり……駄目なのか!?

どんなに追い掛けても、ネコの心には届かないのか!?

目が霞み、全身が痺れ……視界から色が無くなるのでは無いかと思つた時、部屋の入口に再び全裸のネコが立つていた。

「…ナ…オ。」

「はい、コレ。」

ネコが、俺の鼻先に一枚の封筒を差し出した。

「私からの、お誕生日プレゼント。」

震える手で、封筒を持つ腕を引き寄せ、その身を絡め取る。

「嫌だつ…！」

「柴さん…。」

「絶対嫌だからなつ…！」

「柴さん…どうしたの？？」

「ぜつてえ別れねえ…！」

「柴さん…落ち着いて。」

「…嫌だ。」

「…顔上げて、柴さん。」

ネコが俺の頬を両手で挟み、頬に鼻先に、瞼にキスを落とし、最後に唇を重ねて来る。

その柔かで穏やかな優しいキスが離れた時、俺は放心しながら尋ねた。

「何故？」

「何が？」

「だつてお前…終わりにしちつて…。」

途端にネコの顔が赤面し、ワタワタと慌て出す。

「又…間違えた？あのね…違つよ…終わりにするのは、柴さんが色々悩む事…だから…。」

「ナオつ…？」

「ごめんなさい、ごめんなさい…誤解した？ごめんなさい…。」

ネコの謝罪に、ガックリと頃垂れた俺は、その場にふて寝した。

「ごめんなね、柴さん。」

「…知らねえ。」

「コレ、お誕生日プレゼント…。」

再び封筒を差し出すネコに膨れつ面を見せて、顔をしかめて舌を出

す。

「ネ」は安心した様にクスクスと笑い、封筒を俺の横に置いて立ち上
がつた。

「私、シャワーして来る…気が向いたら、見てね？」
そう言って、部屋を出て行つた。

何だつたんだ、全く…一気に躰の力が抜けてしまった…。

誕生日の朝から、まるでフルスロットルのジーットコースターに乗
つている様だ…。

寝返りを打つと、カサリと先程の封筒に触れた…手紙でも書いてく
れたのだろうか？

中身を取り出すと、薄い紙が折り畳まれて…その中身を見て、俺は
慌ててバスルームに飛んで行つた。

「ナオつ！？」

「ふえ？」

頭を洗つていたネ」を抱き締めると、泡だらけの躰をワタワタと
させて笑いだした。

「泡だらけになるよ、柴さん！…いつその事、一緒に入っちゃう？…」
のお風呂広いから、頭も背中も洗つて上げられるよ？」

楽しそうにそう言つと、俺にシャワーを掛けて世話を焼きだした。

「なあ…アレ…。」

「見たの？」

「お前…嫌がつてたんじゃ無いのか？」

「ん？嫌じゃ無いって言わなかつた？紙切れに拘つて無かつただけ
だよ…そんな物に拘らなくとも、幸せだから…。」

「だが…。」

「柴さん、アレに拘つてたし…だから…私がアレ渡したら、安心し
てくれるかなつて思つたの。出す出さないは、柴さんに任す。」

「…いいのか、本当に？」

「アレ出したら、柴さん『寂しい』『悲しい』って思わなくなる？」

「効果観面だ…だが、お前は？一体、何が怖いんだ？」

「…

「わかんないんだよ……。」

俺の頭からシャワーを掛けながら、ネコは言った。

「馬鹿だから……何が怖いんだかわからないのかなあ？スッゴい嬉しき時とか、楽しい時とかにも、急に怖くなる。今だつて……怖いって自覚したら……もう……。」

シャワーへッドがカラランと床に落ち、濡れた床に丸まる様に座り込んだネコが、指を噛み呻き声を上げて震える。

「お前は、何でそやつて1人で耐えようとする？何で俺に縋らねえんだ？」

抱き上げてバスタオルで包むと、少し安心した顔で微笑んだ。

「昼から外出するから……今日出すぐ、婚姻届。」

「うん。」

朝食のパンをかじりながら、何と無くボンヤリしているネコに声を掛けた。

「少し寝て来い……まだ、疲れてんだろう？」

「……へーき。」

「いいから……。」

ヘッドで添い寝してやると、ネコは直ぐに穏やかな寝息を立てる。チャイムの音に、俺は寝室のドアを閉めると玄関に向かった。

「……アンタ達……ちゃんと連絡取れる様にしどきなさいよ！」

玄関に入った途端悪態を吐く京子が、玄関に放り投げられたネコの上着やバッグを見て、フンと鼻を鳴らした。

「又……ネコちゃんに無体な事したんでしょう？」

ズカズカと入り込み、ネコのバッグから携帯を取り出し、床に置きっぱなし俺の携帯を合わせて差し出す。

「直ぐに充電する！――何かあつたのかつて心配したわ――」

「……悪い。」

充電機に携帯を置くと、京子はヤカンに水を入れながら尋ねた。

「ネコちゃんは？」

「さつき寝させた。」

「誕生日プレゼント、貰つた？」

「ああ…今朝貰つた。保証人、サインしてくれたんだな。」

「あの子、どうしても松田と私に保証人になつて欲しいって、頭下

げに来たの。」

「え？」

「私は二つ返事で了承したけど、松田には…土下座したのよ。」

「何故？」

「自分が又新宿に戻る事、これからも柴の世話になる事、許して欲しいって。柴を安心させる為に、婚姻届渡して遣りたいって。」

「…。」

「一番付き合いの長い私達に認めて貰わないと、意味が無いんだって…アンタには、過ぎた嫁だわ！？私が貰いたい位よ…！」

「…アレは、俺のだ。」

「今日出すんでしょう？」

「ああ…昼から2人で出して来る。」

「夜、集まるから…結婚祝いと、序にアンタの誕生祝い。」

「場所は？」

「8時に『Bell』で。今日は、貸し切りだつて。」

「…わかった。」

「じゃ…おめでとう、柴。良かつたわね。」

「ああ…ありがとな。」

珈琲一杯だけを飲むと、京子は口端を上げて帰つて行つた。

昼前にネコを起こし、用意をするのを待ちながら婚姻届を眺めていた。

「佐久間に…沙夜さんの所にも行つたのか？」

「役所の人のがね、私が未成年だから、親のサインが必要だつて教えてくれたの。序に本籍地も聞いてきたよ。榊の住所だつて。」

「それで…榊に行つたのか？」

「何で知ってるの？お花をね…お供えに行つたんだよ。」

「…知つてたのか？」

「おじいさんの事？週刊誌で書いてあつたの見たの…だから…。榎でね、森田さんって人に会つたよ？柴さんの事も知つてた。」

「あ…以前会つた事が有る。」

「堂本さん…つて人の所に、是非遊びにいらつしゃ いつて言つてた。

お友達？」

「…古い知り合いだ。」

お待たせと言つて出て来たネコを見て、ドキリとした。
淡い水色のワンピースを着て、薄化粧をしたネコは内から光輝く様で…。

「柴さん？」

「…ナオ…キスしていいか？」

顎を引き上げ唇を重ね、その柔かな唇の感触に酔い、ゆつくつと舌を絡め吸い上げた。

「夜は、パーティーだそうだ。」

喜びながら靴を履くネコが、不意に尋ねる。

「そういえばさあ、柴さん。」

「ん？」

「私…柴さんのお嫁さんになつて、何すんの？」
…全く…この娘ときたら…。

渡される（後書き）

思いの外長い作品になつて、驚いています。

そして、多くの方にご支持頂いた事に、本当に感謝しています。
作中、色々と矛盾点がありましたが…敢えて、そのまま突っ走りました。

例えば、沙夜さんと佐久間さんが結婚しても、ナオを佐久間さんが
養子縁組しないと柴さんとナオは叔父と姪の関係にはならないんですね
すよ…（^ー^・）

通常は、佐久間さんと結婚した沙夜さんの名字は、音戸から佐久間
に変更になりますが、ナオはそのまま音戸乃良のまんまなんです。
いやあ…勉強不足で申し訳ありません。

最後迄、子供の様なナオでしたが…これからどうなるんだろ？（^ー^・）

別ね作品で、ちらほら参加させて行きますので、お楽しみに…。
それでは、最後迄読了頂き、本当にありがとうございました！
又、次の作品でお会い出来ることを楽しみに致しております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8461t/>

新宿のネコ

2011年7月31日04時38分発行